博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	阿出川 修嘉
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 186 号
学位授与の日付	2014 年 9 月 10 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察　–可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について–

Name	Adegawa, Nobuyoshi
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 186
Date	September 10, 2014
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	On the problem of a “correlation” between modal meaning and verbal aspects in modern Russian — the analysis from examples of modal predicates of “possibility” with infinitive —

現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察

—— 可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について ——

阿出川　修嘉

東京外国語大学大学院地域文化研究科
博士後期課程地域文化専攻

現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察

—— 可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について ——

阿出川　修嘉

東京外国語大学大学院地域文化研究科
博士後期課程地域文化専攻

謝辞

本稿を準備、執筆するにあたっては、様々な方々から様々な形で支援を賜っている。

筆者の学部時代からの指導教官である、中澤英彦東京外国語大学名誉教授には、本研究の準備段階から、本稿の執筆の過程における各段階で貴重な御助言を頂いた。
また、匹田剛東京外国語大学准教授にも、筆者が不躾に送りつける拙い文章に対して、形式面、内容面その他様々な観点から、貴重なコメントを寄せていただいた。忌憚なく意見の交換をさせていただけたことは、極めて貴重な経験であった。

また、日露青年交流センターからの奨学金（「2010 年度日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ《日本人研究者派遣》」）を得て、2010 年 10 月より一年間モスクワに滞在する機会を得られたことは、筆者にとって大きな転機となったことは疑うべくもない。
川勝一成所長（当時）、また渡航準備に際して、また現地滞在中も各種のサポートを行なって下さった、菅原幸子氏、大久保加菜氏始め、センターのスタッフの皆様にも篤く御礼を申し上げる。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員 Alexander Kostyrkin 氏も、筆者が無遠慮に、またひっきりなしに送りつける、拙い質問のメールに対して、貴重な時間を割き、快く回答を寄せて頂いた。併せて多くの貴重な用例も都度提供して下さり、また理論的側面からも様々な示唆を与えて頂いた。

その他にも、大学院のゼミでの友人・同僚たち、そして上のモスクワ滞在時には東洋学研究所の所員の方々との意見交換も有益であった。

これらの方々からの精神的、学問的、物質的な援助と支えがなければ、本稿は完成しなかった。記してここに深く感謝の意を表したい。

現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察

―― 可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について ――

目次

謝辞 iii

目次 v

はじめに

0. 本章の概要 1

1. 本研究について：その必要性、方法と意義 1
   - 1.1. 本研究の必要性 1
   - 1.2. 本研究で用いた方法 1
   - 1.3. 本研究の意義 2

2. 本研究で対象とする「ロシア語」 2
   - 2.1. 伝統的な「現代ロシア標準文語」の理解と言語研究における問題点 2
   - 2.2. 本研究で対象とする「現代ロシア語」 3

3. 本稿の全体の構成 4

4. その他書式上の留意事項など 5
   - 4.1. 本節の概要 5
   - 4.2. 本文で使用する文字体系について 5
   - 4.3. 本研究で採用する文法情報の略号について 6
   - 4.4. 例文番号、図表番号について 7
   - 4.5. 種々の括弧の用い方について 7
   - 4.6. 研究者の氏名と生没年について 7
   - 4.7. ウェブ上の各種リソースについて 8
   - 4.8. 各種術語の採用について 9

第一章
問題提起、先行研究の問題点、分析の対象とその目的

0. 本章の概要 11

1. 問題提起として 11

2. 本研究の分析対象、本研究で行う分析の目的 13
   - 2.1. 本研究で行う分析の目的と対象 13
   - 2.2. 本研究の目指す最終的な目的 14

3. 先行研究とそれらの問題点 14
   - 3.1. 本節の概要 14
   - 3.2. 可能性 16
   - 3.3. 不可能性 17
   - 3.4. 不可避性 19

4. 先行研究の抱える問題点と本稿の課題 20
   - 4.1. 本節の概要 20
   - 4.2. 言語使用の実態の記述 20
   - 4.3. 可能性の意味の明確化とその分類 22
   - 4.4. 不定詞の語彙的意味の考慮 22

5. 第一章のまとめ：本稿で解決を試みる課題 23

第二章
理論的前提となる諸概念

0. 本章の概要 25

1. 状況と述語、その分類：状況の性質（акциональность）について 25
   - 1.1. 本節の概要 25
   - 1.2. 状況の性質（акциональность） 25
   - 1.3. Vendler（1967）による分類 28
     - 1.3.1. 概要 28
     - 1.3.2. 活動（activities） 29
     - 1.3.3. 達成（accomplishments） 29
     - 1.3.4. 到達（achievements） 30
     - 1.3.5. 状態（states） 30

1.4. まとめ：状況の性質 30

2. 動詞：アスペクトと体のカテゴリー 32
2.1. 本節の概要 32
2.2. 導入：二つの意味の対立軸を想定する必要性 33
2.3. 「状況の性質」の変化：一次的アスペクトと二次的アスペクト 34
2.4. アスペクトというカテゴリー 35
2.4.1. 状況の構造モデル 35
2.4.2. 一次的アスペクト 36
2.4.2.1. 概要 36
2.4.2.2. 外部ステージ A に関わるアスペクト 37
2.4.2.3. 内部ステージに関わるアスペクト 38
2.4.2.4. 外部ステージ B に関わるアスペクト 39
2.4.2.5. その他のアスペクト 40
2.4.3. 二次的アスペクト 41
2.4.3.1. 「状況の性質」の変化と二次的アスペクト 41
2.4.3.2. 二次的（数量的）アスペクトの様々な意味 42
2.4.4. まとめ 42
2.5. ロシア語の体のカテゴリーの持つ文法的意味 43
2.5.1. 概要 43
2.5.2. 体のカテゴリーの文法的意味 44
2.5.2.1. 文法形式の個別的意味と一般的意味 44
2.5.2.2. 体の二項の対立：欠如的対立について 45
2.5.2.3. 完了体の一般的意味（不変的意味）をめぐる議論 46
2.5.2.4. 体のカテゴリーの意味記述の異なるアプローチ 51
2.5.3. 個別的意味 56
2.5.3.1. 本節で取り上げる研究について 56
2.5.3.2. 完了体の個別的意味 57
2.5.3.3. 不完了体の個別的意味 59
2.5.3.4. まとめ：個別的意味の分類 61
2.5.4. Храковский（2002）による体の意味の分類 61
2.5.4.1. 「位相」について 61
2.5.4.2. タイプ１ 62
2.5.4.3. タイプ２ 63
2.5.4.4. タイプ３ 63
2.5.4.5. タイプ４ 64
2.5.4.6. タイプ５ 64
2.5.4.7. タイプ６ 65
2.5.4.8. タイプ７ 65
2.5.4.9. まとめ：Храковский（2002）の分類と状況の構造モデル 66

2.6. ロシア語動詞の体のペア 66
2.6.1. 「体のペア」という概念と動詞のタイプ 66
2.6.2. 体のペアの種類 67
2.6.2.1. 体のペア：不完了体化によるもの 67
2.6.2.2. 体のペア：完了体化によるもの 68
2.6.2.3. 体のペア：補充法によるもの 69
2.7. 本節のまとめ：「アスペクト」と「体」 69
2.7.1. 概要 69
2.7.2. 「状況の性質（акциональность）」とロシア語の体のカテゴリーとの関係 70
2.7.2.1. 活動（＝限界のないプロセス） 70
2.7.2.2. 達成（＝限界のあるプロセス） 71
2.7.2.3. 到達（＝出来事） 71
2.7.2.4. 状態（＝静態） 72
2.7.2.5. まとめ 72
2.7.3. 「アスペクト」と「体」 73
2.7.3.1. 一次的アスペクト 73
2.7.3.2. 二次的アスペクト 76
2.7.4. 「不完全」な「体のペア」 76
2.7.5. 個別的意味の分類の問題点：一次的・二次的アスペクトとの関係 77
2.7.6. アスペクトのクラスター、「完了相」、「未完了相」とロシア語の体 80

3. モダリティのカテゴリー 81
3.1. 本節の概要 81
3.2. モダリティの理解とその枠組み 82
3.2.1. 命題的部分と様態、命題と事象 82
3.2.2. Palmer におけるモダリティの理解とその枠組み 83
3.2.3. Плунгян（2011）における枠組み、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」 84
3.2.4. 「法」と「モダリティ」 85
3.2.5. まとめ 85
3.3. 評定のモダリティ 86
3.3.1. 自然言語における「評定のモダリティ」 86
3.3.2. ロシア語における「評定のモダリティ」とその表現手段 86
3.3.2.1. 概要 86
3.3.2.2. 専用の語彙クラス及びそれと機能的に近い語結合や文 87
3.3.2.3. 専用の小詞 88
3.3.2.4. 間投詞 88
3.3.2.5. イントネーション 88
3.3.2.6. 語順 89
3.3.2.7. 特別な文型 89

3.4. 非現実のモダリティ 89
3.4.1. 自然言語における「非現実のモダリティ」 89
3.4.2. ロシア語において文法化された「非現実のモダリティ」 90

3.5. 可能性のモダリティ 91
3.5.1. 概要：機能・意味的場という概念 91
3.5.2. 可能性のモダリティを含む文の意味構造 93
3.5.3. 内的可能性とその下位区分 94
3.5.4. 外的可能性とその下位区分 95

3.6. 述語 мочь について：その「多義性」と「無標性」 96
3.7. 本節のまとめ：可能性のモダリティと本研究の対象の位置付け 98

4. ロシア語の不定詞の備える諸特徴 101
4.1. 本節の概要 101
4.2. ロシア語の不定詞の形態論的特徴及び備えている文法的カテゴリー 101
4.2.1. 不定詞の形態論的特徴 101
4.2.2. 不定詞の備えている文法的カテゴリー 102
4.3. ロシア語統語論における不定詞の機能的位置付け 103
4.4. 接語的用法と非接語的用法 105
4.4.1. 80 年文法での新たな提案：接語的従属関係と非接語的従属関係 105
4.4.2. 接語的用法 106
4.4.3. 非接語的用法 108
4.5. 不定詞の体のカテゴリーの用法 110
4.5.1. 概要 110
4.5.2. 完了体が用いられるケース 111
4.5.2.1. 単一の動作 111
4.5.2.2. 反復動作 111
4.5.2.3. 事前の予告（警告）、危惧の念 111
4.5.3. 不完了体が用いられるケース 112
4.5.3.1. 過程の意味 112
4.5.3.2. 単一の動作 112
4.5.3.3. 反復動作 114
4.5.3.4. 禁止、不必要 114
4.5.4. 否定の意味要素を伴う不定詞の用法に関して 115
4.5.4.1. 不可能の意味と完了体、禁止の意味と不完了体 115
4.5.4.2. 「可能性」を表す述語との語結合 115
4.5.4.3. 不定法文 116
4.5.4.4. 命令法 116
4.6. 本節のまとめ 117

5. 可能性の意味を含む述語を持つ文の意味・統語構造の分類の試み 118
5.1. 本節の概要：意味・統語構造の分類 118
5.2. 肯定構造 119
5.2.1. タイプⅠ 119
5.2.2. タイプⅡ 118
5.3. 否定構造 120
5.3.1. タイプⅢ 120
5.3.2. タイプⅣ 121
5.4. 論理的に可能な（想定される）意味構造 121

6. 第二章のまとめ 122

第三章
本研究のデータ：サンプルの収集、取捨選択及び分類

0. 本章の概要 125

1. 言語コーパスの利用：コーパスの概要 125
1.1. 言語研究における言語コーパスの利用 125
1.2. ロシア語を対象とする言語コーパス 126
1.2.1. 概要：ロシア語を対象とする主要なコーパス 126
1.2.2. ウプサラ・コーパス 127
1.2.3. テュービンゲン大学のコーパスシステム 127
1.2.4. ロシア・ナショナルコーパス 129
1.2.5. その他のコーパス 130
1.3. 本研究で採用したコーパスと採用の理由、その他の留意事項 131

2. サンプルの収集：文字列による検索 132
2.1. サンプル収集にあたっての目的 132
2.2. 検索にかける文字列 132

3. サンプルの取捨選択と分類、その基準 135
3.1. 概要：サンプルに対するフィルタリング 135
3.2. 第一のフィルター：モダリティ形式（述語）に関するフィルター 135
3.2.1. 概要 135
3.2.2. 文中で述語として機能していないケース 136
3.2.2.1. мочь 136
3.2.2.2. уметь 137
3.2.2.3. можно / нельзя 137
3.2.2.4. возможно 137

3.2.3. 文中で述語として機能しているケース 137
3.2.4. モダリティ形式に関するフィルタリングの結果 138
3.3. 第二のフィルター：不定詞に関するフィルター 138
3.3.1. 概要 138
3.3.2. 体のペアを持つ動詞 139
3.3.3. 体の形態的対立が考慮されない動詞 140
3.3.3.1. быть 140
3.3.3.2. 単体動詞 141
3.3.3.3. 単体動詞に準じる動詞 141
3.3.3.4. 両体動詞 142
3.3.4. その他のケース 142
3.3.4.1. 同綴異義の動詞 143
3.3.4.2. その他：辞書未収載の動詞 145

4. 第三章のまとめ 145

第四章
言語現象の実態の検証、考察と解釈

0. 本章の概要 147

1. 先行研究の記述の検証：言語形式の使用の実態 148
1.1. 本節の概要 148
1.2. データの整理及びその数量的分布 148
1.2.1. 概要 148
1.2.2. 述語の別に応じた分類 149
1.2.3. 動詞のタイプと体の別に応じた分類 149
1.2.3.1. 全体的なデータの分布 149
1.2.3.2. ペアを持つ動詞とその体の別 150
1.2.3.3. 体の形態的対立が考慮されない動詞 151
1.2.4. 意味・統語構造に応じた分類 152
1.2.4.1. 意味・統語構造に応じた分類：全体的なデータの分布 152
1.2.4.2. 意味・統語構造に応じた分類：動詞のタイプとその体の別 152
1.2.5. まとめ：実際に用いられる意味・統語構造 153
1.3. 意味・統語構造にしたがった観察：мочь 以外の述語 154
1.3.1. 概要 154
1.3.2. タイプⅠ 155
1.3.2.1. 全体的なデータの分布 155
1.3.2.2. 内的可能性の述語との結合の場合 155
1.3.2.3. 外的可能性の述語との結合の場合 158

1.3.3. タイプⅡ 159
1.3.3.1. 全体的なデータの分布 159
1.3.3.2. 内的可能性の述語との結合の場合 160
1.3.3.3. 外的可能性の述語との結合の場合 161
1.3.4. タイプⅢ 163
1.3.4.1. 全体的なデータの分布 163
1.3.4.2. 内的可能性の述語との結合の場合 163
1.3.4.3. 外的可能性の述語との結合の場合 165
1.3.5. タイプⅣ 167
1.3.5.1. 全体的なデータの分布 167
1.3.5.2. 内的可能性の述語との結合の場合 168
1.3.5.3. 外的可能性の述語との結合の場合 169
1.3.6. мочь 以外の述語との語結合における不定詞の体の形態の役割 171
1.3.6.1. 非現実のモダリティが対象とする「状況」 171
1.3.6.2. 完了体の機能 172
1.3.6.3. 不完了体の機能 173
1.4. 意味・統語構造にしたがった分析：述語 мочь の場合 175
1.4.1. 概要 175
1.4.2. データから見る使用の実態：мочь と不定詞の語結合 175
1.4.3. мочь の表すモダリティの種類と意味・統語構造のタイプの関係 177
1.4.3.1. タイプⅠ 177
1.4.3.2. タイプⅡ 178
1.4.3.3. タイプⅢ 180
1.4.3.4. タイプⅣ 182
1.4.3.5. 意味・統語構造のタイプとモダリティの種類：мочь の場合 183
1.4.4. 述語 мочь との語結合における不定詞の体の形態の機能 184
1.4.4.1. モダリティの種類と対象となる状況 184
1.4.4.2. 不定詞の語彙的意味とモダリティの種類との関係 185
1.4.4.3. 完了体の機能 188
1.4.4.4. 不完了体の機能 188
1.5. データの数量的分布から見る不可能性と完了体の選択の関係 190
1.5.1. 概要 190
1.5.2. 不可能性と完了体の関係について：мочь 以外の述語の場合 190
1.5.2.1. 内的可能性を表す述語（мочь 以外）の場合 190
1.5.2.2. 外的可能性を表す述語（мочь 以外）の場合 193
1.5.3. 不可能性と完了体の関係について：述語 мочь の場合 194
1.5.4. まとめ 195
1.6. まとめ：ロシア語における可能性に関わるモダリティと不定詞の体のカテゴリー 196
1.6.1. 概要 196
1.6.2. 可能性に関わるモダリティの種類と意味・統語構造 196
1.6.2.1. 意味・統語構造ごとの全体的な使用実態 196

1.6.2.2. 使用実態に応じたそれぞれの述語の特徴付け 197
1.6.3. 可能性に関わるモダリティにおける不定詞の体の形態の果たす役割 199
1.6.3.1. モダリティの意味、不定詞の語彙的意味と体の機能 199
1.6.3.2. 「体の競合」のケース 201
1.6.4. 可能性のモダリティの種類と意味・統語構造、不定詞の体の形態の機能 203

2. 語彙的意味を基準にした単位への統合、形態的対立のスケール 203
2.1. 本節の概要 203
2.2. 体のペアを持つ動詞：語彙的意味を基準にした単位への統合 205
2.2.1. 語彙的意味を基準にした単位への統合 205
2.2.2. 特殊なケース 206
2.2.2.1. 体のペアとして複数の動詞との対応が想定される場合 206
2.2.2.2. いわゆる「体のトロイカ」を形成する場合 206
2.3. 体の形態的対立のスケール 207
2.3.1. 概要：体の形態的対立のスケール 207
2.3.2. 体の形態的対立のスケール（今回のデータから） 208
2.3.3. こうした傾向は何を意味するのか 209
2.4. 特徴的な振る舞いを見せる動詞 211
2.4.1. ペアを持つ動詞（第Ⅱ群） 211
2.4.1.1. 動詞群 211
2.4.1.2. 不完了体が用いられる場合 212
2.4.2. ペアを持つ動詞（第Ⅰ群） 214
2.4.2.1. 動詞群 214
2.4.2.2. 完了体が用いられる場合 215

2.5. 本節のまとめと今後の課題 216

3. 第四章のまとめ 218

第五章
補足的考察：述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケース

0. 本章の概要 221

1. 異なる視点からの分析の試み 221
1.1. 問題提起 221
1.2. 本章で試みる分析の目的とその対象 223

2. 収集したデータに関する情報 225
2.1. 検索にかける文字列 225
2.2. サンプルの分類及び制限事項 225
2.3. データの総数 226

3. 言語使用の実態と考察 227
3.1. 概要 227
3.2. 統語環境に応じた不定詞の振る舞いの比較 228
3.3. 動詞ごとの振る舞いの違い 230
3.3.1. 概要 230
3.3.2. 動詞ごとの振る舞い 231
3.3.2.1. 述語派生抽象名詞 231
3.3.2.2. 述語との語結合の場合との比較 232
3.3.3. 統語環境に応じて振る舞いが変わらない動詞 234
3.3.4. 統語環境に応じて振る舞いが変わる動詞 235

4. 第五章のまとめ 236

第六章
本稿における結論

0. はじめに 239

1. 「可能性」の意味の明確化と意味・統語構造への分類 241

2. 言語使用の実態の記述 242

3. モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味の考察 244

4. 述語派生抽象名詞と不定詞の結合のケース 246

第七章
おわりに：今後の課題

0. 本章の概要 247

1. 動詞ごとの振る舞いに関する問題 247
1.1. 「体の形態的対立のスケール」について 247
1.2. その他の特徴的な動詞 248
1.3. 「体の競合」をめぐる問題 250

2. 可能性を表すその他の手段とその平行的使用に関する問題 250
2.1. 概要：可能性の意味を表すその他の表現手段 250
2.2. 様々な表現手段の平行的使用に関する問題 251

補足資料：体の形態的対立のスケール（詳細）

..... 255

参考文献

0. はじめに 263

1. 欧文文献１（ロシア語） 263

2. 欧文文献２（英語、その他） 268

3. 日本語文献 269

4. 辞書・辞典類 271

5. ウェブ上の各種リソース 272

はじめに

0. 本章の概要

この章では、本論に入る前に、本稿全体に共通している、いくつかの前提事項について確認する。

まず、第 1 節で、本稿で扱う研究の必要性、本研究で用いた分析の方法、そして本研究が持っていると考えられる意義について、理論的側面と実用的側面の双方から述べる。

第 2 節では、本研究で対象とする「現代ロシア語」について確認する。

第 3 節では、本稿の全体の構成について述べる。

第 4 節では、本稿の書式上の留意事項について確認する。

1. 本研究について：その必要性、方法と意義

1.1. 本研究の必要性

下でも確認する通り、本研究の主たる対象は、モダリティの述語と不定詞からなる語結合をめぐる問題である。この対象は、体の用法などを扱う研究においては、以前からしばしば言及がされている対象である。しかし、そこでの記述に関して言えば、体系的なものが目指されているとは言えないものであった。

体のカテゴリーについては、実際にどのような動詞が、どちらの体の形式で用いられているのかが十分に明らかになっているとは言えず、他方、モダリティのカテゴリーをめぐっては、そのモダリティの分類がごく大まかになされたままで性急な定式化が試みられているという状況があった。また、動詞の意味的側面に関して言えば、不定詞の語彙的意味に関する考察が不十分であるなどの問題があった。

そのため、非母語話者が、現実の発話に接する（言語使用の実例に触れる）際に、その意味を適切に理解できない、あるいは実際に自身が発話を生成する（言語形式を選択する）場面に遭遇した際に、不適切な形式を選択してしまうという状況がしばしば生じる。

本研究では、こうした従来の研究には不足していた視点を補った上で、対象に改めて考察を加えることを目指している。

1.2. 本研究で用いた方法

上記のような問題意識の下に、本研究では、まず第一に言語使用の実態を把握するという必要性から、言語資料をコーパスから収集し分析するという方法を採った。そうして得られた多数のデータの数量的分布を調査することで、それを足掛かりとして対象となる言語単位の文法的行動の把握を試みた。

こうした方法は、従来のロシア語アスペクト研究においては試みられていないものだが、この方法を採用することにより、これまでは明らかになっていなかった、言語

単位の文法的行動を明らかにすることができた。

その一方で、言語単位の記述に際しては、母語話者への聴き取りによる調査も実施し、その結果も記述に含め一層の充実を図った。これは主に、当該言語形式の交換の可能性を探るために行なったものだが、コーパスから得られた言語資料に対する観察という方法だけでは、当該言語形式の選択可能性に関する記述という点から見て、不足が生じてしまうため、それを解消するべく行なったものである。

1.3. 本研究の意義

本研究は、理論的側面、実用的側面の双方において一定の意義を有すると考えられる。

まず、理論的側面からの意義としては、上でも述べた通り、体のカテゴリーを扱う研究において、実際の言語使用に対する観察から始めるべく、コーパスからサンプルを収集した上で、言語使用の実態についてのデータを、その数量的分布の情報と共に示し、新たな視点から対象に考察を加えたという点が挙げられるだろう。

また、本研究を進めるにあたっては、ペテルブルク機能文法学派（後述）によって提案されている、機能・意味論的な理論的構築物を援用している。したがって、本稿で試みるような、言語使用の実態に関するデータを利用した分析というのは、これらの理論的構築物の具体的な振る舞いを、計量言語学的な情報を足掛かりにしてどのように記述することができるかという試みであると位置付けることもできるだろう。

また、伝統的なロシア語学において提案されてきた、体の意味の理論を、一般言語学におけるアスペクトの観点から、Плунгян（2011, 2012）における論を援用しつつ見直すことで、問題点を炙り出し、改めて整理を行なったという点も貢献の一つであると考える。

また、従来記述されてきた、モダリティの述語と不定詞という語結合における、体の形態選択を行なう動機付けについても、従来とは異なる視点から再検討を試みたことも、本研究の持つ意義の一つと言える。

また、非過去時制（非過去形）、あるいは非直説法における、体のカテゴリーの見せる文法的行動は、未だ明らかになっていない部分が多い。本研究で対象としている、不定詞はまさにそうした形態の一つであり、その文法的行動の一端を明らかにしようと試みているという点でも一定の意義を有している。

一方、本研究の持つ、実用的側面からの意義としては、モダリティの述語と不定詞という語結合において、どのような統語構造で、どのような述語と不定詞が結合する際に、どちらの体が、母語話者によってどの程度用いられているかという点について、データの数量と共に示し、明らかにしたという点が挙げられるだろう。これは、非母語話者にとっては貴重な資料となるものである。

2. 本研究で対象とする「ロシア語」

2.1. 伝統的な「現代ロシア標準文語」の理解と言語研究における問題点

この節では、ロシア語学における「現代ロシア語」の伝統的な規定とその問題点に

ついて確認していこう。

ロシア語学の研究対象である、「現代ロシア標準文語（современный литературный русский язык）」の成立の過程では、まず、Кантемир（Антиох Дмитриевич; 1708-1744）、Ломоносов（Михаил Васильевич; 1711-1765）、Тредиаковский（Василий Кириллович; 1703-1769）、Сумароков（Александр Петрович; 1717-1777）、Фонвизин（Денис Иванович; 1745-1792）、Державин（Гавриил [Гаврила] Романович; 1743-1816）、Новиков（Николай Иванович; 1744-1818）、Карамзин（Николай Михайлович; 1766-1826）、Грибоедов（Александр Сергеевич; 1795-1829）、Пушкин（Александр Сергеевич; 1799-1837）、Крылов（Иван Андреевич; 1769-1844）らによる作品において、ロシア語の完成度と安定度が高まって行った。その時点では、まだスラヴィニズム（славянизмы）[1]、民衆の口語体、西欧語の要素という三つが秩序なく混在していたが、最終的には Пушкин が、これらの要素を有機的に融合したとされ、この時代の言語が今日のロシア語の礎ともなっている。その後、Лермонтов（Михаил Юрьевич; 1814-1841）、Гоголь（Николай Васильевич; 1809-1852）、Достоевский（Федор Михайлович; 1821-1881）、Тургенев（Иван Сергеевич; 1818-1883）、Салтыков-Щедрин（Михаил Евграфович; 1826-1889）、Чехов（Антон Павлович; 1860-1904）、Толстой（Лев Николаевич; 1828-1910）、Горький（Максим; 1868-1936）、Бунин（Иван Алексеевич; 1870-1953）らの作家たちの手になる作品が、現代ロシア語の規範の形成に大きく寄与したとされる（cf. Энциклопедия 1998: 441-442）。

こうした理解の下、ロシア語学の対象となる「現代ロシア標準文語」も、その規定に沿うものとなっている。これはすなわち、Пушкин の活動年を基準にすれば 19 世紀から現在までを「現代ロシア語」と捉えているということになる。

しかしながら、Пушкин の活躍した 1800 年前後から、2000 年代の現在までには、間 200 年もの年月が流れており、その間様々な語の流入、消失、あるいは個々の語の形態や意味・用法の変化などといった、言語体系内の多方面にわたる変化を経ているであろうことは想像に難くないし、またそうした側面を記述した研究も多く成されてきている[2]。したがって、この伝統的な立場に立って「現代ロシア語」を規定し、共時的な言語研究を行なうには、この「現代ロシア語」は、余りにも通時的な変化を被り過ぎており、それによって生じてくる、研究上の弊害の方がむしろ大きくなってしまうのではないかとの危惧が生じる。したがって、こうした通時的な変化の可能性を無視して、ひとまとまりに「現代標準語」として分析対象とするのはいささか無理があると考えられる。

2.2. 本研究で対象とする「現代ロシア語」

こうした状況を踏まえた上で、本研究では、対象とするロシア語を、少なくとも 20 世紀初頭〜中庸以降のロシア語に限り、これを「現代ロシア語」として捉えることとする。これは、本研究で対象とするべきロシア語は、現在用いられているロシア語で

[1] 古代スラヴ語、あるいはより後の時代（11 世紀以降）の教会スラヴ語からロシア語に入ってきていた語や慣用的言い回しなどを指して言う（cf. Энциклопедия 1998: 487-489）。

[2] このような側面を扱った研究として、代表的なものとしては Воронцова и др.（1996）などがある。

あるという観点に立っているためである。

なお、このような「現代ロシア語」の捉え方は、既に 80 年代に、同様の立場を Милославский（Игорь Григорьевич; 1938-）が自著において言及している。Милославский は、「現代ロシア語」の「こうした理解は広く受け容れられているものではない」と断りを入れつつも、『「現代」という語は、「20 世紀中頃に属する」と理解する必要がある。』と述べている（Милославский 2011: 5）。また、「標準語（литературный язык）」という語の理解についても、『文学で用いられている言語及び一般社会の教養のある人々の用いている言語（язык литературы и образованных членов общества）』であるとしている。本研究においても、「現代ロシア語」及び「標準語」については、基本的にはこの立場に沿った理解をしている。

また、以下でも述べる通り（第三章を参照）、分析のためのデータを収集する際にも、まず、この「現代ロシア語」を対象とするという基準を満たすという観点から、ウプサラ・コーパス（第三章にて後述）を採用し、サンプルを採集している。

また、原則として韻文も対象には含めず、取り扱うのは散文である。特殊な言語活動の産物である韻文は、「実際に用いられている言語を記述する」という目的を持った分析には必ずしもそぐわないと考えるからである。

以下、本稿では、「現代ロシア語」という表現すら用いず、単に「ロシア語」という表現で代える。これを用いている場合には、特に断りがない限り、上述の「20 世紀以降の標準ロシア語」を念頭に置いて論を進めている。

3. 本稿の全体の構成

以降の本稿全体の構成について確認しよう。

まず、第一章（「問題提起、先行研究の問題点、分析の対象とその目的」）では、本論に先んじて、問題提起と、先行研究における記述の確認を行なう。そこで、先行研究の抱える不備な点などを検討する。その上で、より具体的な形で、本稿において解決を試みる課題を明確に定める。

続く第二章（「理論的前提となる諸概念」）では、本稿における分析を行なうための理論的前提としての諸概念について確認する。

まず第 1 節（「状況と述語、その分類：状況の性質（акциональность）について」）では、人間が概念化する「状況」とその性質について概観する。

続いて、本研究における主たる対象となる、二つのカテゴリーについて概観する。すなわち、アスペクトのカテゴリー（同章第 2 節）とモダリティのカテゴリー（同第 3 節）である。

第 2 節（「動詞：アスペクトと体のカテゴリー」）では、まず一般言語学的な視点からアスペクトのカテゴリーについて概観した後、アスペクトのカテゴリーの表現をロシア語において担っている文法的カテゴリーである、体のカテゴリーについて、その意味と機能について確認する。

第 3 節（「モダリティのカテゴリー」）では、モダリティのカテゴリーについて概観する。まず一般言語学的な視点からモダリティのカテゴリーの概要を把握し、その後

ロシア語のモダリティのカテゴリーについて概観する。そして、本稿の対象である「可能性」のモダリティの意味について確認する。ここまでで、本研究の対象の、ロシア語の言語体系全体での位置付けを明らかにすることができる。

第 4 節（「ロシア語の不定詞の備える諸特徴」）では、ロシア語の動詞の一形態である、不定詞の持つ、形態論的、統語論的特徴について確認する。そして、不定詞の体のカテゴリーの意味と用法について概観する。

第 5 節（「可能性の意味を含む述語を持つ文の意味・統語構造の分類の試み」）では、「可能性」のモダリティの意味を含む文の、意味・統語構造に応じた分類を試みる。

第三章（「本研究のデータ：サンプルの収集、取捨選択及び分類」）は、本研究で分析対象となるデータに関する章である。まず、ロシア語を対象とする、既存のコーパスについて概観する。次に、本稿で採用したコーパスからサンプルを収集する際の手順について確認し、更にその中から最終的に利用するデータを取り出すための基準について確認する。そして、最終的なデータの数量についてみる。

第四章（「言語現象の実態の検証、考察と解釈」）では、前の章で確認したデータから、本研究の分析対象が見せる、実際のテクストにおける文法的な振る舞いの実態を明らかにした上で、こうした振る舞いが、一体どのような要因によって生じてきているのか、あるいは従来とは異なる解釈が可能なのかどうかについて考察する。

続く第五章（「補足的考察：述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケース」）では、前章までで対象としてきた一連の述語から派生した抽象名詞と、不定詞が語結合を形成するケースを取り上げ、述語との語結合のケースとの比較を試みる。

第六章（「本稿における結論」）において、本稿で行なった一連の作業と分析について確認し、本稿での結論に代える。

第七章（「おわりに：今後の課題」）では、最後に、本稿では十分に考察を加えられなかった点、あるいは扱いきれなかった点などについてまとめ、今後の課題として設定する。

4. その他書式上の留意事項など

4.1. 本節の概要

ここでは、本稿で採用している書式面に関する、以下の留意事項についてまとめる。

① 本文で使用する文字体系について
② 本文で採用する文法情報の略号について
③ 例文番号、図表番号について
④ 種々の括弧の用い方
⑤ 研究者の生没年について
⑥ ウェブ上の各種リソースについて
⑦ 各種術語の採用について

4.2. 本文で使用する文字体系について

本稿では、例文あるいは本文でロシア語を表記する必要のある場合、キリル文字（ロシア文字）をそのまま採用することにした。ラテン文字に翻字することは、より広汎な読者の便宜に適うものではあろうが、本稿では、キリル文字で表記されていれば、それがロシア語の語あるいは文であるということが一目で確認できるという視認性の高さという利便性に、より重きを置くことにした。

なお、キリル文字の各字母とラテン文字の対応は以下の表のようになっている。キリル文字のラテン文字への翻字方式に関しては、複数の方式がある[3]が、下表では米国議会図書館（Library of Congress; LC）方式の翻字法を採用している[4]。

下表では、キリル文字の全 33 文字（大文字、小文字）がそれぞれどのラテン文字に対応しているかを示している。各字母の左側には便宜上通し番号を振ってある。

表 1: 翻字一覧（米国議会図書館方式）

	キリル文字	ラテン文字		キリル文字	ラテン文字
1	А а	A a	18	Р р	R r
2	Б б	B b	19	С с	S s
3	В в	V v	20	Т т	T t
4	Г г	G g	21	У у	U u
5	Д д	D d	22	Ф ф	F f
6	Е е	E e	23	Х х	Kh kh
7	Ё ё	Ë ë	24	Ц ц	T͡S t͡s
8	Ж ж	Zh zh	25	Ч ч	Ch ch
9	З з	Z z	26	Ш ш	Sh sh
10	И и	I i	27	Щ щ	Shch shch
11	Й й	Ĭ ĭ	28	ы	y
12	К к	K k	29	ъ	″
13	Л л	L l	30	ь	′
14	М м	M m	31	Э э	Ė ė
15	Н н	N n	32	Ю ю	I͡U i͡u
16	О о	O o	33	Я я	I͡A i͡a
17	П п	P p	-	-	-
	キリル文字	ラテン文字		キリル文字	ラテン文字

[3] キリル文字のラテン文字への翻字（古くは「転写」とも）法の概要については、以下の Wikipedia の項目を参照されたい：

http://en.wikipedia.org/wiki/Romanization_of_Russian

[4] キリル文字の LC 方式による翻字法については、以下のドキュメントを参照：

http://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/russian.pdf

4.3. 本研究で採用する文法情報の略号について

本稿では、例文内の語に文法情報を付している場合がある。原則として、本論に直接関係すると思われる、動詞に関わる部分に限っている。

また、それぞれの文法的カテゴリーを示すための略号は、Leipzig Glossing Rules で採用されているものに依っている[5]。本稿で用いている具体的な略号は下表の通り：

表 2：本稿で採用している略号

文法的カテゴリー	略号
人称	1：１人称、2：２人称、3：３人称
性	M：男性、F：女性、N：中性
数	SG：単数、PL：複数
時制	PST：過去形、PRS：現在形、FUT：未来形
その他の動詞の諸形	PTCP：分詞（形動詞）
	INF：不定詞
	IMP：命令形
体	PFV：完了体、IPFV：不完了体

これらの略語を、問題となっている動詞（下線を施してある）の後の角括弧の中に、スモールキャピタルで表示する。以下の例で確認されたい：

(3-25) Кто их <u>поймет</u> [PFV-FUT-3-SG] ?
誰が彼らのことを理解できようか？

4.4. 例文番号、図表番号について

本稿では、例文と図表に以下のような形式で番号を付している。

（章番号 － その章内での例文の通し番号）

すなわち、前節で挙げた例のように、例文の頭に「 (3-25) 」と付してあれば、その例文は、第三章全体を通して 25 個目の例文であることを示す。

図表についても、数字の付け方に関する規則は同様である。「表 4-5」とあれば、第 4 章の 5 番目の表であることを示す。

4.5. 種々の括弧の用い方について

原則として、重要な概念（あるいは術語）の初出時には、二重鍵括弧（例：『重要な概念』）を用いて提示することを原則とする。それ以降は、他の語と区別して強調する必要などがあれば、一重鉤括弧（例：「重要な概念」）に入れて表す。

---

[5] Leipzig Glossing Rules については以下の URL を参照されたい（2013 年 8 月現在）：

http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php

概念あるいは術語の言い換えを行なう際には、丸括弧に入れて表す（例：「重要な概念（術語）」）。また、丸括弧は、原語を示す際にも用いている（例：『言語学（языкознание; linguistics）』）。

4.6. 研究者の氏名と生没年について

本研究では、ある研究者の研究を紹介、引用する際には、その研究者の氏名と生年（あるいは生没年）を、調査の及ぶ限り付することとしている。

生年（生没年）の情報については、ある研究者が過ごしている（あるいは過ごした）時代というものは、その研究者の言語観、言語理論の形成、発展、あるいは修正等に、多かれ少なかれ影響を与えるものであるという認識に筆者が立っており、こうした情報を付記しておくことは、少なからず有効であると判断したため、付記してある。

なお、氏名及び生年（生没年）に関する情報は、ロシア人の研究者に関しては、Энциклопедия（1979, 1998）、及び Wikipedia ロシア語版[6]に主に依拠している。その他の欧米諸国の研究者については、Wikipedia 英語版[7]や米国議会図書館典拠データベース[8]の情報に基づいている。調べのつかなかった人物に関しては、氏名はイニシャルのみを付記し、生年（生没年）については記載していない。

4.7. ウェブ上の各種リソースについて

ここ 20 年余りでウェブは進化を続け、膨張し続けている。万物に関する情報の保管庫としてのその価値の高さは、既存の（紙媒体の）百科事典などを、質、量、情報の反映のスピードなどの面で、遥かに凌駕するものと既になりつつあることは異論の無いところであろう。

このような、ウェブの持つ、情報の保管庫としての有用性は、言語研究にとっても同様であり、本稿の執筆時、またその準備段階においても、適宜ウェブ上の情報は参照、利用している。具体的には、主に参照したものとして、Wikipedia（英語版、ロシア語版）がある[9]が、以下の本文においても必要に応じて、参照した電子資料の URL

---

[6] URL は以下の通り：

http://ru.wikipedia.org/wiki/Заглавная_страница

[7] URL は以下の通り：

http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page

[8] 米国議会図書館に収められている書物類の、主に著者に関するデータベースで、随時更新されている。議会図書館所蔵の書物の書誌情報は、この典拠データに基づいて記述が成されている。この典拠データには、全てではないが、著者の生年、生没年に関する情報が付されている場合があり、本稿ではその情報を利用している場合がある。以下の URL を参照：

http://authorities.loc.gov

利用の方法などについては以下の URL を参照：

http://authorities.loc.gov/help/contents.htm

[9] Wikipedia における情報の信頼性については、各種の研究が成されているが、いずれの研究も全体と

（URI）[10]を示している場合がある。

本文内に掲載した各種リンク先の内容については、本稿執筆時点（2013 年 9 月）で確認している。また、以前は有効だったリンク先が執筆時点で無効となっているような場合があれば、その旨注記を付してある。

なお、参照したウェブページについては、具体的には末尾に付した文献一覧内の、「ウェブ上の各種リソース」の項に掲載してあるので、必要に応じて参照されたい。

4.8. 各種術語の採用について

本稿では、言語学上の各種概念を指す術語を使用する際には、一般言語学、ロシア語学双方で広く受け入れられていると思われるものを用いている。一般言語学における術語と、ロシア語学における術語において大きく異なっているような場合には、原則として双方について示すことにしている[11]。また、必要に応じて脚注を設け、より詳細な説明を加えている場合がある。

本稿において最も重要な対象となる、以下の二組の術語については、先んじてここで触れておくことにしよう：

① 「アスペクト」と「体」
② 「不定詞」と「不定形」

まず、「アスペクト」と「体（たい）」という術語については、一般言語学における概念としての意味・文法的カテゴリーを指す場合には、「アスペクト」という術語を用いることとし、ロシア語をはじめとするスラヴ諸語における文法的（形態論的）カテゴリーについて述べる場合には、「体」という術語を用いることとする。

一般言語学の範囲では、「アスペクト」の他に、「相」という術語が用いられることもあるが、本稿では、この文法的カテゴリー全体を表す場合には、「アスペクト」の術語を採用する。その下位概念である、個々のアスペクトの種類をさす場合には「相」

して Wikipedia に記載されている情報の信頼性を否定するものとはなっていない。また Wikipedia 自体に以下の項目（「Reliability of Wikipedia」）が立てられており、複数の研究にリンクが張られている：

http://en.wikipedia.org/wiki/Reliability_of_Wikipedia

なお、日本語版 Wikipedia についての同種の研究は、ウェブ上では見つけることができなかったため、こうした研究が事実上試みられていないものと考えられる。

[10] 「URL」は「Uniform Resource Locator」を略したもの。より上位の概念として「URI（Uniform Resource Identifier）」があるが、これらはほぼ同義で用いられる。

[11] ここで述べるような、一般言語学における術語と、日本のロシア語学界において伝統的に用いられてきた術語との間にある、異同も含めた関係については、何らかの形で整理を行なう必要性があるように思われる。術語それ自体は、説明の便宜のためのものに過ぎず、その意味では本質的なものではないが、その一方で、ある術語をもってその概念の理解にどう適切に導くかという観点も必要とされるだろうし、その術語が提案されてきた歴史的な背景などにも一定の配慮をする必要があろう。そうした複数の視点を保ちつつ、排すべきものは排し、残すべきものは残すという作業は求められてくるだろう。

の術語を原則として用いている（例えば、「完了相」など）[12]。

それに対して、「体」という術語について、この名称自体は、ロシア語及びそれと系統を同一とするスラヴ諸語の研究においては、一般的に受け入れられている名称である。また、「体」のカテゴリーは、一般言語学の範囲で規定されている「アスペクト」のカテゴリーを表すという機能ばかりではなく、(文法的カテゴリーであるという性質故に）より多様な用いられ方をすることがあるという意味においても、ロシア語の文法的カテゴリーを指す場合には、「体」の名称を用いるのが適切であろうと考える。

次に、もう一方の重要な対象である「不定詞」という術語（上記②）に関しては、一般言語学寄りのこの術語を用いることにする。

従来日本のロシア語学においては（また、ロシア語教育の分野においても)、「不定詞」を指す場合に、「不定形」という述語が用いられてきた。ロシア語の術語としては「инфинитив」あるいは「неопределенная форма глагола」である[13]が、この術語を日本語に訳出する際に「不定形」という訳語が充てられたのは、動詞の「定形（определенная форма глагола)」に対する語として提案されたものであるからと考えられる。この経緯を考えれば、「不定形」という術語を採用するのにも、それ相応の正当性があると筆者自身は考えている。しかしながら、本稿では、英語学などでも採用されており、一般により広く用いられ、より理解されやすいであろう「不定詞」という術語の便宜性をより重んじ、こちらの術語を採用することにしている。

[12] ただ、「相」という術語自体も、「開始相」、「中間相」、「終了相」といったいわゆる「位相（phase)」の概念（後述）との混同を招きかねないものであるので、その点では全てを解決してくれる術語ではない。

[13] Энциклопедия（1998）における「不定詞（Инфинитив)」の項目など参照されたい（cf. Энциклопедия 1998: 158-159)。

第一章

問題提起、先行研究の問題点、分析の対象とその目的

0. 本章の概要

本章は、本論に入る前段階の、導入としての位置付けにある。

以下まず、第 1 節で、問題提起として、ロシア語における、モダリティの意味を持つ述語と不定詞が語結合を成す場合の、不定詞の体のカテゴリーの選択をめぐるいくつかの問題について概観する。

そこでの議論を踏まえて、第 2 節では、本研究で行なう分析の対象を定め、また分析の目的について確認する。

第 3 節で、本研究の対象を取り扱った先行研究における記述を、主に Рассудова（1982）と Forsyth（1970）の研究から概観する。

第 4 節では、これらの先行研究が抱えている問題点についてまとめ、不備な点、あるいは補われるべきであろう点について指摘する。

そして、第 5 節では、ここまでの議論を踏まえて、本稿で解決を試みる、個々の具体的な課題を設定して、本章の内容のまとめと代える。

1. 問題提起として

ロシア語の動詞には、主にアスペクトの意味を表わすカテゴリーとして、『体（вид）』という文法的（形態論的）カテゴリーが備わっている[1]。ほぼ全ての動詞が、『完了体（совершенный вид）』か、『不完了体（несовершенный вид）』かに属するとされる[2]。

このような言語的特徴を有するため、ロシア語においては、「アスペクト」のカテゴリーと、他の文法的カテゴリーとの相互の関係性が、形態論的特徴を伴うため顕在化しやすいということになる。事実、体のカテゴリーを扱った過去の研究でも、他の、意味的、あるいは文法的カテゴリーとの相関関係についてはしばしば取り上げられ、議論の対象となっている。

そのような例のうちの一つとして、以下本稿でこれから取り上げる、モダリティの意味と体のカテゴリーとの関係に関するものが挙げられるだろう。

ロシア語においては、モダリティの意味を含む語と動詞が語結合を成す場合には、その動詞の形態は不定詞という形態を取る（下例参照）：

---

[1] 「アスペクト」及び「体」という、それぞれの術語によって念頭に置かれている概念については、第二章の該当部分（cf. 第二章、2.5.1.）も参照されたい。

[2] 「быть」は、動詞としても連辞としても用いられるため、その扱いには慎重さが求められる。動詞として考える場合、「存在」などの意味を表すため不完了体動詞と意味的に共通する部分が多いが、その一方で人称変化を行なうと未来の意味を表すため、その点では完了体動詞と特徴を共通にしていると言える。

(1-1) Я не ***могу*** <u>научить</u> [PFV-INF][3] тебя вежливости. [UC][4]
あんたに礼儀を教えることはできないんだ。

ロシア語の動詞の諸形態のうち、不定詞という形態は、他の諸言語の場合と同様、このように他の語の従属的成分としての機能を有する一方で、不定詞単独で用いて文を形成することも可能である[5]。そのため、動詞の諸形態のうち、この形態は、実際の発話において頻度の高い部類に入る形態のひとつであると言える。

そして、ロシア語の体のカテゴリーが持つ、大きな言語的特徴のうちのひとつは、動詞が不定詞という形態であっても、(例えば、時制のカテゴリーとは異なり）体のカテゴリーが保持されるという点にある。したがって、ロシア語話者は、不定詞を用いる際にも、文法的カテゴリーである（そのため義務的である）体のカテゴリーの形式選択の必要性に、常に迫られているということになる。

さて、上で述べた、モダリティの意味とアスペクトの意味の間にある相関関係の例に立ち返ることにしよう。

モダリティのカテゴリーと体（≒アスペクト）のカテゴリーという、二つのカテゴリーの間の関係については、過去に多くの記述が成されている。複数の研究において指摘されていることとして、一般に、あるモダリティの意味と、それらの意味を含む文において用いられる不定詞の体の形態選択との間には、一定の相関関係が見られるというものがある[6]。そのうち、最も典型的なものとしては、モダリティの意味を含む述語とそこに結合する不定詞の体の形態選択に関する例である。

例えば次のような文を例にとってみよう：

(1-2) В этом месте улицу ***нельзя*** <u>перейти</u> [PFV-INF].
ここでは通りを渡ることはできません。

述語 нельзя は、不可能性の意味を表す一般的な述語だが、この「不可能性」の意味を文が含んでいる場合には、不定詞は完了体が用いられるとされる。同様の選択傾向については、以下のような不定法文の場合にもしばしば指摘される：

(1-3) Тебе этого не <u>понять</u> [PFV-INF]!
あんたなんかに分かりっこないのよ！

しかしながら、こうした相関関係を「定式化」しようと試みると、次のような例は「例外的」として扱われることになる（例は Рассудова 1982: 125）：

---

[3] 以下例文中、モダリティの意味を含む語をボールドの斜字体で示し、不定詞には下線を施し、後続する括弧内に文法情報を付する。なお、文法情報の略号については前章第 4.3.節を参照。
[4] ウプサラ・コーパス（後述）からの例文であることを示す。ウプサラ・コーパス及びここで用いている略号などについては、第三章第 1. 3.節を参照。
[5] ロシア語における不定詞の用法についての概要は、第二章第 4.4.節を参照されたい。
[6] 本稿以下第二章、第 2.4.節でも見るが、Рассудова（1968, 1982）や Forsyth（1970）などを参照。

(1-4) В этом кинотеатре ***нельзя*** показывать [IPFV-INF] широкоэкранные фильмы.
この映画館ではワイドスクリーンの映画は上映することができません。

上の例では、「不可能性」の意味が表されている（したがって「定式」に従うとすれば完了体が選択されるはずのケース）にも関わらず、不定詞は不完了体が用いられている。

このいくつかの例を見るだけでも、「不可能の意味の場合には、不定詞は完了体を用いる」という「定式化」を試みても、限られたケースしかカバーできないものになるだろうことが伺える。

その一方で、こうした「定式」は、しばしば外国人向けのロシア語学習用教材などでも取り扱われているという状況があり[7]、それを考慮すると、一定の有効性を持つものであるとも考えられる。したがって、「定式」を提案するのであれば、何らかの形で「修正」あるいは「精密化」を行なう必要が生じてくるということになるだろう。

このように、モダリティの意味と体の形態の間の相関関係をめぐる諸問題は、未だ解決されないまま残されているのである。

2. 本研究の分析対象、本研究で行なう分析の目的

2.1. 本研究で行なう分析の目的と対象

ここまで、モダリティの意味を表す語と不定詞の語結合を例に、モダリティのカテゴリーと、体のカテゴリーの間にあると思しき相関関係について概観した。

本研究の主たる目的は、先に見たような、モダリティという意味カテゴリーと、アスペクトという意味カテゴリーの間にある何らかの相関関係の詳細を明らかにするということにある。

まず、モダリティの意味カテゴリーについては、本研究では、『可能性（возможность）』のモダリティの意味を対象として取り上げることにする。

ここで、「可能性」の意味を特に取り上げる意図について述べておく必要があるだろう。いくつかあるモダリティの意味のうち、「可能性」のモダリティは、『必要性（необходимость）』と並んで、最も基本的（根源的）なものであり、事実、実際の発話での使用頻度も高いと思われる。したがって、このモダリティの意味と、体（アスペクト）の形式選択との関係について整理し、記述をまず試みた上で、そこで一定の成果が得られれば、他のモダリティの意味の記述を行なう際にも、何らかの形で資するであろうことが予想される。

ロシア語において、この「可能性」の意味を表す述語は、後述するように（cf. 第二章、第 3.5.節）、いくつか用意されているが、本稿では мочь, уметь; способен, в состоянии, в силах; можно, нельзя, возможно, невозможно といった述語を取り扱う[8]。

---

[7] 例えば、Гуревич（2008）、Караванов（2003）、Скворцова（2003）、Соколовская（2003, 2008）、といった、外国人向けの教科書や問題集などでも取り上げられている。

[8] 本稿では、一般に мочь の体のペア（第二章、第 2.6.節参照）であるとされる смочь と、同様に уметь のペアであるとされる суметь は、ひとまず対象として取り上げていない。これは、このそれぞれのペアが、他の動詞の場合のペアと本質的に異なっており、別途検証が必要であると考えているからであ

アスペクトのカテゴリーについては、上で見たように、ロシア語においてアスペクトの意味カテゴリーの表現を担っている主たる言語形式は、動詞（ここでの述語と結合する場合には不定詞）の体のカテゴリーである。

したがって、本研究の観察の対象は、「可能性」の意味を含む語（述語及びそれらから派生した抽象名詞）と不定詞から成る語結合と、その不定詞の体のカテゴリーということになる。

2.2. 本研究の目指す最終的な目的

本稿で行なう分析は、最終的にロシア語という文法体系に関する何を、ひいては人間が用いる言語という体系に関する何を明らかにすることにつながるものとなりうるのかについて考えてみることにしよう。

ロシア語の動詞の諸形態のうち、不定詞という形態は、時制のカテゴリーを持たない。したがって、不定詞という形態は、言語化（あるいは概念化）されてはいるものの、時間軸にはまだ位置付けられていない「状況（あるいは動作）」の様相を反映する形式であると考えられる。この時間軸上に位置付けられていない「状況（あるいは動作）」というのは、取りも直さず、話者の意識の中において、言語外現実と紐付けられるよりも前の段階にある、抽象的なレベルで、「状況（あるいは動作）」の様相を表しているということになるだろう。

更にロシア語の場合には、先に述べたように、動詞が不定詞という形態を取っていてもなお、体のカテゴリーは保持される。これは、極めて抽象的、原初的なレベルにある「状況（あるいは動作）」でさえも、「完了体」的か「不完了体」的かの、どちらかの捉えられ方がされており、且つその捉え方のどちらかの言語的表現を強いられるということを物語っている。

本研究によって、不定詞の見せる文法的な振る舞いを明らかにすることで、抽象的なレベルにおいて、話者がどのように「状況（あるいは動作）」を認識・把握しているかという点に関する、何らかの示唆が得られると期待される。

3. 先行研究とそれらの問題点

3.1. 本節の概要

前節で述べた通り、本研究の対象は、「可能性」のモダリティの意味を持つ語と、不定詞から成る語結合、そしてその不定詞の体のカテゴリーである。

本節では、これらを対象とした先行研究について概観し、そこで解消されていないいくつかの問題点について確認することにしよう。

ここでは、代表的な研究として、Рассудова（Ольга Петровна）によるもの（1968, 1982）と、Forsyth による研究（1970）を中心的に取り上げ、概観していくことにする。

ここで、それぞれの研究について、その性格や体の研究史における位置付けなどについてごく簡単に確認しておこう。

る。смочь や суметь といった動詞が、мочь や уметь に対する純然たるペアとして見なせるかについては、機会を改めて議論が必要だろう。

Рассудова（1968）は、ロシア語教育の分野における、ロシア語の体のカテゴリーの意味・用法に関する解説書として執筆されたものである。Рассудова（1982）は、これに改訂・増補が施された新版という位置付けになる（版を改めるにあたり題名も変更されている）。理論的な基盤としては、Маслов（Юрий Сергеевич; 1914-1990）あるいは Бондарко（Александр Владимирович; 1930-）などに主に立脚していると考えてよい。ただ、全体として母語話者の視点からの意味・用法についての説明に、より重きが置かれているという印象を受ける。また、理論的な説明に際しては、Бондарко らの理論に拠っており、著者独自の、客観的且つ厳密な科学的記述、あるいは理論的体系の構築を目指すという性格のものではない。それよりもむしろ、実用面を重視しており、どのような発話の場面で、どのような体の形態が選択されると、どのような意味あるいはニュアンスが発生するのか、という観点からの記述が多くを占めている。その意味で、氏による意味・用法の説明は、母語話者の言語的直観を反映しているとも見ることができる。まさにそれこそが、この著作の強みでもあり、一方で弱みともなっていると言えるだろう。しかし、そうした直観が適切に記録されているという意味で、価値の高い著作のうちの一つでもある。

もう一方の Forsyth（1970）は、英国人である Forsyth（James; 1928-）[9]による著作である。非母語話者による、ロシア語の体のカテゴリーに関するモノグラフとしては最も大部なもののうちの一つと言ってよい。理論的な枠組みとしては、本著作以前に発表されている、上の Рассудова（1968）の枠組みから大きく外れるものではないと言ってよいだろう（したがって、理論上 Маслов や Бондарко の系譜に連なっていると言える）。

いずれの著作も、ロシア語の体のカテゴリーの表す意味・用法を包括的に扱っており、80 年代以降に入ると、このような規模で体のカテゴリーを正面から扱った著作自体が少なくなっているという状況[10]を踏まえると、その価値は未だに衰えていないと言っていいだろう。

以下では、「可能性」の意味とその変種に関する、それぞれの研究における記述を以下で確認していくことにしよう。Рассудова の著作（1968, 1982）からは、「可能性」と「不可能性」に関する記述を取り上げる。Рассудова（1982）は、モダリティの意味と体の選択の相関関係について、不定詞の体の用法に関する章（1982: 91-127）の中で言及している[11]。この箇所に関しては、初版（1968）と改訂新版（1982）とでは大きな違いは見られない。以下では主に改訂新版（1982）に基づき記述を確認していくことにする。

Forsyth の著作（1970）からは、「可能性」、「不可能性」と「不可避性」（後述）に関する記述を取り上げる。Forsyth（1970）においては、モダリティの表現を扱っている章において（cf. 1970: 227-298）、不定詞の体の用法について触れられている。

---

[9] 国籍、生年についての情報は Энциклопедия（1996）によっている。

[10] こうした状況が生まれている背景としては、ロシア語アスペクト論における学問的な動向も大きく影響していると思われる。その学問的動向については、以下の第二章第 2.5.2.3.節～第 2.5.2.4.節などの記述も参照されたい。

[11] Рассудова（1982）におけるこの章の内容（不定詞の体の用法）については、後の、第二章、第 4.3.節でも確認する。ここでは、「可能性／不可能性」についての記述だけを確認するに留める。

3.2. 可能性

まず、Forsyth（1970）における「可能性（ability, capability）」に関する記述について見ていこう。

Forsyth（1970）では、мочь, смочь, можно, быть в состоянии, удаваться, удаться, успеть, суметь などの述語と共に用いる不定詞は、多くの場合（”predominantly”）完了体であるとし、以下の例などが挙げられている（Forsyth 1970: 236-237）：

(1-5) С этим ***можно*** поздравить [PFV-INF] друг друга.
このことではお互いに祝福し合っていいだろう。

(1-6) Я думаю, ***можно*** начать [PFV-INF].
始められると思います。

Рассудова（1982）は、「モダリティの意味を含む語が表す意味は、おそらく完了体の意味とより呼応している（”Семантика модальных слов, по-видимому, в большей степени соответствует значению СВ[12]”）」と述べている（1982: 96）。

しかし、以下の例を対比して、体のカテゴリーの違いによる意味の違いにも言及している（Рассудова 1982: 98）：

(1-7) ***Можете*** усложнять [IPFV-INF] задания.
(1-8) ***Можете*** усложнить [PFV-INF] задания.
課題を難しくすることもできますよ。

不完了体が用いられている前者（1-7）では、「徐々に複雑にしていく」という漸次的な変化が念頭に置かれているのに対して、後者（1-8）では、完了体が用いられているため、そうした意味は表されない。

Forsyth（1970）は、不完了体の不定詞が用いられるのは、「その文が、不定詞によって表された動作を行なう、（ある特定の状況下のものではなく）通常の能力を表している場合[13]」であるとしている（Forsyth 1970: 237）：

(1-9) Проводы... как ***могут*** люди переносить [IPFV-INF] такое? Как ***можно*** за пять минут до разлуки рассказывать [IPFV-INF] анекдот и смеяться [IPFV-INF]?

---

[12] ロシア語アスペクト論に関する文献の多くで、慣習的に「СВ」は、「完了体（совершенный вид）」を表す。同様に、「不完了体（несовершенный вид）」は、「НСВ」で表す。

[13] 原文は以下の通り（Forsyth 1970: 237）：

The imperfective is used with such predicators where the sentence expresses capability in general to perform the type of action denoted (not ability to perform it on a specific occasion).

なお、Forsyth（1970）では、能力の意味と共に、『成功（success）』の意味も同じ節で扱っているが、本研究の対象からはずれるので、ここではその意味については省略する。

(Аксенов)
見送ること、それをどうして人は耐えられようか？どうやって別れる五分前までに冗談を言って笑ったりできるだろうか？

同様に、述語 уметь（及び успевать）は、通常一般的な能力を表すので、不定詞は不完了体が多いと指摘している。しかし、一般的な能力を表す場合でも、完了体が用いられることもあるとしている（Forsyth 1970: 239）：

(1-10) Она ***умела*** <u>прикинуть</u> [PFV-INF], что выгоднее, ***умела*** <u>приободрить</u> [PFV-INF] людей, а когда нужно — <u>накричать</u> [PFV-INF].
彼女は、何がより得かの見当を付けることができ、人々を少し元気づけることができ、必要な場合には、怒鳴りつけることもできた。

また、この可能性の意味には、次のような変種がある。不定詞が否定辞を伴う場合である：

(1-11) ***Можно*** не <u>раздеваться</u> [IPFV-INF].
上着は脱がなくていいです。

(1-12) Боюсь, что весь урожай ***может*** не <u>сохраниться</u> [PFV-INF].
穫れた物全部は残らないんじゃないか。

これらは、それぞれ不定詞が不完了体の場合には、「許可（разрешение）」の意味が表され、完了体の場合には「推測（допущение）」や「予測（предположение）」の意味の場合であるという（Рассудова 1982: 127）。
このように、可能性の意味の場合には、不定詞の選択は完了体が多いという記述がある一方で、不完了体の使用についても記述がされている。

3.3. 不可能性

上の、「可能性」の意味の場合には、完了体の使用が多いという指摘とともに、双方の体の形態が用いられうることも指摘されていた。
それに対して、この、「可能性の意味の場合には完了体が用いられる」という傾向が一層強まるのが、否定とともに用いられる場合、すなわち「不可能性」が表される場合である。
まず、Forsyth（1970）による「不可能性（inability）」の記述を確認しよう。そこでは、не мочь, не смочь, не удаваться, не удаться, не успеть, нельзя, не в состоянии, не в силах といった語と用いられる場合、具体的な状況における一回の動作であれば、不定詞は完了体で用いるのが通常であるとされている（Forsyth 1970: 241）。
このことは、Рассудова（1982）においても、動作の「不可能性（невозможность）」の意味は完了体に充てがわれていると指摘されている（1982: 123-126）。

最も端的にこの傾向をはっきりと感じられるのが、上でも見た述語 нельзя を用いる場合である（例文は Рассудова 1982）:

(1-13) Здесь строят подземный переход, в этом месте улицу ***нельзя*** перейти [PFV-INF].
ここでは地下道の建設が行なわれているので、この場所から通りを渡ることはできません。
(1-14) При красном свете ***нельзя*** переходить [IPFV-INF] улицу.
赤信号では通りを渡ってはいけません。

この述語の場合には、上例（1-13）のように、完了体が用いられていれば、「不可能」の意味が表され、（1-14）のように不完了体が用いられていれば、「禁止」や「不必要」の意味が表される。

あるいは、下のような不定法文の場合にも、こうした対立を見ることができる。Рассудова（1982）では、以下のような例とともにこの意味的な対立を指摘している（1982: 124）:

(1-15) Вам не пройти [PFV-INF] эту дистанцию.
この距離を行くのはあなたには無理だ。
(1-16) Вам не проходить [IPFV-INF] эту дистанцию.
この距離を行くことはない。

これらは、完了体が用いられている前者は、当該動作が遂行できないことを表し（「この距離は無理だ」）、不完了体が用いられている後者は、当該動作を行なう必要がないことを表している（「この距離を行くことはない。」）。

このように、Рассудова（1982）では、特に「不可能性」の意味に関して、体の形態との強い相関関係が指摘されている。

しかし、Рассудова（1982）では、その一方で、この「不可能性」の意味は完了体だけにあてがわれているものではないとも言っており、不完了体が用いられる場合として以下のような場合を挙げている（Рассудова 1982: 123-126）:

① 動作の完遂への過程（процесс）を表わしている場合
② 動作の反復性（повторяемость）の意味が前面に押し出される場合
③ 動作の持続性（длительность）が前面に押し出される場合
④ 動詞が不完了体の形態しかそもそも持っていないような場合

(1-17) Мы не ***можем*** оставаться [IPFV-INF] равнодушным к несчастью близкого нам человека.
我々は身近な人の不幸に冷淡なままでいることはできないのです。

この例では、持続性が念頭に置かれているとしている。

また、Forsyth（1970）は、これらの述語と結合する不定詞が、不完了体で用いられるケースとして、「動作それ自体を行なうことが主体の力を超えている時（ ... 【省略―筆者による】 ... when performance of the action as such is beyond the subject's powers）」であるとし、下の例を挙げている（Forsyth 1970: 242）：

(1-18) И часу <u>оставаться</u> [IPFV-INF] там не ***мог***, в этот же день уехал обратно в дивизию.
ひとときもそこに留まることはできず、その日のうちに師団に戻って行ってしまった。

もっとも、Forsyth（1970）の同じ箇所では、上の例文と合わせて、жить と вести が用いられている例文が二文挙げられているが、これらはどちらも不完了体しかない動詞[14]なので、形式選択の義務性という観点からすれば、ここでの例としては適当ではないように思われる。

このように、「不可能性」の場合には、不定詞の体は完了体が選択される傾向が強いことが、どちらの研究でも指摘されている。

3.4. 不可避性

「可能性」の意味のもうひとつの変種として、状況（動作）の「不可避性[15]」についても考えてみよう。

状況（動作）の「不可避性」とは、「当該状況（動作）が生じてしまうのを避けようがない」という意味を表す。典型的には、二重否定の構文（не мочь не ..., нельзя не ... など）で表され、生じてしまう状況（動作）はやはり不定詞によって示される。「～せざるをえない」、「～しないではいられない」、「～しないわけにはいかない」など、文脈に応じて様々な日本語の訳が考えうる。

この「不可避性」の表現と、そこでの不定詞の体の選択について言及している研究は少ない。ほぼ唯一、Forsyth（1970）において、この構文における不定詞について言及されている。

そこでは、「不可避の現象というのは、非常にしばしば、一回の動作なので、完了体の動詞が不完了体の動詞よりも普通である（”Very frequently the unavoidable phenomenon is a single action, so that perfective verbs are more common than imperfective verbs, …【後略―筆者】”）」と指摘されている。以下の例を参照：

(1-19) Мы не ***могли*** не <u>рассмеяться</u> [PFV-INF] на его слова.
私たちは彼の言葉に笑い出さざるをえなかった。

(1-20) Это случилось...Нет, это не ***могло*** не <u>случиться</u> [PFV-INF].
それは起きてしまった・・・いや、それは起きざるをえなかったのだ。

---

[14] いわゆる「単体動詞」と呼ばれるもの。第二章、第 2.6.節にて後述。

[15] ここで「不可避性」という術語を用いているが、これは筆者による試験的な術語である。

しかし、それは常にではなく、「持続する状態や反復動作の場合には，不完了体動詞不定形も用いられる（”In the case of continuous states or repeated actions the imperfective infinitive is used”）」とされている（Forsyth 1970: 262）。

(1-21) Но и не <u>думать</u> [IPFV-INF] об этом Даша не ***могла***.
しかしダーシャはそのことを考えないわけにはいかないのであった。

4. 先行研究の抱える問題点と本稿の課題

4.1. 本節の概要

ここまでで、先行研究における記述、具体的には、Рассудова（1968, 1982）と Forsyth（1970）の両研究を見てきた。双方の研究ともに、「可能性」のモダリティの意味を含む文において用いられる不定詞の体の選択について、その特徴的な傾向と、その傾向から外れる例について指摘している。

先行研究で指摘された、体の形態選択の傾向についてまとめると下の表のようにまとめることができるだろう。下表では、それぞれ「◎（＝非常によく用いられる）」、「○（＝ある程度用いられる）」、「△（＝余り用いられないが用いられうる）」の記号を付してある：

表 1-1：モダリティの意味と体の形態選択（先行研究での記述）

	完了体	不完了体
可能性	◎	○
不可能性	◎	△
不可避性	◎	△

下で詳しく見るように、管見によれば、それぞれの研究が抱えている問題点は、主に以下のような観点からそれぞれ指摘することができる：

① 言語使用の実態の記述
② 「可能性」の意味の明確化と分類
③ モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味という要素

以下では、上記のそれぞれについて確認し、本稿で具体的に解決を試みる課題を設定していこう。

4.2. 言語使用の実態の記述

まず、「言語使用の実態の記述」（前節の①）について考えてみよう。

Рассудова（1982）では、「不可能性の意味の場合には、主に（в основном）完了体である」としている（1982: 127）。しかしながら、完了体が実際にどれくらいの割合で用いられるのか、あるいは不完了体が現れてくるケースはどれくらいあるのか、と

いった点については言及していない。

一方、この点に関して Forsyth（1970）では、いくつかの述語については、自身の収集したデータの範囲内で形式選択の実際数を示している部分があり、その点は非常に興味深い。例えば、上で（cf. 第 3.2.節）見た「可能性」の述語も含め、мочь/смочь[16], можно, в состоянии, удаваться/удаться, успевать/успеть といった述語とともに用いる不定詞について、以下のような数字を挙げている（Forsyth 1970: 237）:

表 1-2：Forsyth（1970）による可能性の述語と結合する不定詞の体の形態に関する調査

述語	不完了体	完了体	完了体の割合（%）
мочь/смочь	23	40	63.5
можно	14	48	77.3
в состоянии など	1	3	75
удаваться/удаться	-	6	100
успевать/успеть	-	14	100

また、「不可能性」（cf. 第 3.3.節）に関する記述内でも、「не мочь / не смочь の場合には、85 パーセントの不定詞が完了体である（64:11[17]）」といった指摘がされている（1970: 241）。

上で述べた「不可避性」の意味（cf. 第 3.4.節）と体の選択についても、Forsyth では、上に述べた通り、この意味が表される場合には完了体が多いとしている。しかし、ここで挙げられている例文は、人称文、無人称文[18]合計で全 7 例であり、そこで用いられている不定詞は、рассмеяться, осудить, случиться, оглянуться, думать, думать о чем, влюбляться の 7 つである（本文での提示順）。これらの動詞に限っては、この説明は有効であると思われるが、より多くのデータを収集した場合に、どのような様相を呈するかについてはなお検証の余地があるだろう。

このように、Forsyth（1970）での試みは、それ自体としては興味深いが、一方で、いずれの場合にも、データの数量という観点からすると、少ないと言わざるを得ない。また、用いている資料体についても、その詳細が明らかにされていない。筆者の観察では、用いられている言語資料は、文学作品からの引用が多いという印象があり、その点で文体的な偏りがあるのではないかという疑念が生じてしまう余地を残すものとなっている。

したがって、１）より多くのサンプルからデータを取り、２）資料体として一般に公開されているものを選択するといった点については、改善の余地があるだろう。

このような視点を加えた上で、述語の意味と、それに結合する不定詞の体の選択と

[16] ここで、スラッシュで区切られている二つの語は、それぞれ動詞に準じる述語で、体のペア（cf. 第二章、第 2.6.1.節）と見なされているものである。それぞれスラッシュの左側の語が不完了体、右側の語が完了体となっている。

[17] この数字は完了体と不完了体の比率を示している。

[18] 「人称文（личное предложение）」及び「無人称文（безличное предложение）」とは、ロシア語統語論における、「文」の伝統的な分類である。名詞・代名詞類の主格によって表される「主語」を有する文は「人称文」に分類され、それ以外の文は「無人称文」とされる。

の間にある相関関係について、具体的なデータの数量と共に示すことは、本稿での第一の課題としていいだろう。

もちろん、一般にある事象間に何らかの相関関係が数値上観察された場合に、その両者の間に何らかの因果関係があるかどうかという点については別途検証が求められるので、そうした分布の記述を行なうことそれ自体によって、そうした相関関係を生じさせている要因（恐らくは意味的なもの）に関する定式化に即座に結び付けられるというわけではないが、その種のデータを具体的に示している研究は、上述の通り少ないため、まず第一にそれを示すことそれ自体、一定の価値を有していると考えられる。

4.3. 可能性の意味の明確化とその分類

次に、「可能性」の意味の明確化と分類について考えてみる（第 4.1.節の②）。

どの先行研究でも「可能性」の意味について言及し、それと不定詞の体の形態選択の相関関係について指摘してはいるものの、その「可能性」の意味それ自体について十分掘り下げられているとは言いがたい。

この点に関しては、Forsyth（1970）は、「能力」や「可能性」などへの分類を行なった上で記述を行なっているが、Рассудова（1982）においてはそこまでの考察は試みられていない。

上で先行研究の記述を見た際には、その研究の著者がそれぞれ用いている術語に従って分類したものだが、そこで念頭に置かれている「可能性」、「不可能性」などの意味が、どのような体系の中に位置を占めているものなのかは不透明である。

また、「可能性」の意味の「変種」の扱いも異なっている。例えば、先の節で（cf. 第 3.4.節）既に見たように、Forsyth（1970）では「不可避性」の意味について扱われている一方で、Рассудова（1982）では全く言及されていないといった事実はその例となろう。

この、「可能性」の意味分類の不明瞭さという問題と関連して、それらの述語同士の意味の違いについても、十分に考慮されていないと言える。「可能性」の意味を表す述語は複数あるが、それらがロシア語の語彙体系内でどのように棲み分けが成されているのかという点には十分応えるものとはなっておらず、また他方、それらの述語と結合して用いられる不定詞の体の形態に、そうした意味の違いが何らかの影響を持つのか（あるいは持たないのか）という点にまで注意が払われている研究は、筆者の知る限り存在していない。

4.4. 不定詞の語彙的意味という要素

述語と語結合を成す、不定詞に関する問題点について考えてみよう（第 4.1.節の③）。

先行研究では、不定詞が結合する相手となる語（すなわち述語などのモダリティの意味を含む語）の意味についての考慮、言及はされているが、不定詞それ自体の語彙的意味については、ほとんど考慮されていない。

後述するように（cf. 第二章、第 2.6.節参照）、ロシア語の動詞には、その語彙的意味（あるいは「状況の性質」; 後述）に応じて、どちらか一方の体しか持ち得ないもの

（いわゆる「単体動詞」; 後述）などが存在する。もし述語と結合する不定詞が、単体動詞であるならば、そこに体の形態選択の必要性は発生しない。それは、不定詞がその形態しか持っていないということであり、その場合には、モダリティの意味による影響の有無については、少なくとも形態面からは判断できない。従来の研究では、そうしたことにも着目されていない。また、実用的な観点に重きを置くならば、形態的対立が想定され得ないケースを検討する優先順位は低くてよいだろう。

不定詞の語彙的意味を考慮し、何らかの基準を用意して、分析対象を観察し直すことが必要だろう。

5. 第一章のまとめ：本稿で解決を試みる課題

前節までで、本研究で取り扱う対象と、それが扱われている先行研究での記述、そしてそれらの研究において不足していると思われる点などについて見てきた。

ここでは、これらを踏まえた上で、本稿で解決を試みる課題を設定し、本章のまとめとしたい。

本稿で解決を試みる課題は、その性質により、二つに大きく分けることができる。

まず一つ目の性質は、先行研究における記述の検証、及びその補足という性質である。すなわち、先行研究にどのような不備が存在しているかを認識した上で、それらをデータに基づいて検証し、記述に不備があれば実態に即して修正し、また不足していると思われる部分があれば、それを補うことである。

そして二つ目の性質は、先行研究では従来試みられてこなかった視点からの課題の設定とその検証という性質である。過去の研究では見られなかった角度から対象を見直した上で、新たな課題を設定し、従来は考慮されてこなかった領域にまで踏み込んで考察を加え、新たな基準を設けた上で、眼前の言語現象を再解釈する可能性がないかを探ることである。

以下では、この二つの性質に応じて設定された、それぞれの課題について確認する。

先に、Рассудова（1982）や Forsyth（1970）らによる先行研究での記述と、それらが共通して抱えている問題点について確認した（cf. 本章、第 4 節）。そこでは、以下の三点が共通の問題点として指摘されていた：

① 言語使用の実態の記述
② 「可能性」の意味の明確化とその分類
③ モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味

本稿では、まずこの三点に基づいて課題を設定する。

第一に、言語使用の実態の調査という観点から、「可能性」のモダリティと、不定詞の体の形態選択の実態がどのようになっているのか、どの程度相関関係があるのか（あるいはないのか）について、データから確認できるように、改めて調査を行なうことが必要だろう。

しかし、上で見た通り、Forsyth（1970）の研究では、体の選択の傾向に関するデー

タが提供されているものも部分的にはあるので、そこで見られる弱点は克服しなければならない。したがって、一定数以上のサンプルを収集することができ、且つ文体的にも偏りの少ないものを言語資料とする必要があるだろう。

この実態把握を行なった上で、モダリティの意味を含む語と、体の形態選択との間にある相関関係を、データの数量的分布に関する情報をもって特徴付けることができる。このことはまた、Forsyth（1970）において示されている数値を、改めて検証するという、追試的な役割も担うことになるだろう。

第二に、「可能性」の意味の明確化と分類という観点からの課題を考えてみよう。従来の研究、特に Рассудова（1982）の研究では、「可能性」の意味それ自体に関する記述が不十分だった。したがって、「可能性」というモダリティの意味を、モダリティの意味の体系内に適切に位置付けた上で、改めて体のカテゴリーとの関係を捉え直すことが必要である。

そして、三番目の課題として、モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味に注目し、その上で改めてモダリティの意味と体の形態選択の関係について考察を加える。

第二章

理論的前提となる諸概念

0. 本章の概要

本章では、本稿で取り扱う言語現象を理解するための理論的な前提となる諸概念について把握を試みる。

まず、第 1 節では、言語における「状況」と、それが持つ意味特徴である「状況の性質（акциональность）」という概念について見る。また、「状況」を表わす主たる言語的手段の一つである、述語の基本的な分類についても確認する。

次に、第 2 節において、一般言語学的な視点から「アスペクト」のカテゴリーを概観する。また、ロシア語の言語体系内でアスペクトを表す主要な言語形式のうちの一つである、「体」という文法的カテゴリーについて確認する。

そして、第 3 節では、本稿のもう一方の大きな対象である、モダリティのカテゴリーについて見た後、本稿の主たる対象となるモダリティの種類について確認する。

第 4 節では、ロシア語の動詞の諸形態のうち、不定詞を特に取り上げ、その形態論的特徴、統語論的な特徴を確認する。そして、不定詞の体のカテゴリーの用法について論じる。

最後に、モダリティの意味を含む文を、その意味・統語的構造に応じた分類を試み、論理的に可能な四つの意味・統語的構造のタイプを提案する（第 5 節）。

1. 状況と述語、その分類：状況の性質（акциональность）について

1.1. 本節の概要

本節では、まず話者によって「概念化」された「状況」それ自体、またそれが備える意味的な特徴である、「状況の性質（акциональность）」という概念について見る（cf. 第 1.2.節）。

そして、言語において「状況」を表現するための主たる言語形式のひとつを構成する「述語」の持つ意味論的性質に応じた分類について、Vendler（1967）による分類と併せて考察を加える（cf. 第 1.3.節）。

1.2. 状況の性質（акциональность）

大まかに言えば、ある言語外現実（あるいはその断片）を言語によって表現しようとする際には、その言語外現実（あるいはその断片）は、まず話者による概念化[1]のプロセスを経て言語化される。その際、その概念化・言語化された言語外現実である「状況」は、多くの言語において、述語を中心とする述部によって表される。

本節で扱う『状況の性質[2]（акциональность; actionality）』とは、言語化された「状況」

---

[1] ここで Плунгян（2011）が用いている術語は「концептуализоваться」である（cf. Плунгян 2011: 113）。

[2] 「акциональность」あるいは「actionality」という術語に対しては、管見によれば定訳は提案されて

の持つ意味的な特徴付けのことを指している（cf. Татевосов 2010: 3）。また、文脈によっては、一定の意味的な基準で述語を分類することそれ自体（またそれによって得られる分類それ自体）をも指すことのできる術語である[3]。

ここではまず、原則として Плунгян（2011）での記述に沿う形で、基本的な分類について見ておこう。

概念化のプロセスを経た、ある『状況（ситуация）[4]』は、その「静態性」及び「動態性」に応じて、『静的な状況（стативная ситуация, статив）』と『動的な状況（динамическая ситуация）』とに二分して考えることができる。

まず、「静態性」の特徴を有する「状況」である、『静的な状況（стативная ситуация）』（あるいは『静態（статив）』）について確認しよう。これは、その「状況」のどの局面を切り出しても、同一のものから成っている「状況」である。

この「静的な状況（静態）」は、更に『恒常的静態（постоянная стативная ситуация）』と『一時的静態（вре́менная стативная ситуация）』とに分類することも可能である。

「恒常的静態」は、『持続性（длителность）』を有し、時間的な限界を持っておらず、これは『性質（свойство）』とも言い換えることが可能である[5]。

一方、「一時的静態」は、「持続性」は有するものの、その始まりと終わりが画定されている[6]。こちらは、『状態（состояние）』とも言い換えられる[7]。

ここで、「静的な状況（静態）」の下位分類についてまとめておこう。下表では、「状況」の「動態性」、「持続性」、「時間的限界」の特徴の有無に応じて、プラスとマイナスで表示してある：

いないようである。ここでの「状況の性質」という訳語は、筆者による試訳である。「動作性」という訳語も考えうるが、広義の「動作」と、狭義の「動作」とで解釈が異なってくることが予想され、したがって混同される可能性があるため、ここでは採用していない。

[3] Плунгян（2011）や Татевосов（2010）によっても指摘されている通り、本文で用いている「акциональность」という術語の他にも、「онтологическая классификация（本体論的分類）」、「таксономическая классификация（分類学的分類）」、「семантические типы предиката（述語の意味タイプ）」、「аспектуальный класс（アスペクトのクラス）」、「лексический аспект（語彙的アスペクト；lexical aspect）」、「аспектуальный характер（アスペクトの性質）」「тип ситуации（状況のタイプ）」、「событийные тип（eventuality type；出来事のタイプ）」などの術語が用いられることもある。「онтологическая классификация（本体論的分類）」という術語は、Зализняк и Шмелев（2000）が採用している。また、Падучева は、「таксономичекие категории предикатов（述語のカテゴリー分類）」という術語を採用している（Падучева 1996, 2004）。本稿では、概念の混同をさけるために、特別な理由がない限り、「状況の性質」という術語を用いることとする。

[4] 同一の概念を指す術語としては、他に『事態（положения вещей; states of affairs）』などがある。この術語を採用している研究で主なものとしては、Булыгина（1980）や Шатуновский（1996）があるが、本稿では以下、原則として、より簡明な術語であると思われる「状況」を採用する。

[5] これは、『個別レベルの述語（individual-level predicates; предикаты индивидного уровня）、あるいは『安定的性質を示す述語（устойчивые предикаты）』と呼ばれることもある（Плунгян 2011: 112）。

[6] 同様に、こちらは『ステージレベルの述語（stage-level predicates; предикаты стадиального уровня）』、あるいは『エピソード的述語（эпизодические предикаты）』とも呼ばれる（Плунгян 2011: 112）。

[7] 日本語の「状態」という語自体は、恒常的な状態とも一次的な状態ともどちらとも解釈しうるので、訳語としては必ずしも適切ではないが、ここでは上で見た「静態」の下位の概念を表すものとして便宜的に採用している。

表 2-1：「静的な状況（静態）」の下位分類

	動態性	持続性	時間的限界
恒常的静態（性質）	［−動態性］	［＋持続性］	［−限界］
一時的静態（状態）	［−動態性］	［＋持続性］	［＋限界］

これに対して、「動態性」の特徴を有している状況が、『動的な状況（динамическая ситуация）』（あるいは『動態』）』である。これは、様々な種類の「変化」を示すもの（したがって、当該状況の局面をいくつか取り出した場合、それぞれの局面が異なっているということになる）を指す[8]。この「動的な状況」は、まず『出来事（событие）』と『プロセス（процесс）』とに分類、対置される。

「出来事」は、後述する Vendler（1967）の分類のうち、『到達（achievements）』に対応するものであり、下で述べる「プロセス」とは異なり、ある状態から別の状態への移行が瞬間的なものを指している。

これに対して、「プロセス」は、ある状態から別の状態への移行が、漸進的に行われるものを指す。

この「プロセス」は、『限界のあるプロセス（предельный процесс）』と『限界のないプロセス（непредельный процесс）』とに分類することが可能である。

「限界のあるプロセス」は、「状況」が通常の形で進展すると、それ自体の持つ限界点に到達して、終了してしまうような「状況」を指す[9]。

それに対して、「限界のないプロセス」とは、そうした限界点を持たず、その「状況」を継続させるのに必要なエネルギーが投下されている限りは、終了しないようなタイプの「状況」を指す[10]。

この、「限界のあるプロセス」と「限界のないプロセス」について、英語の例を一つ引いてみよう。例えば、英語の「sing a song」という動詞句によって表される状況は、その歌われている歌の終わりまで来てしまえば、それ以上はその状況を持続させることが出来ない。一方「sing」という動詞によって表される状況は、（動作主が投下するエネルギーが尽きない限りは）状況それ自体はいくらでも持続することができる。したがって、前者は「限界のあるプロセス」であり、後者は「限界のないプロセス」であるということになる[11]。

ここで「動的な状況」についてまとめておこう。下表では、「動態性」、「漸進的移行」、

[8] あるいは「状態」であっても、それを維持するために一定のエネルギーを継続的に投下する必要があるものであれば「動的な状況」と見なしうる（Плунгян 2011: 113）が、ここでは取り上げず、典型的なケースに限って論を進める。

[9] Comrie（1976）は、このような状況を指す場合に「telic」という術語を用いている（1976: 44）。

[10] Comrie（1976）では、こうした状況を「atelic」と呼んでいる（1976: 44）。

[11] ここでの議論は、ロシア語学ではいわゆる『限界性（предельность）』という術語の下、古くから知られている意味特徴の有無に関するものと同一である。この「限界性」については、後の節でも再度確認するが（cf. 第 2.5.2.3.節）、かつては体のカテゴリーの不変的意味（インヴァリアント）として提案されていたこともあるものである。

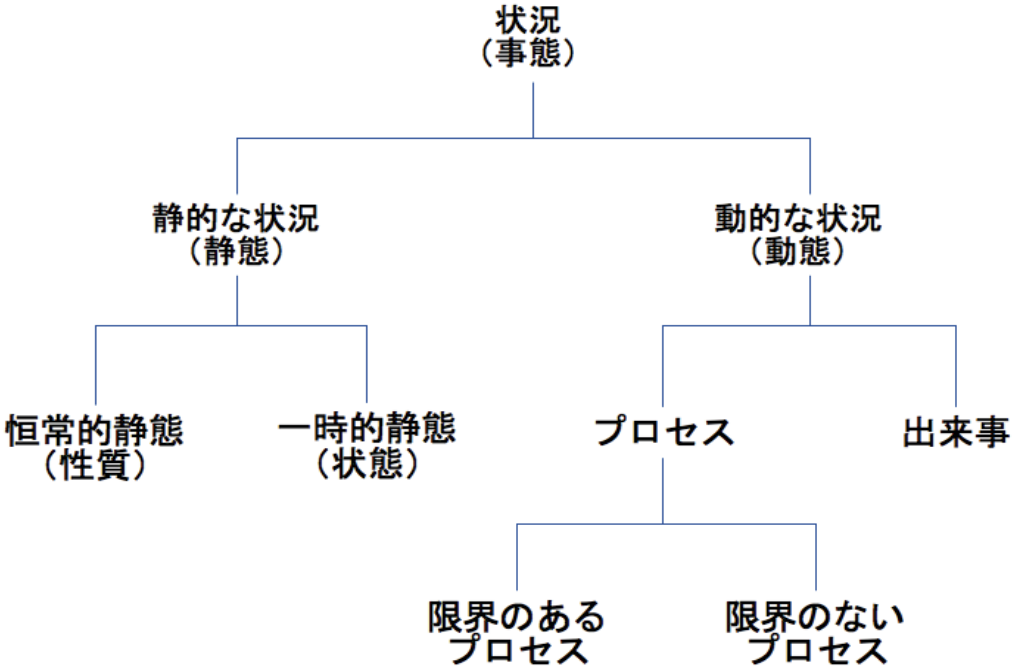
「限界点」の有無に応じて、それぞれプラスとマイナスで表示してある：

表 2-2：動的な状況の下位分類

動的な状況	動態性	漸進的移行	限界点
出来事	［＋動態性］	［−漸進的］	［＋限界］
限界のあるプロセス	［＋動態性］	［＋漸進的］	［＋限界］
限界のないプロセス	［＋動態性］	［＋漸進的］	［−限界］

ここまで「状況の性質」について見てきた。ここまでの内容を図にまとめると、以下のようになる。下図は、Плунгян (2011) において提示されているもの (Плунгян 2011: 115) を基にして、筆者が若干の修正を加えた上で作り直したものである：

図 2-1：「状況の性質」に応じた分類



1.3. Vendler（1967）による分類

1.3.1. 概要

ここまで見てきた「状況の性質」という概念は、元々は、言語哲学者である Vendler（Zeno; 1921-2004[12]）の著作（1967）において、『時間の概念図（time scheme)』とし

[12] 生没年の情報は Wikipedia 英語版を通じて以下の URL の情報を得た：

http://www-senate.ucsd.edu/assembly/memorial_resolutions/vendlerzeno.pdf

また、Wikipedia 英語版の以下の項目（URL）も参照：

て提案された[13]ものであり、そこでは以下の四つの分類が提案されている：

① 『活動[14]（activities）』
② 『達成（accomplishments）』
③ 『到達（achievements）』
④ 『状態（states）』

この節では、Vendler（1967）における記述に沿ってまとめ、本節の最後（cf. 第 1.4. 節）に、まとめとして、前節までで見てきた「状況の性質」の分類との対応関係を確認する。

また、ここでは、ロシア語の動詞との比較は差し当たり行なわない。それについては後の節にて考察する（cf. 第 2.7.2.節）。

1.3.2. 活動（activities）

「活動（activities; деятельность）」は、時の中において進行する「過程」であり、連続する「相（phase）」からなっているものを指す。Vendler（1967）で挙げられている例によれば、run, walk, swim, push a cart, drive a car などがそれらを表わす動詞句であるとされる（1967: 107）。

また、次の『達成（accomplishment）』とは異なり、「限界点[15]」を持たないとされる。すなわち、上で挙げた動詞によって表される「状況」は、それ自体としては、際限なく「走り」続けることができるし、「歩き」続けることができるし、「泳ぎ」続けることができるし、「カートを押し」続けることができるし、「車を運転し」続けることができるということになる。

この「活動」は、上で見た「状況の性質」の分類においては、「動的な状況」のうちの、「限界のないプロセス」に対応するものである。

1.3.3. 達成（accomplishments）

「達成（accomplishment; исполнение）」は、それ自体が「限界点」を持っているものである。

Vendler（1967）の挙げている例によれば、paint a picture, make a chair, build a house, write a novel, read a novel, deliver a sermon, give a class, attend a class, play a game of chess, grow up, push a cart to the supermarket, recover from illness, get ready for something（1967: 107）などがこれに該当する。

それ自体が「限界点」を持っているので、「一枚の絵を描き」続けたり、「一脚の椅

---

http://en.wikipedia.org/wiki/Zeno_Vendler

[13] 一方で、Плунгян（2011）も指摘しているように（2011: 111）、既に 50 年代に金田一（1950）において類似の分類が提案されていたことは興味深い。

[14] ここで採用している、それぞれの術語に対する日本語訳は、影山（1996）によっている。同書の Vendler の分類に関する記述も参照（1996: 41-42）。

[15] Vendler 自身の用いている術語は、『終結点（terminal point）』である。

子を作り」続けたり、「一軒の家を建て」続けたりするといったことは通常不可能である。「一枚の絵」、「一脚の椅子」、「一軒の家」が完成した時点で、もうその同じ動作を継続することはできないからである。

この「達成」は、上で見た「状況の性質」の分類においては、「動的な状況」のうちの、「限界のあるプロセス」に対応するものである。

1.3.4. 到達（achievements）

「到達（achievements; достижение）」は、動詞それ自体は、その状況が完遂した場合を提示している。

英語の場合には、現在進行形によって、その状況達成へのプロセスを提示することが出来ない。例えば、「He is reaching a summit.」という文は「頂上への到達という動作の達成への過程」を表すことができない。そして何らかの状態の変化を伴うものであるとされる。

この「到達」は、上で見た「状況の性質」の分類においては、「動的な状況」のうちの、「出来事」に対応している。

1.3.5. 状態（states）

「状態（states; состояние）」は、上の「活動」と同様に「限界点」は持たない。

しかし、英語の場合には進行形が作れないという点で、上の「活動」や「達成」とは区別され、長さや期間を表せるという点で、「到達」とは異なる（cf. Vendler 1967: 104）。

「活動」と「状態」の間にある差異は、上で見た「動態性」の有無である。すなわち、「状態」を維持するためには、何らのエネルギーも必要としないのに対して、「活動」の場合には、その「活動」を維持するために一定のエネルギーを要するという点で決定的に異なっている。

この「状態」は、上で見た「状況の性質」の分類においては、「静態」に対応している。

1.4. まとめ：状況の性質

前節までで、「状況の性質」について、更にその一連の議論の元となった、Vendler（1967）による分類について確認した。

「状況」は、まず「動態性」の有無によって「動的な状況（動態）」と「静的な状況（静態）」とに二分される。

「動態性」の特徴を持つ「動的な状況（動態）」は、更に「漸進的移行」という特徴の有無によって「プロセス」と「出来事」に分類される。

前者の「プロセス」は、ある状態から別の状態への移行が漸進的であるという意味特徴を持ち、更に当該状況の「限界点」の有無により、「限界のないプロセス」と「限界のあるプロセス」とに二分される。

この「動的な状況」のうち、「出来事」は、「限界点」という特徴は共有しているが、ある状態から別の状態への移行が瞬間的であるという点で、「プロセス」とは区別される。

対して、「動態性」を持たない「静的な状況（静態）」は、恒常的なもの（「恒常的静態（性質）」）と一次的なもの（「一時的静態（状態）」）とに分けることができる。

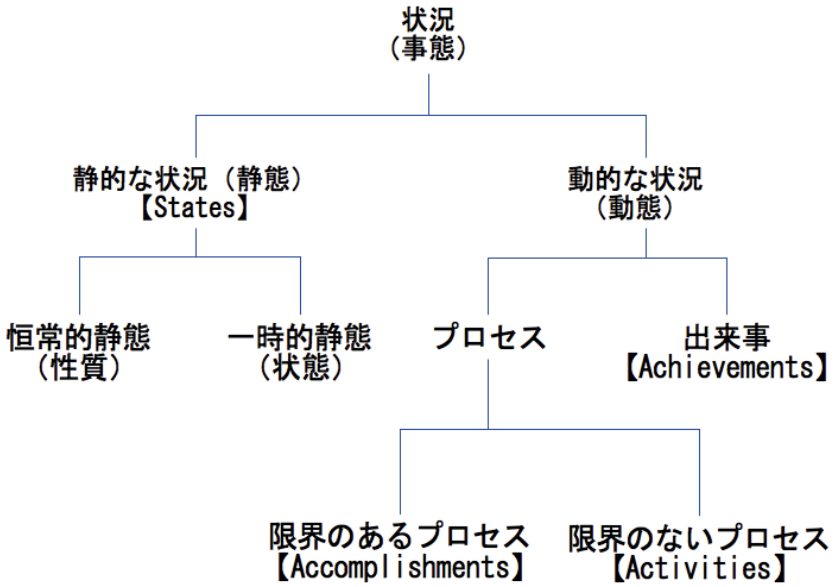
また、これら一連の「状況の性質」の分類と、Vendler（1967）によって提案された「時間の概念図」との対応関係についても確認した。それぞれの対応関係をまとめると、下表のようになる：

表 2-3：Vendler（1967）の分類と「状況の性質」の対応

<table>
<tr><th>Vendler の分類</th><th colspan="2">状況の性質</th></tr>
<tr><td>活動
（activities）</td><td>限界のないプロセス</td><td rowspan="3">動的な状況
（動態）</td></tr>
<tr><td>達成
（accomplishments）</td><td>限界のあるプロセス</td></tr>
<tr><td>到達
（achievements）</td><td>出来事</td></tr>
<tr><td>状態
（states）</td><td colspan="2">静的な状況
（静態）</td></tr>
</table>

この対応関係を、先に見た述語の分類の図に付加すると以下のようになる：

図 2-2：状況の性質の分類と Vendler（1967）の分類



上にも述べた通り、これらの「状況」が、ロシア語においてどのような述語（動詞）によって表されるかについては後節（第 2.7.2.節）にて確認する。

2. 動詞：アスペクトと体のカテゴリー

2.1. 本節の概要

前節までで、言語化された「状況」の性質と、その分類について見てきた。本節では、その「状況」を提示するための言語的手段のうちの一つである、『アスペクト（аспект; aspect）』のカテゴリーについて、まずは一般言語学的な枠組みから確認する。

一般言語学の分野における、アスペクトというカテゴリーの定式化についての本格的な試みは、Comrie（Bernard; 1947-）によるものが最初と考えてよいだろう（cf. Comrie 1976）。Comrie（1976）は、様々な言語に見られる言語現象を調査・分析し、スラヴ諸語における体の研究での学術上の蓄積（主に Маслов, Бондарко らによる一連の著作[16]）を基盤としつつ、そこでの成果をスラヴ諸語以外の様々な系統の言語に適用・検討するという方法で、アスペクトというカテゴリーを一般言語学的に定式化しようと試みた。

そこでの定式化によれば、アスペクトとは、「ある状況の時間的な内部構造の、様々な捉え方（different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation）」を表すものであり（cf. Comrie 1976: 3）、『完了相（Perfective）』と『未完了相（Imperfective）』にまず大きく二分される。「完了相」は、「ある状況を構成する異なる別個の相に分割することなく、その状況を一つの全体として見る捉え方（the view of a situation as a single whole, without distinction of the various separate phases that make up that situation）」を表している（cf. Comrie 1976: 16）。それに対して、「未完了相」は、状況の内部構造に基本的に注意を向けているものであり、ある状況を内部から捉えた上で、時間的な内部構造を明示的に示すものである（cf. Comrie 1976: 16, 24）。

以下で述べる、一般言語学的枠組みからのアスペクトに関する記述は、前節までと同様、Плунгян（Владимир Александрович; 1960-）による一連の著作（2011, 2012）における記述に多くの点で拠っている。ここで Плунгян の論を援用する主な理由は、著者である Плунгян が、ロシア語アスペクト論研究の専門家ではないという点にむしろ大きな意義を見出しているからである。現在のロシア語アスペクト論においては、様々な術語を、様々な研究者がそれぞれ自由に用いているとも言えるような、言ってみれば概念や術語が「乱立」しているような状況にある。その一方で、そうした諸々の概念や術語を整理するという試み自体が、対照的に極めて少なく、全体像の把握が極めて難しくなっているというのが現状である[17]。そうした学問的な状況において、著者がアフリカ諸語研究の専門家である Плунгян（2011, 2012）においては、そうした諸々の概念や術語が、それぞれの相互の関係性なども含めて、簡明に整理、提示されている。

---

[16] 具体的には、Маслов（1959）、Вопросы（1962）、Рассудова（1968）、Бондарко（1971）などが挙げられている。

[17] もちろん、そうした試みはこれまで全く成されていなかったわけではなく、過去には Маслов（1965）があり、この著作を再評価する試みの一環として後年になって行なわれた、Падучева（1998）による研究がある。しかしいずれも、ロシア語を中心とするスラヴ語における体のカテゴリーに重きが置かれていることは事実で、本文で援用している Плунгян（2011）が試みているような、一般言語学的な枠組みからの考察や、あるいは術語の対比などについては不十分であるという印象を受ける。

本節では、まずこの一般言語学的な枠組みからアスペクトという文法カテゴリーを俯瞰（cf. 第 2.4.節）した後、ロシア語の体のカテゴリーをその主たる対象とする「アスペクト論（аспектология）」の伝統的な枠組みに基づいて、ロシア語の体のカテゴリーについて確認する（cf. 第 2.5.節）。

それに先立ち、アスペクトというカテゴリーが内包する、性質の異なる二つの意味の対立軸について考えてみよう。

2.2. 導入：二つの意味の対立軸を想定する必要性

自然言語の「アスペクト」というカテゴリーの主たる機能は、話者によって概念化された「状況」が、どのように時において経過していると話者が捉えているのか、そしてそのうちのどの局面を、どのように言語化して聞き手に対して提示するのか、という点にあると言えるだろう。

しかしながら、自然言語におけるアスペクトのカテゴリーの実際の用法を見る際には、ただひとつの基準では捉えきれない場合がある。

具体例を見てみよう。本研究の対象であるロシア語において、アスペクトの意味を表わす機能を担っている、主たる言語形式のひとつである「体」のカテゴリーの示す意味的対立について、以下の二文を対比して見てみよう[18]：

(2-1) Он <u>открыл</u> [PFV-PST-SG-M] окно.
(2-2) Он <u>открывал</u> [IPFV-PST-SG-M] окно.

完了体が用いられている、前者の例（2-1）では、過去のある一時点で「完了」した動作が表される（「彼は（その時）窓を開けた。」）。それに対して、不完了体が用いられている、後者の例（2-2）では、過去のある一時点での当該動作の完了へと至る「過程」を表している（「彼は（その時）窓を開けようとしていたところだった。」）。

また、後者の文は、前後の文脈が異なれば、当該状況の「反復性」（「彼は（何度も）その窓を開けた。」）、さらには「習慣性」（「彼は（きまって）その窓を開けるのだった。」）などの意味を表すことができる。

ここには、状況の有り様、あるいはその提示の仕方について、異質のものが混在していることが分かる。それを整理するために、何らかの基準（軸）を設定する必要があるだろう。

このことは、Forsyth（1970: 153）においても端的に指摘されている。ロシア語の体のカテゴリーの表す対立は、非常に大きな捉え方をするとすれば、以下の二つの意味的対立が大きな軸になっていると考えられる（下表は Forsyth 1970 における記述をもとに筆者が作成したもの）：

[18] 本節以下動詞には下線を施し、角括弧内に文法情報を表示する。文法情報の略号については、本稿冒頭「はじめに」、第 4.3.節を参照。

表 2-4：ロシア語の体のカテゴリーの意味的対立軸

体の意味的対立軸	完了体	不完了体
A	当該動作（状況）の完了 （cf. 動作の結果）	当該動作（状況）完了への過程 （cf. 持続性）
B	一回の動作（状況）	反復する動作（状況） （cf. 習慣性）

上表の A と B という、大きな二つの対立軸を想定しておくことは、アスペクトの意味を捉える際には重要である[19]。

この二つの対立軸を踏まえた上で、上例（2-1）及び（2-2）について改めて考えてみると、完了体が用いられている（2-1）は、A の軸を基準にすると、過去のある一時点で「完了」した動作を表すということになるし、B という軸を基準にすると、当該動作が一回生じたということを表すことになる。

それに対して、不完了体が用いられている後者（2-2）では、A の軸に沿って見れば、過去のある一時点での当該動作の完了へと至る「過程」を表わすということになり、B の軸に沿えば、当該動作の「反復性」、あるいは「習慣性」の意味を表すということになる。

2.3. 「状況の性質」の変化：一次的アスペクトと二次的アスペクト

上で、ロシア語の体のカテゴリーの表す意味を例に取って、体の意味を考える際に、二つの意味の対立軸を考慮する必要性について述べた。

これについて、より理論的に掘り下げた考察を行なっているのが、Плунгян（2011）である。そこでは、Dik（1989）や Мельчук（1998）、また著者自身の研究（Плунгян 2000）を踏まえた上で、アスペクトの意味を、まず大きく以下の二つに分けている：

① 『一次的アスペクト（первичный аспект）』
② 『二次的アスペクト（вторичный аспект）』

これらは、それぞれ『線状的アスペクト（линейный аспект）』、『数量的アスペクト（количественный аспект）』とも呼ばれる。

後述するように（cf. 第 2.4.2.節）、「一次的アスペクト」は、その発生の過程において、原初的なアスペクトであるということから「一次的」と名付けられている。この「一次的アスペクト」は、「状況」を構成している部分（「状況の断片」; 後述）を指し示すものである。

[19] もちろん、同じ箇所で Forsyth も指摘しているように（1970: 153）、ここで示す意味的対立によって、ロシア語の体のカテゴリーの示す対立の全てのケースを説明できるわけではなく、また体のカテゴリーの意味をここで示した要素で規定しようという意図も、筆者自身持っていない。しかしながら、これらの対立を体のカテゴリーが示しうるということ自体については、異論はないだろう。なお、このように、何らかの意味特徴により体のカテゴリーが持つ文法的意味を規定しようという試みは従来幾度となく議論され、その都度退けられてきたという経緯がある。この、いわゆる体の不変的意味（インヴァリアント）の探求に関する議論についての概要は、下の節（第 2.5.2.3.節）を参照されたい。

それに対して、ある状況が持つ、元々の「状況の性質（例えばその性質をXとする）」、つまり「一次的」な「状況の性質」が、別の異なる「状況の性質（例えばY）」を持ったものとして認識されるということが起きる。この場合、この新たな性質 Y は、「二次的」なものということになり、それに応じて、アスペクトの意味も一次的なものから二次的なものへと変化することになる。このようなアスペクトの意味を、「二次的アスペクト」と呼んでいる（下の第 2.4.3.節にて後述）。「二次的アスペクト」が現れていれば、当該状況が、ある性質から他の性質へ移行していることを示すものでもあるということになる。

2.4. アスペクトというカテゴリー

2.4.1. 状況の構造モデル

ここではまず、自然言語において、概念化された「状況」がどのような構造をしていると想定されているか（あるいは認知・認識されているか）について確認しておこう。

Плунгян（2011）によれば、自然言語における「状況」を捉える際には、「状況」を構成する、以下の五つの部分[20]が最も重要であるという（Плунгян 2011: 384）：

① 準備の段階（подготовительная стадия）
② 開始点（начало）
③ 中間（середина）
④ 終了点（финал）
⑤ 結果の段階（результативная стадия）

①の「準備の段階」とは、「ある状況がこれから生じるという特徴（予兆）が存在している状態」を指す。

②の「開始点」とは、「ある状況が生じていない状態から、生じている状態へ移行する瞬間」である。

③の「中間」とは、上の「開始点」と、下の「終了点」との間を指す。

④の「終了点」とは、②の「開始点」とは逆に、「ある状態が生じている状態から、生じていない状態へ移行する瞬間」を指す。

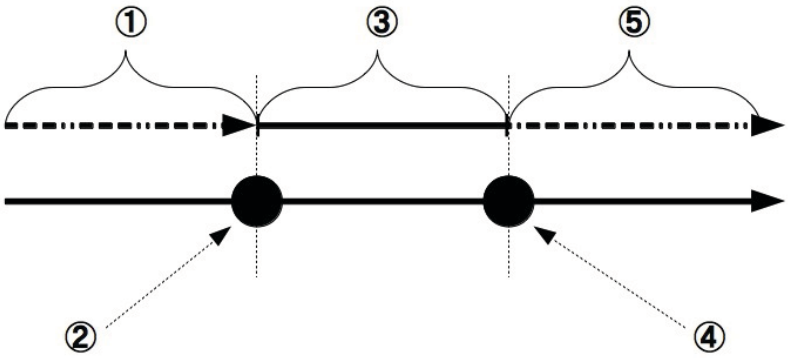
⑤の「結果の段階」とは、「ある状況が終了したあとに生じる状態」を指す。

また、上の②～④は、「内部ステージ（внутренние стадии）」とされ、①と⑤は、「外部ステージ（внешние стадии）」とされる。

「状況」の構造はこれらの要素から成っていると想定されるが、これらを模式的に表すと以下のような図に表すことができる（図中の丸数字が上のそれぞれと対応している）[21]：

[20] Плунгян 自身は、「状況の断片（фрагменты ситуации）」という表現をしている（Плунгян 2011: 384）。
[21] ここで、矢印を左から右に向けているのは、時間の流れをイメージするためである。また、二本の矢印を引いてあるのは、矢印や丸数字などを加えた場合に煩雑になるのを避けるという便宜のためである。

図 2-3：状況の構造モデル



上で述べたような、①～⑤の各部分（②と④以外は「段階」と言い換えることもできるだろう）を全て持ち合わせた、言うなれば「理想的な」状況とは、上で見た「状況の性質」のうち、「限界のあるプロセス」である（cf. Плунгян 2011: 395）。

しかし、実際には、これら①～⑤の部分のうち、どれかが欠けているような「状況」も存在する[22]。

いずれにしても、話者によってこのように認識・把握された「状況」の、上図のどの部分（局面）を、話者の主観に基づいて、聞き手（発話の受取手）に、どのように提示するかというのが、「アスペクト」の表わす文法的機能であると言ってよいだろう。

このモデルを踏まえた上で、以下の節では、この模式図のどの部分がどのようなアスペクトによって表されているかについて見ていくことにする。

なお、以下本文では、この「状況の構造モデル」を、単に「構造モデル」と呼ぶことがある。

2.4.2. 一次的アスペクト

2.4.2.1. 概要

上でも（cf. 第 2.3.節）述べた通り、『一次的アスペクト（первичный аспект）』とは、その発生の過程において原初的なアスペクトであるということから「一次的」と名付けられている。

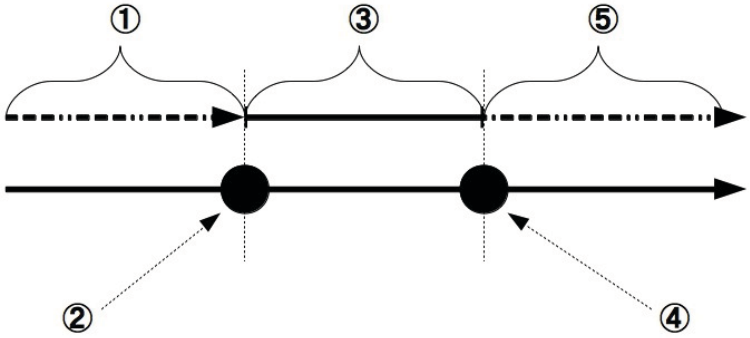
この「一次的アスペクト」は、下図「状況の構造モデル」における、「状況」を構成している各部分（①～⑤）を表わすものである。時間軸をある方向に伸びていく線と捉え、それに沿って進行（あるいは進展）していく状況を対象としているという意味で、「線状的アスペクト（линейный аспект）」とも呼ばれていると考えられるが、この「時間の線状性」、それ自体は、我々の感覚に照らしてみてもそう大きな乖離はないだろう。

ここで、上の節（cf. 第 2.4.1.節）で確認した、状況の構造モデルを下に再掲してお

[22] 例えば、瞬間的な状況の場合には、上記の③の部分を持たず、②と④の部分が完全に一致していると考えられる（cf. Плунгян 2011: 384）。このように、全ての「状況」が、上で示した５つの部分全てから構成されているとは限らない。

こう：

図 2-3：状況の構造モデル【再掲】



上でも述べた通り、これらの全ての部分を持ち合わせているのは、「限界のあるプロセス」である。ここでは、この「理想的」な「状況」の構造モデルと照らし合わせながら、それぞれのアスペクトの意味を見ていくことにしよう。

一次的アスペクトには、以下のようなものがある：

表 2-5：状況の構造モデルと一次的アスペクト

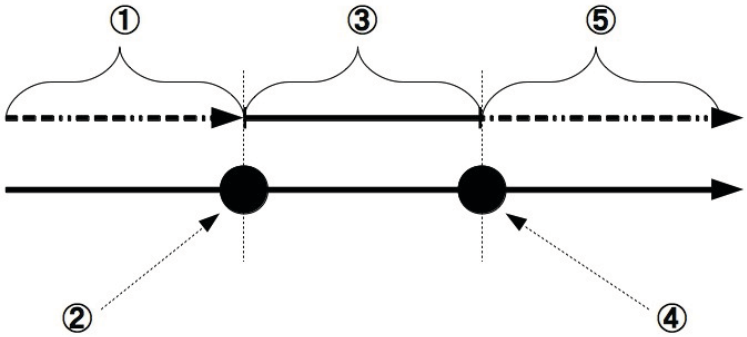
アスペクト（大分類）		アスペクト（下位分類）
外部ステージ A に関わるアスペクト		予期・予測のアスペクト（проспектив）
内部ステージに関わるアスペクト	状況の開始点に関わるアスペクト	起動相（инцептив）、示点相（пунктив）
	内部ステージ	持続相（дуратив）
		進行相（прогрессив）
	状況の終結点に関わるアスペクト	終結相（комплетив）、示点相（пунктив）
外部ステージ B に関わるアスペクト		結果相（результатив）
		パーフェクト（перфект）

以下で、それぞれのアスペクトについて見ていくことにしよう。

2.4.2.2. 外部ステージ A に関わるアスペクト

ここではまず、外部ステージ A の部分に関わるアスペクトについて確認する。上述の通り、外部ステージ A は下図の①の部分を指している：

図 2-3：状況の構造モデル【再掲】



この部分を表すアスペクトは、『予期・予測のアスペクト（проспектив; prospective aspect）[23]』である。この「予期・予測のアスペクト」は、「ある状況が後に続く状態」を指し示す。

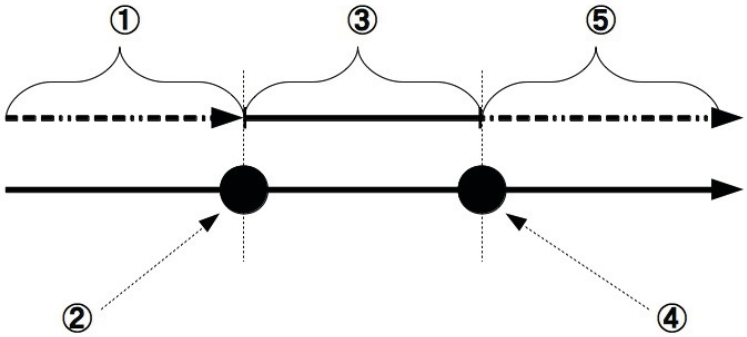
英語では、動詞 go を用いた「be going to (do)」、「be about to (do)」、「be on the point of (doing)」などの形式によって表されるアスペクトである（cf. Comrie 1976: 64）。

このように、このアスペクトを示す形式は、通常分析的な構造である。多くの場合、未来時制と混同されることが多い。ロマンス諸語、ゲルマン諸語などの他に、チュルク諸語やバントゥー諸語などに見られる（Плунгян 2011: 386）。

2.4.2.3. 内部ステージに関わるアスペクト

次に、「内部ステージ」を表わすアスペクトについて見ていこう。「内部ステージ」は、下図の②、③、④が該当する：

図 2-3：状況の構造モデル【再掲】



上図②の、当該状況の「開始点」を表すアスペクトは、『起動相（инцептив; inceptive）』

[23] 「前望相」という訳語が充てられることもあるようだが、いかにも術語然としており、その意味するところが分かりにくいため、ここでは採用していない。なお、「予期・予測のアスペクト」は、筆者による試訳である。

である[24]。

上図③の部分には、通常、一定の「持続性（長さ；длительность）」が想定されている。この部分を表すアスペクトには、『持続相（дуратив; durative）』と『進行相（прогрессив; progressive）』がある。

「持続相」という表現は、当該状況が、静態的な「状態」の場合でも、動態的な「プロセス」の場合でも用いられる。

それに対して、「進行相」は、「持続相」のうち、「限界のあるプロセス」について言う場合に用いられる。すなわち、動的で且つ持続している状況を表すのに限って用いられるアスペクトが、「進行相」である。

上図の④、当該状況の「終了点」部分を述べるアスペクトは、『終結相（комплетив）』である。「限界のあるプロセス」が、その自らの終結点に到達したことを表す（Плунгян 2011: 396）

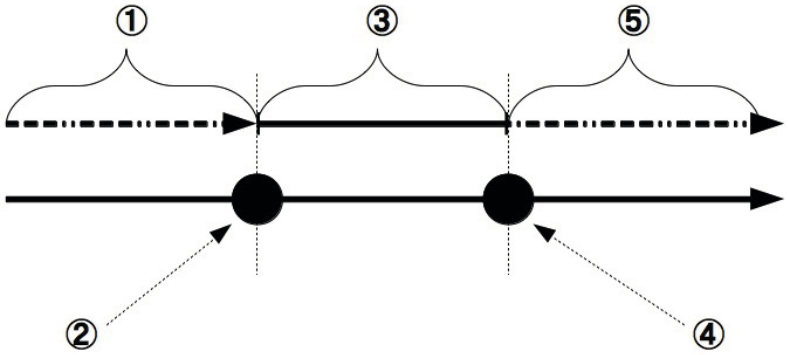
また、上で見た『示点相（пунктив）』という術語が、この「終結相」を表すために用いられることもある（cf. 第 2.4.2.5.節）。

2.4.2.4. 外部ステージ B に関わるアスペクト

ここでは外部ステージ B の部分（下図⑤の部分）に関わるアスペクトについて確認する。

この部分を表す主なアスペクトは、『結果相（результатив; resultative）』と『パーフェクト（перфект; perfect）』である。以下でそれぞれのアスペクトについて確認していこう。

図 2-3：状況の構造モデル【再掲】



「結果相」は、上述（cf. 第 1.2.節）の「限界のあるプロセス」が、自然に帰結する結果を表す。

それに対して「パーフェクト」は、この「結果相」が「弱められた」ものであると、

[24] この他にも、『示点相（пунктив）』という術語で表される場合がある。この「示点相」という術語の多様な用いられ方については、後の第 2.4.2.5.節を参照。

Плунгян（2011）では表現されている（2011: 389）[25]。すなわち、「結果相」は、当該状況（動作）が帰結した結果の状態しか指せない（つまり「状況」とその帰結としての「状態」との間の意味的・論理的な結び付きが強い）のに対して、「パーフェクト」の場合には、当該状況（動作）と、意味的・論理的な結び付きが直接無いような「状態」でも描写することができるからである（Плунгян 2011: 389）。

また、「結果相」と「パーフェクト」の間にある差異は、次のようにもまとめられるだろう（Плунгян 2011: 388）。すなわち、「結果相」は、当該状況（動作）が生じた後の状態について述べているだけなのに対して、「パーフェクト」の場合には、当該状況（動作）が生じた後の状態を述べるのではなく、発話時点よりも前の状況を意味しているという点で、「結果相」とは異なる。例えば、「John has heard about it.」という文（相は「パーフェクト」）が表すのは、１）ある過去の一時点で、「John がそれについて耳にする」という状況が生じた（これは「John heard about it.」という文で表される）、そして、２）その、「当該状況が生じた」という事実が、話者の発話時点での John に関する特徴に何らかの意味を持つ、ということである（Плунгян 2011: 389）。

Comrie（1976）は、この「パーフェクト」の意味について、「回顧的（retrospective）」であるとしている。これは、この意味が、ある時点の状態と、それよりも先行して生じた状況との間に、何らかの関係性を持たせるからである（Comrie 1976: 64）[26]。

2.4.2.5. その他のアスペクト

ここでは、ここまで述べてきたもの以外の、その位置付けが若干特殊なアスペクトについて簡潔に確認する。

まず、先にも見た（cf. 第 2.4.2.3.節）、『示点相（пунктив）[27]』について確認しよう[28]。

これは、他のアスペクトとは異なり、以下に示すような、「状況」のある部分、あるいはある「状況」全体を指す場合に用いられる（Плунгян 2011: 385）。「示点相」が表すのは以下の各部分である：

イ）ある状況の開始点（＝上図②）
ロ）ある状況の終了点（＝上図④）
ハ）状況全体（開始点と終了点が一致している場合）

上記のうち、イ）とロ）については上の節（cf. 第 2.4.2.3.節）で見た通りである。

---

[25] 一方で、この「パーフェクト」については、そもそもこれをアスペクトの意味として見なすかどうかついて議論があるということは指摘しておくべきだろう。なお「パーフェクト」については、Comrie（1976）による一連の記述も参照（cf. Comrie 1976: 52-65）。

[26] なお、これと対置されるのが、上で（cf. 第 2.4.2.2.節）見た「予期・予測のアスペクト」である。これはある時点と、それに後続する状況との間に関係性をもたらすものであると言える。

[27] ここで提案している訳語は、筆者による実験的な試訳である。

[28] 類似の概念として、「инхоатив」と「инцептив」がある。多くの場合、日本語ではどちらにも『起動相』という訳語が充てられている。厳密には、前者は「動作の開始」を表し、後者は「状態の開始」を表す（Плунгян 2011: 396）。また、これらはどちらも、『位相（фаза; phase）』の存在があらかじめ想定されている。一般に想定される三つの位相（後述）のうちの『開始相（начальная фаза）』を表すものである。「位相」の概念などについては、後の本章第 2.5.5.節を参照されたい。

ハ）の、開始点と終了点が一致している場合というのは、いわゆる瞬間的な動作（状況）を指しており、上で見た（cf. 第 1.3.節）、Vendler（1967）の分類における、「到達（achievements）」を表すものなどが該当する。

このように、この「示点相」という術語は、その表す内容が様々であるため、以下本稿では、混同を避けるために原則としてこの術語は用いていない。

2.4.3. 二次的アスペクト

2.4.3.1. 「状況の性質」の変化と二次的アスペクト

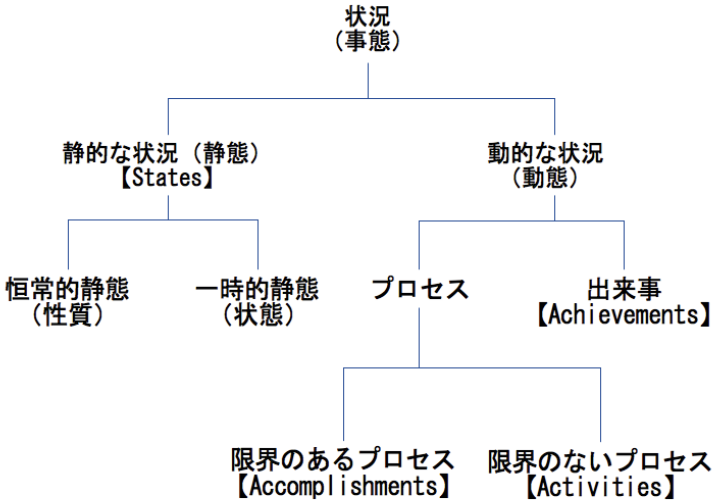
次に、『二次的アスペクト（вторичный аспект）』について見ていくことにしよう。

ある動詞の「状況の性質（X）」が、別の異なる「状況の性質（Y）」に変化する、あるいは異なる状況の性質の一部（X'）を表すように変化することで、アスペクトの形式が表す意味にも変化が生じることがある（cf. Плунгян 2011: 395）。

元々の「状況の性質（X）」を、「一次的」なものとすると、そこから変化した「状況の性質（Y）」は、X とは異なる、「二次的」なものということになる。このそれぞれに応じて、アスペクトの意味も一次的なものから二次的なものへと変化しうるということになる。

先に見た、「状況の性質」の図をここでもう一度確認しておこう：

図 2-2：状況の性質の分類と Vendler（1967）の分類【再掲】



上で述べた「状況の性質」の変化とは、例えば、「静態」から「出来事」に変化したり、「動的な状況」から「静態」に変化したりするといったケースである。

Плунгян（2011）で「二次的アスペクト」として挙げられているものとしては、主に以下のようなものがある：

① 『反復相（итератив）』
② 『習慣相（хабитуалис）』

③　『多回相（мультипликатив）』
④　『単一相（семельфактив）』
⑤　『配分相（дистрибутив）』

この「二次的アスペクト」は、『数量的アスペクト（количественный аспект）』とも呼ばれる[29]。

2.4.3.2. 二次的（数量的）アスペクトの様々な意味

ここでは上で挙げられた「数量的アスペクト（количественный аспект）」のそれぞれについて検討する。

「反復相（итератив）」は、ある状況（動作）が、ある一定の期間において、反復することを表す。

対して「習慣相（хабитуалис）」は、定期的に反復される状況（動作）を表し、それが当該状況の主体の特徴付けになることもある。

「多回相（мультипликатив）」は、多数回にわたって反復する状況（動作）を表す。それに対して、そうした状況の単一量を表現するのが、「単一相（семельфактив）」である。

「配分相（дистрибутив）」は、次々と、連続して同種の状況（動作）が生じることを表すものである。Плунгян（2011）では次のような例文が挙げられている（2011: 221）：

(2-3)　Все <u>поразъехались</u> [PFV-PST-PL] кто куда.
　　皆それぞれ思い思いの所へ出かけた。
(2-4)　Он <u>перечитал</u> [PFV-PST-M] всё, что нашлось в библиотеке.
　　彼は図書館にあったものを全て読み返した。

2.4.4. まとめ

前節までで、言語における「アスペクト」のカテゴリーについて見てきた。

「一次的アスペクト（線状的アスペクト）」には以下のようなものがあった。構造モデルと対応させると下表のようにまとめることができるだろう：

[29] これらの他にも、反復相の変種で、普通よりも低い頻度で定期的に繰り返す状況を表す『稀偶相（раритив）』と、当該動作の程度が弱いことを表す『弱化相（аттенуатив）』も挙げられている（cf. Плунгян 2011: 221-222）が、本文では特に取り上げず、ここで述べるに留める。

表 2-6：構造モデルと一次的アスペクト

アスペクト（大分類）		アスペクト（下位分類）	状況の性質に関する備考
外部ステージ A に関わるアスペクト		予期・予測のアスペクト（проспектив）	—
内部ステージに関わるアスペクト	状況の開始点に関わるアスペクト	起動相（инцептив） 示点相（пунктив）	状態あるいはプロセスの開始
	内部ステージ	持続相（дуратив）	—
		進行相（прогрессив）	限界のあるプロセス
	状況の終結点に関わるアスペクト	終結相（комплетив） 示点相（пунктив）	限界のあるプロセス
外部ステージ B に関わるアスペクト		結果相（результатив）	—
		パーフェクト（перфект）	—

「二次的アスペクト（数量的アスペクト）」には以下のようなものがあった：

① 『反復相（итератив）』
② 『習慣相（хабитуалис）』
③ 『多回相（мультипликатив）』
④ 『単一相（семельфактив）』
⑤ 『配分相（дистрибутив）』

管見によれば、「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」は、「状況」をミクロ的（微視的）に捉えるのか、あるいはマクロ的（巨視的）に捉えるのかという点に、本質的な違いがあるように思われる。

「一次的アスペクト（線状的アスペクト）」は、状況それ自体をミクロ的に見ている。その上で、その状況のいずれかの部分（断片）を聞き手に提示している。

それに対して、「二次的アスペクト（数量的アスペクト）」は、状況それ自体は、マクロ的に見ている。その上で、マクロ的に捉えた状況（多くは複数）を、聞き手に、動的、あるいは静的（「習慣相」の場合）に提示していると考えてよいだろう。

これらのアスペクトが、ロシア語という言語体系ではそれぞれどのように表されるかについては、後の節（cf. 本章、第 2.7.3.節）で確認する。

2.5. ロシア語動詞の体のカテゴリーの持つ文法的意味

2.5.1. 概要

上節までで、一般言語学的な枠組みでアスペクトのカテゴリーについて確認した。本節では、ロシア語の動詞が備える「体」という文法的カテゴリーについて見ていくことにしたい。

先に述べた通り、ロシア語の動詞のほぼ全て[30]には「体」のカテゴリーが備わって

[30] 存在を表す語であり、連辞としても機能する、быть をどのように位置づけるかにより、立場は異なりうる。быть を動詞ではないと見なすのであれば、全ての動詞が体のカテゴリーを有している。

おり、それらの動詞は、『完了体（совершенный вид）』もしくは『不完了体（несовершенный вид）』のどちらかに属している。この体のカテゴリーは、主に、上で見た、種々のアスペクトの意味を表す主たる言語形式として機能している。

次節ではまず、言語形式の「個別的意味」と「一般的意味（不変的意味）」という考え方について見た上で、体のカテゴリーを成す、完了体、不完了体という二項が成している、言語学的対立の性質について確認する。

それらを踏まえた上で、体のカテゴリーの表す意味（「個別的意味」）について見ていくことにする。ここでは主に、Бондарко（1971）、Рассудова（1968, 1982）の二者の研究を基に論を進め、ロシア語の体の意味について、体の研究の伝統的な立場からからまとめる。

最後に、個別的意味の記述について、従来とは異なる視点からの分析を試みている、Храковский の研究（2002）における体の個別的意味の記述に関する提案を紹介する。

なお、先に述べた通り（cf. 本稿冒頭「はじめに」、第 4.8.節）、「アスペクト」と「体」という術語については、一般言語学における概念としてのカテゴリーを指す場合には、「アスペクト」という術語を用いることとし、ロシア語をはじめとするスラヴ諸語における文法的（形態論的）カテゴリーについて述べる場合には、「体」という術語を用いることとする。

2.5.2. 体のカテゴリーの文法的意味

2.5.2.1. 文法形式の個別的意味と一般的意味

体のカテゴリーなどの文法形式が表す意味を、『一般的意味（общее значение）』（あるいは『不変的意味（инвариантное значение）』、『不変体（インヴァリアント；инвариант）』）と『個別的意味（частное значение）』とに大きく分けて考える。

「個別的意味」とは、個々の文（発話）において、ある特定の条件において現れてくる意味を指す。それに対して、「一般的意味」とは、ある文法形式が、あらゆる用法において、共有して持っていると考えられる意味のことである（cf. Зализняк и Шмелев 2000: 18）。

「一般的意味」は、統語論的、意味論的文脈などの可変的要素を排除した後に残る、当該の文法形式（ここでは体のカテゴリー）に共有されている、抽象度の高い意味を指すので、より「ラング」の側に近い意味であると考えられる。それに対して、「個別的意味」は、より「パロール」の側に近い意味であると考えてよいだろう。

「個別的意味」と「一般的意味」との違いは、以下のように理解することができるだろう：

表 2-7：一般的意味と個別的意味

	言語形式の意味の、発話時の文脈への依存度	意味の抽象度
個別的意味	高	低；パロール的
一般的意味	低	高；ラング的

2.5.2.2. 体の二項の対立：欠如的対立について

体のカテゴリーを形成する、完了体と不完了体の二項がどのような対立関係にあるかということについて確認しておこう。

一般に、言語学において、二つの言語単位の間にある何らかの質的な差異を記述する際に想定される対立には、しばしば用いられるものとして、「等価対立（эквивалентная оппозиция; equivalent opposition）」がある。これは二項間の示差的特徴を、「＋」と「−」の形に還元して表示する[31]。

これに対して、『欠如的対立（привативная оппозиция; privative opposition）』は、対立関係にある二項間の示差的特徴を、一方を「＋」、もう一方を「±」という形に還元して表示するものである。この対立が想定されている場合には、「＋」で表示される一方を『有標項（маркиро́ванный член; marked member）』、「±」の表示を持つ項を『無標項（немаркиро́ванный член; unmarked member）』として扱う[32]。「有標項」は、「その意味特徴を有している」ことを積極的に表示するのに対して、「無標項」は、それ自体は、その意味特徴を「有している」とも「有していない」とも特に表示しない。

それぞれの対立の具体例として、しばしば引かれる、ロシア語の名詞の数のカテゴリーの例を見てみることにしよう。ここでは、студент（学生、男子学生）とその複数形である студенты、студентка（学生、女子学生）とその複数形である студентки という四つの語（及び語形）と、それぞれの表す意味について考えてみる。いずれも「高等教育機関の学生、大学生」を意味する語である。

まず単数の場合を考えてみよう。それぞれ、студент であれば男子学生、студентка であれば女子学生を表す。したがって、この二者は、「（自然）性」という意味特徴を示差的なものとして対立している。意味特徴のうち、「男性」と「女性」のどちらを取り上げて基準にするかは任意だが、いずれの場合でも下図のような形で対立関係を表すことができる。この場合、この両者間の対立関係は、上で見た「等価対立」ということになる：

表 2-8：等価対立による意味特徴の表示

語	意味特徴の対立（１）	意味特徴の対立（２）
студент	＋男性	−女性
студентка	−男性	＋女性

ところが、複数形（студенты, студентки）になると状況は異なってくる。まず、

[31] 更に、「両極的対立（эквиполентная оппозиция; equipollent opposition）」という対立を想定する場合もある。これは、対立する二項のそれぞれが積極的に表示する意味特徴を取り上げ、「＋」で表示する。しかし、体のカテゴリーの特徴付けに関していえば、この対立の表示方法では、様々な意味特徴を列挙するのみに終わってしまう可能性が高い。管見によれば、恐らくそのことが理由で、アスペクト論において体の二項の対立を論じる際には、この両極的対立に基づいて議論されることは少ない。この対立に基づいて体のカテゴリーの特徴付けを試みたものとしては、Мучник によるものがある（Мучник 1971）。

[32] それぞれ、『強い項（сильный член）』、『弱い項（слабый член）』とする場合もある（cf. Милославский 2011）。

студентка の複数形である студентки は、その語によって表される集合の成員は女子学生のみである。それに対して、студент の複数形である студенты の場合には、そうした制限はなく、男子学生と女子学生が混在した集合も、男子学生のみからなる集合も表すことができる。つまり、その成員の性別に関する情報については、студенты という形式自体は直接言及していない。студентки とは異なり、студенты という語（語形）は、その集合の成員が男性あるいは女性であるということをその語形自体が積極的に表示することはないのである。

したがって、双方が複数形の場合には、両者の間にある対立関係は、студентки を「有標項」、студенты を無標項とする、「欠如的対立」ということになり、以下のように示すことができる[33]：

表 2-9：欠如的対立による意味特徴の表示

語	意味特徴の対立
студенты	±女性
студентки	＋女性

本稿の目的は、体のカテゴリーの対立はどの対立のタイプかというのを直接論じることにはないため、ここではこうした対立の種類があることを指摘するにとどめる。

本稿では、１）体の対立は欠如的対立であり、２）その際有標項は完了体であるとする、現在アスペクト論において広く受け容れられている立場に原則としては沿うことにする。

2.5.2.3. 完了体の一般的意味（不変的意味）をめぐる議論

ロシア語の体のカテゴリーが持っている「一般的意味（不変的意味、インヴァリアント）」が、一体どのようなものであるかについては、これまでさまざまな意味が提案されてきており、その都度退けられるということが繰り返されている。

この点を巡る議論の推移については、Гловинская（Марина Яковлевна; 1936-）による一連の研究（1982, 2001）に詳しいので、ここでは基本的にそこでの記述に沿う形でいくつか見ていくことにしよう。

この節では差し当たり、体のカテゴリーの対立は、完了体を有標項とする欠如的対立（cf. 第 2.5.2.2.節）を成しているという立場に立ち、以下の論を進める。欠如的対立を成していると考えれば、有標項（つまりこの場合には完了体）の意味特徴を定め

[33] もちろん、この場合にも意味特徴のどちらを基準とするかにより、例えば以下のような表示の方法も考えうるだろう：

語	意味特徴の対立
студенты	±男性
студентки	−男性

しかしながら、通常欠如的対立では一方をある意味特徴を積極的に表示する有標項とし、他方を無標項とするため、上のような表示は、混乱を招きかねないというデメリットを補うに十分なほどの大きな利点は見出しにくいだろう。

ることが最大の目的となる。
これまで、完了体の不変的意味として、以下のような意味が提案されてきた：

① 『終了性（законченность действия）』
② 『限界性（предельность действия）』
③ 『結果性（результативность действия）』
④ 『点状性（точечность действия）』
⑤ 『全一性（целостность действия）』

しかし、上のいずれの意味特徴によっても、体の意味や用法の全てを説明することが出来ないため、最終的には退けられてきている。以下では、Гловинская（2001）での記述（Гловинская 2001: 6-14）に依拠しつつ、上記のそれぞれの意味特徴を具体的に見ていくことにする。

まず、①の「終了性（законченность действия）」から見ていこう。この意味特徴を提案していたのは、Миклошич（Франц; Franz Xaver Ritter von Miklosich; 1813-1891）や Богоро́дицкий（Василий Алексеевич; 1857-1941）である。
この「終了性」とは、当該状況（動作）が、終了点にまで到達したということを表す。
しかし、この「終了性」は、ある状況（動作）の「開始」の意味を表す動詞（例えば、засуетиться, побежать, запеть といったもの）の説明には適さないため、退けられることとなる。

次の②の「限界性（предельность действия）」を見てみよう。この意味特徴を提案していたのは、Якобсон（Роман Осипович; 1896-1982）や Виноградов（Виктор Владимирович; 1894-1969）である。そして、彼らに追従している、Авилова（Наталья Сергеевна; 1915-）、Земская（Елена Андреевна; 1926-2012）、Панов（Михаил Викторович; 1920-2001）、Тихонов（Александр Николаевич; 1931-2003）といった研究者もまた、この意味特徴をインヴァリアントとして提案していた。
この「限界性」について、Гловинская（2001）は、70 年文法からの規定を、「最も上手くいっているもの」として引用しているので、ここでも紹介しておこう：

> 『動作の限界という意味の最も抽象的な意味は、内的性質の持つ限界の意味である。内的性質の限界とは、すなわち、そこに到達すると、その動作が消耗してしまい、止んでしまうような、そうした限界あるいは「臨界点」である。（Грамматика 1970: 337）[34]』

[34] 原文は以下の通り：

Наиболее абстрактным значением предела действия является значение внутреннего качественного предела, т.е. такой границы или «критической точки», по достижении которой действие должно исчерпать себя и прекратиться.

Гловинская（2001）は、この「限界性」という概念が、二つの用法で用いられていると指摘している。

一つは、上で見た文法的概念としての「限界性」である。しかし、この「限界性」を持っているのは、以下で見る、『限界動詞（предельные глаголы）』のみである。

もう一つは、動詞の語彙的意味の持つ意味要素としての「限界性」である。この意味要素としての「限界性」を持っているのは、いわゆる「限界動詞」と呼ばれるものである。例えば、「открывать-открыть окно（窓を開ける）」という動詞（句）は、それ自体限界を持つものだが、この語彙的意味を持つ形式は、不完了体（открывать）、完了体（открыть）の双方があり、語彙的意味としては、どちらも「限界性」の意味要素を含んでいる。この場合「限界性」は、完了体だけに固有のものではないということになる。

また、「限界」に到達しない完了体を表す一連の動詞群もある。以下の二例を見てみよう：

(2-5) *[35]Он уж надел [PFV-PST-SG-M] пальто и продолжает его надевать [IMPF-INF].
*彼は外套をもう着込んでいたが、それを着る動作を続けている。

(2-6) Цены уже очень повысились [PFV-PST-PL] и продолжают повышаться [IMPF-INF].
物価は既に非常に高くなったが、上がり続けている。

上例（2-5）が不自然なのは容易に理解できる。しかし、(2-6）は極めて自然である。もし（2-6）で用いられている完了体が何らかの「限界」に到達しているのであれば、（2-5）と同様に不自然に感じられるはずである。これはいわゆる『絶対的限界（абсолютный предел）』と『相対的限界（относительный предел）』の違いである。(2-6）のような、「相対的限界」を表す動詞は、他に возрасти（増大する）、повысить（高める、増やす）、повыситься（高まる、増える）、понизиться（下がる、低くなる）、удлинить（遠ざける）、удлиниться（遠ざかる）、уменьшить（減らす）、уменьшиться（減る、小さくなる）、ускорить（速度を上げる）、ускориться（速度が上がる）などがある。

以上のことから、「限界性」という概念が、完了体の不変的意味としては不完全であるということが分かる[36]。

上記③の「結果性（результативность действия）」を見てみよう。この意味特徴を提案していたのは、Карцевский（Сергей Осипович; 1884-1955）、Мучник（И. П.）である。

---

[35] ここで、例文の文頭に付してある星印（*）は、当該文が非文であることを示す。

[36] 「限界」という概念それ自体については、本文で見た「絶対的限界」と「相対的限界」の他に、「内的限界（внутренний предел）」と「外的限界（внешний предел）」、「現実的限界（реальный предел）」と「潜在的限界（потенциальный предел）」、「明示的限界性（эксплицитный предел）」と「非明示的限界性（имплицитный предел）」などがある。これら一連の「限界（性）」という概念それ自体についての考察は、簡潔にまとめられたものとして、ТФГ（1989）における Бондарко による論を参照されたい（cf. ТФГ 1989: 46-51）。

この「結果性」は、文字通り「動作の結果」を表すものである。Мучник は、これを先の「限界性」とほぼ同一のものと見なしていたようである。

しかしながら、Гловинская によれば（2001: 12）、この「結果性」は、完了体が普遍的に持ち合わせている特徴のように思われるものの、不完了体との「示差的な」特徴とはなっていない。というのも、結果性を表すことのできる不完了体動詞もあるからである。例えば、видеть, слышать, ощущать, чувствовать, лгать といった動詞、あるいは увеличиваться, удлиняться といった、限界（絶対的限界）を持たない状況（動作）を表す動詞などは「結果性」を表すことができる。

あるいは、以下のような例文を参照：

(2-7) Я <u>смотрел</u> [IMPF-PST-SG-M] фильм «Летят журавли».
「鶴が飛んでいく」という映画を観たことがあります。

(2-8) Что же вы правило <u>нарушаете</u> [IMPF-PRS-2PL]?
何だって規則を破っているんです？

これらの文における、それぞれの不完了体動詞は、当該状況が結果に到達していることを表していると言える。前者はいわゆる不完了体の個別的意味のうちの「一般的事実の意味（「観たことがあります」）」（下の第 2.5.3.3.節にて後述）であり、後者は、規則を「既に破っている」（つまり、「規則を破る」という状況が完了して結果が出ている）状況下で用いられる（「なぜ破っているのですか？」）。

したがって、この「結果性」もまた、完了体のインヴァリアントとしては適当ではないと言わざるを得ない。

上記④の「点状性（точечность действия）」の意味特徴を提案していたのは、Бругман（Карл; Karl Brugmann; 1849-1919）、Мейе（Антуан；Antoine Meillet; アントワーヌ・メイエ; 1866-1936）、Мазон（Андре; André Mazon; 1881-1967）、Пешковский（Александр Матвеевич; 1878-1933）である。

この「点状性」（『非延長性（непротяженность）』、あるいは『非持続性（недлительность）』という術語が用いられることもある）とは、当該状況の開始と終了が、点のように一致している[37]ことを表すとされる。

この意味特徴が、完了体の共有する意味特徴であるとすれば、完了体によって表される状況は、開始すると同時に終了するというタイプの状況であるということになる。

しかしながら、完了体動詞は常にそうした状況を表すものばかりというわけではない。例えば、「постепенно привык（徐々に慣れた）」、「медленно подошел（ゆっくりと近付いた）」というような例や、あるいは「проспал два часа（二時間眠った）」、「погулял с двух до четырех（二時から四時までぶらぶらした）」というような、「点」という感覚では捉えられそうもない例があることを考えれば、「点状性」という意味特徴は、完了体のインヴァリアントとしては適切ではないということになる。

[37] Гловинская（2001）は、「終了と開始が融け合っている（конец сливается с началом）」という表現を用いている（2001: 12）。

上記⑤の「全一性（целостность）」の意味特徴を支持しているのは、Размусен（Л. П.）、Ф. де Соссюр（Фердинанд де; Ferdinand de Saussure; フェルディナン・ド・ソシュール; 1857-1913）、Достал（Антонин; 1906-?）、Исаченко（Александр Васильевич; Aleksandr Issatschenko; 1910-1978）、Ружичка（Рудольф; Rudolf Růžička; 1920-2011）、そして、Маслов（Юрий Сергеевич; 1914-1990）と、その弟子にあたる Бондарко（Александр Владимирович; 1930-）である。また、先の章で確認したように（cf. 第一章、第 3.1. 節）、Рассудова や Forsyth も、理論的には Маслов と Бондарко の系譜に連なると考えられるため、ここに加えることもできるだろう。

この「全一性」という概念については、Размусен による初期の規定と、後年になって提案された規定とでそれぞれ理解が異なっていることが指摘されている（Гловинская 2001: 13-14）。

Размусен による初期の規定によれば、「全一性」は、当該状況の開始、中盤、終了のそれぞれが、一体の物（総体）としてみなされているということを表す[38]。

しかしながら、この規定は、上の①「終了性」の箇所でも挙げた、開始を表す動詞（засуетиться, побежать, запеть など）に関して、この「全一性」が当てはまるかどうかについて議論の余地があるだろう。もっとも、Размусен の主張したように、「状況の開始」の部分を更に細分化して、「状況の開始の開始」、「状況の開始の中盤」、「状況の開始の終了」の三つを、一体の物として表している、と考えることもできるだろう。しかしながら、これが許容されるのであれば、更に「状況の開始の開始の開始」、「状況の開始の開始の中盤」、「状況の開始の開始の終了」を一体の物として表す、更にはもっと言えば「状況の開始の開始の開始の開始」、「状況の開始の開始の開始の中盤」、「状況の開始の開始の開始の終了」を一体の物として表す、というように、定義が際限無く循環してしまうこととなり、結果として、こうした規定の有効性自体が疑わしいものとなってしまうだろう。

近年になって、「全一性」という概念は、「集約性（комплексность）」、「動作の不可分の全一性（неделимая целостность действия）」、あるいは「（開始相・中間相・終了相といった）相に分ける形で動作を表現できない性質（непредставимость действия в виде фаз）」といったように、比喩的に用いられるようになっている。しかし、これらの規定を採用したにしても、先の「結果性」で見た、（2-7）の例文が反例となってしまうだろう。そこでの不完了体によって表されている状況（動作）は、「全一性」をもって表されていると見なせるからである。

ここまで、過去に様々な研究者によって提案されてきた、完了体の不変的意味の候補について、その代表的なもの（「終了性」、「限界性」、「結果性」、「点状性」、「全一性」）を見てきた。

管見では、そもそもの問題は、あるひとつの意味特徴によって、様々な発話の条件

[38] ここでの規定は、先に見た（cf. 第 2.1.節）、Comrie（1976）による「完了相」の規定と酷似している。このことから、Comrie（1976）では、この Размусен による「全一性」の規定を利用して「完了相」を特徴付けようと試みていたことが分かる。

下で体のカテゴリーによって表される多様な意味全てを、そこに還元する形で説明するということが果たして可能かどうかという部分にあるのだろうと思われる。事実、こうしたアプローチで行なわれてきた議論が、(少なくともロシア語の動詞に関して言えば）最終的な解を提示するに現在まで至っていない以上、そのアプローチ自体を見直す時期に来ていることは間違いないであろう。その意味で、体のカテゴリーの示す、個別的な意味の記述を充実させると同時に、とりわけ、体のカテゴリーの文法的意味と、動詞の語彙的意味との相互の関係についても記述を更に行なっていく必要があると思われる[39]。

そうした学問的状況の中で、80 年代に入り、異なるアプローチによる、体の意味の記述に関する試みが提案された。次節では、その異なるアプローチについて取り上げてみる。

2.5.2.4. 体のカテゴリーの意味記述の異なるアプローチ

前節では、これまでに提案されてきた完了体のインヴァリアントと、それに対する反論について検討した。

こうした従来の体の意味の分析手法に対して、80 年代に入って異なるアプローチを提案したのが Гловинская である。

管見によれば、80 年代以降、本稿の執筆時点で、体のカテゴリーの文法的意味の記述のアプローチには、大きく分けて以下の二つのアプローチがあると考えられる[40]：

① 『意味特徴依存アプローチ（признаковый подход）』
② 『意味解釈依存アプローチ（смысловой подход）[41]』

前節まで見てきたような、「意味特徴依存アプローチ」は、プラハ言語学派の伝統を引き継いでおり、端的に言えば、音韻論における音素の記述法を、言語の意味の記述にも適用しようという試みである。すなわち、いくつかの意味特徴の組み合わせによって、体のカテゴリーの対立の記述、あるいは不変的意味の記述に取り組んできた。しかしながら、前節で述べたように、このアプローチに基づいた数々の意味特徴は、提案されては退けられるということを繰り返し、決定的な候補が見つからないまま、行き詰まりを見せていた。

こうした、体の意味研究における、ある種の閉塞感を打開しようという試みが、82 年の著作（Гловинская 1982）に始まる Гловинская の取り組みだったといえる。Гловинская は、従来行なわれてきた、このようなアプローチを、「古典的」なもので

---

[39] このように、体のカテゴリーの表す意味は一様ではないが、そうした多様性をもったカテゴリーであることを特徴付けることを可能にするのが、後に述べる「アスペクトの意味のクラスター」という概念であろう。それについては本章の後の節（第 2.7.6.節）を参照されたい。

[40] Петрухина（2009）では、ここで述べる二つのアプローチに加えて、Падучева（Елена Викторовна; 1935-）が取り組んでいる『таксономический подход（分類アプローチ）』と、体のカテゴリーがテキストにおいて果たす機能に注目した『текстовый подход（テキストアプローチ）』の二種類が加えられているが、ここでは、本文に挙げた二種類のアプローチを最も主要なものであると見なし、以下論を進める。なお、これら四つのアプローチについて、Петрухина（2009）でも概略が述べられている（cf. 2009: 52-59）。

[41] Петрухина（2009）では、このアプローチを指す際、「толковательный подход」という術語が用いられている（cf. 2009: 55-57）。

あると位置付け、このアプローチでは体のカテゴリーの意味の本質には迫れないとし、異なる意味記述のアプローチを提案した。それが「意味解釈依存アプローチ」である。

そこでは、完了体と不完了体の二項にある意味的対立は一様ではないことが指摘され[42]、その対立のタイプを明らかにするというアプローチが試みられている。

Гловинская が、体の対立の意味的タイプというものを提案するに至った理論的背景には、それまでのアスペクト論において行なわれていた意味の扱いとは根本的に異なった意味論的手法がある。これは、Апресян（Юрий Дереникович; 1930-）を中心とする、「モスクワ意味論学派[43]」によって現在も精力的に理論的発展が進められている意味記述の手法である。この学派自体は、動詞のみならず語の意味記述全般に取り組んでいるが、Гловинская は、この学派の意味分析・記述の手法を、体のカテゴリーの意味記述に適用することにより、体の対立のタイプという概念を提案するに至ったと考えられる。

本稿では、そのモスクワ意味論学派の意味記述の理論、あるいは Гловинская がその著作（1982, 1986, 1998, 2001, 2002）で行なった、動詞の体の意味を中心とした意味記述について、その詳細にまで踏み込むことはできないが、簡潔に確認しておく必要はあるだろう（以下の記述は主に Гловинская 2001 に基づいている）。

この意味記述の手法は、いわゆるメタ言語による語のパラフレーズによる意味記述の方法で、語の意味を、いくつかの根源的な意味要素に還元していくという方法を取る。まず、規定することのできない、『原初的な概念（исходные понятия）』として、'МОМЕНТ РЕЧИ', 'МОМЕНТ НАБЛЮДЕНИЯ', 'ПРЕДШЕСТВУЮЩИЙ', 'ПОСЛЕДУЮЩИЙ', 'ПОСЛЕ', 'ПОЗЖЕ', 'СУЩЕСТВЕННЫЙ', 'ПРИЗНАК', 'ЗНАЧЕНИЕ ПРИЗНАКА', 'ДЕЙСТВИЕ', 'СОСТОЯНИЕ', 'РЕЗУЛЬТАТ', 'ЧАСТЬ', 'БЫТЬ', 'СУЩЕСТВОВАТЬ', 'НАХОДИТЬСЯ', 'ИМЕТЬ', 'МОЖЕТ', 'БОЛЬШЕ', 'НЕ', 'КАЖДЫЙ', 'ЕСЛИ ... ТО'; 'ЦЕЛЬ', 'ДОЛЖНО', 'НЕПОСРЕДСТВЕННО', 'ПРЕКРАТИТЬСЯ', 'БЫТЬ БЛИЗКИМ К ЧЕМУ-Л.', 'ПОЛУЧИТЬ', 'СОЗДАТЬ'; 'ГОВОРЯЩИЙ', 'СЛУШАЮЩИЙ', 'СЧИТАТЬ'などを設定している（cf. Гловинская 2001: 83-86）[44]。

---

[42] もちろん、それ以前にも体に二項の成す意味的な対立が一様でないことを指摘した研究者はいる。例えば既に 1948 年に Маслов は、その著作の中で、以下の五つのタイプを指摘している（Маслов 1948）:

① プロセスとしての動作と全一的な動作
② 結果達成の試みとしての動作と結果が達成したことを示す動作
③ 無制限の長さを持つ動作と制限のある（あるいは瞬間的な）動作
④ 反復動作と単一の動作
⑤ 一般的な動作と具体的な動作

またこの研究については、簡潔にまとめられた Милославский（Игорь Григорьевич; 1938-）による記述（cf. Милославский 2011: 158-159）、あるいは Гловинская による記述（Гловинская 2001: 24-25）なども参照されたい。

このように、意味的な対立の多様さは認識されてはいたものの、この多様な対立を成す二項から不変的な意味を取り出すことまでは、意味特徴依存アプローチによっては成し遂げられなかったということになる。

[43] 「モスクワ意味論学派（Московская семантическая школа）」とその理論についての概説としては、Апресян（2005）を参照されたい。

[44] ここで各概念がスモールキャピタルで示してあるのは、（自然言語であるロシア語とは異なる）メタ言語であることを明示的にするために筆者が行なったものである（下の「中間的概念」についても同

次に、『中間的概念（промежуточные понятия）』として、'НАЧАТЬ' / 'НАЧИНАТЬ', 'КОНЧИТЬ' / 'КОНЧАТЬ', 'СТАНОВИТЬСЯ' / 'СТАТЬ', 'ДЕЙСТВОВАТЬ', 'БЫТЬ (НАХОДИТЬСЯ) В КАКОМ-ТО СОСТОЯНИИ', 'ИМЕТЬ СВОЙСТВО', 'ПОСТЕПЕННО'といったものが挙げられている（cf. Гловинская 2001: 86-89）。

これらの言語は、パラフレーズのための特殊な言語として理解されるべきで、これらの語と意味の近い、ロシア語という自然言語体系内での語とは必ずしも一致しないものであるとされる（cf. Гловинская 2001: 86）。

これらの言語を用いて意味分析を施す過程で、動詞の語彙的意味等を排除していった上で最終的に残る共通の意味要素を基にして、体のペアを成す二つの動詞の間にある、意味的な対立の型を分類、抽出していくのである。

Гловинская は、体の意味の対立のタイプとして、以下の四つを基本的な型として提案している[45]：

表 2-10：Гловинская（1982, 2001）による体の意味的対立のタイプ

対立の型	メタ言語による表示
Ⅰ型	НАЧИНАТЬ (-СЯ) ― НАЧАТЬ (-СЯ)
Ⅱ型	СТАНОВИТЬСЯ ― СТАТЬ
Ⅲ型	ДЕЙСТВОВАТЬ С ЦЕЛЬЮ ― ЦЕЛЬ РЕАЛИЗОВАНА
Ⅳ型	БЫТЬ В СОСТОЯНИИ ― НАЧАТЬ БЫТЬ В СОСТОЯНИИ И БЫТЬ В НЕМ

以下の表で、それぞれの「型」に属する動詞を確認しておく：

表 2-11：それぞれのタイプに該当する動詞

対立の型	該当する動詞
Ⅰ型	возникать / возникнуть, наставать / настать, наступать / наступить, начинать / начать, начинаться / начаться, появляться / появиться, исчезать / исчезнуть, переставать / перестать, прекращаться / прекратиться, выздоравливать / выздорветь, замерзать / замерзнуть (о воде), засыхать / засохнуть, согреваться / согреться, высыхать / высохнуть, заболевать / заболеть, забывать / забыть, загрязняться / загрязниться, заквашиваться / закваситься, закисать / закиснуть, затихать / затихнуть, насыщаться / насытиться, омрачаться / омрачиться, опошляться / опошлиться, оскудевать / оскудеть, ослабевать / ослабеть, отвердевать / отвердеть, отогреваться / отогреться, оттаивать / оттаять, превращаться / превратиться, проходить / пройти (о боли), размягчаться / размягчиться, спускать / спустить (шина спускает), угасать / угаснуть (чувства угасают), углубляться / углубиться (в занятие), бледнеть / побледнеть, глупеть / поглупеть, грустнеть / погрустнеть, дурнеть / подурнеть, краснеть / покраснеть, возвращаться / возвратиться,

様）。原文では表記に関して特段区別はされていない。

[45] なお、それぞれの型は、施される意味分析に応じて、それぞれ I 型が I-a 型と I-б 型、III 型が III-a 型と III-б 型、IV 型が IV-a 型、IV-б 型及び中間タイプ（промежуточный тип）とに下位分類されるが、ここでは最も基本的なものである四つのタイプを本文には示す。

Ⅰ型	приближаться / приблизиться, снижаться / снизиться, входить / войти, всходить / взойти, выходить / выйти, заходить / зайти, отходить / отойти, подходить / подойти, расходиться / разойтись, сходить / сойти, проходить / пройти (мимо чего-либо), окрашивать / окрасить, увлажнять / увлажнить, смягчать / смягчить, успокаивать / успокоить; делать / сделать, вбивать / вбить, втаскивать / втащить, погружать / погрузить, читать / прочитать, шить / сшить, писать / написать, строить / построить, надевать / надеть, возвращаться / возвратиться, возвращать / возвратить, вставать / встать, забывать / забыть, загораживать / загородить, исполнять / исполнить (пьесу Шопена), изготавливать / изготовить, ложиться / лечь, наклонять / наклонить, обрабатывать / обработать, окружать / окружить, окутывать / окутать, опрокидывать / опрокинуть, опускать / опустить, опускаться / опуститься, осматривать / осмотреть, останавливать / остановить, останавливаться / остановиться, отделять / отделить, отделяться / отделиться, открываться / открыться, открывать / открыть, откусывать / откусить, отламывать / отломить, перевозить / перевезти, переворачивать / перевернуть, передвигать / передвинуть, переезжать / переехать, переходить / перейти, переодевать / переодеть, переодеваться / переодеться, перечитывать / перечитать, переворачиваться / перевернуться, подбирать / подобрать, поднимать / поднять, подниматься / подняться, подтягивать / подтянуть, подтягиваться / подтянуться, появляться / появиться (о пятне), приближаться / приблизиться, прикреплять / прикрепить, приобретать / приобрести (окраску), раздавать / раздать, разрезать / разрезать, раскрывать / раскрыть, раскрываться / раскрыться, рассказывать / рассказать, расспрашивать / расспросить, рассчитывать / рассчитать (конструкцию), садиться / сесть, свертывать / свернуть, свертываться / свернуться, связывать / связать, связываться / связаться, снижать / снизить (скорость), собирать / собрать, собираться / собраться, соединять / соединить, соединяться / соединиться【全 123 ペア】
Ⅱ型	улучшаться / улучшиться, удаляться / удалиться, приближаться / приблизиться, падать / упасть (о температуре, ценах и т.п.), повышаться / повыситься, понижаться / понизиться, подскакивать / подскочить, продвигаться / продвинуться, разбухать / разбухнуть, раздуваться / раздуться, расти / вырасти, расширяться / расшириться, сокращаться / сократиться, сужаться / сузиться, толстеть / потолстеть, увеличиваться / увеличиться, удлиняться / удлиниться, уменьшаться / уменьшиться, утолщаться / утолститься, увеличивать / увеличить, уменьшать / уменьшить, удалять / удалить, приближать / приблизить, улучшать / улучшить, ухудшать / ухудшить, повышать / повысить, понижать / понизить, расширять / расширить, сужать / сузить, поднимать / поднять (цены)【全 30 ペア】
Ⅲ型	вколачивать / вколотить, выбивать / выбить (дурь из головы), выбивать / выбить (гвозди у завхоза), всучивать / всучить, выпытывать / выпытать, добиваться / добиться, зазывать / зазвать, отговаривать / отговорить, подбивать / подбить (вступить в драку), подговаривать / подговорить, принуждать / принудить, склонять / склонить, соблазнять / соблазнить, провоцировать / спровоцировать, уговаривать / уговорить, умолять / умолить, упрашивать / упросить, вдалбливать / вдолбить, внушать / внушить, втираться / втереться,

Ⅲ型	втолковывать / втолковать, доказывать / доказать, обманывать / обмануть, убеждать / убедить, уверять / уверить, задабривать / задобрить, запугивать / запугать, успокаивать / успокоить, доказывать / доказать (теорему), отгадывать / отгадать, решать / решить (задачу), разгадывать / разгадать, сдавать / сдать (экзамен), дожидаться / дождаться, искать / найти[46], ловить / поймать, отыскивать / отыскать, поступать / поступить (в институт); заставлять / заставить, настаивать / настоять (на своем), обращать / обратить (в мусульманство), объяснять / объяснить, растолковывать / растолковать, будить / разбудить, подбадривать / подбодрить, приохочивать / приохотить, успокаивать / успокоить, усыплять / усыпить, утешать / утешить, взвешивать / взвесить (аргументы), выбирать / выбрать, выяснять / выяснить, изучать / изучить, обдумывать / обдумать, осмыслять / осмыслить, придумывать / придумать (загадку), разузнавать / разузнать, узнавать / узнать, беречь / уберечь, возбуждать / возбудить (дело), выбиваться / выбиться (в люди), выводить / вывести (пятно), выслеживать / выследить, выслуживаться / выслужиться, защищать / защитить, менять / обменять (квартиру), основывать / основать (общество), отдыхать / отдохнуть, прятать / спрятать, предотвращать / предотвратить, приспосабливать / приспособить, разыскивать / разыскать【全 66 ペア】
Ⅳ型	беситься / взбеситься (Он бесится/ взбесился от ревности.), беспокоиться / обеспокоиться, волноваться / взволноваться, любить / полюбить, ненавидеть / возненавидеть, обожествлять / обожествить, сердиться / рассердиться, тревожиться / встревожиться, верить / поверить, увлекаться / увлечься, интересовать / заинтересовать, интересоваться / заинтересоваться, воображать / вообразить, выделять / выделить, понимать / понять, признавать / признать, возглавлять / возглавить, возноситься / вознестись, выбиваться / выбиться, загромождать / загромоздить, заполнять / заполнить, нависать / нависнуть, покрывать / покрыть, поворачивать / повернуть, кончаться / кончиться, начинаться / начаться, доходить / дойти, обрываться / оборваться, изменять / изменить (направление), подводить / подвести, приводить / привести, выводить / вывести, доводить / довести, заводить / завести, обходить / обойти, отходить / отойти, переходить / перейти, подходить / подойти, проходить / пройти, опоясывать / опоясать, нависать / нависнуть, вдаваться / вдаться, открываться / открыться, подниматься / подняться, возноситься / вознестись, загораживать / зогородить, закрывать / закрыть, заслонять / зослонить, застилать / застлать, воплощать / воплотить, выделяться / выделиться, выступать / выступить, обнаруживать / обнаружить, сохранять / сохранить, обнимать / обнять, заниматься / заняться[47], встречаться / встретиться, предъявлять / предъявить, скрывать / скрыть; наслаждаться / насладиться, гладить / погладить, трогать / тронуть, пытаться / попытаться, заботиться / позаботиться; глядеть / поглядеть, видеть / увидеть, слышать / услышать, казаться / показаться, чудиться / почудиться, мерещиться / померещиться,

[46] найти に対応する不完了体としては、通常 находить が想定されることが多いが、Гловинская はこの二つをペアとは見なしておらず、代わりに искать を提案しているため（Гловинская 2001: 106-107）、ここではそれに従う。

[47] 場合によってはペアを成していないという考え方もあろうが、Гловинская はペアであると見なしている。

Ⅳ型	ощущать / ощутить, чуять / почуять, чувствовать / почувствовать, нравиться / понравиться, огорчаться / огорчиться, восхищаться / восхититься, жалеть / пожалеть, веселить / развеселить, восхищать / восхитить, удивлять / удивить, льстить / польстить, возмущать / возмутить, обижать / обидеть, огорчать / огорчить, оскорблять / оскорбить, поддерживать / поддержать, потеть / вспотеть, думать / подумать (о чем), думать / подумать (что 節)【全 89 ペア】

これは、いわゆる「メタ言語」による客観的な意味記述を目指したものであるが、管見では、アスペクト論におけるこの研究の最大の学術的な貢献は、ロシア語の体のカテゴリーの対立が一義的なものではないという漠とした印象を、従来とは異なる意味論的操作により、理論的な裏付けを伴って「型」という形で提示し、さらには、それまで様々なものが提案されて来ていた、体の意味的不変体（インヴァリアント）というものの新たな候補を提案したということにあるだろう。

しかしながら、メタ言語による記述が、どの程度意味記述の客観性を保証してくれているのかという問題[48]や、あるいはこの Гловинская の理論自体にも問題点は存在しており[49]、その意味では、体のカテゴリーの意味をめぐる諸問題は、未だ全面的な解決は見ていないと言える。

2.5.3. 個別的意味

2.5.3.1. 本節で取り上げる研究について

ここまで、体という文法的カテゴリーの表す意味の記述について見た。本節では、体の個別的意味に関する先行研究の記述を確認する。

完了体、不完了体のそれぞれの個別的意味については、様々な研究者が分類を行ない、リストの作成を試みている。本節では、主に Бондарко（1971）、Рассудова（1968, 1982）での記述を中心に見ていくことにする。

Бондарко（Александр Владимирович; 1930-）による研究（1971）は、直接の師にあたる Маслов（Юрий Сергеевич; 1914-1990）の研究を発展させる形で、体のカテゴリーの表す意味の体系的な記述を目指すという、著者の一連の研究活動の、ちょうど中間あたりに位置するものである。この著作の前後から、氏の著作の主たるテーマは機

[48] 一般にメタ言語に対する批判として、メタ言語とは、いわゆる「マーカー語」という単なる言い換えの一種であり、それに拠って意味記述を行っても、詰まるところロシア語を理解する者にしか理解できないという状況に陥らざるをえず、普遍的な意味の記述方法とは言えない、という批判がある。もっとも、こうした問題点はここでの動詞の意味記述に限らず、言語の意味記述全体にとっての問題でもあると考えられ（cf. 郡司他 2004: ix-xvii）、ここでの Гловинская の方法論にとってだけではなく、先に述べた、ロシア語アスペクト論において従来行なわれてきた、意味特徴によって体のカテゴリーの文法的意味を規定しようとする意味特徴依存アプローチにとっても同様に当てはまるものであると考えられる。

[49] Гловинская 自身も、それぞれの型の下位タイプに対する修正を加えている（cf. Гловинская 2002）。また、若干異なる視点からの指摘として、体の対立の意味タイプの意味記述を行う際に、対象として取り上げられている動詞の選定に偏りがあり、結果として、頻度数の高い動詞の意味記述が進んでいないという点が挙げられる。この点に関する指摘と、問題点の解消に向けた提案については阿出川（2007）を参照。

能文法の理論へと本格的にシフトしていると考えられることから、この Бондарко（1971）が、氏の一連のロシア語アスペクト研究において、ある種の区切りとしての役割を果たしていると見ることもできるだろう。その意味では記念碑的な位置付けにあたる研究である。

Рассудова（Ольга Петровна）は、先にも見たように（cf. 第一章、第 3.1.節）、ロシア語教育の分野が専門であることから、体のカテゴリーをどのように外国人に習得させるか、という視点でその著書（1968, 1982）をまとめている。先にも述べた通り、理論的には Бондарко に拠っている部分が大きいと言えるだろうが、時制のカテゴリーとの関わりも考慮された、体のカテゴリーの持つ多様な意味と用法に関する記述は非母語話者にとっては極めて貴重である。

以下本節では、まず、従来の枠組みに沿った、伝統的な個別的意味の分類について、上記の先行研究に沿って記述を確認する。

体の意味の特殊性から、上で（cf. 本章、第 2.4.節）確認した、一般言語学の視点からのアスペクトの意味の記述と比較した場合、改善すべきと思われる点もあるが、そうした問題については、後の節（cf. 第 2.7.5.節）において考察を加える機会を別途設けることにする。

2.5.3.2. 完了体の個別的意味

まず完了体の個別的意味から見ていくことにしよう。

Бондарко（1971）では、以下を完了体の個別的意味として挙げている（1971: 22-24）:

① 具体的事実の意味（конкретно-фактическое значение）
② 例示的意味（наглядно-примерное значение）
③ 潜在的動作の意味（потенциальное значение）
④ 一括化の意味（суммарное значение）

それぞれに対応する例文を見ながら、これらの意味について見ていくことにしよう[50]。

まず、「①具体的事実の意味」から見て行こう。

(2-9) Скоро <u>вернется</u> [PFV-PRS-3SG]. <u>Пройдите</u> [PFV-IMP-PL], <u>подождите</u> [PFV-IMP-PL].
すぐに戻りますので。どうぞお入りになってお待ち下さい。

この意味は、「具体的な、単一の事実（конкретный единичный факт）」を表す（Бондарко 1971: 22）。

次に「②例示的意味」について確認しよう。

(2-10) Иногда весной бывает так: <u>налетит</u> [PFV-PRS-3SG] буря, <u>погуляет</u> [PFV-PRS-3SG] часа два-три и так же неожиданно <u>затихнет</u> [PFV-PRS-3SG], как началась.

[50] 例文はそれぞれ当該文献から引用したものである。その際例文が複数上げられている場合には、筆者の判断で取捨選択している。本節においては以下同様。

春にはこういうことが時折あるものだ。嵐が巻き起こり、二三時間にわたってそれは駆け巡ったかと思うと、巻き起こった時と同じように、不意に止んでしまったりする。

この意味では、反復する動作が表される。その際、反復する複数の動作のうち一つを、その動作の具体的なイメージを与えるための「例」として取り上げることで表現する（Бондарко 1971: 22）。

下の例に見られる、「③潜在的動作の意味」では、潜在的な可能性が表現される。ある特定の一時点に属するものではなく、いかなる時点においても生じうるような、可能性、必要性などについて述べられている文脈において現れる。

(2-11) Женщины! Женщины! Кто их <u>поймет</u> [PFV-PRS-3SG]?
女よ！女よ！一体誰があの人たちを理解できようか？

動詞の形態は、多く、完了体の未来形（非過去形）あるいは不定詞の形態で現れ、否定を伴うことも多い。この意味は、上で見た「例示的意味」と近い意味であるとされる（Бондарко 1971: 23）。

「④一括化の意味」について見てみよう。

(2-12) Равняясь с ними, Алексей <u>мигнул</u> [PFV-PST-M]раз пять подряд.
彼らに追いつきながら、アレクセイは五度ほど立て続けに瞬きした。

この意味が現れる場合には、「два раза（二回）、「трижды（三回）」、「несколько раз（何度か）」といった回数を表す指標を伴う（Бондарко 1971: 24）。

Рассудова（1982）では、以下を完了体の個別的意味として挙げている（1982: 10）：

① 具体的事実の意味（конкретно-фактическое значение）
② 一括化の意味（суммарное значение）
③ 例示的意味（наглядно-примерное значение）

それぞれに対応する例文として以下のような例を挙げている：

(2-13) Он <u>повторил</u> [PFV-PST-M]мне свой вопрос.
彼は私に質問を繰り返して言いました。
(2-14) Он несколько раз <u>повторил</u> [PFV-PST-M]свой вопрос.
彼は続けて何度か質問を繰り返しました。
(2-15) Если вы не поймете мое объяснение, я всегда могу <u>повторить</u> [PFV-INF] его вам (я всегда <u>повторю</u> [PFV-PRS-1SG] его вам).
説明が分からないようでしたら、いつでも繰り返してあげますよ。

2.5.3.3. 不完了体の個別的意味

続いて、不完了体の個別的意味を確認していく。

Бондарко（1971）では、以下を不完了体の個別的意味として挙げている（1971: 24-36）:

① 具体的過程の意味（конкретно-процессное значение）
② 制限のない多回性の意味（неограниченно-кратное значение）
③ 一般的事実の意味（обобщенно-фактическое значение）
④ 恒常的・不断の動作の意味（постоянно-непрерывное значение）
⑤ 潜在的・性質的動作の意味（потенциально-качественное значение）
⑥ 制限のある多回性の意味（ограниченно-кратное значение）

前節と同様に、対応する例文を見ながらそれぞれの個別的意味を確認して行こう。

まず「①具体的過程の意味」である。

(2-16) Ел [IPFV-PST-M] Мирон Лукич разборчиво, привередливо и скоро отодвинул тарелки.
ミローン・ルキーチは選り好みをして食べていたが、好き嫌いを言ってすぐに皿を押しやった。

これは、具体的な、つまり時間軸に一定の位置を占め、且つ動作がその完遂に向かって進行している過程にあるものとして動作を提示する（Бондарко 1971: 24）。

「②制限の無い多回性の意味」は以下のような例で見ることができる。これは無制限に反復する動作を表す（Бондарко 1971: 27）:

(2-17) Зимой гостила [IPFV-PST-F] иногда в усадьбе странница Машенька...
冬に時々領地に客として逗留していたのは、さすらい人のマーシェニカであった。

下の例に見られる「③一般的事実の意味」は、当該動作があるのか無いのか（あったのか無かったのか）を表すというのがその基本的な意味である（Бондарко 1971: 29）:

(2-18) Ко мне сам Никодим Палыч Кондаков обращался [IPFV-PST-M], и я его вылечил.
ニコヂム・パーヴロヴィチ・コンダコフが自分で私のところに診察を受けに来たことがあって、治療してあげたんだ。

「④恒常的・不断の動作の意味」は、完遂の途上にある動作が、途切れることなく恒常的に進行していることが表される：

(2-19) Говорят—жизнь быстро двигается [IPFV-PRS-3SG] вперед...

人生というものは足早にただただ前に進んでいくのだという。

Бондарко（1971）では、この意味では、反復するのでもなく、途切れるわけでもなく、長い期間を覆うように、「一枚の岩のような」動作が表されるとしている（Бондарко 1971: 30）。

「⑤潜在的・性質的動作の意味」について見てみよう：

(2-20) А ты и на скрипке <u>играешь</u> [IPFV-PRS-2SG]?
バイオリンもできる？

この意味では、主体の持つ性質や特徴としての動作を潜在的な可能性として提示する（Бондарко 1971: 28）。

下の例に見られる、「⑥制限のある多回性の意味」は、先の、完了体の「一括化の意味」の場合と同様に、「два раза（二回）、「трижды（三回）」、「несколько раз（何度か）」といった回数を表す指標を伴って、（有限の回数）反復する動作が表される（Бондарко 1971: 31）。

(2-21) Два раза <u>выпадал</u> [IPFV-PST-M] зазимок, насыпал сугробы.
二度雪が降って、雪の山を作った。

Рассудова（1982）では、以下を不完了体の個別的意味として挙げている（1982: 10）[51]：

① 具体的過程の動作（конкретно-процессное действие）
② 無制限の多回動作（неограниченно-кратное действие）
③ 一般的事実の意味（общефактическое значение）

それぞれに対応する例文としては以下のような例が挙げられている：

(2-22) Молодая женщина <u>сидела</u> [IPFV-PST-F] у окна вагона и <u>читала</u> [IPFV-PST-F].
若い女性が車両の窓際に座り、読み物をしていた。

(2-23) Иногда я <u>перечитывал</u> [IPFV-PST-M] писателей, которых особенно любил.
時々私はとりわけ気に入っている作家の作品を読み返していた。

(2-24) Вы <u>читали</u> [IPFV-PST-PL] эту повесть? В каком журнале вы ее <u>читали</u> [IPFV-PST-PL]?
この小説をお読みになりましたか？どの雑誌で読まれましたか？

[51] この著作の初版となる Рассудова（1968）においては、用いられている術語が若干異なっていることも指摘しておくべきであろう。それぞれ①が『動作の過程の意味（значение процесса действия）』、②が『反復性の意味（значение повторяемости）』となっている。これは、68 年の初版の出版後に、Бондарко（1971）が出版されたため、そこでの成果を踏まえ、且つ取り込もうとしたためと思われる。

2.5.3.4. まとめ：個別的意味の分類

ここまで、従来の研究で提案されている、個別的意味のリストを確認して来た。

それぞれの研究者が挙げている完了体の個別的意味は以下のものである。下表では、それぞれの対応関係が分かるように、内容的に近いもの同士が隣り合うように並べ替えてある。

表 2-12：それぞれの研究者が挙げている完了体の個別的意味

Бондарко（1971）	Рассудова（1982）
①具体的事実の意味	①具体的事実の意味
④一括化の意味	②一括化の意味
②例示的意味	③例示的意味
③潜在的動作の意味	–

同様に、不完了体の個別的意味としては、以下のようなものが挙げられている（意味の提示の方法についても上表と同様）：

表 2-13：それぞれの研究者が挙げている不完了体の個別的意味

Бондарко（1971）	Рассудова（1982）
①具体的過程の意味	①具体的過程の動作
④恒常的・不断の動作の意味	
②制限のない多回性の意味	②無制限の多回動作
⑥制限のある多回性の意味	
⑤潜在的・性質的動作の意味	–
③一般的事実の意味	③一般的事実の意味

こうした個別的意味のリストアップの方法が抱えている理論上の問題点については、以下の節（cf. 第 2.7.5.節）で改めて論じることとし、ここでは各リストの紹介に留める。

2.5.4. Храковский（2002）による体の意味の分類

ここまでで、伝統的なアスペクト論における、体のカテゴリーの個別的意味のリストを見てきた。ここでは、それらとは若干異なる視点からの体の意味に関する分析である、Храковский（2002）による体の個別的意味の分類に関する研究を取り上げておこう。ここまで見てきた、Маслов や Бондарко に始まる伝統的な枠組みでの定式化とは異なる形での提案として有意義であると思われる。

Храковский（2002）では、下に述べる「位相」という概念を利用して、体の意味を、言わば模式図的に表示できるという点で極めて興味深い。

2.5.4.1. 「位相」について

ここで『位相（фаза; phase）』という概念について確認しておこう。「位相」とは、「進行している時間における、ある任意の時点の状況」（Comrie 1976: 48）を指す。通

常、『開始相（начальная фаза）』、『中間相（серединная фаза）』、『終了相（конечная фаза）』の三つが想定される。

「位相」を図示するにあたり、どのように提示するかはそれ自体検討の余地があるが、ここでは差し当たり下図のようなイメージで捉えておく（括弧内の丸数字は以下の説明の便宜のため添えてある）[52]：

図 2-4：三つの「位相」

開始相	中間相	終了相
（①）	（②）	（③）

Храковский（2002）では、この三つの「相」の、どの「相」を表わすか、あるいは、複数の相が表わされると考えられる場合に、どの部分（どの組み合わせの「相」）を表わすかにより、以下の七つのタイプに分類して、ロシア語の体のカテゴリーが表す意味について考察を加えている：

表 2-14：Храковский（2002）による「位相」の組み合わせ

タイプ	「位相」の組み合わせ
タイプ１	起動相（上図中の①）
タイプ２	中間相（同②）
タイプ３	終了相（同③）
タイプ４	起動相＋中間相（同①＋②）
タイプ５	起動相＋終了相（同①＋③）
タイプ６	中間相＋終了相（同②＋③）
タイプ７	起動相＋中間相＋終了相（同①＋②＋③）

次節以降でそれぞれのタイプについて見ていくことにしよう。

2.5.4.2. タイプ１

タイプ１は、起動相を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（グレーの部分が表わされる相であることを示している）：

図 2-5：Храковский（2002）の分類（タイプ１）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。

具体的には、закипеть（沸き始める）、заболеть（痛み出す）、заснуть（寝入る）などの「開始の動作様態（начинательный СД）[53]」を表わす動詞（接頭辞 за-を伴うもの）

[52] 先の「状況の構造モデル」（cf. 第 2.4.1.節）と同様に、時間の流れは左から右に流れているものとイメージする。

[53] 『動作様態（способ действия；「動作様式」とも）』は、動詞の語彙・文法的な分類である。接頭辞、後接辞などの形態素によって、当該動詞が表す動作に、時間的な意味、結果の意味などの意味要素が

該当する。また、увидеть, понять（理解する）などもここに含まれている。

2.5.4.3. タイプ２

タイプ２は、中間相を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（同上）：

図 2-6：Храковский（2002）の分類（タイプ２）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、不完了体である。

このタイプに該当するのは、上（cf. 第 1.3.節）で見た Vendler の分類のうち、以下のものである：

① 「活動」：
танцевать（踊る）、гулять（ぶらぶらする）、бежать（走る）など

② 「達成」：
открывать（開ける）、строить（建てる）、писать（書く）、ломать（壊す）、сохнуть（乾く）、ржаветь（錆びる）など

③ 「状態」：
болеть（痛む）、любить（愛している）、висеть（掛かっている）など

2.5.4.4. タイプ３

タイプ３は、終了相を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（同上）：

図 2-7：Храковский（2002）の分類（タイプ３）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。主に以下のような動詞が含まれる：

① 「終了の動作様態（финитивный СД）」を表わす動詞（接頭辞 от-や от-と後接辞-ся との組み合わせで表されるもの）：

加えられた一連の動詞を指す（cf. Энциклопедия 1996: 530）。術語に関しては、研究者によっては、「動詞の動作様態（способ глагольного действия）」という術語が用いられることもある（Энциклопедия 1996, Петрухина 2009 など）。また、本文でも用いているように、頭文字をとって「СД」または「СГД」と略号で示される場合がある。

動作様態の分類は様々な研究者によって様々に行われている。例えば、Энциклопедия（1996）では、16 の分類が提案されている（Энциклопедия 1996: 530-532）。Зализняк и Шмелев（2000）では、主要なものとして 15 の分類が提案されている（2000: 104-127）。Авилова（1976）では、「時間に関わる動作様態」として 4 分類、「数量に関わる動作様態」として 10 分類、「特殊な結果性を表す動作様態」として 5 分類の、合計 19 の分類が提案されている（1976: 259-316）。上の本文では、Храковский（2002）が採用している分類をそのまま利用している。

なお、本文で触れているそれぞれの動作様態に対しては日本語の訳語は定まっておらず、本文で採用している訳語も、筆者による試訳である。

отцвести（咲き終わる）、отговорить（話をやめる）、отбегаться（走り終わる）、отстреляться（弾を撃ち尽くす）など

② 接頭辞「раз-」を伴う動詞：
разлюбить（嫌いになる）

2.5.4.5. タイプ４

タイプ４は、「起動相＋中間相」を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（同上）：

図 2-8：Храковский（2002）の分類（タイプ４）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。
ここに分類されるのは、以下のような動詞である：

① 「開始を表わす動作様態」に属する動詞：
закричать（叫び出す）、зазвонить（鳴り始める；鳴らし始める）
② 接頭辞「по-」を有するいくつかの動詞：
полететь（飛び始める）、поползти（這い始める）など
③ 接頭辞「вз-」や「воз-」を有するいくつかの動詞：
взволноваться（そわそわし始める）、возненавидеть（嫌いになる）など
④ 接辞「за- -ся」を有する動詞：
загореться（燃え出す）、задуматься（考え込む）など
⑤ 接辞「вз- -ся」を有する動詞：
взбунтоваться（暴動を起こす）など

2.5.4.6. タイプ５

タイプ５は、「起動相＋終了相」を表わすタイプであるが、他のタイプとは異なる、特殊なタイプと位置づけることができるだろう。すなわち、このタイプに関しては、中間相がそもそも考慮され得ないからである。したがって、図にするとすれば以下のようになるだろう：

図 2-9：Храковский（2002）の分類（タイプ５）

起動相　＝　終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。
具体的には、以下のような動詞が含まれる：

① 『瞬間動詞（моментальный глагол）』

② 『一回の動作を表す動作様態（семельфактивный СД）』の動詞[54]：
тряхнуть（一回揺らす）、стукнуть（一回こつりと叩く）など
③ 接頭辞「вз-」を伴ういくつかの動詞：
взвыть（急に吠える）
④ 『結果を表わす動作様態（общерезультативный СД）』に属する動詞：
найти（見つけ出す）、посмотреть（眺める）、догадаться（気付く）、поскользнуться（滑って転ぶ）опомниться（正気に返る）など

2.5.4.7. タイプ６

タイプ６は、「中間相＋終了相」を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（同上）：

図 2-10：Храковский（2002）の分類（タイプ６）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。

ここには、дожить（～まで生きる）、досеять（あるところまで種を蒔き終える）などの、『終了・完結を表わす動作様態（финально-комплетивный СД）』に属する動詞が含まれる。

2.5.4.8. タイプ７

タイプ７は、「起動相＋中間相＋終了相」を表わすタイプである。図に示すと以下のようになる（同上）：

図 2-11：Храковский（2002）の分類（タイプ７）

起動相	中間相	終了相

ロシア語においてこの意味の表現を担っているのは、完了体である。

ここに含まれるのは、以下のような動詞である：

① 体のペアを持っている動詞：
открыть（開ける）、построить（建てる）、написать（書く）、сломать（壊す）、высохнуть（乾く）、заржаветь（錆びる）など
② 『限定を表す動作様態（делимитативный СД）』に属する動詞：
посидеть（少しの間座っている）、полежать（少しの間横になっている）、всплакнуть（ちょっと泣く）
③ 『一定期間の持続の動作様態（пердуративный СД）』に属する動詞：
прождать（ある一定の時間・期間待つ）、просидеть（ある一定の時間・期間座っている）、проработать（ある一定の時間・期間働く）

[54] いわゆる『一回体』と呼ばれる完了体動詞。

2.5.4.9. まとめ：Храковский（2002）の分類と状況の構造モデル

ここまで見てきて分かる通り、このХраковский（2002）において提案されているモデルは、上で見た「状況の構造モデル」（cf. 第 2.4.1.節）と類似しており、この両者は、事実上ほぼ同じイメージを表しているものであると考えてよいだろう。

このような「位相」の概念を利用して、その組み合わせによって、ロシア語の体の意味を分類するという、Храковский（2002）の提案自体は、従来の伝統的な枠組みでの「体の個別的意味」をめぐる議論には従来なかった性格のものである。

管見では、この論が興味深い理由は、「動作様態」の表す意味と、体のカテゴリーの表す意味とを同列に扱っているという部分にある。従来のアスペクト論では、体の個別的意味を議論する際には、原則として「動作様態」については対象としていなかった。「動作様態」によって表される意味は、動詞の「語彙的意味」であるとされ、体のカテゴリーの表す「文法的意味」を記述するという方向性とは異なるものとして、一線を画されていたためである。

そうした線引きを取り払った上で、「開始」に関わる意味（すなわち、一次的アスペクトの意味）なども含み込んだ上で、体の意味を列挙するという氏の試みは、相応に評価されてしかるべきであろう。

2.6. ロシア語動詞の体のペア

2.6.1. 「体のペア」という概念と動詞のタイプ

ここでは『体のペア（видовая пара）』という概念と、それに応じたロシア語の動詞の分類について確認する。

「体のペア」とは、共通する語彙的意味を有しており、体の文法的意味においてのみ異なっている[55]という関係にある、二つの動詞である。形態論的な観点に照らすと、これらの二つの動詞は、語形成における派生関係にあることが多い[56]。

しかしながら、ロシア語の全ての動詞が、体のペアを形成しているわけではない。体のペアの有無などに応じて、以下のように分類することができる：

① ペアを成す動詞（парные глаголы）
② 単体動詞（одновидовой глагол）
③ 両体動詞（двувидовой глагол）

上の①の、「ペアを成す動詞」とは、「открывать」と「открыть」のようなものを指す[57]。この二つの動詞は、共通の語彙的意味を持っており、体の意味でのみ差異があ

[55] もちろん、ここで述べたような、ロシア語の動詞の意味を考える際に、「語彙的意味」と「体の意味」から成っているというように、この両者を峻別できるものとして扱うという立場に異論を唱える研究者も存在する。例えば、先に見た、モスクワ意味論学派に属するГловинская などは、体の意味と語彙的意味は融け合っているとの立場を取っている（cf. Гловинская 1982: 47-54）。

[56] 体のペアについての語形成論的観点からの分類については、下の第 2.6.2.節において論じる。

[57] なお、以下本文で、ペアを成す動詞を一つの動詞語彙として提示する場合、「不完了体 / 完了体」のように提示する。なお、ここでそれぞれの例として挙げている動詞群は主にБондарко, Буланин（1967）において挙げられているものである。

るとみなすことができるため、これらは「体のペア」を成しているものとして扱われる。

②の「単体動詞」は、対応する体のペアを持たない動詞を指し、これらは更に「不完了体単体動詞」と「完了体単体動詞」とに分類される。

「不完了体単体動詞」には、иметь, значить, стоить, обладать, принадлежать, состоять, содержать, знать, бояться, уважать, жалеть, гулять, разговаривать などが含まれる。

「完了体単体動詞」には、очнуться, очутиться, встрепенуться, ринуться, хлынуть, грянуть, нагрянуть, отпрянуть, воспрянуть, рухнуть, посчастливиться, поперхнуться, угораздить, состояться などが分類される[58]。

同③の「両体動詞」とは、同一の動詞形態が、完了体としても不完了体としても用いられる動詞を指す。この「両体動詞」に属するものは、адресовать, арендовать, велеть, женить, жениться, заимствовать, использовать, исследовать, казнить, родить, завещать などがあり、外来語を動詞化したものには特に多く見られるものである。

上で述べた通り、両体動詞の場合には、同一の動詞が完了体としても、不完了体としても用いられるため、体の差異が形態的に明示されない。そのため、体の意味の差異は、文脈などの要素から判断するしかない[59]。

以下本稿では、この「ペアを成す動詞」、「単体動詞」、「両体動詞」などの別を、「動詞のタイプ」と呼ぶことがある。

2.6.2. 体のペアの種類

体のペアは、その語形成のプロセスに応じていくつかの分類が可能である。ここでは、以下の三つについて確認する：

① 「不完了体化（имперфективация）」によるもの
② 「完了体化（перфективация）」によるもの
③ 「補充法（супплетивизм）」によるもの

以下では主に Энциклопедия（1998）での記述に従って、それぞれのパターンを見ていくことにする。

2.6.2.1. 体のペア：不完了体化によるもの

『不完了体化（имперфективация）』とは、完了体動詞に、特定の接辞を付加することで、語彙的意味に変化はもたらさずに不完了体動詞を形成する方法である。

不完了体化をもたらす接辞には以下のようなものがある（cf. Энциклопедия 1998: 149-151）：

---

[58] これらは、上で見た、Vendler（1967）による動詞語彙の分類（cf. 第 1.3.節）などに代表される、「状況の性質」の分類と対応させることが可能である。それについては後節（第 2.7.3.節）を参照されたい。

[59] もっとも、ここでどの分類にどのような動詞を含めるかということ自体についても、立場に相違がある。本稿では原則として、研究社露和辞典（東郷他 1988）、СРЯЕ（1981-1984）の記述に従って分類を行っている。

表 2-15：不完了体化をもたらす接辞と語形成例

不完了体形成接辞	例 （完了体動詞 → 形成される不完了体動詞）
-ыва- / -ива-	заработать → зарабатывать, проколоть → прокалывать, отморозить → отмораживать, перепрыгнуть → перепрыгивать, рассмотреть → рассматривать, расклеить → расклеивать
-а́- / -я́-	подмести → подметать, принять → принимать, умереть → умирать, напомнить → напоминать, погиьнуть → погибать, обидеть → обижать, разре́зать → разреза́ть, выпустить → выпускать
-ва-	нагреть → нагревать, разбить → разбивать, дать → давать
-ева-	продлить → продлевать, застрять → застревать

これらの語形成を経た、二つの動詞は、通常体のペアをなしていると見なされる。

2.6.2.2. 体のペア：完了体化によるもの

『完了体化（перфективация）』とは、「不完了体化」とは逆に、不完了体動詞から完了体動詞を形成する方法である。

これには大きく分けて二つのケースがあり、第一に、『完了体形成接辞（чистовидовые приставки）[60]』を付加して形成される場合、第二に、それ以外の接辞を付加して形成される場合がある。

「完了体形成接辞」には以下のようなものがある（cf. Энциклопедия 1998: 336）：

表 2-16：主な完了体形成接辞と語形成例

完了体形成接辞	例 （不完了体動詞 → 形成される完了体動詞）
вз- / вс-	ерошить → взъерошить, кипятить → вскипятить
воз- / вос-	мужать → возмужать, препятствовать → воспрепятствовать
вы-	учить → выучить
за-	консервировать → законсервировать
из- / ис-	ваять → изваять, печь → испечь
на-	рисовать → нарисовать
о-	бледнеть → обледнеть
от-	мстить → отомстить
по-	советовать → посоветовать
под-	готовить → подготовить (доклад)
при-	готовить → приготовить (ужин)
про-	читать → прочитать
раз- / рас-	будить → разбудить
с-	делать → сделать

[60] ここで用いている術語（「完了体形成接辞」）は筆者による試訳である。

у-	наследовать → унаследовать
пере-	ночевать → переночевать

このような語形成のプロセスを経ている不完了体動詞と完了体動詞は通常体のペアと見なされる[61]。

しかし、これらの接辞も、付加される相手となる不完了体動詞によっては、語彙的意味の変化をもたらすことがある（例：ставить → выставить, заставить, наставить, переставить, проставить など）。そのような場合には、通常体のペアとはみなされない。

2.6.2.3. 体のペア：補充法によるもの

さらに、『補充法（супплетивизм）』によって体のペアを形成するタイプの動詞もある。これらは語幹に形態的な共通部分を持たないが、体のペアと見なされる。

具体的には、брать / взять, говорить / сказать, класть / положить, раскладывать / разложить, ложиться / лечь, садиться / сесть, становиться / стать, приходить / прийти などがこのタイプに分類される。

2.7. 本節のまとめ：「アスペクト」と「体」

2.7.1. 概要

ここまでで、一般言語学的な立場からの「アスペクト」の意味カテゴリーについて（cf. 第 2.4.節）、また、ロシア語という個別言語において、「アスペクト」の意味を表す文法的手段のうちの主要なものの一つとしての「体」という文法的カテゴリーについて（cf. 第 2.5.節）、それぞれ見てきた。

本節では、これらの「アスペクト」と「体」の両カテゴリーのそれぞれの関係について考察を加え、本節での一連の議論のまとめに代えることにしたい。その途上で、ロシア語アスペクト論の抱える複雑さと問題点についていくつかの指摘を行なうことになる。

以下まず、「状況の性質」とロシア語の体のカテゴリーとの関係について確認する。

そして、上で見た「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」が、ロシア語ではどのような言語形式によって表現されるかについて確認する（cf. 第 2.7.2.～2.7.3.節）。

また、上で見た「体のペア」という理論的構築物の不備な点について指摘し、体の個別的意味のリストの抱える問題点についても指摘する（cf. 第 2.7.4.～2.7.5.節）。

そして最後に、「完了相」、「未完了相」という術語と、それの表すアスペクトの意味、

[61] もっとも、ここで挙げた「完了体形成接辞」が、元の不完了体動詞に語彙的な変化を、本当に全くもたらしていないのかという点は議論が必要だろう。もしこれが、純粋に完了体を形成することに特化した接辞なのであれば、ここで見たような、вз-/вс-, воз-/вос-, вы-, за-, из-/ис-等々といった、形態のバリエーションは不要であり、一つ、ないしは極少数の形態素に集約してしまう方が、言語体系全体にとっては効率的である（その点、上で見た「不完了体化」の場合には、そのための形態素の数が相応に少なくなっていると言える）。しかし実際にはそうなっていない以上、そうした形態的なバリエーションを保持していなければならない何らかの理由があると考えられる。この形態的バリエーションが過去にどのように推移してきたか、あるいは今後変化していくものなのか、このまま保持されるのか、あるいはいくつかのものは淘汰されていくのかといった点は、別途考察を加える対象とすべきだろう。

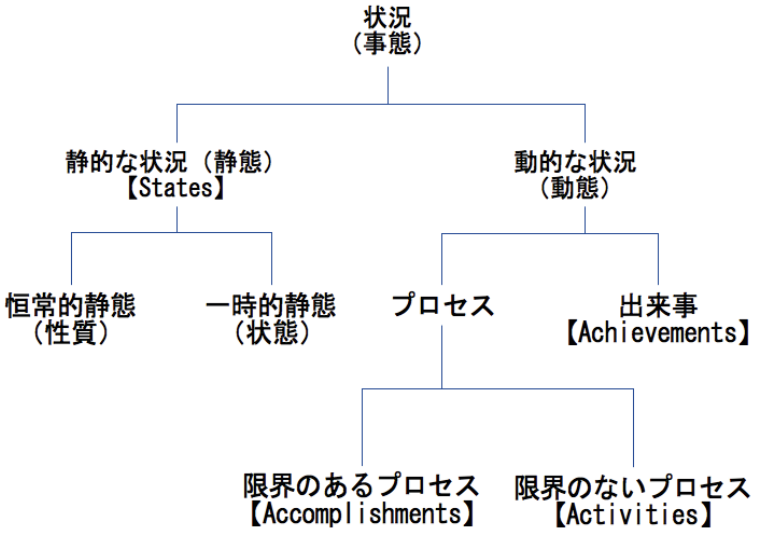
ロシア語の体のカテゴリーとの対応関係について考察する（cf. 第 2.7.6.節）。

2.7.2. 「状況の性質（акциональность）」とロシア語の体のカテゴリーとの関係

先に「状況の性質（акциональность）」について見たが（cf. 本章第 1 節）、本節では、この「状況の性質」と、ロシア語の体のカテゴリーとの関係について考えてみよう。それぞれの「状況の性質」が、ロシア語においてはどちらの体の形態で表現されうるかということについて確認する。

先に見た、「状況の性質」と、Vendler（1967）による分類の対応関係を改めて確認しておこう。下図を再度掲載しておく：

図 2-2：状況の性質と Vendler（1967）の分類【再掲】



それでは以下で、それぞれの「状況の性質」について具体的に見ていくことにしよう。便宜的に、Vendler（1967）の分類に応じて、以下節を設けることにする。

2.7.2.1. 活動（＝限界のないプロセス）

Vendler（1967）の「活動（activities; деятельность）」は、「限界のないプロセス」と対応している。

この「活動」が表わされる場合には、ロシア語では、不完了体動詞（多くの場合単体動詞）が用いられる。

писать（書く）、бежать（走る）、петь（歌う）、рисовать（描く）、купаться（沐浴する）、идти (дождь) （雨が降る）、усиливаться（強まる）、увеличиваться（大きくなる）、повышаться（高まる）等の動詞がこれに分類される。

これは、次に述べる「達成」とは異なり、動作の完遂に要する期間を表わす「за два часа（２時間で、２時間かけて）」というような副詞句表現とは結合できない（例文は Гловинская 2001 より）：

(2-25) *Я <u>бежал</u> [IPFV-PST-M] за два часа.

(2-26) *Я рисовал [IPFV-PST-M] за три минуты.

2.7.2.2. 達成（＝限界のあるプロセス）

Vendler（1967）の「達成（accomplishments, исполнение）」は、「限界のあるプロセス」と対応している。

これはロシア語の場合、動詞の形態は不完了体、完了体の双方によって表わされうる。

完了体の形態はこの動作の完遂を表わし、不完了体の形態は、その完遂にいたるプロセスの一部分を表わす。писать / написать письмо（手紙を書く）、рисовать / нарисовать кружочек（円を描く）、строить / построить дом（家を建てる）、читать / прочитать письмо（手紙を書く）、открывать / открыть окно（窓を開ける）等のような動詞がこの分類に当てはまる（ここで挙げた例ではいずれも、最初の形態が不完了体動詞である）。

また、上の「活動」とは異なり、「за два часа（二時間で、二時間かけて）」という表現と結合できる（例文は Гловинская 2001 より）：

(2-27) Я написал [PFV-PST-M] письмо за два часа.
私は二時間でその手紙を書き終えた。
(2-28) Я нарисовал [PFV-PST-M] кружок за три минуты.
私は三分で円を描き終えた。

2.7.2.3. 到達（＝出来事）

Vendler（1967）の「到達（achievements; достижение）」は、「出来事」と対応している。

この「到達」はロシア語では、通常完了体動詞によって表わされる。заметить（気付く）、найти（見つける）、прийти（到着する）、достигнуть（到達する）といった動詞がこの分類に当てはまる。これは、次の「状態」とは異なり、「долго（長く、長いこと）」等の、持続期間を表わす副詞句とは共に用いられない：

(2-29) *Я долго находил [IPFV-PST-M] письмо.
(2-30) *Я два часа приходил [IPFV-PST-M] к нему.

対して、ある時点を表わす副詞句、例えば「в тот момент（その時）」、「в два часа（２時に）」などとは結びつくことができる：

(2-31) В три часа я достиг [PFV-PST-M] вершины.
三時に私は頂上に到達した。
(2-32) Я заметил [PFV-PST-M] его ровно в два часа.
私はちょうど二時に彼に気付いた。

なお、上例（2-29）、（2-30）のように、不完了体動詞が用いられると、通常反復動作として解釈される(いずれにしても上の副詞との結合は意味をなさない)。そのため、この場合には体の形態は、二次的アスペクトを示すということになる。

2.7.2.4. 状態（＝静態）

Vendler（1967）の「状態（states; состояние)」は、「静態」と対応している。

この「状態」は、不完了体動詞（多くの場合単体動詞）によって表わされる。знать（知る、知っている)、любить（愛している、好きである)、верить（信じる)、скучать（寂しがる)、тосковать（寂しがる)、болеть（痛む)、висеть（掛かっている)、стоять（立っている)、находиться（ある）などの動詞がこの分類に当てはまる。

これは、「долго（長いこと、長い間)」等の、持続期間を表わす副詞句とともに用いることが可能である：

(2-33) Я знала [IPFV-PST-M] его два года.
私は２年間彼を知っていた。

(2-34) Я много лет люблю [IPFV-PRS-M] его.
私は長年彼のことを愛している。

その一方で、ある時点を表わす副詞句と共に用いることは出来ない。

(2-35) *В три часа я знал (любил) его.

2.7.2.5. まとめ

本節では、Vendler の動詞句の分類を中心にして、「状況の性質」とロシア語の動詞の関係について考えてみた。

「活動（activity)」と「状態（state)」は、もっぱら不完了体動詞によって表わされ、それに対して「達成（accomplishment)」及び「到達（achivement)」の場合には、完了体動詞によっても、不完了体動詞によっても表わされるということが分かった。これらの関係は以下のような表にまとめることができる：

表 2-17：Vendler の分類とロシア語動詞

状況の性質		Vendler の分類	完了体	不完了体
動的な状況	限界を持たないプロセス	活動	—	○
	限界を持つプロセス	達成	○	○*
	出来事	到達	○	○**
静態		状態	—	○

*一次的、二次的　**二次的

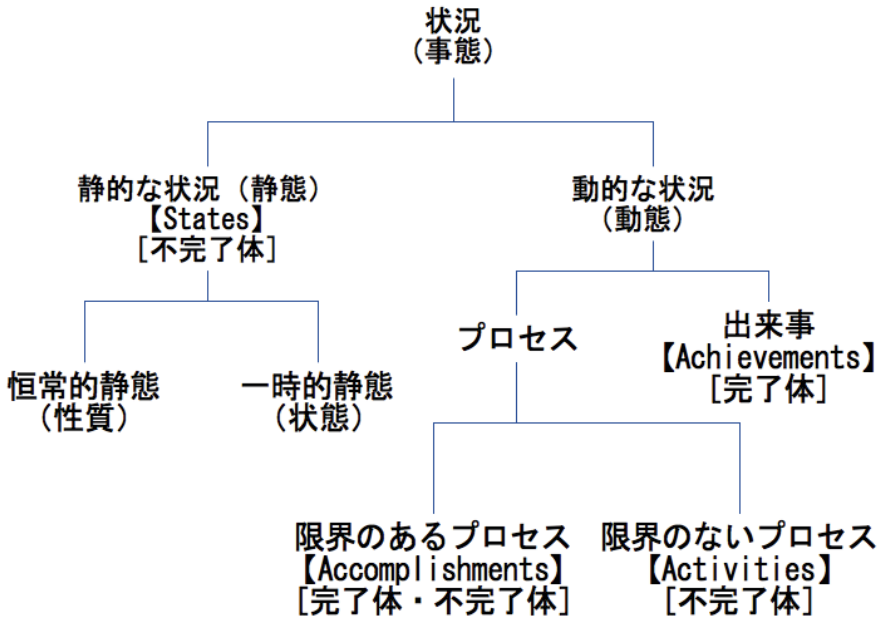
したがって、体の異なる二つの形態を、その語彙的意味の共通性から「体のペア」としてまとめることができる（したがってその二つの形態の対立を考慮することができる）のは、「達成（accomplishment)」の場合と「到達（achievement)」の場合に限ら

れるということになる。このように、動詞の語彙的な意味と、その動詞の体の形態の間には、相関関係があり、その結果実現する体の意味も制限を受ける。

上表を見ても分かる通り、「達成（accomplishment）」、「到達（achievement）」の場合には、それを表す動詞はペアを成している。それに対して「活動（activity）」、「状態（state）」を表す動詞は、単体動詞であることが多い。なお、ロシア語動詞への Vendler の分類の適用については Гловинская（2001: 25-28）などを参照されたい。

ここまでで見てきた、「状況の性質」、Vendler による分類と、それぞれの状況を表すロシア語動詞の体のカテゴリーとの対応関係は、下図のようにまとめることができる:

図 2-12：状況の性質と体のカテゴリー



2.7.3. 「アスペクト」と「体」

ここでは、上で見た「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」と、ロシア語の動詞の体のカテゴリーとの関係について考えてみる。

2.7.3.1. 一次的アスペクト

ここでは、上（cf. 第 2.4.2.節）で見た「一次的アスペクト」が、ロシア語ではどちらの体によって表されるかについて確認する。

まず、一次的アスペクトについて見ていこう。一次的アスペクトには以下のようなものがある：

表 2-18：一次的アスペクト

外部ステージ A に関わるアスペクト（①）		予期・予測のアスペクト（проспектив）
内部ステージに関わるアスペクト	状況の開始点に関わるアスペクト（②）	起動相（инцептив）
	内部ステージ（③）	持続相（дуратив）
		進行相（прогрессив）
	状況の終結点に関わるアスペクト（④）	終結相（комплетив）
外部ステージ B に関わるアスペクト（⑤）		結果相（результатив）
		パーフェクト（перфект）

まず、上表①の「外部ステージ A に関わるアスペクト」には、「予期・予測のアスペクト」が分類される。ロシア語の体系には、このアスペクトを表す文法形式は用意されていない。

Comrie（1976）では、英語の「be going to (do)」によって表されるアスペクトと類似の表現として下のような例文が挙げられている：

(2-36) Я ***собираюсь*** убить [PFV-INF] тебя.
お前を殺してやる。
(2-37) Поезд ***должен*** прийти [PFV-INF] в семь часов.
列車は 7 時に来ることになっています。

しかし、Comrie（1976）では、いずれも「予期・予測のアスペクト」の文法的意味以外の意味が加わってしまっているため、ロシア語のこれらの形式が、純粋な「予期・予測のアスペクト」の形式であるとは見なしていない（Comrie 1976: 65）。

次に、上表中の②～④の、「内部ステージに関わるアスペクト」について見てみよう。

まず、状況の開始点（上表②）に関わる「起動相」のアスペクトに相当するものは、上で見た（cf. 第 2.5.4.節）Храковский（2002）の記述を考慮すると、以下の二種類と考えて差し支えないだろう：

イ）「開始の動作様態（начинательный СД）」を表わす完了体動詞
（закипеть, заболеть, заснуть など）
ロ）その他の完了体動詞（увидеть, понять など）

次に、上表の③、「内部ステージ」を表す「進行相」と「持続相」に相当する意味は、ロシア語では不完了体（現在時制、過去時制）によって表される。

(2-38) Они смотрят [IPFV-PRS-3-PL] на нас.

彼らは僕らの方を見ている。
(2-39) Она сидела [IPFV-PST-SG-F] у окна.
彼女は窓のそばに座っていた。

そして上表の④、状況の終結点を表すアスペクトは、以下の二種類であろう：

イ）「終了の動作様態（финитивный СД）」を表わす完了体動詞
（отцвести, отговорить, отбегаться, отстреляться）
ロ）接頭辞「раз-」を伴ういくつかの完了体動詞（разлюбить など）

そして、上表中の⑤、「外部ステージ B に関わるアスペクト」のうち、「結果相」は、動詞の単一の文法的カテゴリーによって表現されるのではなく、以下のような、分詞（形動詞）を用いた表現が対応している：

(2-40) Дверь открыта.
窓が開いている。

対して、「パーフェクト」の意味を表す言語形式は、ロシア語では過去時制で用いられる完了体であると考えてよいだろう：

(2-41) Кто-то открыл [PFV-PST-SG-M] окно.
誰かが窓を開けちゃったんだな。

これらの対応関係をまとめると、以下のようになるだろう

表 2-19：一次的アスペクトの意味とロシア語動詞

<table>
<tr><th colspan="3">アスペクト</th><th>対応する言語表現</th></tr>
<tr><td colspan="2">外部ステージ A に関わるアスペクト
（①）</td><td>予期・予測のアスペクト
（проспектив）</td><td>なし</td></tr>
<tr><td rowspan="4">内部ステージ
に関わるアスペクト</td><td>状況の開始点
に関わるアスペクト
（②）</td><td>起動相（инцептив）</td><td>完了体動詞
（開始の動作様態など）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内部ステージ
（③）</td><td>持続相（дуратив）</td><td rowspan="2">不完了体動詞</td></tr>
<tr><td>進行相（прогрессив）</td></tr>
<tr><td>状況の終結点
に関わるアスペクト
（④）</td><td>終結相（комплетив）</td><td>完了体動詞
（終了の動作様態など）</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部ステージ B に関わるアスペクト
（⑤）</td><td>結果相（результатив）</td><td>分詞</td></tr>
</table>

	パーフェクト（перфект）	完了体動詞 （過去時制）

2.7.3.2. 二次的アスペクト

「二次的アスペクト」（cf. 第 2.4.3.節）は、ロシア語ではどのような形式によって表されるだろうか。以下のそれぞれのアスペクトについて考えてみよう：

① 『反復相（итератив）』
② 『習慣相（хабитуалис）』
③ 『多回相（мультипликатив）』
④ 『単一相（семельфактив）』
⑤ 『配分相（дистрибутив）』

上記①の、「反復相」は、不完了体動詞によって表される。上で見た、不完了体の個別的意味のうち、「無制限反復の意味」と対応する。

上記②「習慣相」及び③「多回相」も、不完了体動詞によって表される。

また、これらは『多回性を表す動作様態（многократный способ действия）』を表す不完了体動詞によっても表される。「-ива-」、「-ва-」「-а-」といった形態素によって表される（例：хаживать, сиживать, певать, едать）。

上記④の「単一相」は、『一回性を表す動作様態（однократный способ действия）』を表す完了体動詞によって表される。「-ну-」（例：толкнуть）、「-ану-」（例：стегануть）、「с-」（例：сжульничать）、「с- ... -ну-」（例：сполоснуть）といった形態素によって表される。

上記⑤の「配分相」は、『配分を表す動作様態（дистрибутивный способ действия）』を表す完了体動詞によって表される。「пере-」（例：переглотать, перегаснуть）、「по-」（例：повывести, померзнуть）といった形態素によって表される。

上記をまとめると下表のようになる：

表 2-20：二次的アスペクトとロシア語動詞

二次的アスペクト	ロシア語動詞
反復相	不完了体動詞
習慣相	不完了体動詞
多回相	不完了体動詞（動作様態）
単一相	完了体動詞（動作様態）
配分相	完了体動詞（動作様態）

2.7.4. 「不完全」な「体のペア」

上で、ロシア語の体のペアという概念について見た。体のペアを成す二つの動詞は、その語彙的意味は同一で、体の意味によってのみ異なるとされる。

上で見たように、アスペクトの意味の対立には、「一次的アスペクト」の対立（一次

的な対立）と、「二次的アスペクト」の対立（二次的な対立）との二つの種類の対立がある。ロシア語の体のペアは、多くのものがこの二種類の対立を示すことができる。具体例を見てみよう：

表 2-21：体のペアとアスペクトの対立

アスペクトの意味的対立	完了体	不完了体
一次的な対立	Когда я вошел в его комнату, он **открыл** окно. 私が彼の部屋に入ったら、彼は窓を開けた。	Когда я вошел в его комнату, он **открывал** окно. 私が彼の部屋に入ったら、彼は窓を開けようとしていた。
二次的な対立	Сегодня утром после завтрака он **открыл** окно. 今朝朝食後に彼は窓を開けた。	Каждый день после завтрака он **открывал** окно. 毎日朝食後に彼は窓を開けることにしていた。

しかしながら、いくつかのペアについては、二種類の対立のうち、二次的アスペクトの対立しか示せないものがある。例えば、случаться/случиться や、あるいは приносить/принести、находить/найти などである。これらはいわゆる「トリビアルな対立を示すペア（тривиальная пара）」と呼ばれるものである（cf. Падучева 1998: 36）。これらの動詞の表す状況（動作）は、持続性を持ちうる状況（動作）であるにも関わらず、通常ペアを成すとされる不完了体動詞は、一次的アスペクトの意味、すなわち「持続相」（あるいは「進行相」）を表すことができない。例えば、以下のような文は非文とされる：

(2-42) *Он долго находил свой кошелек.

不完了体動詞は、全て「反復相」を表す。これらの状況（動作）で、「持続相」を表現したい場合には、別の動詞を用いて代えるということになる。

(2-43) Он долго искал свой кошелек.
　　彼は長いこと財布を探していた。

したがって、これらの動詞の場合には、ひとつのペアでは、二つの種類のアスペクト（一次的アスペクト、二次的アスペクト）の意味の対立は表せないということになる。

2.7.5. 個別的意味の分類の問題点：一次的・二次的アスペクトとの関係

上で、アスペクトの意味が、ロシア語ではどのような形式によって表されるかを確認した。本節では、伝統的なロシア語アスペクト論における「個別的意味」のリストにおける問題点について考えてみよう。

先に、伝統的なアスペクト論において提案されていた、個別的意味のリストを確認した（cf. 本章、第 2.5.3.節）。

管見によれば、従来の個別的意味のリストが抱えている最大の問題は、上で見た、一次的アスペクトと二次的アスペクトの峻別が考慮されていないという点にある。すなわち、異なる基準でまとめうる、先に見た二つの軸（cf. 第 2.2.節）に応じたアスペクトの意味が、それぞれ混在する形でリスト内に存在しているのである。

この一次的アスペクトと二次的アスペクトを考慮した上で、従来の個別的意味のリストに修正を加えるとするとどのようになるだろうか。ここでは試みに、上で見たリストのうち、最も細かく個別的意味が分類されていた Бондарко（1971）でのリストを援用することにする。

まず、完了体の個別的意味を見てみよう。ここで挙げられていたのは、「①具体的事実の意味」、「②例示的意味」、「③潜在的動作の意味」、「④一括化の意味」の四つであった。

まず、「①具体的事実の意味」は、当該状況（動作）の完了という側面を重視するのであれば、終結相を表していると考えられ、したがってこの場合には一次的アスペクトということになる。また、当該状況（動作）を「出来事」として把握し、提示しているのであると見れば、この場合には二次的アスペクトということになる。

「②例示的意味」は、反復動作を表しているので、二次的アスペクトの意味と考えられる。

「③潜在的動作の意味」も、事実上「例示的意味」に準じるので、やはり二次的アスペクトを表すものと考えてよいだろう。

「④一括化の意味」も、やはり反復する動作を表すので、二次的アスペクトの意味を表していると考えられる。

次に、不完了体の個別的意味を見てみよう。挙げられていたのは、「①具体的過程の意味」、「②制限のない多回性の意味」、「③一般的事実の意味」、「④恒常的・不断の動作の意味」、「⑤潜在的・性質的動作の意味」、「⑥制限のある多回性の意味」の六つである。

まず、「①具体的過程の意味」は、「持続相」を表していると考えられるので、一次的アスペクトの意味である。

次に、「②制限のない多回性の意味」は、反復動作を表すので、二次的アスペクトの意味ということになる。

「③一般的事実の意味」は、一次的アスペクトの意味を表すことはできないので、この意味で用いられる場合には、当該「状況」は既に「出来事」として捉えられていると考えられる。したがって、この意味の場合にも、表されているのは二次的アスペクトの意味ということになるだろう。

「④恒常的・不断の動作の意味」は、「持続相」の意味を表しているので、一次的アスペクトの意味ということになる。

「⑤潜在的・性質的動作の意味」、及び「⑥制限のある多回性の意味」も、反復動作を表すので、二次的アスペクトとみなすことができる。

「体の個別的意味」のリストに、一次的アスペクトと二次的アスペクトという基準

を加えてみると下の表のようになる：

表 2-22：個別的意味と一次的・二次的アスペクト

表す形式（体）	個別的意味	一次／二次的アスペクト
完了体	①具体的事実の意味	一次、二次
	②例示的意味	二次
	③潜在的動作の意味	二次
	④一括化の意味	二次
不完了体	①具体的過程の意味	一次
	②制限のない多回性の意味	二次
	③一般的事実の意味	二次
	④恒常的・不断の動作の意味	一次
	⑤潜在的・性質的動作の意味	二次
	⑥制限のある多回性の意味	二次

これを、今度は一次的アスペクト及び二次的アスペクトを基準にして、改めて整理し直すと、以下のような表の形でまとめることができる：

表 2-23：一次的・二次的アスペクトと個別的意味の対応

一次／二次的アスペクト	表す形式（体）	個別的意味
一次	不完了体	①具体的過程の意味
	不完了体	④恒常的・不断の動作の意味
二次	完了体	①具体的事実の意味
	完了体	②例示的意味
	完了体	③潜在的動作の意味
	完了体	④一括化の意味
	不完了体	②制限のない多回性の意味
	不完了体	③一般的事実の意味
	不完了体	⑤潜在的・性質的動作の意味
	不完了体	⑥制限のある多回性の意味

これを見ても分かるように、従来ロシア語アスペクト論において、体のカテゴリーの表す「個別的意味」として提案されてきたものは、一般言語学的な意味でのアスペクトの意味に照らしてみると、そのほとんどが「二次的アスペクト」であり、「一次的アスペクト」に関して言えば、「個別的意味」としてリストに加えられているのは、二つ（「具体的過程の意味」と「恒常的・不断の動作の意味」）のみであるということが分かる。

このことからも、ロシア語の体のカテゴリーの表す意味がいかに特殊なものであるかが伺えるだろう。体のカテゴリーのこうした特殊性は、次節で再度検討することになる。

2.7.6. アスペクトのクラスター、「完了相」、「未完了相」とロシア語の体

前節で見たように、ロシア語の体の個別的意味としてリストアップされていたものは、そのほとんどが二次的アスペクトの意味である。こうした状況はどう捉えればいいだろうか。先の、体の不変的意味（インヴァリアント）の探求をめぐる一連の議論（cf. 本章、第 2.5.2.3.節）ともあわせて、ロシア語の体のカテゴリーは、一体どんな「意味」を表していると考えればいいのだろうか。

こうした問題に対する解決案の一つとして興味深いのが、「アスペクトのクラスター」という概念である。すなわち、それぞれ近似のアスペクトの意味が組み合わされる形で、多義性を持ったひとつの文法形式が表すという現象である（cf. Плунгян 2011: 402）。これは、それぞれのアスペクトの意味に、言語形式をひとつずつ割り当てていると、いわゆる経済性の法則に反してしまうという言語体系内の事情から生じてくる自然な現象であると思われる。Плунгян（2011）では、これらを、いくつかのアスペクトの意味が組み合わさったものであると位置付けており、『アスペクトのクラスター（аспектуальные кластеры）』と呼び、以下のものを挙げている（cf. Плунгян 2011: 402-406）：

表 2-24：アスペクトのクラスター（Плунгян 2011）

アスペクトのクラスター	含まれているアスペクトの意味
完了相 （перфектив）	示点相、終結相、起動相、限定相
未完了相 （имперфектив）	持続相、習慣相
未終結相 （инкомплетив）	結果相、進行相
Factative[62] （фактатив）	完了相（終結相、示点相）、持続相

ここでは、上の中から、ロシア語の体のカテゴリーの意味を考える際に重要となる、『完了相』（Perfective）」と『未完了相（Imperfective）』について考えてみることにしよう。先走って言ってしまうと、それぞれ、ロシア語の完了体、不完了体に相当すると考えられるものである。

上で述べたように、Плунгян（2011）の指摘によれば、「完了相」及び「未完了相」というのは、それぞれ単一のアスペクトの意味を指しているのではなく、お互いに類似した複数のアスペクトの意味が抱合されたものを指している（Плунгян 2011: 402-403）。

まず、『未完了相（имперфектив; imperfective）』とは、一体どのようなアスペクトを表すものだろうか。これは、先に見た構造モデルの内部ステージを表す、すなわち、「持続相（дуратив）」（＝一次的アスペクト）と「習慣相（хабитуалис）（＝二次的ア

[62] 資料不足のため、日本語の訳を見つけることができなかった。

スペクト）の双方を表すことのできるアスペクトであると位置付けることができ、これはロシア語の「不完了体」と対応するものである。

『完了相（перфектив; perfective）』は、「示点相（пунктив）」、「終結相（комплетив）」、「開始相（инцептив）」、「限定相（лимитатив）」といった一連のアスペクトの意味が含まれたものである。つまり、それ自体の構造が、複雑に入り組んでいるような「状況」（あるいはそうした状況のある一部分）を、そうした複雑な内部の構造については触れずに、より原初的な「出来事」として、まとめあげる形で表すのが「完了相」による提示の仕方であると考えられる（cf. Плунгян 2011: 396）。ロシア語でこの機能を果たすのは、完了体である。

興味深いことに、この「完了相」に含まれている一連のアスペクトの意味（示点相、終結相、開始相、限定相）は、先のインヴァリアントの議論の際に出されていた、諸々の意味的特徴（cf. 本章、第 2.5.2.3.節）と類似している。もちろん、このあたりの議論も踏まえた上で、この「アスペクトのクラスター」という概念が提案されているという事情もあるだろう。しかし、そうであったとしても、先に筆者が述べたように、単一の意味特徴によって体のカテゴリーの表す不変的意味が記述できるのかという、根本的な疑問に対する解答案の一つとして、非常に興味深い案だと思われる。

3. モダリティのカテゴリー

3.1. 本節の概要

本節では、『モダリティ（модальность; modality）[63]』のカテゴリーについて概観する。このカテゴリーをめぐっては、ロシア語学においてはもちろん、一般言語学においても、そのカテゴリーそれ自体の捉え方について、あるいはこのカテゴリーとその他の文法的カテゴリーとの関わり合いなどについて、従来多くの議論が成されて来ている。

本節ではまず、本稿ではどのようにモダリティのカテゴリーを捉えているかについて明らかにするため、自然言語におけるモダリティのカテゴリーについて、まず、Palmer（2001）におけるモダリティの理解と枠組みについて（第 3.2.2.節）、また Плунгян の研究（2011, 2012）におけるモダリティの枠組みについて（第 3.2.3.節）、それぞれ確認し、これらを踏まえた上で、モダリティというカテゴリーの全体像を捉える。

そして、モダリティの最も基本的な分類である「評定のモダリティ」及び「非現実のモダリティ」という二分法に従い、それぞれのモダリティについて確認し、ロシア語においてこれらのモダリティがどのように表現されているか、ロシア語統語論における「法」と「モダリティ」は、それぞれどのように位置付けることができるかについて確認する（第 3.3.節～第 3.4.節）。

そして、本稿の主たる対象である、「可能性」のモダリティの意味を含む文について、その意味構造と意味の下位分類について検討する（第 3.5.節）。

---

[63] 「модальность」あるいは「modality」という術語に対しては、他に、「叙想性」、「叙法性」、「法性」などの訳語が充てられる場合もあるが、本稿では、既に一般的に受け容れられていると思われる「モダリティ」の術語で統一する。

3.2. モダリティの理解とその枠組み

3.2.1. 命題的部分と様態、命題と事象

モダリティというカテゴリーの全体像を捉えるにあたり、研究者間で共有されていると思われる（恐らくほとんど唯一とも言える）理論的前提は、自然言語における文の意味は、二つの意味的要素から構成されているということであろう。すなわち、文の意味は、『命題的部分』と、その命題的部分をどのように話者が捉えているかを表す『様態（модус）』から構成されている[64]。

例えば、以下の四つの文を比較してみよう：

(2-44) Он на работе.
(2-45) Он должен быть на работе.
(2-46) Он может быть на работе.
(2-47) Он, может быть, на работе.

これらは全て、「彼ガ職場ニイル[65]」という要素を共通して持っており、まさにこれが「命題的部分」であると言える。この共通している命題的部分に対して、上記の四つの文では、話者が様々な「捉え方」をしていることを「様態」が表している。

それぞれの文は、例（2-44）では、当該の「命題的部分」を現実のものと捉えていることを表し（「彼は今職場にいる。」）、対して例（2-45）では、当該の「命題的部分」が生じることが必要であるという話者の捉え方を表している（「彼は職場にいるはずだ［いるにちがいない］。」）。例（2-46）では、客観的な諸条件に照らして、当該の「命題的部分」が生じる可能性があるという話者の捉え方を表している（「彼は職場にいる可能性がある。」）。そして、例（2-47）では、その真偽については話者の持つ情報や知識に不足があるため分からないものの、当該の「命題的部分」が生じる可能性があるということを表している（「彼はひょっとすると職場にいるかもしれない。」）[66]。こうした話者の「捉え方」の違いが、言語形式の違いとして反映されるということになる。

上で、「命題的部分」とした意味内容は、厳密には『命題（proposition）』と『事象（event）』とに分類することができる。「命題」とは、その真偽性が問題となるものを指す（澤田 2006: 40）。命題は、その真偽を問うことはできても、その遂行可能性などを問うことはできない。それに対して、「事象」（あるいは「行為」とも）は、その真偽を問うことはできない。しかし、その遂行可能性などを問うことはでき、まさにその遂行可能性、必要性、存在性が問題となる（澤田 2006: 40）。また、「事象」は、文

[64] Золотова и др.（2004）でも指摘されている通り（cf. 2004: 75）、こうした峻別は、バイイ（Bally, Charles; 1865-1947）による『диктум (dictum)』と『модус (modus)』への分類が恐らく最初であろう。
[65] 言語学の単位としての「文」とは異なっていることを表すために、ここではカタカナ表記を採用している。
[66] ここで取り上げた例文（2-46）と（2-47）の意味の違いについては、Булыгина, Шмелев（1993）において言及されている。また、この二つの文が発される際には、そのイントネーションの型も異なるものとなる。

で表される場合と、動詞句で表される場合がある（澤田 2006: 39）。
ここで見た、例（2-44）～（2-47）の解釈では、全て、真偽を問える「命題」が対象とされている場合ということになる[67]。

3.2.2. Palmer（2001）におけるモダリティの理解とその枠組み

本節ではまず、Palmer（2001）におけるモダリティの理解と、その分類について確認する。
Palmer（2001）におけるモダリティの分類では、モダリティはまず大きく『命題的モダリティ（propositional modality）』と『事象的モダリティ（event modality）』とに二分される。「命題的モダリティ」とは、「命題に関する話し手の態度に関わるモダリティ」である。それに対して、「事象的モダリティ」とは、「実現していない、起こりうる事象に対するモダリティ」とされる（cf. Palmer 2001: 8）。
「命題的モダリティ」は、更に『認識的モダリティ（epistemic modality）』と『証拠的モダリティ（evidential modality）』によって構成される。
「認識的モダリティ」とは、「その命題が事実であるかどうかに関する話し手の判断を表すもの」（Palmer 2001: 24）である：

(2-48) John may be in his office.　(Palmer 2001: 24)
　　ジョンは自分のオフィスにいるのかもしれない。

上例では、助動詞 may によって話者の命題に対する推量を表している。
「証拠的モダリティ」とは、「命題の真実性を裏付ける証拠に関するもの」（Palmer 2001: 8）である。澤田（2006）でも指摘されている通り（2006: 7）、英語には証拠的モダリティを表す助動詞はないため、ここでは日本語の例を見ておく：

(2-49) 雨が降るそうだ。

上例では、助動詞「そうだ」によって、ここで話題になっている命題が話者の伝聞による情報であることが表されている[68]。
一方、「事象的モダリティ」は、更に『束縛的モダリティ（deontic modality）[69]』と『力動的モダリティ（dynamic modality）』によって構成される。
「束縛的モダリティ」とは、「その事象を引き起こす要因が主語の外側にあるもの」

---

[67] なお、例（2-45）及び（2-46）については、「事象」が対象とされているという解釈も可能で、その場合にはモダリティの意味が異なってくる。下の第 3.2.2.節を参照されたい。
[68] 同じ「そうだ」という助動詞は、「様態」の意味も持ちうる。この「様態」の意味は、認識的モダリティに属する。なお、その場合助動詞と結合する動詞は連用形になり、また助動詞「そうだ」それ自体の文法的振る舞いも異なる。この点に関しては澤田（2006）で触れられている（cf. 2006: 7-8）
[69] このモダリティの名称に関して「義務的モダリティ」という訳語が用いられることもあるが、澤田（2006）では、この「束縛的モダリティ」という訳語を提案している。澤田（2006）の指摘する通り、このモダリティには「義務」ばかりではなく、「許可」の意味なども含まれる。そのため、「義務的モダリティ」という術語ではこのモダリティの一面しか反映されていないと思われ、ここでは澤田（2006）における訳語を採用している。

である（cf. Palmer 2001: 70）：

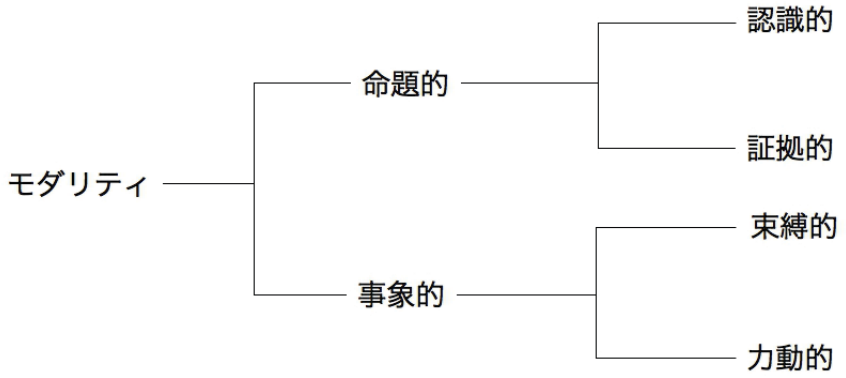
(2-50) You must go now.　(Palmer 2001: 71)
　　もう行きなさい。

「力動的モダリティ」とは、「その事象を引き起こす要因が主語の内側にあるもの」である（cf. Palmer 2001: 70）：

(2-51) He can run a mile in under four minutes.　(Palmer 2001: 77)
　　彼は四分かからずに一マイル走れる。

ここまで見てきた、Palmer（2001）のモダリティの分類をまとめると下図のように表すことができる：

図 2-13：Palmer（2001）におけるモダリティの分類



3.2.3. Плунгян（2011）における枠組み、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」

一方、Плунгян（2011）では、モダリティをまず大きく以下の二つに分類している[70]：

① 『評定のモダリティ（оценочная модальность）』
② 『非現実のモダリティ（ирреальная модальность）』

それぞれのモダリティについては、以下（cf. 第 3.3.節、第 3.4.節）で詳しく見るが、端的に言えば、「評定のモダリティ」とは、話者の、当該状況に対する「態度（отношение; attitude）」に関するモダリティである。これは、上で見た Palmer（2001）の枠組みにおける、「命題的モダリティ」に相当すると考えてよいだろう。

それに対して「非現実のモダリティ」とは、当該状況の現実世界に対する「位置付

[70] なお、ここでは評定のモダリティを最初に出し、非現実のモダリティを二番目に提示しているが、両者の軽重に違いはなく、便宜的なものである。どちらのモダリティの種類も等しく重要であるという Плунгян の指摘及びその立場（Плунгян 2012: 309）には筆者自身も賛同するものである。

け（статус）」に関するモダリティである（cf. Плунгян 2011: 423）。これは、同じく Palmer（2001）の枠組みにおける「事象的モダリティ」に相当する。

この「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」は、それぞれ異なる意味要素であり、この異質さ故に「モダリティ」のカテゴリーの規定が困難になっているという側面もあると Плунгян（2011）では指摘されている（cf. Плунгян 2011: 423）。このような状況を踏まえて、Плунгян（2011）では、モダリティというカテゴリーについて、この二つの異質な意味的要素が、双極を成して（あるいは、この二つの意味が「中心的意味」となって）成立しているカテゴリーであると捉えている。

3.2.4. 「法」と「モダリティ」

Lyons（またそれに立場を同じくする Плунгян）によれば、『法（наклонение）』は、「文法化されたモダリティ」であるという捉え方が一般的なものである（cf. Плунгян 2012: 309; Lyons 1977, Bybee 1985, Palmer 1986, 2001）。すなわち、「法」のカテゴリーとは、何らかの「モダリティ」の意味を表すことに特化された、形態論的カテゴリー（つまり文法的カテゴリー）である。

なお、伝統的なロシア語統語論においては、前者（「法」）を『客観的モダリティ（объективная модальность）』、後者（「モダリティ」）を『主観的モダリティ（субъективная модальность）』とする場合もある（Грамматика 1980, Энциклопедия 1996 など）[71]。

3.2.5. まとめ

本節では、Palmer（2001）と Плунгян（2011）におけるモダリティの枠組みについて確認した。

本節のまとめとして、両者の枠組みの比較を試みてみよう。下表では便宜上 Плунгян（2011）の枠組みを先に提示してある：

図 2-14：Плунгян（2011）及び Palmer（2001）におけるモダリティの枠組みの対応関係

<table>
<tr><td>Плунгян
（2011）</td><td colspan="2">評定のモダリティ</td><td colspan="2">非現実のモダリティ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Palmer
（2001）</td><td colspan="2">命題的モダリティ</td><td colspan="2">事象的モダリティ</td></tr>
<tr><td>認識的
モダリティ</td><td>証拠的
モダリティ</td><td>束縛的[72]
モダリティ</td><td>力動的
モダリティ</td></tr>
</table>

Плунгян（2011）における枠組みと、Palmer（2001）における枠組みはこのように対応していると考えてよいだろう。

以下の記述では、主に Плунгян（2011）による、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」という二分法による記述を中心としながら、それぞれについて見ていく

[71] この「主観的モダリティ」、「客観的モダリティ」というそれぞれの術語は、様々な研究者により多様な用いられ方をしているので注意が必要である（cf. Плунгян 2012: 315）。

[72] 『根源的モダリティ』という術語が用いられる場合もある。

ことにする。

3.3. 評定のモダリティ

3.3.1. 自然言語における「評定のモダリティ」

『評定のモダリティ（оценочная модальность）』とは、当該状況に対する、話者の「態度（отношение）」に関するものである。

この「評定のモダリティ」に分類されるものとしては、以下のようなものがある（Плунгян 2011: 424-426）：

① 『強度（интенсивность）』に関するもの
② 『倫理的評価（этическая оценка）』に関するもの
③ 『認識に基づいた評定（эпистемическая оценка）』

以下では上記のそれぞれについてごく簡潔にまとめてみる。

まず、①の「強度」に関するものから見ていこう。これは、当該状況が実現する度合いの強さ（弱さ）に関わるものである。性質形容詞には、この強度を表す形態素を付加することができる。

例えば、強度が強くなる例としては、「ужасный」と「ужаснейший」の関係が挙げられ、逆に弱くなる例としては「холодный」と「холодноватый」の関係が挙げられる[73]。また、いわゆる比較級を表す接辞もこの「強度」を表すものと考えてよいだろう（「холодный」と「холоднее」）。

次に、②の「倫理的評価」に関するものを見てみよう。これは、「良い・悪い」、「正しい・間違っている」などのような、いわゆる「評価」に関わるものである。このモダリティは多くの言語で語彙化されている[74]。

そして、③の「認識に基づいた評定」とは、「認識的モダリティ（эпистемическая модальность; epistemic modality）」とも呼ばれているものであり、話者による、当該状況の真偽判断の程度に関するものである。

この「認識に基づいた評定」には、二種類あり、一方は『想定（эпистемическая гипотеза）』であり、もう一方は、その認識に基づいた「想定」と一致しているかどうか（соответствие эпистемическому ожиданию）である。

これらはいずれも、話者の主観的な判断である「評定」を含むものであると考えられる。

3.3.2. ロシア語における「評定のモダリティ」とその表現手段

3.3.2.1. 概要

「評定のモダリティ」と考えられるものは、ロシア語においてどのような言語手段によって表されるだろうか。

---

[73] 下線を施した部分が当該モダリティの意味を担う形態素である。同じ段落の次の例も同様。

[74] ここには、Золотова（1982）、Золотова и др.（1997, 2003）などで取り上げられている、ロシア語の『評定のカテゴリー（категория оценки）』なども含められるだろう。

上でも書いた通り、この種類のモダリティは、ロシア語統語論では『主観的モダリティ（субъективная модальность）』と呼ばれることもある。これは、「文」という単位が成立するための必須のものではなく、あくまでも付加的な物と位置付けられ、『価値判断や資格付けという第二の層を形成する（Энциклопедия 1996: 240）』話者の態度を示す[75]。

前節でも少し見た通り、この「評定のモダリティ」が表される言語手段は、ロシア語の体系においては、形態素、語、あるいは特定の構文、語順など多岐に渡っている。

具体的には、以下のようなものが挙げられている（Энциклопедия 1996: 240）：

① 専用の語彙クラス及びそれらと機能的に近い語結合や文
② 専用の小詞
③ 間投詞
④ イントネーション
⑤ 語順
⑥ 特殊な専用の文構造

この種類のモダリティの場合には、これらの手段が文法化されておらず、語彙化されていたり、あるいは本来他の意味を表すために用意された表現手段が「転用」されていたりするため、様々な形式がその表現手段として用いられる。

以下でそれぞれについて確認する。

3.3.2.2. 専用の語彙クラス及びそれらと機能的に近い語結合や文

まず、上記①の「専用の語彙クラス及びそれらと機能的に近い語結合や文」は、話者の、伝えられる内容に対する「評定、価値判断（оценка）」を表す。これらの「評定」の内容に応じて、以下のようなものに分類することができる：

表 2-25：専用の語彙、語結合、文

表されるモダリティの意味	表現手段
真実性（достоверность）という観点からの価値判断	наверное（恐らく）, надеюсь（きっと～だろう）, пожалуй（たぶん）, вероятно（どうやら）, кажется（思うに）, безусловно（絶対、必ず）, разумеется（もちろん）, естественно（もちろん、当然）, скорее всего（むしろ）, надо полагать（どうやら）など
情報源を示すことによる、情報の客観性の価値判断[76]	по слухам（うわさでは）, говорят（聞くところによると）, по мнению кого-л.（～の意見では）, по-моему（思うに）, насколько мне известно（私の知る限りでは）など

[75] これに対して、「文」という単位の成立に必須のものが、後述する「客観的モダリティ」である（cf. 本章、第 3.4.2.節）。

[76] これは『証拠性（эвиденциальность; evidentiality）』と呼ばれるものであるが、本稿の直接の対象ではないのでここでは詳しくは取り上げない。

数量に関する価値判断	мало того（そのほかに）, мало сказать（～では言い足りない）, по меньшей мере（いずれにしても）, самое большее（せいぜい、多くても）など
肯定的な評価；喜び、是認	на счастье（幸いにも）, к радости（喜ばしいことに）など
否定的な評価；悔恨	на беду（災難なことに）, к сожалению（残念なことに、申し訳ありませんが）など
驚き、当惑（недоумение）	странное дело（奇妙にも）, нечего сказать（本当に、全くもって）, к удивлению（驚くべきことに、驚いたのは）など

3.3.2.3. 専用の小詞

上記②の「専用の小詞」は、以下のような意味を表す。下表 2-26 を参照：

表 2-26：専用の小詞

表されるモダリティの意味	小詞
確信のないこと（неуверенность）	вроде（何だか、どうやら～らしい）
予期、予想（предположение）	разве что（どうやら）
ありそうもないこと（недостоверность）	якобы（～であるかのような）
驚き（удивление）	ну и（たいした～だ）

3.3.2.4. 間投詞

上記③の「間投詞」には、例えば бац, хлоп, хвать, глядь といったものが含まれる。これらを用いて、「突然ある動作が行なわれる」という意味を表す。

例えば以下のような例を参照：

(2-52) Хлоп на землю и лежит без движения.
突然ばったりと地面に倒れ込み、身じろぎもせず横たわっている。

3.3.2.5. イントネーション

上記④「イントネーション」は、アクセントなどの手段により、伝えられる内容に対する、「驚き」、「疑い」、「確信」、「不信」、「反抗」、「皮肉」といった感情に基づく、主体の態度を伝える。

本稿の対象からは大きく外れるので、ここでは詳しくは取り扱わないが、Брызгунова（Елена Андреевна; 1931-）らによるイントネーションパターン（интонационная конструкция; ИК）分類の 7（ИК-7）などが、これに相当するものと考えればいいだろう。

下の例文（2-53）を見てみよう：

(2-53) Кака[7]я она красавица!
あの子が綺麗だなんてとんでもないさ！

上の例文中、上付きの数字がイントネーションパターンを表している（慣習的な表記に従っている）。その直前の、アクセントのあたっている母音でピッチが急上昇するが、その直後に声門閉鎖が生じるのが ИК-7 の特徴である（cf. Грамматика 1980: §153; Одинцова 2011: 278-293）。

3.3.2.6. 語順

上記⑤の語順により、否定的な態度、皮肉を持った態度を伝える。例えば以下のような例を参照：

(2-54) Станет он тебя слушать!
やつはお前の言うことを聞きかねない！

(2-55) Хорош друг!
大した友達だね！

3.3.2.7. 特別な文型

上記⑥の「特別な文型」を用いることで、種々のモダリティの意味を表すことができる。下表 2-27 を参照：

表 2-27：特別な文型

表されるモダリティの意味	例
行なわれない動作についての無念さ	Нет чтобы подождать. 待とうという気もない。
突然の動作	Она возьми и скажи. 彼女は急に話し出した。
実現不可能	Поди попробуй! やれるもんならやってみろ！
何にも制約を受けずに行なわれる動作	Знает болтает. 平然と無駄口をきいている。

3.4. 非現実のモダリティ

3.4.1. 自然言語における「非現実のモダリティ」

『非現実のモダリティ（ирреальная модальность）』とは、当該状況が、現実世界に対してどのような「位置付け（статус）」にあるかに関するものである。

このモダリティの要素が含まれている場合には、例えば話者の発話時点で、現実に今存在しておらず、また将来存在する可能性も無く、また存在するはずのない「状況」、話者の意識の中にのみ存在する「状況」が描写される。

この「非現実のモダリティ」の主要な意味として、既にアリストテレスの時代より議論されてきているのは、『可能性（возможность; possiblity）』と『必然性[77]（необходимость; necessity）』である。

[77] 伝統的には、この「必然性」という訳語が充てられるが、場合によっては「必要性」、「必須性」などの方が、内容の理解には資するようにも思われる。

端的には、「可能性」は、『X は P でありうる［P しうる］（X может P）』という種類の文（発話）、「必然性」は、『X は P でなければならない［P しなければならない］（X должен P）』という種類の文（発話）である。

この両者は、それぞれ「内的」なものと「外的」なものとに分類することができる。内的なものとは、当該状況（P）の生起が、その状況の主体（X）の内的な性質に依存しているものであるのに対して、外的なものは、当該状況（P）の生起が、その状況の主体（X）とは関わりなく、外的な要因に依存しているものである。

「可能性」については、後の節で改めて見ることとし、ここでは「必然性」を例にとって考えてみよう。Плунгян（2011）からの具体例を見てみよう（Плунгян 2011: 428）：

表 2-28：内的必然性と外的必然性

必然性の種類	例
内的必然性	Чтобы рассказать об этом, я должен подготовиться. それについて話すには、準備をしなければいけません。
外的必然性	Чтобы успеть на поезд, я должен выйти в восемь часов. 列車に間に合うには、八時に出なければいけません。

これらの例文の文脈からも分かるように、「内的必然性」とは、当該状況（P）の生起が、主体自身の必要性、あるいは性質に依存しているものであり、対して「外的必然性」の場合には、当該状況（P）の生起が、外的な要因に依存している。

また、先に見た、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」の間にある重要な差異は、「評定のモダリティ」の意味（「評価」や「評定」）は話者から発される（すなわち、「評価」や「評定」を下すのは話者である）ものであるのに対して、ここで見ている「非現実のモダリティ」の意味（「可能性」や「必然性」）というのは、当該状況の主体に関わるものであるという点である（Плунгян 2011: 430）[78]。

3.4.2. ロシア語において文法化された「非現実のモダリティ」

「非現実のモダリティ」が文法化のプロセスを経ると、いわゆる『法（наклонение）』のカテゴリーを形成する。

ロシア語では、この「法」のカテゴリーは、動詞が備える文法的カテゴリーとなっている。通常、『直説法（изъявительное наклонение）』、『仮定法（сослагательное наклонение）』、『命令法（повелительное наклонение）』の三つに分類される。

以下で、делать という規則的な形態変化を行なう動詞を例にとって、それぞれの法の形態について確認する：

[78] この点についての詳細は、後の第 3.6.節を参照されたい。

表 2-29：それぞれの法を表す動詞の形態

法		動詞の形態
直説法	過去形	делал, делала, делало, делали
	非過去形	делаю, делаешь, делает, делаем, делаете, делают
仮定法		делал бы, делала бы, делало бы, делали бы
命令法		делай, делайте

この「法」のカテゴリーは、文法的カテゴリーとなっていることからも、また「述定（предикативность）」を構成する要素ともなっている[79]ことからも分かるように、統語論における最小の単位である、「文」という単位が成立するために必須の要素である。

なお、上でも述べたように、この「非現実のモダリティ」は、ロシア語統語論においては、しばしば『客観的モダリティ（объективная модальность）』と呼ばれることがある。

3.5. 可能性のモダリティ

3.5.1. 概要：機能・意味的場という概念

本節では、本研究の主たる分析対象である、「可能性」のモダリティについて考えていくことにする。

---

[79]『述定（предикативность）』とは、ロシア語統語論における概念で、当該発話と現実とを紐付ける役割を果たすと想定されているものである。当該発話がこのカテゴリーを有するか否かによって、それが、単なる「語（весна）」なのか、あるいは「文（Весна!）」であるのかが区別される。従来、「法（модальность）」、「時制（время）」、「人称（лицо）」の三つの文法的カテゴリーを以て、「述定」とする見方が主流であったが、現在では「人称」を含めない立場もある。また言語学的対立を成していないとして、この概念自体を認めていない研究者もいる（cf. Энциклопедия 1996: 367）。その一方で、Бондарко（1990）では、この三カテゴリーに『時間的定位性／非定位性（временная локализованность / нелокализованность）』を加えてはどうかという提案が出されている（Бондарко 1990: 63; ТФГ 1990: 63）。

「時間的定位性／非定位性」とは、「状況」の持つ意味特徴の一つで、以下のような意味の対立で表される：

① 当該動作（状況）の具体性・非具体性
② 当該動作（状況）が時間軸上で占める場所の定性・非定性
③ 当該動作（状況）がある一時点あるいは一期間に帰属しているか否か

これらの意味要素の対立の組み合わせにより、当該状況の時間的定位、あるいは非定位の特徴が定まる。「時間的非定位性」は、更に以下のように下位分類される：

イ）『単純反復性（простая повторяемость）』
ロ）『通常性（обычность）』（＝『習慣性（узуальность）』）
ハ）『時間的普遍性（временная обобщённость）』
（＝『金言的叙述性（гномичность）』、『超時間性（вневременность）』、『全時間性（всевременность）』）

言語において、これらの特徴の形式的表現を中心的に担っているのは、動詞を中心とした述語であるが、この特徴を考えるには、ある発話全体を考慮しなくてはならない。つまり、述語だけでなく、主体、客体、場合によっては状況語の要素によってもその時間的定位性の有無が定められるからである（cf. Бондарко 1999: 169）。

上で見た通り、「可能性」のモダリティは、まず第一に、非現実のモダリティのひとつとして位置付けることができるだろう。

言語における「可能性」の意味として、Шатуновский（2009）も解釈を示しているのでここで確認しておこう。何かが「可能である」という場合、ア）現在は生起しておらず、イ）未来には生起しているかもしれないし、生起していないかもしれないということを指している（Шатуновский 2009: 315）。これは、上で見た（cf. 第 3.2.2.節）、Palmer（2001）における「事象的モダリティ」と同等のものを指していると考えてよいだろう。

この、「可能性」のモダリティの意味が、どのようにロシア語において表現されているかを考えるにあたり、ここではその理論的な前提として、ペテルブルク機能文法[80]において提案されている「機能・意味的場（функционально-семантическое поле）」という概念を援用する。

「機能・意味的場」とは、ある一定の意味カテゴリー[81]を共通して有している、以下のような言語形式をまとめ上げた理論的構築物である：

① 文法的単位
② 語彙的単位
③ その他の（様々な要素[82]の組み合わせからなる）手段

これらの、意味カテゴリーを持つ形式は、意味の「場」を形成していると考えられる。このような「機能・意味的場」は、言語の構造の、様々な異なるレベルの単位の持つ機能を分析するための体系上の基礎となる（ТФГ 1987: 11）とされる。

この「機能・意味的場」を想定した場合、「可能性」の意味の「場（意味カテゴリー）」を表現する手段としては、以下のようなものがある（ТФГ 1990: 127；提示の順番には変更を加えてある）：

① 形態的手段：直説法における体・時制形態、仮定法における体の形態
② 語彙的手段：モダリティの意味を持つ動詞及び述語
③ 統語的手段：否定を伴った不定詞構造

それぞれ以下のような文が対応する（斜字体で示した語が該当する表現手段）：

---

[80] これは、Бондарко を中心にペテルブルクにおいて積極的に研究が進められている文法理論である。本稿では、例えばマルティネやハリデーのような、他の研究者（及び学派）によって提唱されている機能文法と便宜的に区別するために、「ペテルブルク機能文法」という呼称を用いることにする。マルティネあるいはハリデーなどがそれぞれ主張している「機能文法」との立場上、理論上の違いについては、稿を改めて検討を加える必要があるだろう。

[81] ここで念頭に置かれている「意味カテゴリー」とは、形態論的手段、統語的手段、語彙的手段、およびそれらを組み合わせた手段のそれぞれによって表される意味において、共通して現れてくるカテゴリーの意味特徴を指している（ТФГ 1987: 12）。実際のところ、Бондарко 自身も初期の文献では、「機能・意味的場」という術語を用いる代わりに、「機能・意味的カテゴリー」という術語を用いており（cf. Бондарко 1971b）、これらは非常に近いか、あるいは同一の概念であると考えられる。

[82] ここでの「要素」とは、「言語形式」とほぼ同様の意味で捉えることができるだろう。

(2-56) Ребенок уже *ходит*.
その子はもう歩けます。
(2-57) Он *умеет* плавать.
彼は泳げます。
(2-58) Тебе этого *не понять*!
あんたなんかには分からないのよ！

ТФГ（1990）では、可能性のモダリティを「内的可能性」と「外的可能性」とに分類して提示している（後述）。

3.5.2. 可能性のモダリティを含む文の意味構造

では、モダリティの意味を含む文の意味構造はどのようなものを想定すればいいだろうか。本節ではその点について考えてみる。

本研究では、モダリティの意味構造の基本的な枠組みとして、ТФГ（1990）で提案されている枠組みを援用することにする（cf. 1990: 123-142）。

そこでは、「可能性」のモダリティを含む文では、主要な意味要素として、①モダリティの主体（субъект модальности）、②モダリティの対象となる状況（предметная ситуация）、③、モダリティの対象となる状況の主体（субъект предметной ситуации）、④モダリティの対象（признак）となる状況の主体の持つ特徴、の四つの要素が関わっていると考えられている（cf. ТФГ 1990:123-126）。

①は話者自身であり、②は、上で（cf. 第 3.2.1.節）見た「命題的部分」に該当するものと考えてよいだろう。

なお、ТФГ（1990）では、これら四つの要素がお互いに対等な関係にあるかのように記述されているが、これらのうち、③及び④は、②の命題的部分を構成するものであるので、実際には以下のような階層構造で捉えるのがより適切だろう：

① モダリティの主体（＝話者）
② モダリティの対象となる状況（＝命題的部分）
（ア）モダリティの対象となる状況の主体（上記③）
（イ）モダリティの対象となる状況の主体の持つ特徴（上記④）

これらが実際の文（発話）においてどのような言語形式を伴って表されるかについて考えてみよう。典型的なケースを想定すると、①は話者自身となるので、通常言語形式では表されない[83]。②−（ア）は名詞、代名詞類の主格（もしくは無人称文の場合には与格）によって示され、そして②−（イ）は不定詞によって示され、この二つの要素によって、発話時点では実際に生起していない状況（＝②＝「命題的部分」）が示されるということになる。

[83] ②−（ア）の主体が話者と同一である場合には、当該言語形式で表示される（例：*Я* могу поднять такую тяжесть.）.

そして、当該状況が生起することの「可能性」があることについて話者が言及している（当該状況が生起する可能性があるというように話者が考えている）ということは、モダリティの意味を持つ述語によって示される。

また、「不可能性」を表す場合には、否定辞（多くの場合「не」）と述語との語結合によって示される（Он ***может*** прийти. → Он *не* ***может*** прийти.）。

したがって、モダリティの意味を含む文の意味・統語構造を構成する主要な要素は、以下のようなものになると考えてよいだろう：

表 2-30：モダリティの意味を含む文の主要な意味・統語的要素

意味的要素	統語的要素
モダリティ	述語
「状況」（命題的部分）	主語、不定詞
否定	否定辞

3.5.3. 内的可能性とその下位区分

「内的可能性」とは、「当該状況を引き起こす要因となるものが、当該状況の主体そのもの、主体の内的特徴であるもの」とされている。内的な特徴としては、心理的、あるいは物理的な性質、ものの見方や確信、能力及び習慣、性格の特徴などが挙げられている（ТФГ 1990: 131）。

更に、ТФГ（1990）では、内的可能性を「先天的可能性」と「後天的可能性」に下位分類している。

「先天的可能性」とは、主体固有の性質や才能などが当該状況生起の条件となっているものである。下例を参照：

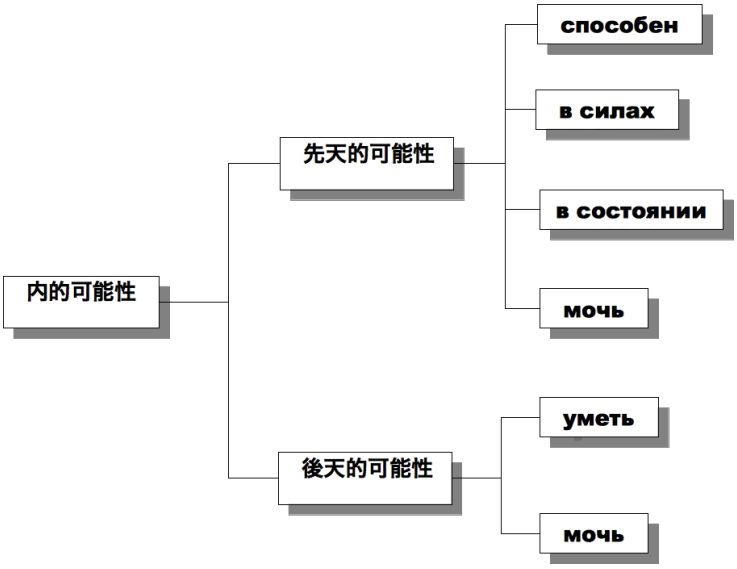
(2-59) Вы добродетельны, несчастны и *не* ***можете*** отсюда уйти.
あなたは高潔で不幸だから、ここから出て行くようなことは出来ない。

対して、「後天的可能性」の場合には、主体の後天的に身に付けた能力、習慣、知識などによって当該状況が引き起こされる：

(2-60) Костя знал так же мало, как и все, и не ***мог*** ответить на эти вопросы.
コースチャは他の皆と同じように、余り物を知らなかったので、それらの質問に答えることが出来なかった。

ここで見たそれぞれの可能性を表すことができる述語は、以下のようなものである。下図では ТФГ（1990）の分類に従っている：

図 2-15：内的可能性とその述語（ТФГ 1990）



3.5.4. 外的可能性とその下位区分

「外的可能性」とは、当該状況の生起を決定する要因が、主体以外、例えば、恒常的あるいは一時的な外的状況、社会的法則、自然の法則などによって条件付けられているものを指す。

この「外的可能性」は、更に「義務的可能性（деонтическая возможность）」と「非義務的可能性（недеонтическая возможность）」とに下位区分される（cf. ТФГ 1990: 132-133）。

「義務的可能性」は、社会での、法律的、通念上の規範が当該状況生起の条件となっているもの、あるいは話者自身の意志などが条件となっているものを指す：

(2-61) Партком ***имеет право*** предлагать своих кандидатов.
党委員会は自らの候補を提案することができる。

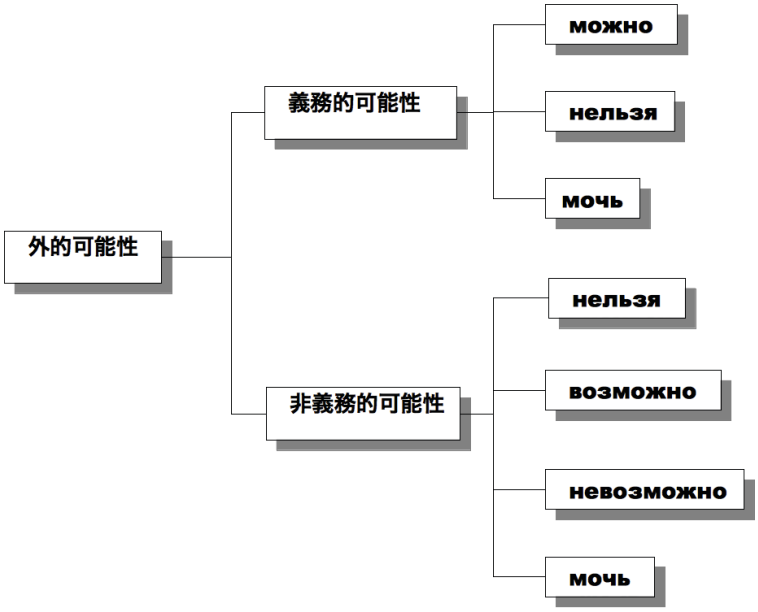
対して、「非義務的可能性」は、社会的性質を持たない外的な状況、物事の進展の客観的法則などによって当該状況が条件付けられているものを指す：

(2-62) Уже в ноябре ***невозможно*** было писать, потому что чернила замерзали во всех чернильницах.
11 月で既に書き物は出来なくなっていた。というのも墨壺という墨壺のインクが凍ってしまっていたからだ。

ここで見たそれぞれの可能性を表すことができる述語は、以下のようなものである。上と同様、ТФГ（1990）の分類に従うと次のような図式にすることができる。また、ここでは、ТФГ（1990）において提示されているものに、筆者の判断で возможно,

невозможно, нельзя を加えてある[84]。:

図 2-16：外的可能性とその述語



3.6. 述語 мочь について：その「多義性」と「無標性」

ここで述語 мочь についても述べておく必要があるだろう。

上の節で（cf. 本章、第 3.4.1.節）、「評定のモダリティ」の意味（「評価」や「評定」）は話者から発されるものであるのに対して、「非現実のモダリティ」の意味（「可能性」や「必然性」）というのは、当該状況の主体に関わるものであると述べたが、こうした差異は以下のような例で確認することができる：

(2-50) Иван ***может*** петь «Марсельезу».

この述語 мочь を用いた文は以下の三つの解釈が可能である：

イ）「イワンは（が）ラ・マルセイエーズを歌っているようだ」
（評定のモダリティ）
ロ）「イワンは（が）ラ・マルセイエーズを歌うことができる」
（非現実のモダリティ）
ハ）「イワンは（が）ラ・マルセイエーズを歌える」
（非現実のモダリティ）

[84] また、ТФГ（1990）では、ここで挙げた述語に加えて、「иметь право」と「иметь возможность」が加えられている。しかし、これらの二つの述語は、その分析的な成り立ちから、「可能性」の述語としての用法は二次的なものであると見なし、今回の調査の対象からは除外してある。これらの述語と、不定詞の語結合における体の選択の問題に関しては、別途機会を改めて取り組む必要があるだろう。

それぞれ、イ）は「評定のモダリティ」、ロ）とハ）は「非現実のモダリティ」を表している。

イ）は、「評定のモダリティ」を表しているので、その「評定」を行なっているのは、当該発話を行なった「話者」である[85]。

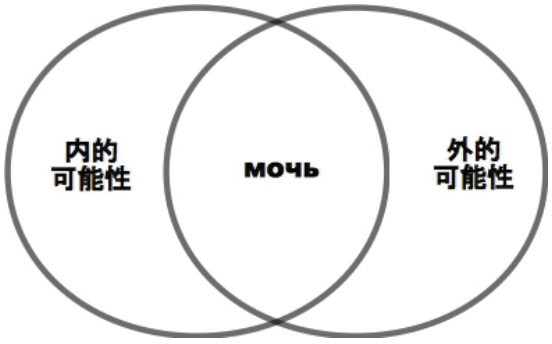
ロ）は、内的可能性を表し、ハ）は外的可能性を表していると解釈ができる[86]。この「可能性」は、話者に関わることではなく、当該状況（「ラ・マルセイエーズを歌う」）の主体（イワン）の内的性質、あるいはイワンを取り囲む外的要因である。

このように、この述語は、モダリティの種類についても、「評定」と「非現実」の双方のモダリティの意味を表すことができる（cf. Плунгян 2011: 430-431）[87]。また、「非現実のモダリティ」に限って考えても、ここまでで確認した図（2-15）及び（2-16）からも明らかなように、мочь という述語は、全ての可能性の種類を表しうる。

このような、мочь という述語の持つ、言わば「多義性」は、言い換えれば、この述語それ自体は、「評定のモダリティ」を表すのか、「非現実のモダリティ」を表しているのか、あるいはその「可能性」が「内的可能性」であるのか、それとも「外的可能性」であるのか、といったことについて全く表示していないということになる。つまり、「モダリティ」や「可能性」の種類の表示に関しては、「無標」であると考えられるのである[88]。

мочь の表す可能性の意味の「守備範囲」というのは、下図のようなイメージで捉えることができるだろう（「非現実のモダリティ」の場合）：

図 2-17：述語動詞 мочь が表す意味の「守備範囲」（非現実のモダリティの場合）



[85] いわゆる「蓋然性」と呼ばれるものは、この「評定のモダリティ」のことを指していると考えてよい。

[86] もっとも、日本語でも、この両者の差異を適切な言語形式を用いて表現し分けるのは困難である。例えば、「（昔習って歌詞を知っているので）イワンがラ・マルセイエーズを歌うことができる」（上記ロ）、「（今日だけは歌ってもよいとの許可を得ているので）イワン（に限って）はラ・マルセイエーズを歌える」（上記ハ）などのように適切な文脈を補えば、その違いが明らかになってくる。

[87] ここで見た例文に関して、Плунгян（2011）ではもう一点興味深い指摘がされている。それは現在時制の機能の違いから来る解釈の差異である。「非現実のモダリティ」を表す場合（上記ロ、ハ）には、現在時制は、発話時点でその「可能性」が存在していることを指している。それに対して、「評定のモダリティ」を表す場合（上記イ）には、時制は、当該状況（ここでは「ラ・マルセイエーズを歌う」）が存在している時点と一致している。すなわち、現在時制であれば、その時点で誰かがラ・マルセイエーズ歌っているということになる。

[88] 「有標」及び「無標」については、本章、第 2.5.2.2.節を参照されたい。

「内的可能性」を表現するのに特化された述語（уметь, способен など）や、「外的可能性」を表現するのに特化されたもの（можно, нельзя など）が用意されている一方で、мочь は、そのどちらの可能性の種類も表せる手段として、また「非現実のモダリティ」のみならず、「評定のモダリティ」をも表せる手段として、言語体系内に用意されていると考えられる。

まさにこのような「無標性」のために、この述語が様々な場面で用いられることにもつながっているとも言える。したがって、後で見るように（cf. 第四章）、テキスト内で用いられる頻度数も最も高いものとなっている。

本稿では、この述語 мочь を、上で見た「非現実のモダリティ」を表す一連の述語とは別に扱い、その意味や用法、不定詞との結合の実態などについて観察することにする[89]。

3.7. 本節のまとめ：可能性のモダリティと本研究の対象の位置付け

本節では、モダリティのカテゴリーについて、一般言語学的な視座と、ロシア語学の視座の双方から検討した。

学問的な立場の異同に関わらず、「モダリティ」のカテゴリーを考える際に、共通している認識としては、我々が生成している文の意味は、命題的な要素と、それに対する話者の捉え方を表す二種類の要素からなっているということである。その「捉え方」を、何らかの言語的手段で表す方法が、「モダリティ」と「法」のカテゴリーであると言える。

「モダリティ」のカテゴリーは、その意味的性質から、「評定のモダリティ」と「非

---

[89] 澤田（2006）では、より広い意味で「可能性」という概念が捉えられており、モダリティには何らかの形で「可能性」が関わっているとし、論が展開されている（cf. 2006: 48-54）。そして、モダリティが対象とする「可能性」について、以下のような分類を提案している（cf. 2006: 49）：

(a) 論理的に見た事柄（すなわち、命題）の可能性：
「ある命題が必然か偶然か、あり得るかあり得ないか」に関するもの（「論理的可能性」）

(b) 認識的に見た事柄（すなわち、状況）の可能性：
「ある状況が話し手にとって確実か不確実か」に関するもの（「認識的可能性」）

(c) 社会的、あるいは言語行為的に見た事柄（すなわち、行為・出来事）の可能性
「その行為は義務か、義務でないか、許可されているか、許可されていないか」などに関するもの（「社会的・言語行為的可能性」）

(d) 内的資質や外的環境から見た事柄（すなわち、行為・出来事）の可能性
「その行為を実行できるか、できないか、実行する意志があるか、ないか」に関するもの（「資質的・環境的可能性」）

(e) 事柄の可能性に対する心的態度：
ある事柄の実現可能性を希求したり、その事柄が実現した（している）ことに対する心理的な意外感・疎外感を表したりするもの（「感情的・心理的可能性」）

上記のうち、(b) の「認識的可能性」が、本文で見てきた「評定のモダリティ」に対応するものであり、(d) の「資質的・環境的可能性」が「非現実のモダリティ」に対応するものと考えられる。このように、いずれも当該状況の生起の可能性を問うているという点では、「評定のモダリティ」も「非現実のモダリティ」も、同様に「可能性」を対象としていると考えられるため、両者をまとめて「可能性に関わるモダリティ」として位置付けることもできるだろう。

現実のモダリティ」とに大きく分けることができる。これらは、Palmer（2001）の枠組みでは、それぞれ「命題的モダリティ」と「非現実のモダリティ」に対応する。

「評定のモダリティ」は、話者の当該状況（動作）に対する「態度」を表す。それに対して、「非現実のモダリティ」は、当該状況が、現実世界に対してどのような「位置付け（статус）」にあるかに関するものである。

この「モダリティ」のカテゴリーは、意味カテゴリーであるため、必ずしもそれ専用の形態素が用意されているわけではなく、それを表現するための言語形式は様々なものになりうる。例えば、ロシア語の体系内では、語や小詞、間投詞、イントネーション、語順、その他特殊な文型など、様々な手段によって表現される。

それに対して、「法」のカテゴリーは、「非現実のモダリティ」に特化された、文法的（すなわち形態論的）カテゴリーであると考えられる。ロシア語の場合には、通常動詞の語尾と小詞との組み合わせによって表される。

本稿の主たる分析対象のひとつである、「可能性」のモダリティは、「非現実のモダリティ」の下位に位置付けることができるものである。

ТФГ（1990）では、この「可能性」のモダリティに、更に、「内的可能性」（Palmerの枠組みでは「力動的モダリティ」）と「外的可能性」（同「束縛的モダリティ」）という二つの下位分類を加えている。

「内的可能性」とは、当該状況を引き起こす要因となるものが、当該状況の主体そのもの、主体の内的特徴（心理的、あるいは物理的な性質、ものの見方や確信、能力及び習慣、性格の特徴など）であるものである。この「内的可能性」は、更に「後天的可能性」と「先天的可能性」とに分類することができる。

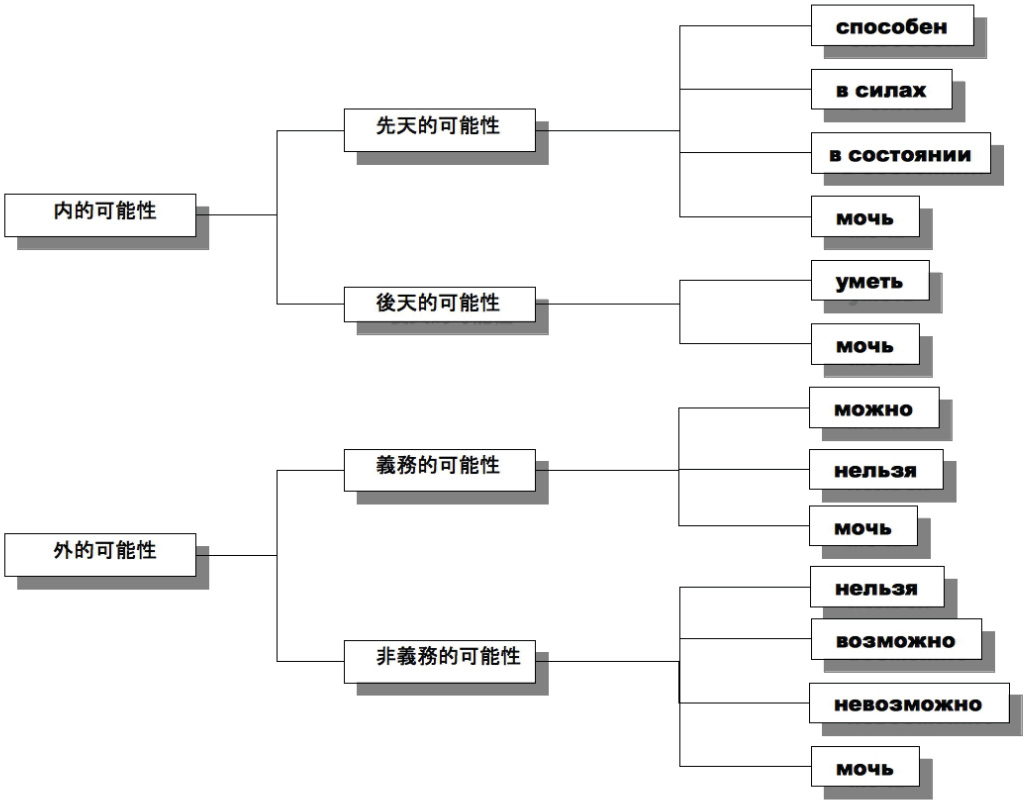
「外的可能性」とは、当該状況の生起の有無が、主体以外の外的要因（恒常的あるいは一時的な外的状況、社会的法則、自然の法則など）によって条件付けられているものである。この「外的可能性」は、更に「非義務的可能性」と「義務的可能性」とに分類することが可能である。

表 2-31：可能性のモダリティとその下位区分、当該状況生起の条件

内的／外的可能性	下位区分	当該状況生起の条件
内的可能性	後天的	主体の能力、習慣、知識
	先天的	主体固有の性質あるいは才能
外的可能性	非義務的	社会での、法律的、通念上の規範
	義務的	社会的性質を持たない外的な状況、物事の進展の客観的法則

この「可能性」のそれぞれを表すことができる述語は、ロシア語の体系内では複数用意されているが、階層構造とともに示すと、以下のような図にまとめることができる：

図 2-18：本稿の対象となる「可能性」のモダリティの意味とその述語



この「内的可能性」と「外的可能性」という分類は、Palmer（2001）の分類では、それぞれ「力動的モダリティ」と「束縛的モダリティ」とに相当する。

したがって、Плунгян（2011）と Palmer（2001）のそれぞれにおいて提案されている、モダリティの枠組みの対応関係は以下のような図にまとめることができる：

図 2-19：Плунгян（2011）、Palmer（2001）それぞれのモダリティの枠組みの対応関係

Плунгян（2011）	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
			外的可能性	内的可能性
Palmer（2001）	認識的モダリティ	証拠的モダリティ	束縛的モダリティ	力動的モダリティ
	命題的モダリティ		事象的モダリティ	

また、もう一方の対象となる「評定のモダリティ」は、述語 мочь が表すものを取り扱う。

そのため、本稿の対象である「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」とを、「可能性に関わるモダリティ」と呼び、まとめて指すことがある。

4. ロシア語の不定詞の備える諸特徴

4.1. 本節の概要

本節では、ロシア語の動詞の諸形態のうちのひとつである、『不定詞（инфинитив, неопределенная форма глагола）』という形態について検討する。この形態は、「単に動作を名指すだけで、どの人称、どの数、どの時制に属するか、現実あるいは非現実と関係しているかについては一切示さない形態」である（cf. Грамматика 1980: §1594）。以下ではまずその形態論的、統語論的それぞれの特徴について確認する。

先にも述べたように（cf. はじめに、第 4.8.節）、従来日本のロシア語学では、この「инфинитив」に対しては、「不定形」という訳語があてられてきている。これは、動詞の形態の一つである「定形（определенная форма глагола）」に対置されるものとして提案されたものであり、その意味では「不定形」という術語にも相応の正当性があると考えられる。しかしながら本稿では、より広く受け入れられていると思われる術語である「不定詞」という術語を用いている。

以下本節では、まず不定詞の形態論的特徴について確認し、次にこの不定詞という形態が備える文法的カテゴリーについて確認する（cf. 第 4.2.節）。

次に、不定詞という形態の、ロシア語統語論における位置付けについて確認する（cf. 第 4.3.～4.4.節）。

そして、不定詞の体のカテゴリーの用法について概観する。完了体、不完了体のそれぞれの形態が、どのような意味を表す場合に用いられるかについて、主に Рассудова（1982）での記述に拠って確認する（cf. 第 4.5.節）。

4.2. ロシア語の不定詞の形態論的特徴及び備えている文法的カテゴリー

4.2.1. 不定詞の形態論的特徴

不定詞の形態論的側面について確認しておこう[90]。

不定詞の動詞語幹は、多くの場合、過去時制の語幹と一致し、そこに不定詞に特徴的な接辞である、-ть / -ти 及び-чь が付加され、不定詞として機能する。以下、説明の便宜上、接辞「-чь」から解説を行なう。

接辞「-чь」は、現在時制、及び過去時制の語幹の末尾に、子音 г 及び к を有する動詞の場合に、付加され不定詞を形成する。下表中の各例を参照（以下、表中では動詞の人称変化語尾及び不定詞の接辞を太字のイタリックで示す）：

表 2-32：不定詞の接辞（-чь）

非過去形（現在形）	過去形	不定詞
берег***ут***	берёг	бере***чь***
мог***ут***	мог	мо***чь***
пек***ут***	пёк	пе***чь***
тек***ут***	тёк	те***чь***

[90] ここでの記述は主に、Грамматика（2005）及び Шелякин（2003）に基づいているが、例として挙げてある動詞については、筆者の判断により取捨選択、あるいは追加を行っている場合がある。

これら以外の動詞の場合には、接辞「-ть / -ти」が付加され、不定詞が形成される。接辞「-ть」は、アクセントが当たっている語幹の後に付加される：

表 2-33：不定詞の接辞（-ть）

非過去形（現在形）	過去形	不定詞
чита***ю***	чита***л***	чита***ть***
грыз***у***	грыз	грыз***ть***

接辞「-ти」は、原則として、接辞それ自体にアクセントが当たっている場合に用いられる：

表 2-34：不定詞の接辞（-ти）

非過去形（現在形）	過去形	不定詞
ид***у***	шёл	ид***ти***
нес***у***	нёс	нес***ти***
вынес***у***	вынес	вынес***ти***
выполз***у***	выполз	выполз***ти***

また、この接辞で終わる動詞に接頭辞「вы́-」が付されて派生する動詞に関しても、アクセントの有無にかかわらず（この場合アクセントは常に接頭辞にある）、接辞は「-ти」のままである（上例の вы-нес-ти, вы-полз-ти）。

4.2.2. 不定詞の備えている文法的カテゴリー

ロシア語の文法体系において、動詞の定形と不定詞では、その備える文法的カテゴリーが異なる。

動詞が定形で用いられる場合には、「人称（一人称、二人称、三人称）」、「体（不完了体、完了体）」、「相[91]（能動相、被動相）」、「法（直説法、仮定法、命令法）」、「時制（過去時制、現在時制、未来時制）」、「性（男性、女性、中性）」、「数（単数、複数）」といった文法的カテゴリーを持っている。

それに対して、不定詞では、これらの文法的カテゴリーのうち、「体」のカテゴリー（不完了体、完了体）と「相」のカテゴリー（能動相、被動相）しか保持されない。

これらを表の形でまとめると以下のようになる[92]。それぞれの文法カテゴリーと共に、括弧内に動詞 делать/сделать を具体例にとってそれぞれの文法形式を示してある：

[91] いわゆる一般言語学の分野で言うところの『態（voice; залог）』のカテゴリーである。
[92] この表は、Грамматика（2005）の記述を参考に作成した（cf. 2005: §1384）。なお、ここでは議論を簡素化するために、分詞（形動詞）の諸形態については検討の対象から外している。

表 2-35: 動詞の備える文法的カテゴリー：定形と不定詞（不定形）

文法的カテゴリー	定形（文法形式）	不定詞（文法形式）
法	直説法（делаю, делал）、仮定法（делал бы）、命令法（делай）	—
時制	過去時制（делал）、現在時制（делаю）、未来時制（буду делать）	—
人称 （過去時制は除く）	一人称（делаю, делаем）、二人称（делаешь, делаете）、三人称（делает, делают）	—
性 （過去時制のみ）	男性（делал）、女性（делала）、中性（делало）	—
数	単数（делаю, делаешь, делает; делал, делала, делало）、複数（делаем, делаете, делают; делали）	—
体	完了体（делал）、不完了体（сделал）	完了体（делать）、不完了体（сделать）
相 （態）	能動相（делает）、被動相（делается）	能動相（делать）、被動相（делаться）

4.3. ロシア語統語論における不定詞の機能的位置付け

ロシア語における不定詞は、その統語論上の機能をどう位置付けるか（記述するか）という点に関して、その特徴付けが一貫しておらず、現在に至っても最終的な解決は見ていないと思われる。

Золотова（1982）も引用しているように（1982: 249）、Пешковский（2001）は、1930年代の時点で、不定詞という形式を、『その意味について謎の多いカテゴリー（загадочная по своему значению категория глагола）』であると評している（2001: 141）。ロシア語統語論においては、動詞の不定詞という形式は、その機能、役割などについて未だ完全には解き明かされていない形態であると言える。

例えば、以下のような例を考えてみよう：

(2-80) Я люблю *гулять* вечером.
夕方散歩するのが好きです。

(2-81) Я начал *слушать* музыку.
音楽を聴き始めた。

(2-82) Паспорт *показать*!
身分証を提示して下さい。

不定詞の機能的位置付けの難しさは、かたや名詞と類似した役割を果たす（上例 2-80、動詞の補語的な機能）こともあれば、かたや動詞に準じた役割を果たす（上例 2-81、合成動詞述語を形成する）こともある[93]、あるいはそれ単独で文を形成することもできる（上例 2-82、不定法文）、というように、不定詞という形態が備える、統語論上

[93] もっとも、捉え方によっては、この（2-81）の不定詞の用法も、名詞と類似した役割であると見ることもできるだろう。

の機能の、ある種の「柔軟さ」、あるいは「曖昧さ」から来ていると考えられる。

このような、不定詞の持つ、統語論的な位置付けの「曖昧さ」のようなものは、不定詞という形態の発生的起源にも一因があるものと思われる。Шелякин（2006）によれば、不定詞は、動詞派生抽象名詞を起源としており、それから動詞のパラダイムに組み込まれたものであるという（Шелякин 2006: 17）。

このような、不定詞の持つ独特の統語論的特徴を、どのように記述するかという問題に関して、従来の議論をまとめると、大きく分けて、60 年文法（Грамматика 1960）に沿った特徴付けと、80 年文法（Грамматика 1980）[94]に沿った特徴付けとがあると考えられるだろう。本稿では、この二つの枠組みを中心に取り扱うことにし、本節ではまず 60 年文法における枠組みについて概観することにする。

60 年文法における枠組みと近い立場を取った記述として、Энциклопедия（1996）での記述がある。ここではまず、その記述に沿ってみていくことにしよう。それに従うと、不定詞の機能は主に以下のように分類される（下表の例文中、不定詞には下線を付してある）：

表 2-36：不定詞の機能（Энциклопедия 1996）

機能	例文
主語としての統語機能	Курить — вредно. 喫煙は体に悪い。
単純動詞述語としての機能	И царица хохотать , и плечами пожимать. 女王は急に、笑い出して肩をすくめた。
不定法文の主要成分	Открыть ему? 彼に扉を開けてあげましょうか？
合成動詞述語の補完的成分として[95]	Я начал читать. 私は読書を始めた。
補語	Я прошу Вас говорить громко. 大きな声でお話し頂きたいのですが。
不一致定語	Нетерпение доехать до Тифлиса овладело мною. チフリスに行くことが我慢できなかった。
目的を表す状況語	Месяц величаво поднялся на небе посветить добрым людям и всему миру. 月は威厳高く天空に上った。善良な人々とこの世の中の全てを照らし出すために。
合成未来を形成	Я буду писать. 書き物をします。

[94] 本稿の執筆にあたり、参照しているのは Грамматика（1980）の増補版である Грамматика（2005）である。

[95] ロシア語の術語としては、「連辞と接する部分（присвязочная часть）」という術語がここでは用いられている。

この枠組みでは、統語論の基本単位が『成分（член предложения）』とされており、これを単位として記述が行なわれる。

この分類は、その用法について理解しやすい一方で、理論的な厳密性を追求する場合には不十分である。Золотова（1982）でも指摘されているように、この枠組みでは、例えば次のような文：

(2-83) Невозможно решить эту задачу.
この課題を解決するのは不可能だ。

この文で用いられている不定詞が、主語として用いられているのか、あるいは補語としての役割なのか、といった統語論上の位置付けがはっきりさせられないためである（cf. Золотова 1982: 249）。

4.4. 接語的用法と非接語的用法

4.4.1. 80 年文法での新たな提案：接語的従属関係と非接語的従属関係

前節で述べたような、枠組みの抱える不備を解消するべく提案されているのが、80 年文法における新たな枠組みである。80 年文法では、統語論の基本単位が『要素（компонент）』とされ、これを記述の単位として『文の構造図式（схема предложения）』が構築される。

この枠組みでは、各「要素」の間にある関係が、『接語的従属関係（присловная подчинительная связь）』と『非接語的従属関係（неприсловная подчинительная связь）』とに分類され、記述される[96]。

ここで、80 年文法であげられている例（Грамматика 2005: §1720）を用いて、この二つの異なる関係について確認しておこう：

(2-84) Я получил эту бандероль распечатанной.
この小包を封が開けられた状態で受け取った。

(2-85) Мальчик надел рубашку неглаженной.
その男の子はシャツにアイロンをかけないまま着込んだ。

(2-86) Больному нужно дать молоко горячим.
病人には牛乳を熱くして出してあげないと。

まず、『接語的従属関係（присловная подчинительная связь）』とは、文における語

[96] 本稿以下で用いる「接語的」、「非接語的」といった術語は、ロシア語の「присловный」及び「неприсловный」という術語に対する筆者による試訳である。なお、一般言語学における「接語（clitic）」とは関わりはない。本稿では、この「接語（clitic）」は対象としていないため、便宜的に「接語的」という術語を用いることは、本稿の範囲内においては問題無いと判断し採用している。しかしながら、ロシア語統語論における「присловный」という術語に対しては、対応する日本語訳は筆者の知る限り提案されておらず、より適切な訳語を考案することは今後の課題のうちの一つであると考える。

の統語的位置によって予め定まるのではなく、語（語彙）それ自体、語の内的な性質によって定まる従属関係のことを指す。

上の例文において接語的関係にあるのは、получить бандероль, эта бандероль, надеть рубашку, дать молоко больному である。

この関係は、統語的位置によっては影響を受けないので、語順を変えても（бандероль получить, бандероль эта, рубашку надеть, дать больному молоко）、この従属関係それ自体は変化を受けない。

それに対して、『非接語的従属関係（неприcловная подчинительная связь）』とは、文において、語の統語的位置によって定まる従属関係である。

上の例文中で、получил эту бандероль распечатанной, нужно дать молоко горячим, надел рубашку неглаженной における、造格（具格）形の形容詞（распечатанной, горячим, неглаженной）は、当該の文においては、動詞と名詞の双方と結びついているものであり、その意味で一時的なものであると言える（このことは、名詞との格の一致が起きていないことからも判断できるだろう）。こうした関係を「非接語的関係」と呼んでいる。

両者の特徴はまとめると以下のようになるだろう：

表 2-37：接語的従属関係と非接語的従属関係

	接語的従属関係	非接語的従属関係
統語的位置の影響	受けない	受ける
従属関係の性質	不変的	一時的

80 年文法では、この「接語的従属関係」と「非接語的従属関係」という分類に従って、不定詞の意味・用法の分類も試みられている（後述）。

ここまでが不定詞の統語論的特徴付けにおける立場の相違に関する概要である。本研究の分析対象の、体系内での位置付けを把握するに際しては、80 年文法の考え方に沿ってまずは分類することとする。これは、不定詞という文法単位を対象として捉える場合、語と語の従属関係によってまず大きな統語構造の枠組みを設定するという 80 年文法のアプローチの方が、本稿で扱う現象を体系内で理解する際には、より適していると考えられるからである。

それに従うと、不定詞の用法は、他の語との従属関係に応じて、『接語的用法（присловное употребление）』と『非接語的用法（неприcловное употребление）』とに分類することができる。以下でそれぞれについて詳しく見ていく。

4.4.2. 接語的用法（присловное употребление）

まず、「接語的用法」について見ていくことにする。

文における不定詞の「接語的用法」とは、以下のような場合を指す（cf. Грамматика 2005: §2745）：

① 情報補完機能（функция необходимой информативно восполняющей формы）

② 客体の意味
③ 定語的意味

まず、①の「情報補完機能（функция необходимой информативно восполняющей формы）」とは、以下のような語結合における不定詞の機能を指している：

表 2-38：接語的用法（情報補完機能）

結合の相手	例
述語	обязан знать（知っている義務がある）、должен ехать（出かけなければいけない）
名詞	мастер рассказывать（物を語るのが得意な人）、охотник пошутить（シャレの好きな人）
動詞；その他	принялся читать（読書に取りかかった）, намеревается уехать（去るつもりである）начал (кончил, продолжает) работать（働き始めた、働き終えた、働き続けている）、пустился плясать（踊り始める）、умудрился напутать（よりによって間違える）волен выбирать（思い通りに選べる）, извольте подчиниться（従いたまえ）

次に、②の「客体の意味」を果たすのは、以下のような語結合の場合である：

表 2-39：接語的用法（客体の意味）

結合の相手	例
動詞	поручить проверить（検査を任せる）、научить читать（読み方を教える）、умолять заступиться
述語	готов действовать（行動する用意がある）、способен понять（理解できる）、хотеть жить（生きたいと思う）、бояться отстать（遅れるのを嫌がる）, устать спорить（議論に疲れる）, рискнуть пойти（敢えて出かける）

本稿の対象である、モダリティの意味を含む述語と不定詞という語結合における不定詞は、まさにこの①の「情報補完機能」と、②の「客体の意味」を持つ接語的用法の場合ということになる。

そして、上記のうちの③は、「定語的意味」を果たしている場合である。具体的には以下のような語結合である[97]：

[97] 本稿第五章において断片的に扱われている、述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケースは、この「定語的意味」の用法にあたる。

表 2-40：接語的用法（定語的意味）

結合の相手	例	
動詞	поехать повидаться（会いに出かける）, выйти погулять（散歩に出る）, отправить учиться（学ばせるために派遣する）	「目的」を示す場合
名詞	свобода действовать（行動する自由）、дар убеждать（説得する才能）、манера спорить（議論の仕方）	（квалифицирующее）
	право выбирать（選択する権利）、потребность любить（愛したいという欲求）、склонность преувеличивать（大げさに言う傾向）、мечта летать（空を飛びたいという夢）	（объектно-квалифицирующее）

4.4.3. 非接語的用法（неприсловное употребление）

不定詞の文における『非接語的用法（неприсловное употребление）』とは、以下のような場合を指す（cf. Грамматика 2005: §2745）：

① 述語的特徴の意味
② 主体的意味
③ 客体的意味
④ 定語的意味

以下それぞれ見ていくことにしよう。
まず①の「述語的特徴」を表す非接語的用法とは以下のようなものである：

(2-87) Она хохотать.
彼女は急に笑い出した。
(2-88) Мы рыбу ловить, а вы — ягоды собирать.
僕らは魚を捕るから、君らはベリーを摘んでくれ。
(2-89) Сомневаться значит искать.
疑うことはつまり探し求めることである。
(2-90) Некого спросить.
尋ねる相手がいない。
(2-91) Не к кому обратиться.
相談相手がいない。
(2-92) Тебе идти первому.
君が最初に行け。
(2-93) Ему бы посоветоваться с врачом.
彼は医者に罹った方がいい。
(2-94) Не шуметь!
騒ぐな！

(2-95) Как с ним не согласиться?
どうして彼に同意しないことがあろうか？

上記②の「主体的意味」を表すのは以下のような場合である：

(2-96) Сломать дерево — не шалость.
木を砕くのは容易ではない。
(2-97) Кататься — весело.
スキーは楽しい。
(2-98) Курить — запрещается.
喫煙は禁止されています。
(2-99) Остановиться значит отстать.
立ち止まることは、後れることを意味する。
(2-100) Закурить есть?
タバコ、ある？
(2-101) Поесть найдется?
食べる物あるかな？

上記③の「客体的意味」を表すのは次のような例である：

(2-102) Стало быть, это ты ему приносила пить и есть, Нелли?
大方、彼に飲み物と食べ物を運んでやったのは君だろう？ネリー。

上記④の「定語的意味」を表す用法は以下のようなものである：

(2-103) Принес книгу почитать.
読む本を持ってきた。
(2-104) Ехать на юг денег нет.
南部へ行くお金がない。
(2-105) Это – нитки вязать шарф.
これはマフラーを編むための糸です。
(2-106) Найди щетку почистить обувь.
靴を磨くブラシを見つけなさい。
(2-107) Ругать он ее не ругал.
あの人が彼女を叱ったかと言えば叱らなかった。
(2-108) Послушать послушаем с удовольствием.
聴くのは喜んで聴きましょう。
(2-109) Говорить так говори.
しゃべれと言ったらしゃべれ。

③の「客体的意味」と④の「定語的意味」は、それぞれ同様の意味を「接語的用法」の不定詞も表しうる（cf. 第 4.4.2.節）。この両者の違いは、上で述べた（cf. 第 4.4.1.節）、「接語的従属関係」と「非接語的従属関係」の間にある違いによって説明できるだろう。

すなわち、「接語的用法」の不定詞の表す客体的意味と定語的意味は、語と語が接語的従属関係にあるので統語的位置（語順）の影響を受けないのに対し、「非接語的用法」の不定詞の表す客体的意味と定語的意味は、その影響を受け（すなわち語順を変えると語と語の間にある統語的関係が崩れてしまう）、且つ一時的なものである。その意味では、極めて限定的な文脈で現れてくる意味・用法であると考えていいだろう[98]。

4.5. 不定詞の体のカテゴリーの用法

4.5.1. 概要

前節までで、ロシア語の不定詞の、主に形態論的側面と統語論的側面を中心にして概観した。本節では、不定詞の体のカテゴリーの表す意味と用法について確認する。

不定詞の体の表す意味と用法については、未来時制や命令法におけるそれと類似しているということがしばしば指摘される（Рассудова 1982: 91, 128）。これは、不定詞が、非過去時制、あるいは非直説法で用いられるということが、そうした類似性を生み出す要因となっているからであろう[99]。

ここでは、不定詞の体の用法について、主に、Рассудова の研究（1982）と Forsyth の研究（1970）における記述に基づいて検討する。

以下では、体の形態の別（すなわち完了体と不完了体）を基準として分類した上で、それぞれの形式が用いられる具体的なケースを確認することにする。

表 2-41：不定詞の体の別によって表される意味・ニュアンス

不定詞の体	表される意味
完了体	単一の動作
	反復動作
	可能性、能力
	警告、危惧の念
不完了体	過程の意味
	単一の動作
	反復動作
	可能性、能力
	禁止、不必要

[98] この、非接語的用法の不定詞の表す、③と④の意味は、外国人向けの教科書などでは学習項目としては通常扱われない。これは、ここで述べた、この二つの意味が極めて限られた文脈でしか現れてこないという事情がその大きな理由だろう。

[99] 本来であれば、非過去時制、非直説法の場合の体のカテゴリーの用法と、不定詞の形態での体の用法について比較を行ない、包括的な記述を目指すべきではあるが、それは本稿の範囲を大きく超えるものとなってしまうため、ここでは、動詞の諸形態のうち、本稿の対象である不定詞の場合のみに限って取り上げることとする。

また、本節では主に、本稿の対象である接語的用法の場合のみを取り上げることとし、その他の統語論的環境における体の意味については、原則として脚注に補足的に示すに留めている。

4.5.2. 完了体が用いられるケース

4.5.2.1. 単一の動作

まず、完了体によって表されるのは、「単一の動作（единичное действие）」である（Рассудова 1982: 96-98）。

(2-110) В этом семестре аспиранты должны сдать [PFV-INF] два экзамена.
今学期は、院生は二つの試験に通らないといけません。

これは上で見た、体の個別的意味のうち、「具体的事実の意味」（cf. 第 2.5.3.2.節）が現われていると考えられる。

4.5.2.2. 反復動作

次に、完了体が反復動作を表す際にも用いられることがある。これは、先に確認した、完了体の個別的意味のうち、「例示的意味（наглядно-примерное значение）」と「一括化の意味（суммарное значение）」にあたるものである（cf. 第 2.5.3.2.節）。

「例示的意味」の完了体は以下のような例で見ることができる：

(2-111) Если вы хотите говорить по-русски, вы всегда можете прийти [PFV-INF] ко мне в субботу.
ロシア語を話したければ、土曜日ならいつでも来て頂いて構わないですよ。

「一括化の意味」を表す完了体は以下の例で見られる。例は Рассудова（1982）による（1982: 117）：

(2-112) Вам надо несколько раз повторить [PFV-INF] этот звук, следя за положением губ.
唇の位置に気を付けて、この音を何回か続けて繰り返す必要があります。

4.5.2.3. 事前の予告（警告）、危惧の念

これは否定辞を伴った場合に特有の用法で、完了体を用いて、「事前の予告（あるいは警告；предостережение）」や「危惧の念（опасение）」を表す場合がある。

「予告」や「警告」を表す完了体は以下のような例で確認することができる[100]：

(2-113) Очень прошу не уронить [PFV-INF].
くれぐれも落とさないで下さいね。

(2-114) Он старался ничем не выдать [PFV-INF] своего волнения.

[100] 同様の意味は、命令法の場合でも見ることができる。それについては下の 4.5.4.を参照されたい。

彼は自らの動揺をどうやっても表に出さないように努めていた。

(2-115) Не вздумай обмануть [PFV-INF]!
絶対だましたりするなよ！

「危惧の念」を表す完了体としては以下のような例がある：

(2-116) Боюсь опоздать [PFV-INF] к началу.
開始に遅れやしないか。

(2-117) Он может и не вспомнить [PFV-INF] всех имен и всех деталей.
彼はあらゆる名前や細々としたことを思い出せないかもしれない。

4.5.3. 不完了体が用いられるケース

4.5.3.1. 過程の意味

まず不完了体によって表されるのは、「過程の意味」である（Рассудова 1982: 98）。当該動作に従事することを示す際に用いられる。以下のような例を参照：

(2-118) Хочу вечером решать [IPFV-INF] кроссворд.
今晩はクロスワードをやりたいな。

(2-119) В воскресенье нам надо упаковывать [IPFV-INF] вещи.
日曜日には荷物をパッキングしないと。

(2-120) Завтра мне надо писать [IPFV-INF] рецензию.
明日は書評を書かないといけないんだ。

(2-121) Вечером мы собираемся играть [IPFV-INF] в шахматы.
今晩はチェスをするつもりだ。

ここでは、不完了体の「具体的過程の意味」（cf. 第 2.5.3.3.節）が現れている。

4.5.3.2. 単一の動作

次に、不完了体によって単一の動作を表すこともできる。不完了体が用いられる場合には、「当該動作への着手（приступ к действию）」の意味を表す（cf. Рассудова 1982: 99-102）。以下のような例を参照：

(2-122) Надо ложиться [IPFV-INF], уже 9 часов.
さあ寝ないと、もう九時だ。

(2-123) До начала спектакля осталось 40 минут, мы должны выходить [IPFV-INF].
舞台が始まるまであと 40 分だ。出かけないと。

(2-124) Повестка дня исчерпана, все желающие высказались, нужно заканчивать [IPFV-INF] собрание.
日程は終了しました。希望者は皆発言を終えましたし、会合をお開きにしましょう。

(2-125) Надо что-нибудь предпринимать [IPFV-INF]!

何かに取り掛からないと！

(2-126) Больному стало хуже, надо вызывать [IPFV-INF] врача!
病人の容態が悪くなった。医者を呼ばなくては！

(2-127) Мы уже опаздываем, хочешь — не хочешь, надо брать [IPFV-INF] такси.
もう遅れてるから、そうしたかろうがしたくなかろうが、タクシーをつかまえなきゃ。

これらの例で不定詞が表している動作は、全て、上で（cf. 第 4.3.2.1.節）見た「単一の動作」である（すなわち通常は完了体が用いられる）と考えられるが、こうした文脈で不完了体を用いると、「発話時点で念頭に置かれている（想定・期待されている）当該動作に、着手することを促す」という機能がある。また、文脈に応じて、上例（2-126）、（2-127）の例に見られるような、「切迫性（неотложность）」、「必然性（обязательность）」、「вынужденность（不可避性）」のようなニュアンスが加わる[101]。

また、移動動詞と共に不定詞が用いられ、ある動作をしようという意図を持った移動を表すことができる。その場合、その動作を表す不定詞の体は、主に不完了体が選択される。次のような例を参照（Рассудова 1982: 106）[102]：

(2-128) И вдруг, сорвавшись с места, побежал догонять [IPFV-INF] Золотухина. (Ю. Герман)
突然席から飛び上がると、ゾロトゥーヒンに追い付こうと走り出した。

下例（2-129）にあるような、やり取りの中で既に言及されており、話者も聞き手も了解している動作を不定詞で表す場合、不完了体が現れる（Рассудова 1982: 103）：

(2-129) — Пожалуйста, непечатай [PFV-IMP-SG] мне пару страниц.
何ページか印刷してちょうだい。
— Хорошо. Что печатать [IMPF-INF]?
いいよ。何を印刷すればいいの？

---

[101] Рассудова（1982）では、ここで述べた一連の意味ニュアンスは、どれも文脈の支持が必要であるとしている。それでもこれらの意味のうち、「動作の着手」の意味は、不完了体の意味とより親和性が高いとしている。それに対して「切迫性」、「必然性」、「不可避性」といった意味は、文脈に依存する割合がより高いと見なしており、そのため、これらは不完了体という形式に固有の意味であるとは考えていない（cf. Рассудова 1982: 102）。

[102] これとは別に、「目的」の意味を表す場合には、完了体も不完了体も用いうる（Рассудова 1982: 107-110）。以下のような例を参照：

① Он приехал сюда изучать [IPFV-INF] экономику края.
彼はこの地域の経済を研究するためにここにやってきた。

② Он приехал сообщить [IPFV-INF] о результатах изысканий.
彼は調査の結果を伝えるためにやってきた。

なお、これらの用法は上で見た「接語的用法」の一つ。本章第 4.4.2.節の「定語的意味」を参照。

ここまで見てきたような、単一の動作を不完了体で表すというケースでの、体の個別的意味は、通常「当該動作があったかなかったか」を問題とする場合に用いられる「一般的事実の意味」（cf. 第 2.5.3.3.節）であると通常解釈される。

4.5.3.3. 反復動作

不完了体によって反復する動作を表すことができる。例えば以下のような例を参照（Рассудова 1982: 110）：

(2-130) На этой станции поезд должен останавливаться [IPFV-INF].
この駅では列車が停まるはずです。

(2-131) Я прошу вас приносить [IPFV-INF] учебник на семинар.
ゼミには教科書を持ってきて下さい。

(2-132) Во время перерыва необходимо проветривать [IPFV-INF] помещение.
休憩の際には部屋に風を入れないといけません。

(2-133) Вы должны брать [IPFV-INF] газеты вечером.
晩には新聞を持ってこないといけません。

後の二例（2-132, 2-133）に見られるように、надо, нужно, необходимо, должен, обязан などの語と結合する場合、完了体と不完了体の対立によって表される意味的対立は、単一の動作か多回性を有する動作かという対立である（Рассудова 1982: 111）。

4.5.3.4. 禁止、不必要

下の節でも述べるように（cf. 第 4.5.4.節）、否定文の場合に特徴的なものとして、「禁止」や「不必要」といったニュアンスが不完了体によって表される場合がある。

「禁止」の意味を表す不完了体が現れる典型的なケースは、述語 нельзя との語結合の場合である：

(1-14) При красном свете нельзя переходить [IPFV-INF] улицу.
赤信号では通りを渡ってはいけません。【再掲】

Forsyth は、同様の用法を指して、「不許可（inadmissibility）を表現する場合には、不完了体が用いられる」と指摘している（Forsyth 1970: 248）。以下のような例を参照：

(2-134) Не могу рассказывать [IPFV-INF] это: мне не велели.
このことは話せないんだ。話すなと言われているんだよ。

先に見た、完了体の持つ「危惧の念」の意味の場合（cf. 第 4.5.2.3.節）と同様に、この例も、命令法の体の用法に類似性を見ることができる。これについては次節を参照されたい。

「不必要（ненужность, необязательность, отрицание необходимости）」のニュアンスを伝える場合にも不完了体が用いられる。以下の例を参照（Рассудова 1982: 122）：

(2-135) Он не должен оправдываться [IPFV-INF] перед нами.
彼は私たちの前で弁明する必要は無い。

(2-136) Не советую вам соглашаться [IPFV-INF] на это предложение.
この提案には同意しないことを勧めるよ。

4.5.4. 否定の意味要素を伴う不定詞の用法に関して

4.5.4.1. 不可能の意味と完了体、禁止の意味と不完了体

ここで、否定の意味要素を伴う不定詞の用法について改めて確認しておこう。

以下の統語的環境において用いられる不定詞が、否定の意味要素を伴っている場合には、それぞれの体の形態に、一定の意味が充てがわれる：

① 「可能性」を表す述語との語結合
② 不定法文
③ 命令法

多くのケースで、「不可能」の意味を表す際には「完了体」が選択され、「禁止」の意味を表す際には「不完了体」が選択されるという、共通した振る舞いが指摘されている。以下でそれぞれについて見ていこう。

4.5.4.2. 「可能性」を表す述語との語結合

本稿の対象である、「可能性」を表す述語との語結合のケースについては既に見てきた通りである。主に完了体にその意味が充てがわれているとされる：

(2-137) **Не могу** рассказать [PFV-INF] всего: это очень давно, и я многое забыл.
全ては話せないんだ。何しろ大分昔のことで、大方忘れちゃったからね。

不完了体を用いると、「禁止」（あるいは「不許可」）の意味になるとされる：

(2-134) Не могу рассказывать [IPFV-INF] это: мне не велели.
このことは話せないんだ。話すなと言われているんだよ。【再掲】

この体の形態とモダリティの意味の呼応が最も顕著に現れるケースは、無人称述語 нельзя と結合した場合である。以下の二例を参照：

(1-13) Здесь строят подземный переход, в этом месте улицу нельзя перейти [IPFV-INF].
ここでは地下道の建設が行なわれているので、この場所では通りを渡ることはできません。【再掲】

(1-14) При красном свете нельзя переходить [IPFV-INF] улицу.
赤信号では通りを渡ってはいけません。【再掲】

この両者は、先の二文と同様に、完了体が用いられている前者は「不可能」を表し、不完了体が用いられている後者は「禁止」を表している。

一方で、この一対一の対応から外れる例があるということは、本稿他で指摘されている通りである。Рассудова（1982）でも下のような例を挙げ、モダリティの意味の影響よりも、多回性の意味が優先されるケースを指摘している（Рассудова 1982: 125）：

(1-4) В этом кинотеатре нельзя показывать [IPFV-INF] широкоэкранные фильмы.
この映画館ではワイドスクリーンの映画は上映することができません。【再掲】

したがって、モダリティの意味を前面に出すか、あるいはアスペクトの意味を前面に出すかについては、話者に依存しているということになる。しかしながら、その話者による選択が、どの程度自由に行なわれうるのかという点についてまでは言及されていない。

4.5.4.3. 不定法文

前節で見たニュアンスは、他の統語的環境においても見ることができる。そのうちのひとつが不定法文における用法である。

例えば Рассудова では、下のような例文の対照が試みられている（1982: 124）：

(1-15) Вам не пройти [IPFV-INF] эту дистанцию. 【再掲】
(1-16) Вам не проходить [IPFV-INF] эту дистанцию. 【再掲】

完了体が用いられている前者は、当該動作が遂行できないことを表している（「この距離は無理だ」）のに対して、不完了体が用いられている後者は、当該動作を行なう必要がないことを表している（「この距離を行くことはない。」）。

「不可能」の意味が完了体に、「禁止」の意味が不完了体に充てがわれているとされている根拠は、この不定法文における用法との類似性にも根拠を求めているものと考えられる。

一方で、不定法文という構文それ自体が表す意味をどうとらえるかに応じて、モダリティの意味を、どの要素に帰することができるかは変わってくるとも考えられる[103]。

4.5.4.4. 命令法

不完了体に充てがわれている「禁止」の意味については、命令法における体の用法にも一貫性が見出されている。例えば次のような例を参照（Рассудова 1982: 139）：

(2-138) Пропустите [PFV-IMP] этого человека.
この人を通してあげて下さい。
(2-139) Не пропускайте [IPFV-IMP] этого человека.

[103] 構文それ自体に何らかの意味を見いだし定式化するという理論的な方向性は、Goldberg（1995）などに始まる、いわゆる「構文文法」という考え方にもつながっていくだろう。こうした点も含めて、人称文、無人称文、不定法文の間の意味的な平行性の有無については、稿を改めて検討する余地は大いにある。なお、この点については後の章（第六章）で、より具体的に問題提起を行なう。

この人は通さないで下さい。

肯定の命令の場合、通常（当該動作の反復性が念頭に置かれていない限りは）完了体が用いられるのに対して、否定の命令（すなわち多くの場合「禁止」の意味となる）の場合には、不完了体を用いることがノルマとなる[104]。

それに対して、否定の命令で、完了体を用いると、上で見た「事前の予告（警告）」のニュアンスが加わる：

(2-140) Не пропустите [PFV-IMP] шоу!
（うっかり）ショーを見逃さないで下さい！

この完了体のニュアンスは、他のケースとは趣を異にしているが、これは命令法という発話の性質（あるいは構文の表す意味）との関係からであると考えられる。

4.6. 本節のまとめ

本節では、ロシア語の不定詞の、形態論上、統語論上の諸特徴について見てきた。

ロシア語の動詞の定形と不定詞がそれぞれ備える文法的カテゴリーについても確認した。動詞の定形が備えている文法的カテゴリーは、「人称」、「体」、「相（態）」、「法」、「時制」、「性」、「数」であるのに対して、不定詞の備える文法的カテゴリーは、「相（態）」と「体」のみである。

不定詞の統語論における位置付けについても概観した。不定詞には、「接語的用法」と「非接語的用法」とがあり、本稿の対象である、述語と不定詞の語結合のケースは、接語的用法のひとつに含まれる不定詞の用法である。

また、不定詞の体の用法についても確認した。先の章（第一章）で既に確認している、「可能性」、「不可能性」などの他に、「単一の動作」、「反復動作」、その他の意味ニュアンス（「警告、危惧の念、動作着手への促しなど」を表す用法がある。

本節で見た、不定詞の体の用法を、体の形態に応じて分類すると、下表のようになる。それぞれの意味・ニュアンスなどに対応する個別的意味とともに示す：

表 2-42：不定詞の体の表す意味

不定詞の体	表される意味	対応すると考えられる個別的意味
完了体	単一の動作	具体的事実の意味
	反復動作	例示的意味
	警告、危惧の念	例示的意味
不完了体	過程の意味	具体的過程の意味
	単一の動作	一般的事実の意味
	反復動作	反復の意味
	禁止、不必要	一般的事実の意味

[104] なお、否定の命令において完了体を使った場合には、「予告」や「警告」といったニュアンスが伝わることは上で既に見た。本章第 4.5.2.3.節を参照。

表される意味を基準にしてまとめ直すと下表のようになる：

表 2-43：不定詞の体のカテゴリーによって表される意味・ニュアンス

表される意味	用いられる不定詞の体	対応すると考えられる個別的意味
単一の動作	完了体	具体的事実の意味
	不完了体	一般的事実の意味
反復動作	完了体	例示的意味
	不完了体	無制限反復の意味
警告、危惧の念	完了体	例示的意味
過程の意味	不完了体	具体的過程の意味
禁止、不必要	不完了体	一般的事実の意味

5. 可能性の意味を含む述語を持つ文の意味・統語構造の分類の試み

5.1. 本節の概要：意味・統語構造の分類

本節では、可能性の意味を持つ述語を有する文を、その意味・統語構造に応じて分類するという試みを行なう。

従来の先行研究においては、明示的にではないものの、意味・統語構造による体の選択についての記述がなされている。例えば、上に述べたような、不可能の意味の場合には完了体が選択されるという「定式化」（Рассудова 1982: 123-126 など）や、あるいは、Forsyth による「非常にしばしば、不可避の現象というのは一回の動作なので、完了体の動詞が不完了体の動詞よりも普通である」といった「定式化」（Forsyth 1970: 262-263）などが挙げられる。

しかし、これらの一連の記述は、阿出川（2004, 2005）でも指摘されている通り、断片的なものに留まっており、そこで扱われている不定詞の動詞語彙などの面で克服されるべき課題があるため、未だ改善の余地は残されていると言ってよいだろう。

そのためには、まず対象の全体像を把握するために、可能性のモダリティの述語を含む文の、想定しうる全ての意味・統語構造について考慮し、それぞれの構造がどのように実際の発話で現れてきているか、またそれぞれの構造における体の選択の実態はどうなっているかについての調査を行なう余地があると考えられる。

その準備として、この節では、論理的に想定しうる意味・統語構造のタイプについて検討してみよう。

先に、モダリティの述語を含む文を構成する意味・統語的要素として、モダリティの意味を表す述語、命題を示す語（主語、不定詞）、否定辞といった要素を取り上げた（cf. 第 3.5.2.節）。以下ではそれらを便宜的に以下の略号で表すことにする：

表 2-44：統語的要素とその略号

意味・統語的要素	略号（元にした語）
モダリティの意味を表す述語	M（Modality）
不定詞（句）	Inf（Infinitive）
否定辞	Neg（Negation）

モダリティの意味を持つ述語を含む文は、これらの略号の組み合わせを用いて表すと以下の四つのタイプ（Ⅰ～Ⅳ）の意味・統語構造に集約することができる：

表 2-45：意味・統語構造の 4 タイプ

タイプ	意味・統語的要素とその結合
Ⅰ	M – Inf
Ⅱ	[M – (Neg – Inf)]
Ⅲ	[(Neg – M) – Inf]
Ⅳ	[(Neg – M) – (Neg – Inf)][105]

上の表記中、記号の間にあるハイフンは、二つの記号の関係が語結合の関係にあることを示す。またそれぞれの括弧は、意味的に優先される結合（語結合）を示す[106]。

ここで、否定辞の位置に注目して、モダリティの述語と否定辞が直接結合していない構造を「肯定構造」、直接結合している構造を「否定構造」と便宜上分類すると、前者の二タイプ（タイプⅠ、Ⅱ）が「肯定構造」に、後者の二タイプ（タイプⅢ、Ⅳ）が、「否定構造」ということになる。以下の節で、それぞれの構造について順に見ていくことにする。

5.2. 肯定構造

5.2.1. タイプⅠ

タイプⅠは、「可能性」の意味を表す際の、もっとも基本的な構造である。以下のような文が分類される：

(2-141) «Какая дура, как я ***могу*** <u>думать</u> о смерти, когда у меня дочь.» [UC][107]
「なんて馬鹿なんだろう、娘がいるのに何だって死ぬことなんて考えられるだろう。」

[105] あるいは、下のような記述も可能であろう。括弧の用法については下の注を参照：

{Neg – [M – (Neg – Inf)]}

[106] 丸括弧、角括弧（ [ ] ）、波括弧（ { } ）の順に用いる。なお、否定辞（Neg）は、常に否定される語の直前に用いて語結合を形成するので、例えば「Inf – Neg」といった語のつながりは、語結合としてはあり得ないということになる。

[107] 以下例文中、モダリティの意味を表す述語はボールドの斜字体で、不定詞には下線を施し、否定辞（及びそれに準じる語句）は斜字体で示す。

(2-142) Только через демократию ***можно*** сполна включить человеческий фактор в глубокие преобразования общества, дать ему мощный импульс. [UC]
民主主義を経て初めて、社会の深い変革に人間的な要素を加えることができ、社会に巨大な衝撃を与えることができる。

5.2.2. タイプⅡ

タイプⅡは、不定詞に否定辞が結合するケースである。「可能性」のモダリティの変種と位置付けることができるだろう。次のような文が分類される：

(2-143) Нейтринные «морщины» ***могли*** служить центрами гравитационной конденсации и вместе с тем *не* оставить «рубцов» на сохранившемся до наших дней отблеске «вселенского жара». [UC]
ニュートリノの「ひだ」は、重力の凝結の中心ともなることができたし、同時に、今日まで保持されてきている、「宇宙の熱」の反射に対して「傷跡」を残さないということも可能だった。

(2-144) Казалось бы, ничтожное количество, и ***можно*** было бы *не* обращать на них особого внимания. [UC]
取るに足らない数だろうと思われるし、それらに特段注意を払わなくてもいいだろう。

5.3. 否定構造

5.3.1. タイプⅢ

タイプⅢは、「不可能性」を表す基本的な構造である：

(2-145) Я *не* ***могу*** назвать требования закона «пустой фразой». [UC]
その法規を「空虚なフレーズ」と呼ぶことはできない。

この構造には、述語 нельзя を含む文も含まれる[108]：

(2-146) Ни одному больному ***нельзя*** отказать в лечении, каким бы ни был уровень его материальной обеспеченности. [UC]
その患者の物質面の保証がいかなる水準のものであったとしても、いかなる患者に対しても治療を断ることはできない。

なお、ここで「否定辞」として分類しているものには、「не」の他に、「вряд ли（恐らく～ない)」も否定辞に準じるものとして扱っている。例えば以下のような例を見る

[108] 一般に、述語 можно の否定形は нельзя であるとされており、否定辞 не と можно の結合で不可能性を表すというのは許容されない。しかし、本文以下の例で示すように、вряд ли と можно の結合のパターンは少ないながらも観察できる。

ことができる：

(2-147) Согласитесь, *вряд ли* ***можно*** считать это разорительной платой.　[UC]
これを破産しそうなほどの料金とみなすことは出来そうもないですよね。

(2-148) Во-первых, *вряд ли* ***можно*** преувеличить роль ЦРУ, других разведок, а также западной пропаганды в разжигании конфликта между Ираном и Ираком и вклад торговцев оружием, да и некоторых правительств из полутора десятков стран в поддержании огня.　[UC]
第一に、CIA、その他の国の諜報機関、またイランとイラクの間の紛争を焚き付けるような西側のプロパガンダの役割と、武器商人に加えて、戦争を支持している数十ヶ国のうちのいくつかの政府の貢献を、過大に評価することはできそうもない。

5.3.2. タイプⅣ

タイプⅣは、いわゆる二重否定の構造である。以下のような文がこのタイプに属する：

(2-149) Между тем признание этого человека *не* ***могло*** *не* внушать уважения: никто ведь не побуждал его говорить о переменах в миросозерцании.　[UC]
そのうちに、この人の告白は尊敬の念を起こさせざるをえなかった。というのも誰も彼に世界観の変化について話すようには促さなかったからだ。

(2-150) ***Нельзя*** *не* учитывать того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР.　[UC]
トロツキーとトロツキストたちが、レーニンの死後このことが急進的な形で明らかになったように、ソ連邦における社会主義の建設というレーニンの思想の反対者だったということは、考慮しないわけにはいかない。

5.4. 論理的に可能な（想定される）意味・統語構造

ここまでで、可能性のモダリティの意味を表す述語を含む文の、四つの意味・統語構造について確認した。この四分類について、それぞれ内的可能性と外的可能性のケースが、論理的には想定しうるということになる。

それらを考慮した上で、論理的に想定しうる意味・統語構造としては下表にあるように合計で八つということになるだろう。下表中で、モダリティの述語の後に、コロンに続けて「INT」、「EXT」という文字が加えてあるのは、それぞれその述語が「内的（internal）可能性」、「外的（external）可能性」を表すものであることを示している。

表 2-46：論理的に可能な意味・統語構造

	タイプ	意味・統語的要素とその結合	要素の結合＋可能性の下位分類
肯定構造	Ⅰ	M – Inf	M: INT – Inf
			M: EXT – Inf
	Ⅱ	[M – (Neg – Inf)]	[M: INT – (Neg – Inf)]
			[M: EXT – (Neg – Inf)]
否定構造	Ⅲ	[(Neg – M) – Inf]	[(Neg – M: INT) – Inf]
			[(Neg – M: EXT) – Inf]
	Ⅳ	[(Neg – M) – (Neg – Inf)]	[(Neg – M: INT) – (Neg – Inf)]
			[(Neg – M: EXT) – (Neg – Inf)]

後の章（第四章）において、上記それぞれの構造がどの程度実際のテキストでは用いられるか、またそれぞれの構造で、不定詞の体の形態がどのように選択されているかという実際のデータを確認する。

6. 第二章のまとめ

この第二章では、本稿が立脚する理論的な背景となる、言語における二つの大きなカテゴリーである、アスペクトとモダリティのカテゴリーを中心に概観し、また、ロシア語の不定詞という形態、そして以下の考察で必要となってくる、モダリティの意味を含む文の意味・統語構造に応じた分類について確認した。

まず第一節では、人間により概念化される「状況」の構造と、それを表現する主な言語手段のうちの一つである述語の分類、いわゆる「状況の性質（акциональность; actionality）」について確認した（cf. 第 1.2.節）。「動態性」、「漸次的変化」、「限界点」などの意味特徴を基に分類が行なわれる。

また、このような、言語における述語の分類に関する議論の先鞭をつけたとも言える、Vendler（1967）の分類についても確認した。

Vendler（1967）による、「活動（activities）」、「達成（accomplishments）」、「到達（achievements）」、「状態（states）」という四分類は、本稿が依拠しているПлунгян（2011）における、「限界のないプロセス」、「限界のあるプロセス」、「出来事」、「静態」という状況の性質に、それぞれ対応することを確認した（cf. 第 1.4.節）。

第二節では、アスペクトとロシア語の体のカテゴリーについて確認した。

まず、一般言語学的視点からの記述として、Плунгян による研究（2011）を援用し、アスペクトの意味を、まず「一次的アスペクト（線状的アスペクト）」と「二次的アスペクト（数量的アスペクト）」とに分類した上で、それぞれについて検討した（cf. 第 2.4.2.節、第 2.4.3.節）。それに先んじて、このような意味的対立を想定する必要な理由についても、ロシア語の例によって確認した（cf. 第 2.2.節）。

「一次的アスペクト」とは、「状況」を構成している部分（「状況」の断片）を指し

示す機能を持つ、言わば「ミクロな視点」を持ったアスペクトである。「予期・予測のアスペクト」、「起動相」、「持続相」、「進行相」、「結果相」、「パーフェクト」といった一連のアスペクトの意味が含まれる。

対して、「二次的アスペクト」とは、「状況の性質」が変化したことに伴って、アスペクトの形式が担う意味にも変化が生じたものである。主に当該状況の数量性(回数)に関わる意味を表し、言わば「マクロな視点」から当該状況を捉えるのが主な機能である。「反復相」、「習慣相」、「倍数相」、「単一相」、「配分相」といった一連のアスペクトの意味が含まれる。

次に、ロシア語において、このアスペクトのカテゴリーを表現する主たる言語手段である、体という文法的カテゴリーについて概観した（cf. 第 2.5.節）。

「個別的意味」と「一般的意味（不変的意味）」という対立を想定する、伝統的なロシア語アスペクト論の理論に基づき、Бондарко（1971）、Рассудова（1982）のそれぞれの研究において提案されている、体の「個別的意味」のリストについて確認した（cf. 第 2.5.3.節）。また、これらの伝統的な立場とは若干異なる切り口からの個別的意味の記述の試みとして、Храковский（2002）の研究も取り上げた（cf. 第 2.5.4.節）。

また、ロシア語（あるいはスラヴ諸語）のアスペクト論における伝統的な概念である、「体のペア」についても確認した（cf. 第 2.6.節）。そこで、「体のペア」の有無に応じて、ペアを成す動詞、単体動詞、両体動詞などの「動詞のタイプ」について見た。

最後に、上で見た、一次的アスペクトと二次的アスペクトが、それぞれどのようにロシア語の体のカテゴリーによって表されるかについて確認した（cf. 第 2.7.節）。

第三節では、モダリティのカテゴリーについて確認した。ここでも一般言語学的な視点からの考察には、Плунгян（2011）の記述を援用している。それに従うと、モダリティは大きく分けて、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」とに分類することができる。この「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」という大きな枠組みに沿って、ロシア語のモダリティの意味とその表現手段についての整理を改めて行なった。本稿の対象となる、「可能性」のモダリティは、「非現実」のモダリティに属すると位置付けられるが、その「可能性」のモダリティについて、その意味の下位区分を、主に ТФГ（1990）に沿う形で行なった。それに従えば、「可能性」の意味は、まず「内的可能性」と「外的可能性」とに大きく二分される。前者は、「先天的可能性」と「後天的可能性」とに分類が可能で、後者は、「義務的可能性」と「非義務的可能性」とに分類が可能である。

本稿で取り扱う述語が表す「可能性」の意味は、下表のようになる：

表 2-47：可能性の意味とそれぞれの意味を表す述語

可能性（大分類）	可能性（下位分類）	述語
内的可能性	先天的可能性	способен, в силах, в состоянии, мочь
	後天的可能性	уметь, мочь
外的可能性	義務的可能性	можно, нельзя, мочь
	非義務的可能性	нельзя, возможно, невозможно, мочь

また、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」の双方を表すことのできる、述語 мочь も対象となっていることから、この述語が表す「評定のモダリティ」も分析の対象に含めることとした。

続く第四節では、ロシア語の不定詞について、その形態論的特徴、統語論的特徴について確認した（cf. 第 4.2.節、第 4.3.節）。

不定詞の形態でも保持される動詞の文法的カテゴリーは、本稿の対象である「体」の他に「相（態）」がある。

ロシア語の不定詞の用法には「接語的用法」と「非接語的用法」とがあり（cf. 第 4.4.節）、本稿の対象である述語と不定詞の成す語結合は、「接語的用法」に分類されるものである。

次に、ロシア語における不定詞の体のカテゴリーが表す意味について確認した（cf. 第 4.5.節）。本稿の対象である、「可能性」、「不可能性」などの他に、「単一の動作」、「反復動作」といったアスペクトの意味を表し、またその他の意味ニュアンス（「警告、危惧の念、動作着手への促しなど」を表す用法がある。

そして、第五節では、本稿の対象となる、可能性のモダリティの意味を含んだ文の、意味・統語構造の分類を試みた。

可能性のモダリティの意味を含む文の、主要な意味・統語的要素として、「述語」、「不定詞」、「否定辞」の三要素を取り上げたが、このそれぞれの要素の組み合わせにより、可能性のモダリティの意味を含んだ文は、下の四つのタイプに大きく分類が可能である：

表 2-48：意味・統語構造と可能性の意味

	タイプ	意味・統語構造	対応する可能性の意味
肯定構造	Ⅰ	(M – Inf)	可能性
	Ⅱ	[M – (Neg – Inf)]	可能性の変種
否定構造	Ⅲ	[(Neg – M) – Inf]	不可能性
	Ⅳ	[(Neg – M) – (Neg – Inf)]	不可避性

それぞれに、可能性の種類に下位分類（内的可能性と外的可能性）が想定し得るため、論理的には合計で八種類に分類が可能ということになる（cf. 第 5.4.節）。

以上を、本稿における共通認識とした上で、以下の章から具体的な対象の分析を試みる。

第三章

本研究のデータ：サンプルの収集、取捨選択及び分類

0. 本章の概要

本章では、本研究での分析を行なうにあたり、コーパスからサンプルを収集する際の手順、及びサンプルから言語データを選別するためのいくつかの基準についての確認を行なう。

本研究で分析対象とするデータは、言語コーパスから収集しているが、まず次の第1節で、言語コーパスからサンプルを収集する理由について述べ、合わせてロシア語を対象とする言語コーパスの概要について確認する。

次に、サンプルの収集と取捨選択に関する、以下のそれぞれの手続きについて述べていくことにする：

① サンプルの収集とその方法
② サンプルの取捨選択とその基準

第2節では、サンプルをコーパスから収集する際の方法について詳しく見ていく（上記①）。その際、本研究の目的を果たすためには、どのようなデータが必要かについて改めて確認する。

第3節では、上記①の作業により得られたサンプルから、本研究の目的に沿う物のみを抽出するプロセスについて確認する（上記②）。サンプルの取捨選択を行なうために、いくつかのフィルターに通して、最終的に分析対象とするデータを取り出す。

1. 言語コーパスの利用：コーパスの概要

1.1. 言語研究における言語コーパスの利用

現代の言語学においては、周知の通り、分析を行なうにあたって、電子版の言語コーパスを利用するというのは、最早一般化した手法であると言ってよいだろう。

本研究も電子コーパスを用いるという点においては、そうした流れに沿うものではあるものの、いくつかの留意点を述べておくことは必要だろう。

本研究は、徹頭徹尾統計的手法を用いて分析を行ない、最終的な結論を導く、という性質の研究では必ずしもないため、計量的・統計的側面に重きを置いた、厳密な意味での（あるいは狭義の）「コーパス言語学」の手法を採用しているものではない。そのため、分析の手法という観点からは、コーパスからのデータ収集というプロセスは必ずしも必要ではないとも思われるだろう。しかしながら、それでもなお、コーパスからのデータを利用することには、以下に述べるような積極的な理由を見出すことができる。

それは主に以下の二点にまとめることができるだろう：

① 多数の用例を集められること
② 文体的な「偏り」を避けられる可能性が大きいこと

従来のアスペクト研究においては、コーパスから収集したある程度の数量的な大きさを持ったデータに基づいて動詞の文法的行動を観察、分析した上で何らかの結論を提示する、といったタイプの試みが成されていなかった[1]。

また、従来のアスペクト論の分野での研究の中には、各研究者の経験則による「独断」により、体の用法という観点から見て特徴的な、一部のある特定の動詞だけが取り上げられ、それについての記述が行なわれるという方向性のものもある。そうした研究では、結果として、体の意味の記述が充実している動詞がある一方で、意味の記述がほとんど行なわれていない動詞が放置されている、といったように、動詞全体という視点から見ると、言わば「虫喰い」があるような状態の記述になっているというケースがある[2]。このようなタイプの研究に対しては、コーパスなどを利用することでそうした不備を解消した上で、改めて対象に接することで、新たな知見が得られる可能性がある。

また、コーパスを利用する最大の利点として、データの性質について、コーパスからデータを収集することにより、収集する言語データの文体的な偏りを避けられる、という点が挙げられる。

様々な文体のテキストを用意し、手作業で満遍なくデータを収集するのには自ずと限界がある。独自にデータを収集し、且つそのことについて言明している研究の具体的な例としては、上で見た（cf. 第一章、第 3〜4 節）、Forsyth（1970）がある。そこでは、文学作品からの例文が多く採用されている。しかし、やはり特定の文学作品からの用例が多くなってしまっており、その意味で、文体的な偏りが存在しているのではないかという疑念を抱かせる余地があることは否めない。

こうした、データ収集における「恣意性」とも言えるものを、極力排除するために、本研究では、その分析対象とするデータの収集にあたり、試みにコーパスを利用することにした。

次節では、ロシア語を対象とするコーパスについて確認する。

1.2. ロシア語を対象とする言語コーパス

1.2.1. 概要：ロシア語を対象とする主要なコーパス

ロシア語を対象としている言語コーパスとしては主に以下のようなものがある：

① ウプサラ・コーパス

[1] もちろん、研究者個々人が収集したサンプルは存在しているだろうが、そのサンプル集そのものに関する情報が開示されておらず、当該研究の追試の可能性が限りなく低いという点で、本稿で行なっているようなコーパスを用いた試みとは性格が異なってくる。

[2] そうした観点から既存の研究の見直しの提案を具体的に行なっている研究としては、阿出川（2007）を参照。

② テュービンゲン大学のコーパスシステム
③ ロシア・ナショナル・コーパス
④ AOT のコーパスシステム
⑤ Максим Мошков のライブラリー（Lib.ru）の電子テキスト

「コーパス」という術語をどのような意味で用いるかについては、一定の慎重さが求められるが、ここでは広義で用い、いわゆる「生のテキスト（raw text)」も含めて取り扱うことにする[3]。

以下で、上記それぞれのコーパスについて概観する。

1.2.2. ウプサラ・コーパス

『ウプサラ・コーパス』は、Lennart Lönngren（1942-）の手になる、ロシア語を対象とする電子コーパスの先駆的存在のサンプルコーパス[4]である。1988～89 年の新聞・科学文献からのテキスト、1960～88 年に出版された文学作品等からのテキストから構成されている。総語数は 100 万語から成っている。今となってはテキストの年代も古く、また規模としても大きい部類のものではなくなってしまったが、サンプルコーパスとしてのその価値は未だ衰えていないと考えられる。

なお、このウプサラ・コーパスのテキストデータは、ウプサラ大学のウェブページ内で公開されており、自由に閲覧、使用することができる[5]。

1.2.3. テュービンゲン大学のコーパスシステム

次に、テュービンゲン大学がウェブ上に提供しているオンラインコーパス[6]が挙げられる。

このシステムでは、その構成するテキストの性格に応じて,「現代語コーパス」、「20 世紀文学作品コーパス」、「19 世紀文学作品コーパス」と大まかに分類された上で各種のサンプルコーパスが提供されている。それぞれのジャンルを構成するのは以下のコーパスとなっている：

---

[3] 一方、狭義で用いる際には、全ての語に文法情報のタグなどが付加され、メタ情報まで整備されているものを指すことができるだろう。

[4] 「サンプルコーパス」と「モニターコーパス」の違いに関しては、齋藤他（2005）を参照されたい（2005: 23）。

[5] 以下の URL でオリジナルのテキストファイルが配布されている（2013 年 8 月確認）：

http://www.moderna.uu.se/slaviska/ryska/corpus/

なお、書籍の形で頻度辞典も出版されている（ЧССРЯ 1993）。

[6] URL は以下の通り（以下は英語版のトップページ；ドイツ語、英語、ロシア語の三言語のトップページが用意されている）：

http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html

なお、このコーパスを作成、公開したプロジェクトなどについての解説としては小林（2003）がある。

表 3-1：テュービンゲン大学のコーパスシステムのテキスト

コーパス名	コーパスを構成するテキスト、作品
「現代語コーパス」	ウプサラ・コーパス
	インタヴュー
	アガニョーク電子版
「20 世紀文学作品コーパス」	マリーニナ（А. Маринина）
	ブルガーコフ散文（М. Булгаков: Проза）
	ブルガーコフ選集（М. Булгаков: Собранное）
	ルィバコフ（А. Рыбаков）
	イリフ・ペトロフ（Ильф и Петров）
	ストルガツキイ兄弟（А. & Б. Стругацкие）
	推理小説（Детективы）
「19 世紀文学作品コーパス」	レフ・トルストイ（Л. Толстой）
	トゥルゲーネフ（И. Тургенев）
	ドストエフスキー（Ф. Достоевский）
	レスコフ（Н. Лесков）

「現代語コーパス」のうち、『インタヴュー』コーパスは、1996 年から 2002 年の各種インターネット上のサイトのインタヴュー記事から収集したテキストから成っており、総語数は 288423 語とされている。

『アガニョーク電子版』は、同名雑誌のウェブ版[7]の、1996 年から 2002 年の間の記事のテキストデータによって構築されているサンプルコーパスである。このことから、このコーパスは、1960～1989 年の時期のテキストを対象としているウプサラ・コーパスの欠を補うために、ウプサラ・コーパスが作られた後の時代のロシア語を反映したコーパスを構築するという意図の下で製作されたものと考えられる。ただし、このコーパスは、コーパス全体の語数が明らかにされていないという点で利用に際しての難がある[8]。

この、テュービンゲン大学のコーパスシステムに含まれているコーパスには、いずれも文法情報を表わす、いわゆる「タグ」が付加されていないため、純粋な文字列検索のみが可能で、文法情報を加えての検索を行なうことは出来ないようである。

[7] URL は以下の通り：

http://www.ogoniok.com/

過去の記事のアーカイブ（1996～2008 年分）は以下の URL において公開されている：

http://www.ogoniok.com/archive/

[8] しかし、ウプサラ・コーパスの 100 万語をはるかに超えていることは、任意の語の検索結果からも容易に推測できる。例えば、文字列「это」を検索した場合、ウプサラ・コーパスでは 3733 例が得られるのに対して、Огонек のコーパスでは 39871 例という結果が返されることから、単純な推測では、ウプサラ・コーパスの規模のほぼ 10 倍、つまり 1000 万語程度だろうと予想される。

なお、いくつかのコーパスには、2004 年 2 月の調査時点で、不備な点がいくつかあり、データとして使用する際には注意を払わなければならないものがある[9]。

また、本稿執筆時点（2013 年 8 月）では、システム自体が機能していないようである[10]。

1.2.4. ロシア・ナショナル・コーパス

2000 年代に入って、ロシアにおいても電子コーパスを利用した言語研究というものが盛んになっており、そうした背景を元に開発に着手されたのが『ロシア・ナショナル・コーパス（Национальный корпус русского языка）[11]』である（以下「ナショナル・コーパス」と略す）。

British National Corpus（BNC）の規模を目指して開発されたモニターコーパスで、現在においてもサンプルの増強、コーパスの機能の追加、規模の拡張等が行なわれている。その構築には、ロシア科学アカデミーヴィノグラードフ記念ロシア語研究所（Институт русского языка имени В.В. Виноградова）、またロシアにおける最大のウェブ検索システムのベンダーである Яндекс[12]が中心的に関わっており、規模という観点からは、ロシア語を対象とするコーパスでは現時点で最大のものと考えて差し支えないだろう。本稿執筆時点（2013 年 8 月）で、「基本コーパス（основной корпус）」の総語数だけでも、229,968,798 語と成っている。

特定のプラットフォームに依存することなく、ウェブブラウザを利用できる環境さえあれば、誰でも無料で利用することができる。

様々なジャンルのテキストを対象として検索が可能であり、上述の「基本コーパス」の他に、「統語論情報コーパス（синтаксический корпус; 757,794 語）」、「新聞記事コーパス（газетный корпус; 173,521,766 語）」、「パラレルコーパス（параллельный корпус; 15,842,627 語）」、「学習者コーパス（обучающий корпус; 664,751 語）」、「方言コーパス（диалектный корпус; 194,283 語）」、「韻文コーパス（поэтический корпус; 9,202,362 語）」、「口頭表現コーパス（устный корпус; 10,361,479 語）」、「語のアクセントに関するコーパス（акцентологический корпус; 12,681,912 語）」、「マルチメディアコーパス（мультимедийный корпус; 3,314,535 語）」、「歴史文書コーパス（исторический корпус）」の各種のコーパスを利用することが可能である。

また、特筆すべきは、単なる文字列検索だけでなく、メタ情報を利用した検索も可

---

[9] 筆者が確認しているものとしては、まず「ルィバコフ」のコーパスでは、データとして出力されるテキストの句読法が不正確なものがある。また「イリフ・ペトロフ」のコーパスでは、検索のヒット数は提示されるものの、肝心のテキストデータが表示されない。これらの不具合が、筆者の環境に限って発生するものなのかどうかについては現在調査中である。

[10] 本稿で行なった分析に際しては、ウェブ上に出力された結果をテキスト形式でローカル環境に保存したものに対して、コンコーダンサーを利用することにより簡易的なコーパスとして利用している。

[11] URL は以下の通り：

http://www.ruscorpora.ru/

[12] URL は以下の通り：

http://www.yandex.ru

能だという点であろう。多くの他のコーパスでも用意されている、形態論的情報、統語論的情報による検索に加え、意味論的情報[13]による検索も可能である。

難点としては、同綴異義語（омонимия）を解決する処理が完了していないという点が挙げられるだろう[14]。そのため時に不便を強いられることもあるものの、現在ロシア語がどのように使用されているかという実態を調べる上で、既に極めて重要なツールとなっているということは疑う余地がないだろう。

公開初年は 2003 年であり、そこから 10 年足らずというごく短い時間で、ロシア語を対象とするコーパスの中心的存在となったと言える。このコーパスを利用した研究の成果も既にいくつか発表されている[15]。

また、公開当初は Macintosh 環境において、検索結果の出力が不完全であるなどのプラットフォームの差異に起因する不備も散見されたが、現在は解消されているようである[16]。

1.2.5. その他のコーパス

上では他に、「AOT」のコーパスシステム（上記④）と、「Максим Мошков のライブラリー（Lib.ru）」の電子テキスト（同⑤）とを挙げたが、本稿では採用していないため、ここでは簡単にその性格を見るに留める。

AOT のコーパスシステム[17]について、これはロシア語に対するテキスト処理のプロジェクトの一環として、ロシア語の検索システムも用意されており、自由に利用が可能だった。現在は、プロジェクトの中心的人物が Яндекс に勤めているため、こちらのプロジェクト自体は、本稿執筆時現在は停止している模様で、実質的にその成果は上のナショナル・コーパスにも還元されているようである[18]。

「Максим Мошков のライブラリー（Lib.ru）[19]」は、古典作品から、現代作家によ

---

[13] この意味論的情報の基礎となっている辞書は、オージェゴフの辞書（СО）、ウシャコフの辞書（СУ）、アカデミー四巻本の辞書（СРЯЕ）、同十七巻本（ССРЛЯ）、Шведова（Наталия Юльевна; 1916-2009）を中心に編纂されている「ロシア語意味論辞典（РСС）」、Бабенко（Людмила Григорьевна; 1946-）による辞書（ТСРГ 1999）、Апресян が中心になって編まれた類義語辞典（НОСС 2004）などである。以下の URL に情報が提供されている：

http://www.ruscorpora.ru/corpora-sem.html

[14] 本稿執筆時点（2013 年 9 月）。

[15] 例えば、Результаты и перспективы（2005）、Труды（2004）などを参照。また、このコーパスに基づいた頻度辞典も出版されている（ЧССРЯ 2009）。

[16] ナショナル・コーパスの詳しい利用法については以下のドキュメントが用意されている：

http://www.ruscorpora.ru/instruction-main.pdf

また、技術的側面からの同コーパスの利用法について触れられているものとしては、雲越（2005）がある。

[17] URL は以下の通り：

http://www.aot.ru/index.html

[18] なお、このコーパスシステムの概要については、水野（2004）を参照されたい。

[19] URL は以下の通り：

http://www.lib.ru/

るもの、あるいは翻訳作品まで、幅広いジャンルに渡る文学作品のテキストを公開しているサイトである。

このサイト自体は、本文テキストに対する検索システム等を備えている訳ではなく、また提供されているテキストは、「生のテキスト（raw text）」で、文法情報などが付加されている訳ではない。そのため、狭義のコーパスとは位置付けられないが、逆に言えば、技術さえあればここで提供されているテキストを元にして、自由なコンセプトで（狭義の）コーパスを構築することも可能だろう。

1.3. 本研究で採用したコーパスと採用の理由、その他の留意事項

本研究でデータとして利用するサンプルの収集に際しては、主なものとして「ウプサラ・コーパス」のデータを利用した。これは、ロシア語を対象としたコーパスとして既に定評があり、またその性格がサンプルコーパスであるという点にある。

例えば、ナショナル・コーパスのようなモニターコーパスの場合、そのコーパスを構成しているデータ全体は、絶えず変化している状態であり、任意の語、あるいは任意の文字列を検索する場合に、得られる結果が検索時に応じて異なってしまう可能性が排除できず、データとして処理する際の扱いが煩雑になってしまう。一方、サンプルコーパスであれば、そのようなコーパス内部の流動性は無いため、検索の結果の扱いが容易になる。

ウプサラ・コーパスの抱える最大の難点としては、上述の通り、既に構築されてから大分月日が流れてしまっていることから来る、「古さ」が挙げられるだろう。最新のロシア語の動向を追う場合には、ウプサラ・コーパスではもはや言語の使用実態を反映していないのではないかという疑念が生じるのは禁じ得ない。しかしながら、今回の研究の用途に照らした場合、その対象がいずれも基本的な語であるということから、そうした時間の経過による意味や用法の変化は大きくないと考え、ウプサラ・コーパスでも十分目的を果たすことができると判断した。

なお、ウプサラ・コーパスの利用に際しては、オリジナルのテキストファイルをウプサラ大学のウェブページ（上述）より入手し、ローカル環境に保存したものに、筆者が若干の加工を加えた[20]上で利用している。

コーパス内の文字列の検索には、原則的に、ローカル環境で AntConc をコンコーダンサーとして利用している[21]。また、適宜テュービンゲン大学がウェブ上に提供しているオンラインコーパス上での検索も行なっている。

---

[20] ここで行なった「加工」とは、キリル文字が独自の翻字法によって翻字されている状態で配布されているオリジナルのテキストに対して、それを筆者がキリル文字に置換するというものである。

[21] 早稲田大学の Lawrence Anthony 氏が提供している、クロス・プラットフォームのコンコーダンスソフトである。基本的に学術目的での使用については無償で利用できるが、利用上のライセンスについては一定の制限が設けられているようなので、詳細については各自において確認されたい。なお、このソフトの概要及び使用法の解説、またロシア語を対象として利用する場合の研究事例などを扱ったものとしては、水野、阿出川（2006）を参照されたい。ソフトウェアの配布先の URL は以下の通り：

http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html

本稿で利用しているのは Macintosh 版のバージョン 3.3.5.（本稿の執筆時点ではベータ版）である。

また、補助的な位置付けとして、上のウプサラ・コーパスからのサンプルに加え、必要に応じて、上述の「アガニョーク電子版」コーパス（cf. 第 1.2.3.節）と「ナショナル・コーパス」（cf. 第 1.2.4.節）からもデータを補完的に採っている場合がある。これは、ウプサラ・コーパスが改善点として抱えている、テキストの時代的な欠如部分を補うことができるだろうと判断したためである。なお、この二つのコーパスからのサンプル収集は、あくまでも補助的な役割を求めてのものであり、以下本稿で示すサンプルの数量的分布についての情報には含められていない。

以下例文を挙げる場合には、その末尾に、どのコーパスからのデータであるかを示すために、下表に示した略号を角括弧に入れて（例： [UC], [RNC], [Ogonek]）付することにする：

表 3-2：コーパスの種類とその略号

コーパスの種類	略号
ウプサラ・コーパス	UC
Огонек 電子版コーパス	Ogonek
ナショナル・コーパス	RNC

2. サンプルの収集：文字列による検索

2.1. サンプル収集にあたっての目的

本節では、コーパスからサンプルを収集する方法について確認する。

上で述べた通り（第一章）、本研究の対象となる言語単位は、「可能性」のモダリティの意味を含む語と、それと語結合を成す不定詞である。本研究の所期の目的の一つとして：

イ）どのような述語（モダリティ形式）が、どの程度用いられているか
ロ）それらの述語がどのような不定詞と語結合を成しているか
ハ）それらの不定詞は、どちらの体の形態で用いられているか

これらの使用実態を、まず明らかにすることから始めなくてはならない。まず、その観察に必要なデータを集めるため、上述のコーパスに対して、述語に相当する文字列によって検索を行ない、この文字列を含む文をサンプルとして収集することから開始した。

以下でその作業手順について詳しく見ていく。

2.2. 検索にかける文字列

まず、述語と不定詞の語結合を含むサンプルを収集するにあたっては、「文中に、本研究で対象となる述語（モダリティ形式）を含んでいる」という基準に従って文を収集するところからまず開始した。

すなわち、述語 мочь, уметь, можно, нельзя, возможно, невозможно, способен, в

состоянии, в силах のそれぞれの語句を含んでいる文ということになる。これらの語を含む文を抽出するために、下表に示す文字列の検索をウプサラ・コーパスに対して行なった：

表 3-3：検索にかける文字列（述語）

述語	検索にかける文字列
мочь	могу, можешь, может, можем, можете, могут; мог, могла, могло, могли
уметь	уметь; умею, умеешь, умеет, умеем, умеете, умеют; умел, умела, умело, умели
можно	можно
нельзя	нельзя
возможно	возможно
невозможно	невозможно
способен	способен, способна, способно, способны
в состоянии	в состоянии
в силах	в силах

以下、上表についていくつか補足を行なっていきたい。

まず、上記文字列の検索に際しては、全て、それぞれ大文字で始まる場合と小文字で始まる場合の双方について検索を行なっている。

また、上表に示してある通り、形態論的に動詞に準じるもの（すなわち мочь, уметь）は、動詞の諸変化形（過去形及び非過去形）のそれぞれを検索にかけている[22]。また、мочь は不定詞の形態では用いられないため、当該文字列は検索にかけていないが[23]、уметь は不定詞で用いられることがまれにあるため、不定詞の形式でも検索にかけてある。

「в состоянии」及び「в силах」については、これはそれ自体、名詞の斜格（前置格）と前置詞という結合（сочетание слов）だが、前置詞 в が大文字の場合と小文字の場合の二通りのパターンを検索にかけている。

また、この両者については、前置詞 в と、состоянии 及び силах の前に一致定語（形容詞類）が入りうるが、こうした一致定語を伴っている場合には、仮に不定詞を伴うケースがあったとしても、純然たるモダリティの述語とは見なせないと判断し、今回の対象には含めていない。そのため、そうした例を求めるための検索も行なっていない[24]。

---

[22] ロシア語の場合には、мочь、уметь 共に、быть を用いた合成未来の形は用いられない。

[23] 不定詞と同一形態の名詞は存在するが、本稿の対象ではないので、文字列検索の時点から除外してある。

[24] 例えば、前置詞を含めずに「состоянии」、「силах」という文字列で検索にかけることも可能だが、その場合下の例のような、本来収集したいサンプル以外の例の方が多く集まってしまうため、上の本文で記した文字列による検索を行なった（斜字体の部分が当該文字列）：

「способен」と「уметь」の扱いについても補足をしておく必要があるだろう。この両者は、その機能に関して類似性が見られる。つまり、両者とも、文の述語としての役割を果たすことができる一方で、定語的な役割を果たすことのできる形態も持っているということである。

「уметь」は、動詞として文の述語の役割を果たす一方、定語的に用いることができる形動詞（причастие ;「形分詞」とも）の諸形態（умеющий, умеющая, умеющее, умеющие, умеющего, умеющему, умеющим, умеющем, умеющей, умеющую, умеющих, умеющими)、及び文副詞としての役割を果たすことができる副動詞（деепричастие ;「副分詞」とも）の形態（умея）も持ち合わせている[25]。

一方、「способен」も、短語尾形[26]で用いられると文の述語としての機能を果たし、長語尾形（способный）で用いられれば、述語としての用法の他に、名詞を修飾する定語的用法をも果たす。

ここでは、「述語」として機能している事例を優先的にサンプルとして収集するという意図の下、上表に示した文字列を含んでいるものをサンプルとして収集した[27]。す

■ 「состоянии」で検索した場合のサンプルの一例：
Многие из них тогда были в удовлетворительном ***состоянии***... [UC]
当時それらの多くは満足のいく状態であった・・・。

■ 「силах」で検索した場合のサンプルの一例：
Мы говорим о "правых" и "левых" ***силах***, влияющих на ход перестройки. [UC]
我々が話しているのは、ペレストロイカの進捗に影響を持っている右派勢力と左派勢力の存在についてである。

[25] それに対して、同様に形態論的特徴としては уметь に近い мочь は、形動詞の形態は存在せず、また副動詞の形態は標準的な用法としては用いられないため、検索の対象とはしていない。
[26] ロシア語においては、形容詞の短語尾形は原則的に文の述語として用いられる。
[27] 実際には、уметь については、形動詞の諸形態、副動詞の形態についても、当初は検索の対象としてサンプルを収集していた。述語としての性質が уметь と способен（способный）とでは異なると判断していたからである。уметь の場合には、不定詞を伴わずにそれ単独では、意味的に欠落していることになってしまうため、動詞が形動詞の形をとっていても、不定詞が伴うことが当然期待される（つまり、形動詞の形でそれ単独で定語的に用いられることはない)。実際に、形動詞や副動詞の形でも、不定詞と語結合を形成している例は多く得ることができる。例えば以下のような例（斜字体の部分が当該文字列、下線を施してあるのが不定詞である）：

- Сейчас времена головокружительно изменились, а в зал перелетают либо все давно знакомые слова, либо не ***умеющие*** <u>взволновать</u> [PFV-INF] сегодняшнего начитавшегося и наслушавшегося зрителя. [UC]
今日時代は目の回るような速度で変化しているのに、ホールでは大分前からなじみのある言葉や、今日の、色々なものを読み飽きて聞き飽きてしまっている観客を、最早刺激することができないような言葉が飛び交っているのである。

- — Знаете ль вы край, где лимоны цветут? — спросил я у капитана, как всегда, не зная меры и не ***умея*** вовремя <u>остановиться</u> [PFV-INF]. [UC]
レモンが咲いている地方をご存知ですか？—いつものように私は、分をわきまえておらず、また折よく自分を留めることができずに将軍にこう尋ねた。

これらは、いわゆる文が『多述定構造（полипредикативная конструкция)』をとっている場合であるが、こうした例は最終的にデータとして採用しなかった。その文において、述語が文の述定の主な担

なわち、уметь の場合には、過去形、非過去形、不定詞の諸形態、способен の場合には、述語としての用法しか持たない、短語尾形の諸形態のみを対象として検索にかけてある[28]。

3. サンプルの取捨選択と分類、その基準

3.1. 概要：サンプルに対するフィルタリング

上の方法で行なった、単なる文字列の検索という機械的な方法においては、当然のことながら、本来求めていない、最終的にはデータとして採用できないサンプルも多数含まれることになってしまう。分析のためのデータとするには、いくつかのフィルターにかけ、当該サンプルの要・不要を判断し、不要なものであれば排除しなければならない。本節では、このフィルターについて確認することにする。

これらのサンプルを分析の対象から除外する際の最初の原則は、１）これらの文字列が「述語」なのかどうか、そして２）不定詞と語結合を成しているかどうか、という点にある。この原則に従って、収集したサンプルを、大きく分けて二つのフィルターにかけることになる。

第一のフィルターでは、まず、当該文字列が文中で述語として機能しているか否かについて判断し、取捨選択を行なう（「モダリティ形式に関するフィルター」）。

第二のフィルターでは、不定詞の語彙的意味に応じて分類を行なうことで、それぞれ不要なサンプルを排除する（「不定詞に関するフィルター」）。

この二つのフィルターを通過したサンプルだけが、本研究の分析対象となるデータとして採用される。

以下では、この二つのフィルターのそれぞれについて見ていくことにする。

3.2. 第一のフィルター：モダリティ形式（述語）に関するフィルター

3.2.1. 概要

まず本節で、モダリティ形式（述語）に関するフィルターから検討する。

い手として機能していない場合に、不定詞の選択に際してどのような要素が影響しうるかの判断が別途必要になると考えたからである。このように、述語が、文の主要な述語として機能していないケースも考慮の対象から外している。なお、『述定（предикативность）』という概念については、本稿第二章 3.4.2.の注 79 を参照。

[28] 長語尾形（способный, способная, способное, способные, способного, способному, способным, способном, способной, способную, способных, способными の諸形態）で用いられている場合でも、不定詞を伴う例は見つけることができる（下例；斜字体の部分が当該文字列）：

Народу было густо, сбежался едва не весь поселок, но не нашлось, похоже, пока никого, кто сумел бы организовать его в одну разумную твердую силу, ***способную*** остановить [PFV-INF] огонь. [UC]
人だかりができていた。ほとんど集落の全員が集まってきていると言えるほどだった。しかし、どうやら、今のところは固く一致団結して火を消し止めようと一肌脱ごうとするような人はいないようだった。

しかし、こうした例も前の уметь に関する注と同様に「多述定」の構造にあたるため、今回はサンプルの収集を行なっていない。今後この構造のデータに対しても配慮した上で再検討を加える必要があるだろう。

上の節で、考察対象となるべきモダリティ形式と同形の文字列を含んだ文がサンプルとして抽出された。これらのサンプルから、述語と不定詞の語結合のみをまず抽出しなくてはならない。

これらのサンプル内で、当該文字列は、以下のように大きく分類することができる：

① そもそも述語として機能していないもの（同綴異義のケースを含む）
② モダリティ形式（述語）として機能しているもの

上記①のサンプルは、「モダリティ形式（述語）」と同綴異義である別の語であるというケースであり、これらは最終的なデータとしては採用されないため、除外しなくてはならない。

それに対して②のサンプルでは、当該文字列は文中で述語として機能している。したがって、その次の段階として、不定詞と語結合を成しているかどうかという基準から取捨選択が行なわれる。

以下で、上記の二つについてそれぞれ具体例と共に確認しよう。

なお、本節以下に引く例文中、ボールドの斜字体が該当する文字列であることを示している。

3.2.2. 文中で文の述語として機能していないケース

3.2.2.1. мочь

上で検索にかけた мочь の諸形態のサンプルから除外される可能性があるのは、может という文字列が、（三人称単数形の述語ではなく）「挿入語」として用いられている場合である。これは、多くの場合 может быть（あるいは быть может、あるいはまた может 単独でも）などの形式を取り、「ひょっとすると、多分」といった意味を表す（cf. 第二章、第 3.3.2.2.節）：

(3-1) А, ***может*** быть, суд будет более независим, если увеличить число народных заседателей? [UC]
それともひょっとすると、陪審員の人数を増やせば、法廷はもっと独立したものになるだろうか。

(3-2) ***Может***, я и не прав, но, например, в большой литературе мы видим настоящих психологов. [UC]
ひょっとすると、私の方が間違っているかもしれませんが、例えば規模の大きな文献の中に、本当の心理学者を見て取ることができます。

この「挿入語」の場合には、不定詞と語結合を成さず、且つその意味も、本研究で対象とする「可能性」のモダリティの意味とは異なるので、データとしては採用しない。

3.2.2.2. уметь

уметь の諸形態のサンプルから除外される可能性があるのは、「умело」という文字列である。これは、形容詞 умелый の短語尾中性形と同様の形態であり、文中で副詞として機能している場合がある：

(3-3) Конечно, профессионалы ***умело*** и хладнокровно, обороняют подступы к воротам, постоянно проявляя даже не мужество, а некую доблесть. [UC]
もちろん、プロフェッショナルは、巧みに、且つ冷静に、勇気ではなくある種の献身の姿勢を常に見せながら、門への進入路を守るのだ。

このケースも、本稿の対象ではないのでデータから除外する。

3.2.2.3. можно / нельзя

можно 及びその否定形である нельзя のサンプルに見られる対象外のケースは、「как можно [нельзя]＋比較級」（できるだけ［これ以上無いくらい］～）で成句となっているケースである。これらのケースも分析の対象から除外する。具体例は以下を参照：

(3-4) Сделать эти стенки как ***можно*** тоньше? Они потеряют прочность... [UC]
この壁をできるだけ薄くしてみる？それだと頑丈さが損なわれてしまうだろう・・・。

(3-5) Воистину мудра и полностью современна формула великого мексиканца Бенито Хуареса: "Уважение права других—это мир". Высказанная более ста лет назад, она как ***нельзя*** более актуальна сегодня...【後略筆者】 [UC]
本当に賢明で、全くもって現代に即した定式とは、偉大なメキシコ人であるベニート・フアレスによるものである。「他者の権利を尊重することこそが、平和である」。百年以上前の言葉だが、これは今日でもこれ以上ないほど重要なものである。

3.2.2.4. возможно

挿入語として機能しているケースであり、これも除外する：

(3-6) Рассудим здраво: ***возможно***, колбасу, масло или, скажем, сгущенку сюда придется завозить. [UC]
まともに考えてみましょう。恐らく、ソーセージ、バター、あるいは例えばコンデンスミルクは、ここに持ってこざるを得なくなるでしょう。

3.2.3. 文中で述語として機能しているケース

当該文字列が、文中で述語として機能しているケースでも、不定詞が省略されており、動詞が形態的に現れていないケースが少なからず存在する（上述の②のケース）。例えば、以下のような例を参照：

(3-7) Но сегодняшняя школа этого не хочет. И не может. Просто не ***умеет***. [UC]
しかし今の学校はそんなことをしたがらない。できないし、また単にそれをする能力も無いのだ。

このように、不定詞が文中に現れてきていない例も、最終的なデータとしては採用しない。

3.2.4. モダリティ形式に関するフィルタリングの結果

ここまでで、モダリティ形式に関するフィルタリングが終了した。ここでは以下のような基準を用いて、サンプルから不要なデータを排した：

① そもそも述語として機能していないもの（同綴異義のケースを含む）
② モダリティ形式（述語）として機能しているもの
(ア) 不定詞が現れてきているもの
(イ) 不定詞が現れてきていないもの

なお、これらのサンプルの分布は以下のとおりとなっている：

表 3-4：モダリティ形式と不定詞の共起

文字列	述語として機能していない（上記①）	述語として機能している（上記②）		総数
		不定詞の共起あり（上記②–ア）	不定詞の共起なし（上記②–イ）	
мочь	50	2398	111	2559
уметь	25	162	24	211
можно	40	1393	41	1474
нельзя	9	345	45	399
возможно	148	18	0	166
невозможно	24	114	6	144
способен	0	89	18	107
в состоянии	12	32	0	44
в силах	0	20	1	21
合計	308	4571	246	5125

次節で見る、「不定詞に関するフィルター」にかけることができるのは、上記②–アの 4571 サンプルということになる。

3.3. 第二のフィルター：不定詞に関するフィルター

3.3.1. 概要

ここまでで、モダリティ形式を基準にしたデータの取捨選択が終わり、「可能性」の

モダリティの意味を表す述語と不定詞という語結合を含んだ文が抽出されていることになる。

次に行なう作業としては、ここまででサンプルとして得られた不定詞を、その動詞のタイプ（あるいは「語彙的意味」とも言い換えられるだろう）に応じて分類することである。

上で見たように（第二章、第 2.6.節参照）、ロシア語の動詞は、体のペアを持つ動詞とそれ以外の動詞とにまず大きく二分することができる。

体の形態の選択についての議論を行なう際には、まず「体のペアを持つ動詞」を対象にして行なうべきであるため、まずこの「体のペアを持つ動詞」を抽出する。

それ以外の動詞、すなわち「体の形態的対立が考慮されない動詞」には、各種の単体動詞や両体動詞（第二章、第 2.6.1.節参照）などが分類されることになる。

また、最終的なデータとして採用しないものとして、以下のタイプの動詞が挙げられる：

1. 体のペアの対応関係が不明瞭な動詞
2. その他（同綴異義の動詞など）

以下でこれらの分類作業について詳しく見ていくことにしよう。

3.3.2. 体のペアを持つ動詞

まず、「体のペアを持つ動詞」について確認していこう。

先に述べた通り（第二章、2.6.1.参照）、「体のペアを持つ動詞」とは、その語彙的意味を共通にし、体の文法的意味においてのみ異なる、二つの動詞を指す。

どの動詞が「体のペアを持つ動詞」であると見なすかという判断については、今回は原則として、『研究社露和辞典』（東郷他編 1988）及び СРЯЕ の記述に基づいている。

この分類作業により、今回のサンプルの中で、体のペアを持つ動詞に分類される不定詞は、全 3454 例となる。述語ごとに分布を示すと以下のようになっている：

表 3-5：体のペアを持つ動詞

述語	ペアを持つ動詞		合計
	完了体	不完了体	
мочь	1293	369	1662
уметь	30	84	114
можно	868	287	1155
нельзя	160	128	288
возможно	14	3	17
невозможно	92	7	99
способен	40	34	74
в состоянии	23	6	29
в силах	15	1	16
合計	2535	919	3454

モダリティの述語と共に用いられる不定詞の、体の形態選択について論じる場合には、まず、形態的対立が顕在化するこのタイプの動詞を対象として観察を行なう必要があるだろう。

3.3.3. 体の形態的対立が考慮されない動詞

前節で、「体のペアを成す動詞」の抽出が完了している。次に、それ以外の動詞、つまり、体の形態的対立について考慮されない（考慮する必要のない）動詞について考えてみよう。

「体の形態的対立が考慮されない動詞」とは、具体的には以下の四つのタイプとなる：

① быть
② 単体動詞（第二章、2.6.1.参照）
③ 単体動詞に準じる動詞（後述）
④ 両体動詞（第二章、2.6.1.参照）

以下で上記のそれぞれについて見ていこう。

3.3.3.1. быть

быть は、今回収集したサンプルでは、全 362 例を得た。

この語は、存在の意味を表し、動詞に準じる機能を果たす場合（下例 3-8）と、後に名辞類（名詞、形容詞など）を従えて連辞としての機能を果たす場合（下例 3-9）とに大きく分けることができる。

(3-8) Возражений <u>быть</u> не *могло*, обязанность Игоря Проухова, общепризнанного мастера высокого стиля, — провозглашать первый тост. [UC]
反対の声が上がるはずも無かった。格調の高い言葉遣いの名手として知られたイーゴリ・プロウーホフがやらなければいけないことは、最初の乾杯の音頭を取ることだったからだ。

(3-9) Они сулят немало увлекательного, но уверенным *можно* <u>быть</u> лишь в одном — они невероятно сложны. [UC]
それ（クォークグルーオンプラズマの探求—阿出川）は少なからず興味深いもののように思われるが、たったひとつだけ確実に言えることがある。それが信じられないほど難しいということだ。

存在の意味を表す動詞的機能（前者）を果たしているものは、135 例あり、連辞としての機能（後者）を果たしているものは、227 例見られた。

3.3.3.2. 単体動詞

単体動詞とは、上で見たように（第二章、第 2.6.1.節参照）、その語彙的意味の特徴のために、対応する体の形態を持たない動詞である。単体動詞は、不完了体単体動詞と完了体単体動詞とに分類される。

ここではサンプルとして得られた単体動詞のうち、頻度数の高いものを中心に見ていく。

まず、不完了体単体動詞は、全体では 415 例得られ、頻度数の高いものとして、жить (43), использовать (38), иметь (21), ожидать (21), знать (17), работать (17), существовать (17), сидеть (12), терпеть (12), управлять (12), надеяться (11), ждать (10), наблюдать (9), судить (9), держать (7), разговаривать (7), утверждать (7), рассматривать (5), использоваться (6), конкурировать (6), сомневаться (6), вести себя[29] (5), находиться (5), петь (5), действовать (4), лежать (4), означать (4), помнить (4), следить (4), стоять (4), трудиться (4), писать (4), воевать (3), молчать (3), мыслить (3), наблюдаться (3), плакать (3), сосуществовать (3), рассчитывать (3), бороться (2), бояться (2), взаимодействовать (2), гордиться (2), держаться (2), мечтать (2), ненавидеть (2), обитать (2), опасаться (2), пахнуть (2), подозревать (2), полагать (2), противостоять (2), содержать (2), спать (2), танцевать (2), уважать (2), участвовать (2), учиться (2) などが見られた（括弧内の数字は頻度数；本章内以下同様）。

次に、完了体の単体動詞を確認しておくことにしよう。全体では 93 例が確認された。

頻度数の高いものから、пригодиться (9), поделать (5), пойти (5), понадобиться (4), способствовать (4), предвидеть (4), подождать (3), поехать (3), нарадоваться (2), обжаловать (2), поговорить (2), погулять (2), поработать (2), походить (2), сгодиться (2), состояться (2), залюбоваться (2), постоять (1), схлопотать (1), вымолвить (1), выплакать (1), доковылять (1), домчаться (1), захрапеть (1), заштормить (1), накуролесить (1), наплевать (1), переорать (1), перетерпеть (1), побежать (1), поболтать (1), побывать (1), погнаться (1), поиграть (1), покликать (1), полежать (1), помотать (1), понаблюдать (1), попеть (1), порадоваться (1), поругать (1), посмеяться (1), постучать (1), потеснить (1), потрепать (1), поучиться (1), почитать (1), пошатнуть (1), просуществовать (1), рухнуть (1), сбрехать (1), спроворить (1), статься (1), уцелеть (1)などがある。

3.3.3.3. 単体動詞に準じる動詞

上で見た単体動詞の他にも、単体動詞に準じると見なした動詞群がある。

ここで取り上げるのは、１）移動動詞（定動詞、不定動詞）[30]、及び２）動詞の被

---

[29] 副詞を伴って「(～のように）行動する、振る舞う」という成句的な表現なので、一語の動詞として扱った。

[30] 「移動動詞（глаголы движения)」とは、「定動詞」と「不定動詞」からなる 14 組程度の不完了体動詞を指す。なお、研究者によりいくつのペアを移動動詞と認めるかは異なる。例えば、Forsyth（1970）では 13 組が移動動詞であるとされている（cf. Forsyth 1970: 319)。Энциклопедия（1996）では、以下の 14 組が想定されている（1996: 87；下表中の番号は便宜上付した）:

動形[31]である。これらは上の不完了体単体動詞と同様、対応する完了体は持っていないため、単体動詞と同等に扱う。

移動動詞のサンプルは全 67 例見られ、定動詞（43 例）、不定動詞（24 例）、それぞれ以下のものが得られた：

表 3-6：具体例：移動動詞（全 67 例）

定動詞 （全 43 例）	вести (15), идти (15), бежать (3), лететь (3), ехать(2), нести (2), плыть (1), гнаться (1), тащить (1)
不定動詞 （全 24 例）	ходить (11), носить (4), летать (3), водить (1), возить (1), кататься (1), плавать (1), ползать (1), гонять (1)

動詞の被動形と判断できるサンプルは全 24 例得られた。

具体的には、рассматриваться (4), считаться (3), включаться (2), изучаться (2), решаться (2), вызываться (1), использоваться (1), исследоваться (1), образовываться (1), применяться (1), приобретаться (1), проводиться (1), производиться (1), регулироваться (1), черпаться (1), читаться (1)などがある。

3.3.3.4. 両体動詞

両体動詞は、完了体の形態も不完了体の形態も同一なので、やはり形態的対立については考慮する必要がない動詞に分類される。

サンプル中、合計 100 例が確認された。頻度数の高いものは、использовать (38), организовать (6), воздействовать (5), гарантировать (5), реализовать (4), игнорировать (3), миновать (3), образоваться (3), ориентироваться (3), анализировать (2), дозировать (2), образовать (2), родиться (2) などである。

3.3.4. その他のケース

ここで確認するのは、１）同綴異義のケースと、２）辞書に収録されていない動詞である。

参考：移動動詞一覧（Энциклопедия 1996）

	定動詞	不定動詞		定動詞	不定動詞
1	идти	ходить	8	нести	носить
2	бежать	бегать	9	вести	водить
3	ехать	ездить	10	везти	возить
4	лететь	летать	11	ползти	ползать
5	плыть	плавать	12	лезть	лазить
6	тащить	таскать	13	брести	бродить
7	катить	катать	14	гнать	гонять

研究社露和辞典（1988）では、上記の他に、гнаться-гоняться, катиться-кататься も移動動詞と認めており、これは Исаченко（1960）における分類と概ね一致している（cf. Исаченко 1960: 312-313）。本稿ではこれらの分類に従って処理している。

[31] 『動詞の被動形（страдательная форма глагола）』とは、他動詞の不完了体に接辞「ся」を付加して形成された不完了体動詞を指す。ロシア語における受動態の表現を担う形式の一つである。

それぞれについて具体的に見ていくことにしよう。

3.3.4.1. 同綴異義の動詞

まず「同綴異義」のケースについて確認しよう。

「同綴異義」は、大きく分けて二つに分類することができるだろう。

ひとつは、「同綴異音異義（омограф, графические омонимы）」である。これは、「замóк（錠前）」と「зáмок（城）」の例が挙げられる。この両者は、綴りは同一であるが、音声（音韻）的には異なっていることで、意味の区別が成されている。

もうひとつは、「同綴同音異義（омонимы）」である。これは、「брак（婚姻関係）」と「брак（欠陥、故障）」、「банк（銀行）」と「банк（缶）」といった例が挙げられるだろう。これらは、綴りの上でも全くの同一であり、且つ音声（音韻）的にも全く同一である。そのため、これらは前後の文脈から、その語がどういう意味で用いられているかを判断する必要がある。

これらの同綴異義は、動詞に関して言えば、体の対応関係が異なってしまう場合が出てくるため、一定の注意を払う必要がある。

まず、動詞の同綴異音異義の具体例を下表に示す：

表 2-7：動詞の「同綴異音異義」の例

綴り	解釈の可能性	体の対応	語の意味
выбегать	выбегáть（不完了体）	ペアあり （対応の完了体：выбежать）	走って出る
	вы́бегать（完了体）	単体動詞	方々を走り回る
забегать	забегáть（不完了体）	ペアあり （対応の完了体：забежать）	走って寄る
	забéгать（完了体）	単体動詞	走り出す
засыпать	засы́пать（完了体）	ペアあり （対応の不完了体：засыпáть）	まいて埋める
	засыпáть（不完了体）	ペアあり （対応の完了体：засы́пать など）	
пробегать	пробегáть（不完了体）	ペアあり （対応の完了体：пробежать）	走り抜ける
	пробéгать（完了体）	単体動詞	ある時間走り回る
разрезать	разрезáть（不完了体）	ペアあり （対応の完了体：разрéзать）	切り刻む
	разрéзать（完了体）	ペアあり （対応の不完了体：разрезáть）	
сбегать	сбегáть （不完了体）	ペアあり （対応の完了体：сбежать）	駆け下りる
	сбéгать（完了体）	単体動詞	走って行って来る

このように、同綴異音異義の動詞同士で体のペアを構成しているようなケース（上

表中の засыпать や разрезать が該当する）も少なからず見られる。

今回得られたサンプル中に、こうした同綴異音異義の動詞があった場合、その文字列だけでは、どちらの体の形態で用いられているかが判断できないため、対象から除外した。具体的には、засыпать（cf. засыпáть / засы́пать）と разрезать（cf. разрéзать / разрезáть）のそれぞれ一例ずつ、合計二例が見られた。

対して、「同綴同音異義」の方は、どうだろうか。下表で具体例を確認しよう：

表 2-8：動詞の「同綴同音異義」の例

綴り	体の別	体の対応	語の意味
высыпáться	不完了体	ペア （対応の完了体：вы́сыпаться）	こぼれ落ちる、 はげ落ちる
	不完了体	ペア （対応の完了体：выспаться）	十分睡眠を取る
засыпáть	不完了体	ペア （対応の完了体：засы́пать）	まいて埋める
	不完了体	ペア （対応の完了体：заснуть）	寝付く
	不完了体	ペア （対応の完了体：заспать）	眠って忘れる
	不完了体	ペア （対応の完了体：засы́пать）	振り撒き始める
походить	完了体	単体動詞	ある時間［しばらく］歩き回る
	不完了体	単体動詞	似ている
прибегáть	不完了体	ペア （対応の完了体：прибежáть）	走り寄る、駆けつける
	不完了体	ペア （対応の完了体：прибегнуть）	頼る、すがる、訴える
проводить	不完了体	ペア （対応の完了体：провести）	行なう、実施する
	完了体	ペア （対応の不完了体：провожать）	送る、送り届ける
просыпáться	不完了体	ペア （対応の完了体：просы́паться）	こぼれ出る
	不完了体	ペア （対応の完了体：проснуться）	目が覚める
сходить	完了体	単体動詞	（歩いて）行って帰ってくる
	不完了体	ペア （対応の完了体：сойти）	下りる

これらは、語彙的意味の点で大きく異なるため、文脈からどの意味で用いられてい

るかが判断できる可能性は、上の「同綴異音異義」の場合よりも高いだろう。
今回のサンプルからは походить が得られた（下記の二例）。これらは、文脈から双方とも完了体動詞であると判断し、そのように扱った。

(3-10) Там же, в кадрах, в случае благоприятного отношения дают листок для переговоров: *можно* <u>походить</u> по организациям, посмотреть, выбрать то, что любо, но не больше двух дней. [UC]
そこの人事部では、友好的に接してもらっている場合には、交渉のためのリストをもらえます。いくつかの組織を回って、好きなものを見たり、選んだりできますが、それは二日間のみです。

(3-11) *Можно* <u>походить</u> по краям заросших оврагов, по вытянутым лентами вдоль полей молодым березнякам. [UC]
湿地帯の地域や、野原に沿って線のように伸びた、若い白樺の林を歩き回ることもできます。

3.3.4.2. その他：辞書未収載の動詞

その他に、辞書に収録されていない動詞語彙（допищаться, оскорбеть, остыдить, перенахалить）も得られたが、これらはデータからは除外した。

4. 第三章のまとめ

本章では、本稿で分析対象となるデータを収集するための一連の手順について確認した。
ロシア語を対象とするいくつかのコーパスについて概観したが、本研究の目的に照らして、ウプサラ・コーパスをサンプルの収集先として採用した。
本稿で行なう分析に必要なデータは、可能性のモダリティの意味を表す述語（мочь, уметь, можно, нельзя, возможно, невозможно, способен, в состоянии, в силах）と不定詞の語結合である。そのため、まずこれらの述語の諸形態を検索の文字列とし、この文字列を含む文をサンプルとして収集した。
この作業で得られたサンプルから、最終的に分析対象として採用するデータを抽出するために、まず大きく二つのフィルターを設定し、それにより不要なサンプルを排除した。
第一のフィルターは、モダリティ形式（述語）を基準としたフィルターである。収集したサンプルの中で、当該文字列が述語として機能しているか否かを基準にして不要なサンプルを排除した。また、述語として機能していても、不定詞が省略されているなどの理由で、不定詞と語結合を成していない場合にも、データとしては採用しなかった。
この第一のフィルターを通過させた時点で、本稿の対象となる、述語と不定詞の語結合がサンプルとして抽出されたことになる。

二番目のフィルターは、不定詞を基準としたフィルターである。不定詞の語彙的意味のタイプに応じて分類を行なうためのものである。

先に見た、動詞のタイプ（第二章、第 2.6.節参照）に応じて、まず「体のペアを持つ動詞」とそれ以外の動詞とに大きく分類を行なった。その結果、全 4565 例[32]のうち、ペアを持つ動詞は 3454 例で全体数の 75.66%を占めており、それ以外の動詞は 1111 例で、24.34%を占めていた。

本稿の対象となる語結合において、不定詞の体の形態選択についての議論は、「ペアを持つ動詞」を対象にすることになる。

[32] 第 3.3.4.節で述べた通り、同綴異義の動詞 2 例と、辞書未収載の動詞 4 例を、不定詞が共起しているサンプル 4571 例から除外してある。

第四章

言語現象の実態の検証、考察と解釈

0. 本章の概要

前の章で、本稿の分析対象である、「可能性」のモダリティの意味を持つ述語と不定詞から成る語結合のデータをコーパスから抽出した。本章では、これらのデータに基づいて、本稿の冒頭（cf. 第一章、第 4 節）において設定した課題に取り組むことになる。そこでは、本稿において解決すべき課題として、以下の観点から従来の研究の問題点を指摘し、それぞれに対応した具体的な課題を設定した：

① 言語使用の実態の記述（cf. 第一章、第 4.2.節）
② 「可能性」の意味の明確化とその分類（cf. 同章、第 4.3.節）
③ モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味の考察（cf. 同章、第 4.4.節）

これらの課題の解決を図るべく、本章では以下のような考察を行なうことにする。

まず第一に、今回得たデータから、本稿の対象である言語単位が、そもそも実際のテキスト内ではどのような振る舞いを見せているのかという実態について、データの数量的な分布に基づいて把握を試みる。従来の研究では、こうした実態が、断片的にしか明らかにされてこなかったことは、本稿第一章で見た通りである（cf. 第一章、第 4.2.節）。本稿の大きな目的の一つは、分析対象である言語単位が見せる、文法的行動の実態に関する全体的な把握と記述にある。

次に、第一章で見た先行研究における記述が、今回得られたデータと照らし合わせてみた場合、果たしてどの程度妥当であると言えるのかという点に関して再検証を行なう。その際に、先に見た、意味・統語構造のタイプ（cf. 第二章、第 5 節）に分類した上で、「可能性」の意味を表すそれぞれの述語が、どのタイプで用いられるのか、また、どの種類のモダリティの意味（cf. 第二章、第 3.2.節）を表しうるのかについても考慮に入れ（これは上述②の課題の解決を目指すものである）、それぞれ見ていく。そして、そこでは、不定詞の体の形態選択が、どのような要因によってなされているのかについても検証を試みる。

ここまでの二点は、先行研究における記述の再検証及び修正の作業と位置付けることができる。これらについては、次の第 1 節にて取り上げる。

続く第 2 節にて取り扱うのは、従来の研究では考慮に入れられていなかった、新たな視点に立って現象を捉え直すという試みである。すなわち、先行研究では注目されてこなかった、述語と結合する不定詞の語彙的意味という要素に着目し、それと不定詞の体の形態が見せる文法的行動の間に何らかの相関関係が見られないか考察を行なう。

1. 先行研究の記述の検証：言語形式の使用の実態

1.1. 本節の概要

上でも述べた通り、本節では、先行研究における記述の再検証及び修正を試みる。

今回得られたデータの数量的分布について確認を行ない、本研究の対象となる言語単位が、実際のテキストにおいて見せている文法的振る舞いについて分析する。それらを踏まえた上で、先行研究における記述の妥当性について検証する。

先に、ウプサラ・コーパスから収集したサンプルを、一定の基準に従って設定したフィルターにかけ、選別作業を行なった（cf. 第三章、第 3 節）。その結果、最終的に本研究でデータとして採用することができるサンプルの総数は、4565 例となった。

以下まず、次の第 1.2.節で、今回のデータの分布の全体像を確認する。得られたデータを､いくつかの基準を元に整理し､分析対象が見せる文法的な振る舞いについて、データの数量的分布という観点から明らかにする。

次に、データを意味・統語構造ごとに分類し、その場合のデータの分布、具体例などについて確認していく。便宜上、まず第 1.3.節で мочь 以外の述語について確認し、続く第 1.4.節で、述語 мочь について見る。この мочь については、それぞれの意味・統語構造（cf. 第二章、第 5 節）において表現されるモダリティの種類についても確認する。

第 1.5.節では、先行研究における記述を、データの数量的分布に基づいて再検証する試みのうちの一つとして、不可能性と不定詞の体の形態の間の相関関係について取り上げる。

そして、第 1.6.節で、ロシア語における可能性に関わるモダリティを含む文について、モダリティの種類、それぞれの述語、それと結合する不定詞の体のカテゴリーが果たしている機能について考察する。

1.2. データの整理及びその数量的分布

1.2.1. 概要

まず本節では、今回得られたデータを、以下の基準に従って分類、整理し、分布の全体像の把握を試みる：

① 述語の別に応じた分類
② 動詞のタイプとその体の別に応じた分類
③ 意味・統語構造に応じた分類

上記①では、述語の別に応じてデータを分類する。これによって間接的に、内的あるいは外的可能性といった、モダリティの意味によっても分類されることになる。同②では、動詞のタイプに応じた分類（cf. 第三章、第 3.3.節）を行ない、更にそれぞれの体の別によっても分類を行なう。同③で、意味・統語構造（cf. 第二章、第 5 節）ごとにデータがどのように分布しているかについて把握を試みる。

それでは、以下でそれぞれ見ていくことにしよう。

1.2.2. 述語の別に応じた分類

まず、本稿の対象となっている述語の別を基準にしてデータを整理してみよう。

それぞれの述語と結合する不定詞の数の内訳は、下表の通りとなっている。下表中、合計欄に示した頻度数の後の百分率は、データの総数（ここでは 4565 例）に占める割合を示している：

表 4-1：述語と結合する不定詞の数量的分布

可能性の種類と述語		合計
内的可能性	уметь	162 (3.55%)
	способен	89 (1.95%)
	в состоянии	32 (0.7%)
	в силах	19 (0.42%)
合計（内的可能性）		302 (6.62%)
мочь		2395 (52.46%)
外的可能性	можно	1391 (30.47%)
	нельзя	345 (7.56%)
	возможно	18 (0.39%)
	невозможно	114 (2.50%)
合計（外的可能性）		1868 (40.92%)
総数		4565

述語 мочь については、上で見た通り（cf. 第二章、第 3.6.節）、内的可能性及び外的可能性といった、「非現実のモダリティ」の意味の他にも、「評定のモダリティ」を表す形式としても用いられうる。そのため、上表中では、別途整理してある。この述語独特の、表しうる意味の幅広さは、結合する不定詞の頻度数の高さにも反映されており、今回のデータの半数以上を占める結果となった。

次いで、外的可能性を表す述語がおよそ 41%を占めており、内的可能性については約 7%しか用いられていない。

1.2.3. 動詞のタイプと体の別に応じた分類

1.2.3.1. 全体的なデータの分布

次に、動詞のタイプ（cf. 第三章、第 3.3.節）に応じて分類を行なってみよう。それぞれの述語と結合する不定詞の、動詞のタイプごとの内訳は以下のようになっている。それぞれの動詞のタイプの総数の欄に示した百分率は、データ全体の総数（ここでは 4565 例）に占めている割合を示している：

表 4-2：動詞のタイプに応じた分類

述語		ペアを持つ動詞	быть	単体動詞、単体扱い	両体動詞	合計
内的可能性	уметь	114	2	44	2	162
	способен	74	0	10	5	89
	в состоянии	29	0	3	0	32
	в силах	16	1	1	1	19
合計（内的可能性）		233	3	58	8	302
мочь		1662	355	346	32	2395
外的可能性	можно	1155	3	182	51	1391
	нельзя	288	1	49	7	345
	возможно	17	0	1	0	18
	невозможно	99	0	13	2	114
合計（外的可能性）		1559	4	245	60	1868
総数		3454 (75.66%)	362 (7.93%)	649 (14.22%)	100 (2.19%)	4565

なお、前の表と同様に、述語 мочь は別途整理してある。また、上表では、быть の内訳、単体動詞の内訳などは示していない。これらについては以下（cf. 第 1.2.3.3.節）で確認する。

1.2.3.2. ペアを持つ動詞とその体の別

ペアを持つ動詞は全 3454 例あり、全 4565 例のうち、およそ 76 パーセントを占めている。ここではその体の内訳の分布を確認しよう。それぞれの頻度数の後に示した百分率は、頻度数の合計に対してどちらの体がどの程度の割合で用いられているかを示している：

表 4-3：ペアを持つ動詞とその体の別

可能性の種類と述語		ペアを持つ動詞		合計
		完了体	不完了体	
内的可能性	уметь	30 (26.32%)	84 (73.68%)	114
	способен	40 (54.05%)	34 (45.95%)	74
	в состоянии	23 (79.31%)	6 (20.69%)	29
	в силах	15 (93.75%)	1 (6.25%)	16
合計（内的可能性）		108 (46.35%)	125 (53.65%)	233
мочь		1293 (77.80%)	369 (22.20%)	1662
外的可能性	можно	868 (75.15%)	287 (24.85%)	1155
	нельзя	160 (55.56%)	128 (44.44%)	288
	возможно	14 (82.35%)	3 (17.65%)	17

	невозможно	92 (92.93%)	7 (7.07%)	99
合計（外的可能性）		1134 (72.74%)	425 (27.26%)	1559
総数		2535 (73.39%)	919 (26.60%)	3454

全体としては、完了体（約 73%）が不完了体（約 27%）を大きく上回っているものの、結合する述語に応じてその分布が異なっていることが分かる（それぞれの述語ごとの傾向については、第 1.3.節以降で詳しく見ることとし、ここでは全体的な傾向を確認するに留める）。

1.2.3.3. 体の形態的対立が考慮されない動詞

次に、体の形態的対立が考慮されない動詞（быть が 362 例、単体動詞及びそれに準じる動詞が 649 例、両体動詞が 100 例）の、述語ごとの分布を確認しておこう（全 1111 例、データ総数の 24.34%；cf. 第 1.2.3.1.節の表 4-2）。先の表と同様に、述語 мочь については別途整理、提示してある：

表 4-4：体の形態的対立が考慮されない動詞

述語	быть		単体動詞					単体扱い		両体	合計
	быть1	быть2	完	不完	移動定	移動不定	被動	完	不完		
уметь	0	2	1	32	0	5	0	0	6	2	48
способен	0	0	1	6	1	2	0	0	0	5	15
в состоянии	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
в силах	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3
合計（内的可能性）	0	3	2	42	1	7	0	0	6	8	69
мочь	135	220	58	213	23	9	24	2	17	32	733
можно	0	3	22	121	15	8	0	0	16	51	236
нельзя	0	1	7	29	3	0	0	1	9	7	57
возможно	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
невозможно	0	0	2	10	1	0	0	0	0	2	15
合計（外的可能性）	0	4	32	160	19	8	0	1	25	60	309
総数	135	227	92	415	43	24	24	3	48	100	1111
述語	быть1	быть2	完	不完	移動定	移動不定	被動	完	不完	両体	合計
	быть		単体動詞					単体扱い			

上表中、いくつか補足をしておく。

まず、「быть」について、「быть1」（135 例）は、存在の意味を表す動詞的機能を果たしているものを、「быть2」（227 例）は、連辞としての機能を果たしているものを、それぞれ表している（cf. 第三章、第 3.3.3.1.節）。また、単体動詞のうち、「移動・定」、

「移動・不定」と示しているのは、それぞれ、移動動詞のうちの定動詞、不定動詞を指している（cf. 第三章、第 3.3.3.3.節）。

なお、上表から分かる通り、「быть」は、今回のデータでは、その大部分（362 例中 355 例＝およそ 98%）が述語 мочь と共に用いられている。

1.2.4. 意味・統語構造に応じた分類

1.2.4.1. 意味・統語構造に応じた分類：全体的なデータの分布

以下では今回のデータを、先に見た意味・統語構造に応じて分類していく。

ここで、意味・統語構造の四タイプを確認しておこう。モダリティの述語を含む文は、以下の四つのタイプが論理的には可能である（cf. 第二章、第 5 節）：

表 2-46：論理的に可能な意味構造【再掲】

	タイプ	基本分類	基本分類＋可能性の下位分類
肯定構造	Ⅰ	M – Inf	M: INT – Inf
			M: EXT – Inf
	Ⅱ	[M – (Neg – Inf)]	[M: INT – (Neg – Inf)]
			[M: EXT – (Neg – Inf)]
否定構造	Ⅲ	[(Neg – M) – Inf]	[(Neg – M: INT) – Inf]
			[(Neg – M: EXT) – Inf]
	Ⅳ	[(Neg – M) – (Neg – Inf)]	[(Neg – M: INT) – (Neg – Inf)]
			[(Neg – M: EXT) – (Neg – Inf)]

この意味・統語構造のタイプに応じて分類を行なうと、データの全体的な分布は以下のようになる：

表 4-5：意味・統語構造のタイプに応じた分類

タイプ	総数
Ⅰ	3150 (69.0%)
Ⅱ	63 (1.38%)
Ⅲ	1261 (27.62%)
Ⅳ	91 (1.99%)
総数	4565

1.2.4.2. 意味・統語構造に応じた分類：動詞のタイプとその体の別

上で見たデータの分布に、動詞のタイプとその体の別という基準を加えると、以下のようになる：

表 4-6：意味・統語構造のタイプ、動詞のタイプと体の別

意味・統語構造タイプ	内的／外的	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
Ⅰ	内的	60	87	1	30	5	2	185
	外的	873	273	23	151	51	3	1374
	мочь	831	258	43	191	26	242	1591
合計		1764	618	67	372	82	247	3150
Ⅱ	内的	0	2	0	0	0	0	2
	外的	2	15	0	8	0	0	25
	мочь	16	12	0	3	0	5	36
合計		18	29	0	11	0	5	63
Ⅲ	内的	48	36	1	26	3	1	115
	外的	237	123	6	52	9	1	428
	мочь	424	81	16	87	6	104	718
合計		709	240	23	165	18	106	1261
Ⅳ	内的	0	0	0	0	0	0	0
	外的	22	14	4	1	0	0	41
	мочь	22	18	1	5	0	4	50
合計		44	32	5	6	0	4	91
総数		2535	919	95	554	100	362	4565

1.2.5. まとめ：実際に用いられる意味・統語構造

ここまで、今回得られたデータを、いくつかの基準により分類を試みた。ここでは、その結果から読み取れることについてまとめてみよう。

上で行なった分類により、先に見た「可能性」の述語を含む文の、論理的に可能な意味・統語構造のうち、実際にどのタイプの意味・統語構造が、どの程度の割合で用いられているのかの把握が可能になった。

最も頻度数の高い構造は、タイプⅠ（「可能性」）で、次いでタイプⅢ（「不可能性」）がよく用いられる構造であることが分かった。それぞれ、69.0%、27.62%を占めており、この二つのタイプだけで全体の 97%近くを占めるということになる。

また、その一方で、意味・統語構造によっては、（論理的には考えうるものの）事実上ほとんど用いられないタイプもあるということが明らかになった。

それは、すなわち、タイプⅡ（「可能性」の変種）及びタイプⅣ（「不可避性」）について、なかでも、これらのタイプで「内的可能性」の述語が用いられるというケースは、今回の調査ではデータが極めて少ないか、全く得られなかった[1]。これは、我々の言語的直観に照らしても違和感がないが、今回の調査で改めてデータの数量をもって確認できたといえる。

[1] こうした傾向は、下で確認するとおり、より規模の大きいコーパスで調べてみても、その頻度は極めて低い。本章以下の第 1.3.3.節、第 1.3.5.節を参照。

また、特定の述語の用法上の強い傾向についても今回のデータから読み取ることができる。すなわち、内的可能性を表す述語のうち、「в силах」は、今回得たデータでは、タイプⅢの意味・統語構造でしか用いられていない。こうした傾向については、Шатуновский（1996）において軽く言及されているのみであり（cf. Шатуновский 1996: 199）、今回の調査により、データの数量的分布という面から母語話者の直感を裏付けることができたと言える。また、この傾向については、既存の辞書にも記述されているものはない[2]ため、この述語が実際に用いられる際の特徴として今後加筆されるべき点と言っていいだろう。

なお、それぞれの意味・統語構造のタイプで、述語と結合する不定詞の体がどのように選択されているかについての実態は、мочь 以外の述語については、以下の第 1.3. 節のそれぞれの節（第 1.3.2.節～第 1.3.5.節）において、述語 мочь については第 1.4. 節において、それぞれ確認する。

1.3. 意味・統語構造にしたがった分析：мочь 以外の述語

1.3.1. 概要

ここまでで、本稿の対象である、可能性に関わるモダリティの意味を含む述語と不定詞の語結合、そしてそこで不定詞がどちらの体の形態が選択されているかについてのデータの数量的分布が明らかになった。ここからは、これらのデータに基づき、従来の研究における記述や、そこにおいて提案された、不定詞の体の選択に関する定式化についての再検証を試みる。

本節では、便宜上、まず мочь 以外の述語（уметь, способен, в состоянии, в силах; можно, нельзя, возможно, невозможно）についてまず考察を行なう。上で確認した、意味・統語構造の四タイプに分類した上で、それぞれのタイプについて：

イ）データの数量的分布はどのようになっているのか；
ロ）それぞれの意味･統語構造で体の形態はどのように選択されているのか;
ハ）述語との語結合で、体の対立はどのような機能を果たしていると考えられるか

これらの点を中心に見ていくことにする。

まず、それぞれの意味・統語構造がどの程度の割合で用いられているかを確認しておこう。データの数量は以下のようになっている（括弧内の百分率は総数に占める割合を示している）：

[2] 例えば、БТС（1998）では、見出し語 сила の三番目の語釈として、「人の持つ、仕事や何かを産み出す活動の基本としての、物理的、精神的性質の全体；生活していく上でのエネルギー、生活能力。何かをするための物理的、精神的可能性（Совокупность физических и духовных свойств человека как основа деловой и творческой активности; жизненная энергия, жизнеспособность. О физической или духовной возможности сделать что-л.）」とされており、そこでの例として「Не в силах забыть кого-, что-л. (невозможно)」と添えられているのみであり、否定の構造でのみ用いるということは明示的には示されていない。

表 4-7：意味・統語構造に応じた動詞の分布（мочь 以外の述語）

タイプ	総数
Ⅰ	1559 (71.84%)
Ⅱ	27 (1.24%)
Ⅲ	543 (25.02%)
Ⅳ	41 (1.89%)
総数	2170

以下で、それぞれの意味・統語構造のタイプについて詳しく見ていくことにする。

1.3.2. タイプⅠ

1.3.2.1. 全体的なデータの分布

まず、タイプⅠの場合の使用実態について確認しよう。これは最も基本的な、当該状況生起の「可能性」について述べる文であり（cf. 第二章、第 5.2.1.節）、四つのタイプの中でも最も使用頻度が高いものとなっている（全体のおよそ 72%を占める）。

動詞のタイプごとの分布は以下のようになっている（括弧内の百分率は総数に占める割合を示している；本節以下同様）：

表 4-8：タイプⅠ（мочь 以外の述語：動詞のタイプごと）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
Ⅰ	933 (59.85%)	360 (23.09%)	24 (1.54%)	181 (11.61%)	56 (3.59%)	5 (0.03%)	1559

ペアを持つ動詞に限って、総数に占める比率をそれぞれ求めると、完了体は 72.16%（1293 例中 933 例）、不完了体は 27.84%（1293 例中 360 例）となる。

それでは、それぞれの可能性の種類（内的可能性、外的可能性）に応じて具体的に見ていくことにしよう。

1.3.2.2. 内的可能性の述語との結合の場合

ここではまず「内的可能性」について見ていこう。「内的可能性」を表す述語と結合する不定詞は、以下のような分布を見せる：

表 4-9：タイプⅠ（内的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
уметь	18 (18.56%)	52 (53.61%)	1 (1.03%)	22 (22.68%)	2 (2.06%)	2 (2.06%)	97
способен	37 (48.05%)	31 (40.26%)	0 (0%)	6 (7.79%)	3 (3.90%)	0 (0%)	77

в состоянии	5 (45.45%)	4 (36.36%)	0 (0%)	2 (18.18%)	0 (0%)	0 (0%)	11
総数	60 (32.43%)	87 (47.02%)	1 (0.05%)	30 (16.22%)	5 (0.27%)	2 (0.11%)	185

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は下表のように変化する:

表 4-10：タイプ I （内的可能性・ペアを持つ動詞）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	総数
уметь	18 (25.71%)	52 (74.29%)	70
способен	37 (54.41%)	31 (45.59%)	68
в состоянии	5 (55.56%)	4 (44.44%)	9
合計（内的）	60 (40.82%)	87 (59.18%)	147

このように、内的可能性の場合には、不完了体が用いられる割合が、下で見る外的可能性の場合よりも全体として多くなっている。

特に、そうした傾向が顕著なのは、述語 уметь の場合である（完了体が約 26%に対して、不完了体が約 74%）:

(4-1) Федька ***умел*** возникать [IPFV-INF] внезапно и так же мгновенно исчезать [IPFV-INF]. [UC]
フェーヂカは、不意に現れて、同じように、あっという間にいなくなる能力の持ち主だった。

(4-2) И вместе с тем, хотя Марию Дмитриевну боялись, все удовольствия, развлечения, праздники ожидались именно от нее. ***Умела*** она дарить [IPFV-INF], веселиться [IPFV-INF], радость находить [IPFV-INF] в самых будничных, казалось, ситуациях. [UC]
そして、マリーヤ・ドミートリエヴナは怖がられてはいたけれども、同時にありとあらゆる満足、楽しみやお祝い事といったことは、彼女から得られることが期待できたのだ。彼女は、贈り物をし、楽しみ、非常に退屈と思われる状況でも、喜びを見つけることのできる人だった。

(4-3) Она ***умела*** внести [PFV-INF] в их застолье, в неторопливый обмен мыслями притягательную, хотя и нервную ноту, будоражущую игру. [UC]

彼女は、彼らの祝日の食卓に、つまり気忙しいあれやこれやの思考のやり取りに、いらいらした調子ではあるけれども、魅力的な、心を揺さぶってくれる遊びを持ち込むことができる人だった。

ここで例えば下の例のように、不定詞の体の形態を入れ替えても、意味に変化は生じない[3]：

(4-3') Она ***умела*** вносить [IPFV-INF] в их застолье, в неторопливый обмен мыслями притягательную, хотя и нервную ноту, будоражущую игру.

このように、不定詞の体の形態は完了体も許容されるものの、今回のデータを見る限りでは、述語 уметь の場合には、結合する不定詞は不完了体の形態が選択される割合がかなり高くなっている。

それに対して、同じ内的可能性でも、先天的可能性（способен, в состоянии）の述語になると、今度は完了体の比率が増えてくる（それぞれ、完了体の占める割合は54.41%、55.56%となる）。

同じ語彙的意味を持つ不定詞が、不完了体の形態で用いられている例、完了体の形態で用いられている例の、双方の例を見つけることができる。下例を参照：

(4-4) Так утверждается иной тип взаимовлияний характера и обстоятельств: не только обстоятельства влияют на личность, но и личность на обстоятельства, что, собственно, и составляет предмет исследования, фокусировку познавательных интересов метода: как человек ***способен*** влиять [IPFV-INF] на время, подчинять его себе, своей воле, своему сознанию. [UC]
このように主張されているのは、性格と環境の相互作用の別のタイプである。個性に影響を与えているのは環境の方ばかりではなく、個性の方も環境に影響を与えている。実際、このことが研究対象、方法の認識に関する興味に対する焦点となっている。どのように人は、時間に影響を与え、時間を自らに、自らの意思に、自らの意識に従属させることができるのだろうか。

(4-5) Был поставлен вопрос о том, насколько композиционно-языковая вариативность отдельных текстов ***способна*** повлиять [PFV-INF] на стабилизацию достаточно крупных и структурно четко организованных вариантов (разновидностей) литературного языка. [UC]
それぞれのテキストの構造上の変動性というものが、標準語の、十分に規模が大きく、構造的に明確に整えられているヴァリアント（種類）の安定化にどの程度影響を与えるかということに関する問題が提起された。

[3] 以下、筆者が用意した例文（あるいはコーパスからのデータを一部改編したものなども含む）に関しては、モスクワ在住のロシア語母語話者（男性、30 代、言語学専攻）にチェックを依頼した。

ここで例えば、上の例文の不定詞の体の形態を、それぞれ下例のように入れ替えても意味に差違は生じないという（下例；例文に対する訳は差異を表すのが困難なためここでは省略する）：

(4-4') Как человек ***способен*** повлиять [PFV-INF] на время, подчинять его себе, своей воле, своему сознанию?

(4-5') Был поставлен вопрос о том, насколько композиционно-языковая вариативность отдельных текстов ***способна*** влиять [IPFV-INF] на стабилизацию...

このように、この述語と結合する不定詞はどちらの体の形態も用いることができるという特徴は、ここで数量的分布がどちらにも偏りを見せていないということにも反映されていると考えられる。

1.3.2.3. 外的可能性の述語との結合の場合

次に、外的可能性の述語についてみていくことにしよう。これらの述語と結合する不定詞は、以下のような分布を見せる：

表 4-11：タイプ I （外的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
можно	861 (63.36%)	271 (19.94%)	22 (1.62%)	151 (11.11%)	51 (3.75%)	3 (0.02%)	1359
возможно	12 (80%)	2 (13.33%)	1 (0.67%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	15
総数	873 (63.54%)	273 (19.87%)	23 (1.67%)	151 (10.99%)	51 (3.71%)	3 (0.22%)	1374

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は下表のように変化する：

表 4-12：タイプ I （外的可能性・ペアを持つ動詞）

	述語	ペア（完）	ペア（不完）	総数
外的	можно	861 (76.06%)	271 (23.94%)	1132
	возможно	12 (85.71%)	2 (14.29%)	14
合計（外的）		873 (76.18%)	273 (23.82%)	1146

このように、外的可能性の意味を持つ述語と結合する場合には、不定詞の体の形態

は、全体として完了体が多く選択されている（完了体が 76.18%）。
具体例をいくつか見てみよう。

(4-6) В этом смысле ***можно*** согласиться [PFV-INF] с академиком А.Д. Сахаровым, который считает, что более глубокие сокращения СНВ потребовали бы учета многих других условий, в том числе наличия систем ПРО. [UC]
この意味では、サハロフ博士に同意できる。彼は戦略兵器のより一層の削減には、ミサイル防衛システムの存在も含めた、他のより多くの条件を考慮する必要があるだろうと考えている。

(4-7) Так, по крайней мере, утверждал Игорь, а уж ему-то ***можно*** было поверить [PFV-INF]. [UC]
少なくともこうイーゴリは主張した。彼のことは信用できた。

(4-8) Теперь в Москве вправе задать ответный и неотложный вопрос: насколько в складывающихся новых обстоятельствах ***можно*** верить [IPFV-INF] другим внешним участникам в конфликте? [UC]
今やモスクワでは、報復とも言える、先延ばしのできない、次のような質問がされる理由がある。新たに出来上がりつつある状況において、他の、紛争への外部の参加者のことをどれくらい信用できるものだろうか。

例えば、ここで上例（4-6）の不定詞の体の形態を入れ替えることは原則としてできない（下例参照）：

(4-6’) ?[4]В этом смысле ***можно*** соглашаться [PFV-INF] с академиком А.Д. Сахаровым, который считает, что более глубокие сокращения СНВ потребовали бы учета многих других условий, в том числе наличия систем ПРО.

この点については、下の第 1.3.6.節において改めて確認することとし、ここでは現象の指摘のみに留める。

1.3.3. タイプⅡ

1.3.3.1. 全体的なデータの分布

次に、タイプⅡを見ていこう。これは「可能性」の意味の変種だが、使用される頻度は非常に低く、今回収集したデータでも 27 例しか得られなかった（データ総数の 1.24%）。
動詞のタイプごとの分布は以下のようになっている：

[4] 以下、慣習に従い、例文文頭に疑問符（?）を付することにより、当該文の許容度が低いことを示す。同様に、星印（*）を付することにより、当該文が非文であることを示す。

表 4-13：タイプⅡ（мочь 以外の述語：動詞のタイプごと）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
タイプⅡ	2 (7.41%)	17 (62.96%)	0	8 (29.63%)	0	0	27

ペアを持つ動詞に限ると、完了体は 10.53%（19 例中 2 例）、不完了体は 89.47%（19 例中 17 例）となる。

この意味・統語構造のタイプで用いられる不定詞の体の形態について、言及している先行研究は少ない。実際のところ、今回得られたデータの数量を見ても、頻度数としては極めて低い部類に入るため、データが集まりにくいという状況があったのだろうと推測できる。

以下で、可能性の種類に応じて見ていくことにする。

1.3.3.2. 内的可能性の述語との結合の場合

内的可能性を表す述語と結合する不定詞は、以下のような分布を見せる：

表 4-14：タイプⅡ（内的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
уметь	0 (0%)	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (%)	2

このタイプの意味・統語構造では、内的可能性の述語が用いられることは極めて稀であることが、上のデータから明らかになったと言えるだろう。

しかし、より規模の大きいコーパスを調べてみると、例えば下のような例を見つけることができる：

(4-9) Но Ельцин ***умеет*** не <u>замечать</u> [IPFV-INF] того, чего не хочет замечать. [RNC: Борис Грищенко. Посторонний в Кремле (2004)]
しかしエリツィンは気付きたくないことには気付かない、その術を身に付けていた。

試みに、ナショナル・コーパス（「基本コーパス」; cf. 第三章、第 1.2.4.節）で、この内的可能性の述語のタイプⅡを求めて検索を行なうと、以下のような結果が得られる[5]：

[5] 2013 年 8 月時点で得られたデータによっている。対象はペアを持つ動詞に限っている。

表 4-15：ナショナル・コーパスでの検索結果（タイプⅡ；2013 年 8 月時点）

検索した語結合	完了体	不完了体	総数
уметь не＋不定詞	10 (10%)	90 (90%)	100[6]
способен не＋不定詞	7 (36.84%)	12 (63.16%)	19
в состоянии не＋不定詞	3 (60%)	2 (40%)	5[7]
в силах не＋不定詞	0 (0%)	0 (0%)	0
総数	20 (16.13%)	104 (83.87%)	124

ウプサラ・コーパスよりもはるかに規模の大きいコーパスでも、得られるのはこの程度のデータ数であることから、極めて使用頻度の低いタイプであると考えてよいだろう。

なお、上例（4-9）の不定詞の体の形態を入れ替えた下例を確認しておこう：

(4-9’) Но Ельцин ***умеет*** не <u>заметить</u> [PFV-INF] того, чего не хочет замечать.
しかしエリツィンは、気付きたくないことに気付かないことができる。

この文も許容される。何かある特定の場面での特定の行動などが念頭に置かれているのであれば、完了体の使用も許容される。

1.3.3.3. 外的可能性の述語との結合の場合

対して、外的可能性の述語の場合はどうだろうか。今回のデータでは以下のような分布となっている：

表 4-16：タイプⅡ（外的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
можно	2 (8%)	15 (60%)	0 (0%)	8 (32%)	0 (0%)	0 (0%)	25

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は、それぞれ完了体が 11.76%（17 例中 2 例）に対して、不完了体が 88.24%（17 例中 15 例）となる。

先にも述べた通り（cf. 第一章、第 3.2.節）、Рассудова（1982）では、述語 мочь と можно と用いられる不定詞の体の別が、意味の区別を行なうとしている（cf. Рассудова 1982:

[6] 検索して得られるサンプル自体は 104 例。うち、быть が 2 例、対象外のサンプルが 2 例あり、それらを計数から除外している。

[7] 検索して得られるサンプル自体は 8 例。両体動詞が 2 例（консолидировать）、誤記と思われる動詞（обидиться）が 1 例あったため、ここでは計数から除外している。

127)。不定詞が不完了体の場合には、「許可（разрешение)」の意味が表され、完了体の場合には「推測（допущение)」や「予測（предположение)」が表されるとされる。下例を参照：

(1-11) Можно не раздеваться [IPFV-INF]. 【再掲】
上着は脱がなくていいです。

不完了体の不定詞が用いられている同様の例として、今回のデータからは以下の様なものがある：

(4-10) Такого преподавателя, никогда никому не ставившего двоек, ***можно*** было бы и не воспринимать [IPFV-INF] всерьез. [UC]
これまで誰にも落第点を付けたことがないような教師がいたとしても、真剣に捉えなくてもよいだろう。

これらの例は、どちらも Рассудова（1982）が指摘するところの「許可」の意味[8]を示していると考えられるだろう。
一方で、完了体の不定詞が用いられる例も、今回のデータでは二例見られる：

(4-11) ***Можно*** ли не согласиться [PFV-INF] с авторами письма, которые расценили случившееся как удар, который совершенно сознательно наносится самой идее обучения по выбору, по интересам. [UC]
選択や興味に応じた学習という思想そのものに対して、全く意識的に振り落とされた一撃のようだと、そのように起こったことを評価した、手紙の筆者たちに同意しないでいいものだろうか。

この場合、不定詞の体の形態を入れ替えても意味は変わらない（下例；先のレイ同様にここでは訳は省略する）：

(4-11') ***Можно*** ли не соглашаться [IPFV-INF] с авторами письма, которые расценили случившееся как удар, который совершенно сознательно наносится самой идее обучения по выбору, по интересам.

同じく完了体が用いられている次の例はどうだろうか：

(4-12) Честно говоря, в голове не укладывается, как ***можно*** не выполнить [PFV-INF] госзаказ на лекарство. [UC]
実を言えば、どうすれば国からの薬の注文をこなさないようにできるのか、腑

[8] 「許可」の意味は「非現実のモダリティ」に含まれる。Palmer（2001）の枠組みで言うところの、「束縛的モダリティ」（cf. 第二章、第 3.2.2.節）に該当する。

に落ちない。

この例で、不定詞の体の形態を入れ替えてみる（下例；上と同様の理由で訳は省略してある）：

(4-12')Честно говоря, в голове не укладывается, как ***можно*** не выполнять [IPFV-INF] госзаказ на лекарство.

この場合には、両者の間には二次的アスペクトに応じた対立が生じる。すなわち、不完了体が用いられている例では、当該状況の反復性が表される。

このタイプの意味・統語構造における、不定詞の体の形態の差異によって表されるのは、Рассудова（1982）による指摘にあったような、「許可」と「推測」及び「予測」という意味の対立のみというわけではなく、アスペクトの意味の対立も表現されうる。

1.3.4. タイプⅢ[9]

1.3.4.1. 全体的なデータの分布

続いて、タイプⅢについて見ていこう。このタイプは、「不可能性」を表す最も基本的な構造であり、全体としての頻度数も先のタイプⅠに続いて多い（cf. 第 1.2.4.1.節）。動詞のタイプごとの分布は、以下のようになっている：

表 4-17：タイプⅢ（мочь 以外の述語：動詞のタイプごと）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
タイプⅢ	285 (52.49%)	159 (29.28%)	7 (1.29%)	78 (14.36%)	12 (2.21%)	2 (0.37%)	543

ペアを持つ動詞に限って総数に占める比率を見ると、完了体は 64.19%（444 例中 285 例）、不完了体は 35.81%（444 例中 159 例）となる。

このタイプⅢに関しては、Рассудова（1982）、Forsyth（1970）の双方で、完了体が多いという記述がなされていた（cf. 第一章、第 3.3.節）が、データの数量的分布から見ても、それがある程度までは裏付けられていると言ってよいだろう[10]。

それでは以下でそれぞれの可能性の種類に応じて見ていくことにしよう。

1.3.4.2. 内的可能性の述語との結合の場合

内的可能性の述語の場合には、以下のような分布を見せる：

---

[9] 特に「不可能性」をめぐる問題については、阿出川（2005）においても取り扱われている。そこでは、Бабенко（Людмила Григорьевна; 1946-）が中心となって編まれた ТСРГ（1999）や ЭСС（2002）で提案されている動詞分類を援用した分析が試みられている。

[10] しかし、こうした傾向は、タイプⅠの「可能性」との語結合においても同様であり、「不可能性」と完了体という形態の結び付きは、データの分布という観点からは特殊なものではなさそうである。この点については、下の第 1.5.節で改めて見る。

表 4-18：タイプⅢ（内的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
уметь	12 (19.05%)	30 (47.62%)	0 (0%)	21 (33.33%)	0 (0%)	0 (0%)	63
способен	3 (25%)	3 (25%)	1 (8.33%)	3 (25%)	2 (1.67%)	0 (0%)	12
в состоянии	18 (85.71%)	2 (9.52%)	0 (%)	1 (4.76%)	0 (0%)	0 (0%)	21
в силах	15 (78.95%)	1 (5.26%)	0 (%)	1 (5.26%)	1 (5.26%)	1 (5.26%)	19
総数	48 (41.74%)	36 (31.30%)	1 (0.87%)	26 (22.61%)	3 (2.61%)	1 (0.87%)	115

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は下表のように変化する：

表 4-19：タイプⅢ（内的可能性・ペアを持つ動詞）

		ペア（完）	ペア（不完）	総数
内的	уметь	12 (28.57%)	30 (71.43%)	42
	способен	3 (50%)	3 (50%)	6
	в состоянии	18 (90%)	2 (10%)	20
	в силах	15 (93.75%)	1 (6.25%)	16
合計（内的）		48 (57.14%)	36 (42.86%)	84

内的可能性の述語に関して言えば、いくつかの述語は、他の意味・統語構造の場合と比較しても、体の選択傾向に変化が見られないものも存在する[11]。最も特徴的なのは、уметь が用いられている場合である：

(4-13) Тане в тревожные минуты не легко дается спокойствие. Мягкий и уступчивый человек, не ***умеет*** заботиться [IPFV-INF] о себе, отстаивать личные интересы. [UC]

[11] 例えばタイプ I との比較が考えられるが、前の注でも述べた通り、この比較については特に第 1.5. 節で取り扱っているため、そちらを参照されたい。

ターニャは、不安な時には、なかなか気持ちが落ち着かないのだ。優しくて、人に譲る性格の人で、自分のことをかまったり、自分の利益を守ったりすることができない人なのである。

ここで不定詞の体を入れ替えた、下の例も許容され、意味の上での違いは認められない（訳は省略）：

(4-13')Тане в тревожные минуты не легко дается спокойствие. Мягкий и уступчивый человек, не ***умеет*** позаботиться [PFV-INF] о себе, отстаивать личные интересы.

このように、述語 уметь の場合、不定詞の体の形態は相互に入れ替えが可能ではあるものの、今回のデータの数量的分布としては、不完了体が一貫して多数を占めている。

それに対して、「в состоянии」及び「в силах」と結合する不定詞の場合には、この意味・統語構造で多数を占めるのは完了体の形態である：

(4-14) Пальцы вцепились в землю, она судорожно вздрагивала от бомб, отталкивая, не ***в силах*** защитить [PFV-INF] меня. [UC]
指は地面にしっかりしがみついていたが、地面は爆撃で震えており、私を押しのけるようで、とても守ってくれるような状態ではなかった。

後で見る通り（cf. 第 1.5.2.1.節）、ここでは不定詞の体の形態を入れ替えることは許容されない。

1.3.4.3. 外的可能性の述語との結合の場合

対して、外的可能性の場合には、データの分布は以下のようになる：

表 4-20：タイプⅢ（外的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
можно	4 (66.67%)	1 (16.67%)	0 (0%)	1 (16.67%)	0 (0%)	0 (0%)	6
возможно	2 (66.67%)	1 (33.33%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (%)	3
нельзя	141 (45.78%)	114 (37.01%)	5 (1.62%)	40 (12.99%)	7 (2.27%)	1 (0.32%)	308
невозможно	90 (81.08%)	7 (6.31%)	1 (0.9%)	11 (9.91%)	2 (1.80%)	0 (0%)	111
総数	237 (55.37%)	123 (28.74%)	6 (1.40%)	52 (12.15%)	9 (2.10%)	1 (0.23%)	428

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は下表のように変化する:

表 4-21：タイプⅢ（外的可能性・ペアを持つ動詞）

	述語	ペア（完）	ペア（不完）	
外的	можно	4 (80%)	1 (20%)	5
	возможно	2 (66.67%)	1 (33.33%)	3
	нельзя	141 (55.29%)	114 (44.71%)	255
	невозможно	90 (92.78%)	7 (7.22%)	97
合計（外的）		237 (65.83%)	123 (34.17%)	360

いくつか具体例を見ておこう：

(4-15) ***Невозможно*** <u>пройти</u> [PFV-INF] мимо и такой страшной беды — ежегодно от голода умирают 400 миллионов человек, в том числе 17 миллионов детей. [UC]
このような恐ろしい不幸を黙って見過ごすことはできない。毎年、1700 万人の子供を含む、4 億人の人が、飢えで亡くなっているのだ。

不定詞を不完了体に入れ替えると下のようになる：

(4-15') ***Невозможно*** <u>проходить</u> [IPFV-INF] мимо и такой страшной беды — ежегодно от голода умирают 400 миллионов человек, в том числе 17 миллионов детей.

この文脈では、文意が変わることなく、不完了体の使用も許容される。したがって、不可能性を表す述語との結合においても不完了体を用いることはできる。しかし、その一方で、データの数量的分布という点では、完了体の使用が好まれているという傾向が見て取れる。

別の述語の場合の例も確認しておこう。

(4-16) То есть я хочу спросить: почему экономическая реформа не сказалась на государственном бюджете? Вряд ли ***можно*** полностью <u>согласиться</u> [PFV-INF] с такой постановкой вопроса. [UC]
すなわち私はこうお尋ねしたい。なぜ経済改革が国家予算に影響しなかったのか？この類いの問題提起には恐らく完全には賛同できないでしょう。

不定詞を入れ替えると以下のようになるが：

(4-16')*То есть я хочу спросить: почему экономическая реформа не сказалась на государственном бюджете? Вряд ли ***можно*** полностью соглашаться [IPFV-INF] с такой постановкой вопроса.

この場合には、完了体の使用は許容されない。不定詞 согласиться は、ここで具体的になされた問題提起を受けての態度表明であるため、反復性を表すことになる不完了体（соглашаться）を用いることはできない。したがって、不可能性という意味の影響よりもむしろ、アスペクトの意味に応じて体の形態選択がなされていると考えられる。

あるいは、先に見た Рассудова（1982）において引かれている例文を再度確認しておこう（Рассудова 1982: 125）：

(2-142)В этом кинотеатре нельзя показывать [IPFV-INF] широкоэкранные фильмы.【再掲】
この映画館ではワイドスクリーンの映画は上映することができません。

ここで不定詞の形態を入れ替えると下例のようになるが：

(2-142') *В этом кинотеатре нельзя показать [PFV-INF] широкоэкранные фильмы.

この文脈では完了体の形態を用いることは許容されない。補語の複数形によって示される当該状況の反復性、一般性と相容れないためである。

1.3.5. タイプⅣ[12]

1.3.5.1. 全体的なデータの分布

タイプⅣを見ていこう。動詞のタイプごとの分布は以下のようになる：

表 4-22：タイプⅣ（мочь 以外の述語：動詞のタイプごと）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
タイプⅣ	22 (53.66%)	14 (34.15%)	4 (9.76%)	1 (2.44%)	0	0	41

ペアを持つ動詞に限って総数に占める比率を見ると、完了体は 61.11%（36 例中 22 例）、不完了体は 38.89%（36 例中 14 例）となる。

先にも述べた通り（cf. 第一章、第 3.4.節）、このタイプⅣの構造について述べているのは、Forsyth（1970）である。本節冒頭でも述べた通り（cf. 第一章、第 3.2.3.節）、

[12] 本節の内容は、阿出川（2004a）及び阿出川（2004b）を踏まえ、再構成をしたものである。

Forsyth（1970）は、この構造に関して、「非常にしばしば、不可避の現象というのは一回の動作なので、完了体の動詞が不完了体の動詞よりも普通である」という「定式化」を試みている（cf. Forsyth 1970: 262-263）。確かに、今回のデータの計数結果を見る限り、Forsyth（1970）での記述にある通り、完了体が選択されているケースが数量の上では多くなってはいる。しかしながら、不完了体が用いられている例も少なからず存在している（完了体が約 61%に対して不完了体が約 39%）。

それではそれぞれの述語に応じて見ていくことにしよう。

1.3.5.2. 内的可能性の述語との結合の場合

内的可能性の述語がこのタイプで用いられているという例は、今回のデータには含まれていなかった。

しかし、より規模の大きいナショナル・コーパスからは、以下のような例を見つけることができる：

(4-17) Она засмеялась — она не ***умеет*** не <u>смеяться</u> [IPFV-INF] , когда смешно, — но гнев клокотал в ней... [RNC: В. Ф. Панова. Времена года. Из летописей города Энска (1953)]
彼女は笑い出したさ。彼女は可笑しい時には笑わないってことができないんだ。でも腹の中では怒りの感情が煮えたぎっていたんだよ・・・。

(4-18) Павел Николаевич умел переключаться, но к середине дня осознал, что впервые не ***в состоянии*** не <u>думать</u> [IPFV-INF] о Марине. [RNC: Сергей Таранов. Черт за спиной (2001)] 【再掲】
パーヴェル・ニコラーエヴィチは気持ちを切り替えることができる人間だったが、その日の昼頃までに、マリーナのことを考えないようでいられるような状態ではなく、そんなことが初めてだと気付いた。

しかし、いずれにしても、こうした例は、極めて少数である。試みに、ナショナル・コーパス（基本コーパス）で以下の検索を行なう[13]と以下のような結果が得られる：

表 4-23：ナショナル・コーパスでの検索結果（タイプⅣ；2013 年 8 月時点）

検索した語結合	完了体	不完了体	総数
не уметь не＋不定詞	3 (25%)	9 (75%)	12 (%)
не способен не＋不定詞	1 (50%)	1 (50%)	2 (%)
не в состоянии не＋不定詞	2 (28.57%)	5 (71.43%)	7 (%)

[13] 2013 年 8 月時点でのデータによる。上で見たタイプⅡの場合と同様、ペアを持つ動詞に限っている（cf. 第 1.3.3.2.節）。

не в силах не＋不定詞	6 (54.55%)	5 (45.45%)	11 (%)
総数	12 (37.50%)	20 (62.50%)	32 (%)

本稿執筆時点（2013 年 8 月）でナショナル・コーパス（基本コーパス）の総語数は、2 億語超であるということからも（cf. 第三章、第 1.2.4.節）、この語結合の頻度数の少なさが推測できる。したがって、内的可能性を表す文のタイプⅣは、非常に稀であると言ってよいだろう。

1.3.5.3. 外的可能性の述語との結合の場合

外的可能性の述語の場合には以下のような分布を見せる：

表 4-24：タイプⅣ（外的可能性）

述語	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
можно	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1
нельзя	19 (51.35%)	14 (37.84%)	3 (8.11%)	1 (2.70%)	0 (0%)	0 (0%)	37
невозможно	2 (66.67%)	0 (0%)	1 (33.33%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3
総数	22 (53.66%)	14 (34.15%)	4 (9.76%)	1 (2.44%)	0 (0%)	0 (0%)	41

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める比率は下表のように変化する：

表 4-25：タイプⅣ（外的可能性・ペアのある動詞）

		ペア（完）	ペア（不完）	総数
外的	можно	1 (100%)	0 (0%)	1
	нельзя	19 (57.58%)	14 (42.42%)	33
	невозможно	2 (100%)	0 (0%)	2
合計（外的）		22 (61.11%)	14 (38.89%)	36

いくつか具体例を見ておこう：

(4-19) ***Нельзя*** не сказать [PFV-INF], что из-за распыления средств по многочисленным объектам объем незавершенного строительства постоянно увеличивался и достиг уже 150 процентов годового объема. [UC]
多数の施設に対する手段の分散が原因で、完成していない建築の数が絶えず拡大し、既に一年の数の 150 パーセントに達したと言わざるをえない。

(4-20) ***Нельзя*** не согласиться [PFV-INF], например, с тем, что пришла пора создать координационный совет по Азовскому морю. [UC]
例えば、アゾフ海に関する調整のための評議会を創設する時期が来ているということには同意せざるを得ない。

ここで、上例の不定詞を入れ替えてみると下例のようになる：

(4-20')?***Нельзя*** не соглашаться [IPFV-INF], например, с тем, что пришла пора создать координационный совет по Азовскому морю.

このように、不完了体の形態を用いることも可能ではあるものの、無理があるという。ここの文脈にあるような、評議会を創る時期が来ているということの具体性と、不完了体が表すことになる、当該状況の「一般性」とが相容れないためである。
このタイプで最も頻度数の高い述語 нельзя に関して言えば、完了体が用いられている例は、六割程度（57.58%）であり、不完了体の不定詞が用いられている例も少なからずある。例えば以下のような例を確認しておこう：

(4-21) Вот каким был мой отец: силач, бегун, храбрец, герой, остряк, бретер, победитель, словом, обыкновенный отец, какой есть у каждого мальчишки и которого ***нельзя*** не любить [IPFV-INF], которым ***нельзя*** не восхищаться [IPFV-INF].
私の父親はこんな男だった。力持ちで、走るのが早くて、勇気があって英雄、洒落の利く人で、決闘が好きで、勝者で。要するに、男の子の親であるような、愛さないわけにはいかず、感嘆しないではいられないような、そんなありふれた父親だった。

上例での不完了体の使用は、当該動作の「無制限反復」から転じた、「一般性」という要素が大きいように思われる。これらの不定詞を完了体に置き換えると下例のようになるが：

(4-21')*Вот каким был мой отец: силач, бегун, храбрец, герой, остряк, бретер, победитель, словом, обыкновенный отец, какой есть у каждого мальчишки и которого ***нельзя*** не полюбить [PFV-INF], которым ***нельзя*** не восхититься [PFV-INF].

このように完了体を用いた場合、その時だけ一時的に当てはまる特徴について描写

しているように響くという。あるいは、話者にとっては事前に分かっていない（未知の）対象の性質などが表されるために、上のような文脈では完了体の使用は許容されない。

例えば、下のような例では完了体が使用される：

(4-22) У Вани просто удивительный папа, это отец, которого ***нельзя*** не полюбить [PFV-INF], которым ***нельзя*** не восхититься [PFV-INF].
ワーニャのお父さんはすごいんだ。好きにならずにはいられないし、驚かないわけにはいかないようなお父さんなんだ。

(4-23) Когда мы с ней впервые встретились, — это было 2 года назад, — мне было ***нельзя*** не ей восхититься [PFV-INF]. Не знаю, почему, но вот таким образом мы начали общаться.
僕が彼女と最初に会った時、あれは二年前だったと思うけれど、彼女には感嘆せざるをえなかった。なぜだか分からないけれど、とにかくそんな風に僕らはやり取りを始めたんだ。

このような文脈であれば、完了体の使用が適切となる。

しかしながら、こうした、当該状況の一般性や具体性といった意味特徴だけでは説明できないケースも存在する。例えば以下の例を見てみよう：

(4-24) То, что сделала сборная Финляндии с допингом, конечно, мерзко. Но не ***может*** не вызывать [IPFV-INF] уважения их искреннее признание своей вины.
[Ogonek, 2001 年 12 号: http://www.ogoniok.com/archive/2001/4687/12-50-51/]
フィンランドの代表チームがドーピングでしたことは、もちろん卑劣なことだ。しかしながら、彼らが自らの罪のことを誠実に告白したことには尊敬の念を抱かざるを得ない。

ここで下のように不定詞を完了体に入れ替えることも可能であり、その場合でも文意に差異は生じない：

(4-24’)То, что сделала сборная Финляндии с допингом, конечно, мерзко. Но не ***может*** не вызвать [PFV-INF] уважения их искреннее признание своей вины.

1.3.6. мочь 以外の述語との語結合における不定詞の体の形態の役割

1.3.6.1. 非現実のモダリティが対象とする「状況」

ここまでで、мочь 以外の述語と不定詞の語結合について、「内的可能性」、「外的可能性」のそれぞれについて見てきた。これらの述語によって表される、「内的可能性」及び「外的可能性」は、「非現実のモダリティ」にあたる。したがって、これらの述語と結合する不定詞の体の形態の役割の分析を通じて、「非現実のモダリティ」における

体の形態の果たしている役割が明らかにできるだろう。

「非現実のモダリティ」が対象とする「状況」は、上で見たように（cf. 第二章、第 3.4.節）、起算時点では生じておらず、将来的に生じうる「事象」である。そのため、その「事象」を、聞き手に提示する際にどのように不定詞の体の形態が用いられているのかを明らかにすることが本節での課題となる。

1.3.6.2. 完了体の機能

まず、「非現実のモダリティ」を表す文における、不定詞の完了体の形態が果たしている機能について考察してみよう。

まず、先にも見た以下の例文の場合を考えてみよう：

(4-6) В этом смысле ***можно*** <u>согласиться</u> [PFV-INF] с академиком А.Д. Сахаровым, который считает, что более глубокие сокращения СНВ потребовали бы учета многих других условий, в том числе наличия систем ПРО. [UC] 【再掲】
この意味では、サハロフ博士に同意できる。彼は戦略兵器のより一層の削減には、ミサイル防衛システムの存在も含めた、他のより多くの条件を考慮する必要があるだろうと考えている。

(4-6’) ?В этом смысле ***можно*** <u>соглашаться</u> [PFV-INF] с академиком А.Д. Сахаровым, который считает, что более глубокие сокращения СНВ потребовали бы учета многих других условий, в том числе наличия систем ПРО.

例（4-6’）のように、ここで不定詞を不完了体に入れ替えると不自然な文と判断される。それは、ここでのサハロフ氏の具体的な提案と、不完了体を用いることによって表されることになる「反復性」が意味的にそぐわないということによる。したがって、ここでの体の選択基準は、当該状況の反復性に対する、当該状況の完了という対立に基づいていると考えられる。

その一方で、反復性を有すると思われる動作が完了体によって表される場合もある。先の例を見てみよう：

(4-3) Она ***умела*** <u>внести</u> [PFV-INF] в их застолье, в неторопливый обмен мыслями притягательную, хотя и нервную ноту, будоражущую игру. [UC] 【再掲】
彼女は、彼らの祝日の食卓に、つまり気忙しいあれやこれやの思考のやり取りに、いらいらした調子ではあるけれども、魅力的な、心を揺さぶってくれる遊びを持ち込むことができる人だった。

上でも見たように、ここで不定詞を不完了体に入れ替えることも可能であり、それによる文全体の意味にも変化はない。これは、いわゆる『体の競合（конкуренция видов）[14]』という現象である。

[14] 『体の競合（конкуренция видов）』とは、マテジウス（Mathesius, Vilém; 1882-1945）によって（恐らく最初に）定式化された概念で、ある一定の文脈において、完了体を用いても、不完了体を用いて

1.3.6.3. 不完了体の機能

次に、不定詞の不完了体の形態が果たしている機能について考察してみよう。

まず、当該状況の持続性が表される際には、不完了体の形態が現れる。ここでは単体動詞「разговаривать（話す、語る）」の例を確認しておこう：

(4-25) Мама разговаривала по телефону. Она ***умела*** разговаривать [IPFV-INF] по четыре часа подряд, и все четыре часа ей было интересно. [UC]
母は電話で話していた。母は四時間ずつ通しで話せるような人だったし、その四時間の間ずっと面白いと感じていたのだ。

類似の文脈で、ペアを持つ動詞を用いた以下のような文を見てみよう：

(4-26) Она ***умела*** рассказывать [IPFV-INF] о своей поездке четыре часа подряд, и все четыре часа мы скучали.
彼女は自分の旅行について四時間通しで話せたが、僕らはその四時間の間ずっと退屈だった。

時間的な持続性を表す状況語（「четыре часа подряд（四時間通しで）」）と不完了体の形態が共起することは、上例（4-26）同様に自然だが、例えば以下の例のように、不定詞の形態が完了体の場合には非文となる：

(4-26')*Она ***умела*** рассказать [PFV-INF] о своей поездке четыре часа подряд, и все четыре часа мы скучали.

また、「状態」を表す不完了体の形態も現れる。以下の例を見ておこう：

(4-8) Теперь в Москве вправе задать ответный и неотложный вопрос: насколько в складывающихся новых обстоятельствах ***можно*** верить [IPFV-INF] другим внешним участникам в конфликте? [UC] 【再掲】
今やモスクワでは、報復とも言える、先延ばしのできない、次のような質問がされる理由がある。新たに出来上がりつつある状況において、他の、紛争への外部の参加者のことをどれくらい信用していられるものだろうか。

上例の不定詞を完了体の形態に入れ替えると：

(4-8') Теперь в Москве вправе задать ответный и неотложный вопрос: насколько в складывающихся новых обстоятельствах ***можно*** поверить [IPFV-INF] другим

も、発話（文）全体の基本的な意味には変化が生じないという現象を指して言う（cf. Бондарко 1971: 36-42; Зализняк и Шмелев 2000: 147）。この「体の競合」の現象について中心的に扱った研究には、Шведова（Лилия Николаевна）による研究（1984）がある。

внешним участникам в конфликте?

この場合には不定詞の表す当該状況が､未来に生じることが表される(「(これから)信用することができるだろうか」)。

次に、反復性を基盤とした意味の場合にも不完了体の形態が現れる。この不完了体の使用が最も顕著だったのが、内的可能性の意味を表す уметь との語結合の場合である。例えば下のような例を参照：

(4-27) Валерия Константиновна ***умела*** находить [IPFV-INF] тон с людьми даже и очень далекими — это было не то что легко, но привычно. [UC]
ヴァレーリヤ・コンスタンチーノヴナは、他人と、それもずいぶんと関係の遠い人とでさえも、調子を合わせることができた。それは簡単なことではなかったが、それでも慣れたものだった。

前節でも見た通り、ここで、下例（4-28'）のように、不定詞の体の形態を完了体に入れ替えることも可能であり、この場合でも文意に差異は生じない：

(4-27')Валерия Константиновна ***умела*** найти [PFV-INF] тон с людьми даже и очень далекими — это было не то что легко, но привычно.

また、当該動作の「無制限反復」から転じた、「一般性」という要素を含む場合にも不完了体の形態が現れる。例えば以下のような例を見ておこう：

(4-19) Вот каким был мой отец: силач, бегун, храбрец, герой, остряк, бретер, победитель, словом, обыкновенный отец, какой есть у каждого мальчишки и которого ***нельзя*** не любить [IPFV-INF], которым ***нельзя*** не восхищаться [IPFV-INF]. 【再掲】
私の父親はこんな男だった。力持ちで、走るのが早くて、勇気があって英雄、洒落の利く人で、決闘が好きで、勝者で。要するに、男の子の親であるような、愛さないわけにはいかず、感嘆しないではいられないような、そんなありふれた父親だった。

上例の文脈では、既に特定の父親についての話題ではなく、様々な恒常的特徴を列挙することを通じて父親について描写している。このような文脈では、完了体を用いることはできない。完了体が用いられるのは、その時点での一時的、具体的な特徴（あるいは、話者にとって一時的と思われる、恒常的な性質であるとその時点では思われていないような特徴）を示すような場合である。したがって、既に見た、下例のような場合には完了体が適切であるということになる：

(4-23) Когда мы с ней впервые встретились, — это было 2 года назад, — мне было ***нельзя*** не ей восхититься [PFV-INF]. Не знаю, почему, но вот таким образом мы

начали общаться. 【再掲】
僕が彼女と最初に会った時、あれは二年前だったと思うけれど、彼女には感嘆せざるをえなかった。なぜだか分からないけれど、とにかくそんな風に僕らはやり取りを始めたんだ。

この文脈では、話者が彼女に感嘆したその時点でのその特徴が具体的なものであると見なされるため、完了体が用いられる。

1.4. 意味・統語構造にしたがった分析：述語 мочь の場合

1.4.1. 概要

先に、モダリティの種類は、大きく分けて、「評定のモダリティ」（Palmer の枠組みに従えば「命題的モダリティ」）と「非現実のモダリティ」（同「事象的モダリティ」）とに二分されることを確認した（cf. 第二章、第 3.2.2.節）。ここまでは、このうち、「内的可能性」（同「力動的モダリティ」）や「外的可能性」（同「束縛的モダリティ」）といった、「非現実のモダリティ」のみを表す述語の使用実態について考察してきた。

本節では、モダリティの表すもう一つの中心的な意味である、「評定のモダリティ」も考慮に入れるために、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」双方のモダリティの種類を表すことができる（cf. 第二章、第 3.6.節）述語である мочь をここで取り上げる。

具体的には、мочь が述語として含まれている文を、四つの意味・統語構造のタイプそれぞれに分類した上で、以下の点について考察する：

① データの数量的分布はどうなっているのか
② どの意味・統語構造のタイプが、どのモダリティの意味を表すことが可能なのか
③ その際、不定詞の体の形態はどのように用いられているのか

以下本節では、まず次節（第 1.4.2.節）で、мочь と結合する不定詞のデータの数量的分布を確認する。次に、мочь が用いられる文を、四つの意味・統語構造のタイプに分類した上で、どのタイプで、どのモダリティの意味が実現するのかについて確認していく（第 1.4.3.節）。

また、それぞれのモダリティの意味において不定詞の体の形態の果たしている役割についても考察する（第 1.4.4.節）。その際、不定詞の語彙的意味と、表されるモダリティの種類との関係についても確認する（第 1.4.4.2.節）。

1.4.2. データから見る使用の実態：мочь と不定詞の語結合

まず、述語 мочь と語結合をなす不定詞の分布について確認する：

表 4-26：мочь と語結合をなす不定詞の分布

タイプ	総数
Ⅰ	1591 (66.43%)
Ⅱ	36 (1.50%)
Ⅲ	718 (29.98%)
Ⅳ	50 (2.09%)
総数	2395

今回得たデータの分布は、意味・統語構造ごとに分類し、不定詞の体の別も合わせて提示すると以下のようになる：

表 4-27：мочь と語結合をなす不定詞の分布（動詞のタイプ別）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	単体（完）	単体（不完）	両体	быть	総数
Ⅰ	831 (52.23%)	258 (16.22%)	43 (2.70%)	191 (12.01%)	26 (1.63%)	242 (15.21%)	1591
Ⅱ	16 (44.44%)	12 (33.33%)	0 (0%)	3 (8.33%)	0 (0%)	5 (13.89%)	36
Ⅲ	424 (59.05%)	81 (11.28%)	16 (2.23%)	87 (12.12%)	6 (0.83%)	104 (14.48%)	718
Ⅳ	22 (44%)	18 (36%)	1 (2%)	5 (10%)	0 (0%)	4 (8%)	50
総数	1293 (53.99%)	369 (15.41%)	60 (2.51%)	286 (11.94%)	32 (1.34%)	355 (14.82%)	2395

ペアを持つ動詞に限ると、完了体と不完了体の占める割合は、下表に示すように変化する：

表 4-28：мочь と語結合をなす不定詞の分布（ペアを持つ動詞）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	総数
Ⅰ	831 (76.31%)	258 (23.69%)	1089
Ⅱ	16 (57.14%)	12 (42.86%)	28
Ⅲ	424 (83.96%)	81 (16.04%)	505
Ⅳ	22 (55%)	18 (45%)	40
総数	1293 (77.80%)	369 (22.20%)	1662

ペアを持つ動詞（計 1662 例）に限ってみれば、全体としては、完了体が 77.8%（全 1662 例中の 1293 例）を占めており、それに対して不完了体の割合は 22.2%（全 1662 例中の 369 例）となる。

ここまでで、мочь と結合する不定詞の体の形態の使用実態についてのデータが得られた。以下では、この述語の表すモダリティの意味と、意味・統語構造のタイプ、そしてそこで用いられる不定詞の体の形態の関係について考察する。

述語 мочь は、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」との双方のモダリティの意味を表しうる。ロシア語において、この二種類のモダリティの意味を単独で表すことのできる述語は、ここで取り上げる動詞 мочь のみである[15]。

以下では、それぞれの意味・統語構造のタイプに応じて、それぞれどのモダリティの種類を表しうるかについて、またその際の不定詞の体の形態の現れ方について確認していく。

1.4.3. мочь の表すモダリティの種類と意味・統語構造のタイプの関係

1.4.3.1. タイプ I

まずタイプ I について、どのようなモダリティの意味が表されうるかについて確認しておこう。ここでは、文脈という要素が与える影響を最小限にするために、単純な構造の例によってそれぞれ確認していくことにする。まず、以下のような文を考えてみよう：

(4-28) Он ***может*** прийти [PFV-INF] к нам завтра.

この文は、二通りの解釈が可能である。ひとつは、「彼は明日来るかもしれない。」という解釈（「評定のモダリティ」としての解釈）、そしてもうひとつは「彼は明日来てもよい。」（「非現実のモダリティ」としての解釈）である。前者の解釈は以下のような文によっても表すことが可能である：

(4-29) Может быть, что он придёт [PFV-PRS-3SG] к нам завтра.

上例（4-28）の不定詞を不完了体に入れ替えた下の例（4-30）はどうなるだろうか：

(4-30) ?Он ***может*** приходить [IPFV-INF] к нам завтра.

この文は、「一日に何度も来ることがある」というような、限られた文脈においてのみ可能であり、そうした文脈の支持がない場合には、通常不自然なものと認識される。

[15] 本稿では、「可能性（возможность）」のモダリティに対象を絞っているため、その場合には双方のモダリティの意味を表せるのは、мочь のみということになる。もし、「必然性（необходимость）」のモダリティも対象に含めるとすれば、述語 должен が、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の双方の意味を表しうる。

ここまでの例は、具体的、特定的な一時点を示す指標（「завтра」）を伴う例だったが、次に、反復性を示す指標（「каждый день」）を加えた場合にどうなるのかについて確認しておこう：

(4-31) Он ***может*** прийти [PFV-INF] к нам каждый день.
彼は毎日うちに来るかもしれない。

この場合には、「評定のモダリティ」の意味を表す。
次に、この文の不定詞を不完了体に入れ替えてみる（下例）：

(4-32) Он ***может*** приходить [IPFV-INF] к нам каждый день.
彼は毎日うちに来てもいい。

この場合には「非現実のモダリティ」の意味が表される（「彼は毎日来てもいい。」）。なお、この文を「評定のモダリティ」として解釈することは難しいようである。それは以下の文が奇妙に響くということからも伺える：

(4-33) ?Может быть, что он приходит [IPFV-PRS-3SG] к нам каждый день.

このように、上例（4-32）は、論理的には、「評定のモダリティ」の意味を表すこともできそうだが、「許可」の意味を表す「非現実のモダリティ」としてのみ解釈される。
ここまで見てきたタイプⅠについて、モダリティの意味、時を示す指標、及び不定詞の体の形態との相関関係をまとめると、下表のようになる：

表 4-29：モダリティの意味と不定詞の体の形態（タイプⅠ）

	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
	時を示す指標		時を示す指標	
	завтра	каждый день	завтра	каждый день
完了体	○	○	○	×
不完了体	×	×	×	○

評定のモダリティの場合には、事実上完了体しか用いられない。

1.4.3.2. タイプⅡ

次にタイプⅡについて確認しよう。同様に単純な例に従って見ていく：

(4-34) Он ***может*** не прийти [PFV-INF] к нам завтра.
明日彼はうちに来ないかもしれない。

(4-35) Это событие ***может*** не произойти [PFV-INF].
その出来事は起きないかもしれない。

この場合、「評定のモダリティ」の意味が表される。これは、Рассудова（1982）において、「допущение（推測）」や「предположение（予測）」の意味の場合として指摘されていた、以下の例文によって表される意味にあたると考えられる（cf. Рассудова 1982: 127）：

(1-12) Боюсь, что весь урожай ***может*** не <u>сохраниться</u> [PFV-INF]. 【再掲】
穫れた物全部は残らないんじゃないか。

(2-117)Он ***может*** и не <u>вспомнить</u> [PFV-INF] всех имен и всех деталей. 【再掲】
彼はみんなの名前とこまごまとしたこと全部は思い出せないかもしれない。

これらの場合、通常危惧の念（опасение）のニュアンス（cf. 第二章、第 4.5.2.3.節）が加わるとしている[16]。
上例（4-34）に反復性の指標となる語を加えた以下の例は、非文と見なされる：

(4-36) *Он ***может*** не <u>прийти</u> [PFV-INF] к нам каждый день.

次に不定詞を不完了体の形態で用いた場合について確認しよう。以下のような例が該当する：

(4-37) Он ***может*** не <u>приходить</u> [IPFV-INF] к нам завтра.
明日彼はうちに来なくてもいい。

(4-38) Он ***может*** не <u>приходить</u> [IPFV-INF] к нам каждый день.
彼はうちに毎日来なくてもいい。

(4-39) Вы ***можете*** не <u>вставать</u> [IPFV-INF].
立ち上がらなくていいです。

(4-40) Я ***могу*** не <u>строить</u> [IPFV-INF] дачу именно сейчас, если кому-то мешает моя стройка. Но рано или поздно строить ее все равно буду.
もし誰かの邪魔になってしまうようなら、ちょうど今別荘を建てるのでなくてもいい。どっちにしろ遅かれ早かれ建てるのだけれど。

上例（4-37）、（4-38）、（4-39）及び（4-40）は、いずれも「非現実のモダリティ」として解釈される。

[16] しかし、この場合表される「危惧の念」を、完了体の形態に直接帰するかどうかは議論が必要だろう。「評定のモダリティ」が表される場合に、完了体が用いられるということであり、「評定のモダリティ」が用いられる場面と「危惧の念」が強く結び付いているとも考えられる。

しかしながら、当該状況の主体が無生物の場合には、不定詞が不完了体の形態であっても、下例のような文脈であれば「評定のモダリティ」としての解釈が許容される：

(4-41) Это событие ***может*** не <u>происходить</u> [IPFV-INF] в течение всего эксперимента, но мы все равно не можем исключить из рассмотрения.
この実験すべての期間においてその出来事は生じないかもしれないが、いずれにしても観察から外すことは出来ない。

これは、当該状況の生起の有無が外的な力によって制御できる性質のものではないことから、外的可能性を表す非現実のモダリティとしての解釈が排除されることになり、完了体によっても（上例 4-35）、不完了体によっても（上例 4-40）、「評定のモダリティ」の解釈が許容されると考えられる。

ここまで見てきたタイプⅡについて、モダリティの意味、時を示す指標、及び不定詞の体の形態との相関関係をまとめると、下表のようになる。なお、下表中のダガー印（†）は、条件付きでその形態を用いることが可能となることを示す：

表 4-30：モダリティの意味と不定詞の体の形態（タイプⅡ）

	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
	時を示す指標		時を示す指標	
	завтра	каждый день	завтра	каждый день
完了体	○	×	×	×
不完了体	×†	×†	○	○

† 主体が無生物の場合には可能

1.4.3.3. タイプⅢ

次にタイプⅢについて確認しよう。下の例から見ていく：

(4-42) Он не ***может*** <u>прийти</u> [PFV-INF] к нам завтра.

これは、「非現実のモダリティ」として解釈される（「彼は明日うちには来られない。」）。あるいは、同じ「非現実のモダリティ」で、「彼は明日来てはならない。」の意味にもなりうる。下の例もこの「非現実のモダリティ」を表している例である：

(4-43) И Веня не ***мог*** <u>согласиться</u> [PFV-INF] с тем, что его нет. [UC]
ヴェーニャは、彼がもういないということが納得できなかった。

一方で、下例のように不定詞を不完了体に代えると、非文と判断される：

(4-44) *Он не ***может*** <u>приходить</u> [IPFV-INF] к нам завтра.

当該状況の主体が無生物の場合には、当該状況生起の可能性がないということが表される：

(4-45) Это событие не ***может*** произойти [PFV-INF].
その出来事が生じる可能性はない。

その場合には、上例のように不定詞は完了体を用いるのが通常であるが、下例のように不完了体を用いることも許容される：

(4-46) Это событие не ***может*** происходить [IPFV-INF] без участия внешних сил.
その出来事は外的な力がかかわらなければ起きるはずはない。

しかし、この場合には、当該状況は生起しており、それが話者の想定に反しているというような場面で用いられる。
また、反復性の指標となる語と完了体の不定詞も共に用いることはできず、下のような例も非文と見なされる：

(4-47) *Он не ***может*** прийти [PFV-INF] к нам каждый день.

それに対して、不定詞が不完了体の場合を確認しておこう：

(4-48) Он не ***может*** приходить [IPFV-INF] к нам каждый день.

この場合には文として成立するが、モダリティの意味は、「非現実のモダリティ」として解釈される（「彼は毎日うちには来られない。」あるいは「彼は毎日うちに来てはならない。」）。
ここまで見てきたタイプⅢについて、モダリティの意味、時を示す指標、及び不定詞の体の形態との相関関係をまとめると、下表のようになる：

表 4-31：モダリティの意味と不定詞の体の形態（タイプⅢ）

	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
	時を示す指標		時を示す指標	
	завтра	каждый день	завтра	каждый день
完了体	×	×	○	×
不完了体	×	×	×†	○

† 主体が無生物の場合には可能

興味深いのは、このタイプⅢという意味・統語構造は、非現実のモダリティしか表すことができないということである。

1.4.3.4. タイプⅣ

タイプⅣについて下の例から見ていこう：

(4-49) Он не ***может*** не прийти [PFV-INF] к нам завтра.
彼は明日うちに来ざるをえないだろう。

これは「評定のモダリティ」としての解釈が可能である（「彼は明日我々のところに来ざるをえないだろう。」）。

それに対して、不完了体を用いた下例の場合を考えてみよう：

(4-50) ?Он не ***может*** не приходить [IPFV-INF] к нам завтра.

これは、上で見た例（4-30）の場合（cf. 第 1.4.3.1.節）と同様、一日に何度も来ることがあるというような、特殊な文脈であれば可能ではあるが、そうでなければ不自然に響くという。

当該状況の主体が無生物の場合の例についても見ておこう：

(4-51) Это событие не ***может*** не произойти [PFV-INF].
その出来事は必ず生じる。

当該状況が将来的に生じることが不可避であることが表される。

(4-52) Это событие не ***может*** не происходить [IPFV-INF].

当該状況の反復性が念頭に置かれれば、上例（4-52）のように不完了体の形態も許容される（訳文は省略）。

反復の指標を伴う例はどうなるだろうか：

(4-53) *Он не ***может*** не прийти [PFV-INF] к нам каждый день.

反復性の指標となる語と不定詞の完了体も共存し得ず、非文と見なされる。それに対して、不定詞が不完了体であれば許容される：

(4-54) Он не ***может*** не приходить [IPFV-INF] к нам каждый день.
彼は毎日うちに来ざるをえない。

この場合には、「非現実のモダリティ」として解釈される（「彼は毎日我々のところに来ざるをえない。」）。

ここまで見てきたタイプⅣについて、モダリティの意味、時を示す指標、及び不定詞の体の形態との相関関係をまとめると、下表のようになる：

表 4-32：モダリティの意味と不定詞の体の形態（タイプⅣ）

	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
	時を示す指標		時を示す指標	
	завтра	каждый день	завтра	каждый день
完了体	○	×	○	×
不完了体	×	×	×†	○

† 適切な文脈の支持が必要

1.4.3.5. 意味・統語構造のタイプとモダリティの種類：мочь の場合

ここまでで、四つの意味・統語構造のタイプについて、それぞれのタイプで実現しうるモダリティの種類について考察してきた。下表のようにまとめることができるだろう：

表 4-33：意味・統語構造とモダリティの種類：мочь の場合

タイプ	評定のモダリティ	非現実のモダリティ
Ⅰ	○	○
Ⅱ	○	○
Ⅲ	×	○
Ⅳ	○	○

上表に体の形態の別を加えてみると、下表のようになる：

表 4-34：意味・統語構造、モダリティの種類と不定詞の体の形態

タイプ	不定詞の体	評定のモダリティ	非現実のモダリティ
Ⅰ	完了体	○	○
	不完了体	×	○
Ⅱ	完了体	○	×
	不完了体	×	○
Ⅲ	完了体	×	○
	不完了体	×	○
Ⅳ	完了体	○	○
	不完了体	×	○

上でも述べた通り、興味深いのは、タイプⅢの意味・統語構造では、評定のモダリティとしての解釈がされないという点である。つまり、この意味・統語構造は、実質的に非現実のモダリティを表すために特化された構造であるということになる。

上の表に、時を示す指標の別を加えると、次のようになる：

表 4-35：意味・統語構造、モダリティの種類、時の指標と不定詞の体の形態

タイプ	不定詞の体	評定のモダリティ		非現実のモダリティ	
		時を示す指標		時を示す指標	
		завтра	каждый день	завтра	каждый день
Ⅰ	完了体	○	○	○	×
	不完了体	×	×	×	○
Ⅱ	完了体	○	×	×	×
	不完了体	×	×	○	○
Ⅲ	完了体	×	×	○	×
	不完了体	×	×	×	○
Ⅳ	完了体	○	×	○	×
	不完了体	×	×	×	○

1.4.4. 述語 мочь との語結合における不定詞の体の形態の機能

1.4.4.1. モダリティの種類と対象となる状況

本節では、述語 мочь との語結合において、不定詞の体の形態が果たす機能について考察するが、それに先んじて мочь の表すモダリティの種類と、そこで対象となる「状況」の種類について確認しておこう。

先に見たように（cf. 第二章、第 3.2.1.節）、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」とでは、それぞれのモダリティにおいて対象として取り上げられる「状況」は、それぞれ異なっている。「非現実のモダリティ」の場合には、対象となる状況が「事象」であるのに対して、「評定のモダリティ」の場合には、対象となる状況は「命題」である。「事象」と「命題」の両者にある差異は、「命題」の方は、何らかの手段により、その真偽について論じることができるのに対して、「事象」の方は、そうした真偽に関する判断ができないという点にある。

「事象」の場合には、未だ生じていない（あるいは生じ得ない）状況であるため、時間軸上に位置を占めることはないが、「命題」の場合は、時間軸上に位置を占めることが可能である。その場合には、以下の三つに分類することができるだろう：

① その「命題」が、起算時点より過去に既に生じており、過去の事実となっている場合
② その「命題」が、起算時点で既に生じており、現在も進行している場合
③ その「命題」起算時点でまだ生じておらず、起算時点以降に生じうる場合

上記のうち、①については、本稿の対象である意味・統語構造では表すことができない。例えば、モダリティの意味を表す述語を過去形にした以下のような文を取り上げてみよう：

(4-55) Она ***могла*** умереть [PFV-INF] сегодня.
彼女は今日死んでしまうかもしれなかった。

この場合には、話者が推定を行なっているその時点が過去であることを示しているのみで、当該状況が過去に生じたということを示すものではない。不定詞によって表されている状況は、推定を行なっている時点ではまだ生じておらず、その時点より後に生じうる状況である（つまり上記のうち、③に該当する）。

過去に生じた状況についての推定が行なわれる場合には、モダリティの意味を表す述語を用いた構造ではなく、以下のように全く異なる統語構造を用いて表される：

(4-56) Была вероятность, что она умерла [PFV-PST] сегодня.
彼女は今日死んだのかもしれなかった。

したがって、「評定のモダリティ」の意味が表される場合には、上記のうち②と③のケースについて検討しなくてはならない。

以下では、まず不定詞の語彙的意味の特徴と、表されるモダリティの意味の種類との関係について考察し、それを踏まえた上で、述語 мочь との語結合の場合における不定詞の体の形態の果たしている役割について、上記の②及び③のケースのそれぞれを確認する。

1.4.4.2. 不定詞の語彙的意味とモダリティの種類との関係

上の節（cf. 第 1.4.3.節）で見た例では、不定詞は「приходить/прийти」が用いられている例を中心に見た。この動詞は、不完了体の形態が進行中の動作を表すことができない、いわゆる「トリビアルなペア」にあたるものである（cf. 第二章、第 2.7.4.節）。このタイプの動詞の完了体によって表される状況は、先に見た、「状況の性質」（cf. 第二章、第 1.2.節）に照らすと、「出来事」にあたる[17]。

この節では、このような、不定詞の語彙的意味（状況の性質）の差異が持つ、体の形態選択における影響について考えてみよう。体の形態的対立が想定されるのは、通常、「限界のあるプロセス」（Vendler の分類でいうところの「達成」）と「出来事」（同「到達」）の場合であるため（cf. 第二章、第 2.7.2.5.節）、この二つの比較を試みる。

「限界のあるプロセス」の動詞の場合に、不定詞の体の形態の対立によって、解釈にどのような変化が生じるか確認しておこう。動詞「умирать/умереть（死ぬ）」及び「смотреть/посмотреть（見る）」を用いた以下の例を比較してみよう：

(4-57) Она ***может*** умереть [PFV-INF] завтра.
彼女は明日死んでしまうかもしれない。

(4-58) Ваня ***может*** посмотреть [PFV-INF] телевизор сегодня вечером.
ワーニャは今夜テレビを見るのかもしれない。

完了体が用いられている上例（4-57）、（4-58）は、これから生じうる未来の状況に対する「評定のモダリティ」として解釈される。それに対して、不完了体が用いられ

[17] Vendler の分類で言うところの「到達（Achievements）」に対応する（cf. 第二章、第 2.7.2.3.節）。

ている下の例を見てみよう：

(4-59) Она ***может*** сейчас умирать [IPFV-INF].
彼女は今死にそうなところなのかもしれない。

(4-60) Ваня ***может*** смотреть [IPFV-INF] телевизор.
ワーニャはテレビを見ているのかもしれない。

(4-61) Альберт невыносимо страдает при мысли, что Анна ***может*** сейчас умирать [IPFV-INF], а ему нельзя повидать ее перед смертью. [А. Шницлер. Прощание (краткое содержание новеллы: http://briefly.ru/shnicler/procshanie/)]
アルバートは、アンナは今今際の際にあるが自分は彼女が死ぬ前にあうことはできないということを考えると、堪え難い苦痛を覚えるのである。

あるいは次のような例も参照しておこう：

(4-62) Он ***может*** сейчас строить [IPFV-INF] себе дачу на его площадке.
あいつは今自分の敷地で別荘を建てているところなのかもしれない。

(4-63) Я ***могу*** делать [IPFV-INF] ботинки на работе завтра в это время.
明日のこの時間は職場で靴を作っているところかもしれない。

これらの例では、やはり「評定のモダリティ」に沿った解釈が可能であり、不定詞の不完了体の形態によって表される動作は、現在（あるいは起算時点で）進行している動作が表される。

次に、上で見た прийти などの「出来事」のタイプの動詞の場合について見てみよう。ここでは動詞「воспоминать/вспомнить（思い出す）」を用いている：

(4-64) Он ***может*** вспомнить [PFV-INF] именно это событие, услышав твой голос.

この場合には、上で見た例（4-28）などと同様、やはり二通りの解釈が可能である。「評定のモダリティ」にしたがった解釈（「君の声を聞けば、彼はまさにその出来事について思い出すかもしれない。」）と、「非現実のモダリティ」にしたがった解釈（「君の声を聞けば、彼はまさにその出来事について思い出せるだろう。」）である。

それに対して、不完了体の不定詞が用いられている、下の例を見てみよう：

(4-64')?Он ***может*** вспоминать [IPFV-INF] именно это событие, услышав твой голос.

これは、無理にこじつければ、反復する動作として解釈することもできるが、通常は用いられないという。実際、ナショナル・コーパスにおいて、以下のような文字列

の組み合わせ（мочь の諸変化形と вспоминать/вспомнить）を試みに検索してみると、不完了体の割合の少なさが分かる：

表 4-36：「出来事」に属する動詞（вспоминать/вспомнить）

	不完了体（вспоминать）	完了体（вспомнить）	総数
могу [prs-1-sg]	16 (4.04%)	380 (95.96%)	396
можешь [prs-1-sg]	4 (21.05%)	15 (78.95%)	19
может [prs-1-sg]	6 (5.22%)	109 (94.78%)	115
можем [prs-1-sg]	1 (3.13%)	31 (96.88%)	32
можете [prs-1-sg]	1 (6.25%)	15 (93.75%)	16
могут [prs-1-sg]	4 (11.43%)	31 (88.57%)	35
総数	32 (5.22%)	581 (94.78%)	613

これと同様の意味特徴を持つ動詞である、「случаться/случиться（起こる、生じる）」についても確認しておこう。この動詞もいわゆる「トリビアルなペア」である：

(4-65) Это ***может*** случиться [PFV-INF] в любую минуту, если мы наконец не обратим серьезного внимания на белорусский город Солигорск. [UC]
ソリゴルスクというベラルーシの都市に我々がいよいよ真面目に注意を払わないようになれば、このことはいつでも起きうるだろう。

ここで、不定詞の体の形態を以下のように入れ替えると、不自然な文と判断される：

(4-65')?Это ***может*** случаться [IPFV-INF] в любую минуту, если мы наконец не обратим серьезного внимания на белорусский город Солигорск.

不完了体を用いた場合、「任意の一分間でそれが何度も生じる」という反復性が示されることになるため、ここでの文脈と照らした場合、通常適当ではないうことになる。
ナショナル・コーパスにおける検索の結果も、やはり、不完了体の使用が極端に低いという同様の傾向が見られる：

表 4-37：「出来事」に属する動詞（случаться/случиться）

	不完了体（случаться）	完了体（случиться）	総数
могу [prs-1-sg]	0	0	0
можешь [prs-1-sg]	0	0	0
может [prs-1-sg]	4 (0.27%)	1488 (99.73%)	1492
можем [prs-1-sg]	0	0	0
можете [prs-1-sg]	0	0	0

могут [prs-1-sg]	14 (23.33%)	46 (76.67%)	60
総数	18 (1.16%)	1534 (98.84%)	1552

このように、「出来事」のタイプの動詞の場合には、当該状況が瞬間的なものと認識され、不完了体の形態は、進行中の動作を表すことができない（そして反復する動作を表す）。可能性に関わるモダリティを表す述語と結合する際に、不完了体を用いると、多くの場合不自然なものになる。仮に用いられていた場合、反復相として解釈されるが、そのような例は実際には極めて少ない。

それに対して、「限界のあるプロセス」のタイプの動詞の場合には、不完了体の形態が進行相を表す一次的アスペクトの意味における対立と、反復相を表す二次的アスペクトの意味における対立の、双方で用いられうる。

これらを踏まえ、述語 мочь との語結合における不定詞の体の形態の機能について考察してみよう。

1.4.4.3. 完了体の機能

まず、「評定のモダリティ」の場合、完了体の形態によって表されるのは、上記③（cf. 第 1.4.4.1.節）の場合（当該「命題」がまだ生じておらず、起算時点以降に生じうる場合）である（用例は再掲）：

(4-56) Она ***может*** умереть [IPFV-INF] завтра. 【再掲】
彼女は明日死んでしまうかもしれない。

「非現実のモダリティ」の場合、やはり当該状況が起算時点以降に生じることを表す：

(4-66) Каждая страна ***может*** получить [PFV-INF] двадцать два допуска за высокие места на соревнованиях за Кубок мира и на чемпионатах Европы. [UC]
めいめいの国が、ワールドカップと欧州選手権で上位を取ると、22 席ずつ立ち入り許可証をもらうことができる。

1.4.4.4. 不完了体の機能

次に、不完了体の機能について考えてみよう。

「評定のモダリティ」が表される場合、不完了体の形態が表すのは、まず上記②の場合（当該「命題」が既に生じており、現在も進行している場合）である。不完了体の形態の不定詞を用いることで、当該状況が現在進行中であることを示すことができる（用例は再掲）：

(4-57) Она ***может*** сейчас умирать [IPFV-INF]. 【再掲】
彼女は今死にそうなところなのかもしれない。

このように、「評定のモダリティ」の場合には、一次的アスペクトの意味の対立に基

づいて、不定詞の体の形態の選択がなされる。

ただ、その際、先に見たように（cf. 本章、第 1.4.4.2.節）、不定詞の語彙的意味（状況の性質のタイプ）には一定の制限がある。すなわち、「限界のあるプロセス」の場合には、ここで見たような不完了体と完了体の対立が生じうるが、「出来事」の場合には、通常完了体のみが用いられ、不完了体が用いられることは極めて稀である。

また、下例（4-67）のように、「非現実のモダリティ」を表す場合、当該状況は（「命題」ではなく）「事象」であるため、不完了体の形態は、（起算時点で）進行している動作を表すことはできず、起算時点以降に生じうる、持続性を持った動作を表すことになる：

(4-67) Она ***могла*** <u>рассказывать</u> [IPFV-INF] о своей поездке четыре часа подряд, и все четыре часа мы скучали.
彼女は自分の旅行について四時間通しで話せたが、僕らはその四時間の間ずっと退屈だった。

この場合、完了体の形態によって表すことはできない（下例）：

(4-67’)*Она ***могла*** <u>рассказать</u> [PFV-INF] о своей поездке четыре часа подряд, и все четыре часа мы скучали.

あるいは、当該状況の反復性を示すこともできる：

(4-38) Он ***может*** не <u>приходить</u> [IPFV-INF] к нам каждый день.【再掲】
彼はうちに毎日来なくてもいい。

なお、上でも見た通り、不定詞の語彙的意味が「出来事」に属する場合には、下例のように、通常は不自然な文と判断される：

(4-64’)?Он ***может*** вспоминать [IPFV-INF] именно это событие, услышав твой голос.【再掲】

また、上で見た例（4-66）の不定詞の体を、もう一方の体の形態に入れ替えることも可能である：

(4-66’)Каждая страна ***может*** <u>получать</u> [IPFV-INF] двадцать два допуска за высокие места на соревнованиях за Кубок мира и на чемпионатах Европы.【再掲】

この場合、不完了体によって示されるのは、反復性という意味特徴を基盤にした、当該状況が一般的なものであるというイメージである[18]。

[18] Шатуновский（2009）は、ここで見たような「一般性」の意味を持つ語（例えば、каждый, любой, всякий,

1.5. データの数量的分布から見る不可能性と完了体の選択の関係について

1.5.1. 概要

上でも見た通り（cf. 第一章、第 3.3.節）、不可能性を表す場合には完了体が用いられると指摘されているが、もしそうなら、データの数量的分布という面でも、一定の相関関係が観察されることが期待される。今回得られた実際のデータに照らした場合、果たしてどのような分布を見せているだろうか。

本節では、今回得られたデータに基づいて、「不可能性」を表すタイプⅢの構造における不定詞の体の形態の現れ方の分布と、それに対する比較の対象として、「可能性」を表す構造である、タイプⅠにおける分布との比較を試みる。

以下では、１）мочь 以外の述語との結合の場合、２）мочь との結合の場合のそれぞれについて、データの数量的分布について見ていくことにする。

1.5.2. 不可能性と完了体の関係について：мочь 以外の述語の場合

1.5.2.1. 内的可能性を表す述語（мочь 以外）の場合

ここではまず、мочь 以外の述語のうち、内的可能性を表す述語と不定詞の結合の場合について見ていこう。タイプⅠ及びタイプⅢの構造における、それぞれの体の形態の分布は以下のとおりとなっている：

表 4-38：タイプⅠとタイプⅢの比較（内的可能性）

述語	タイプⅠ（可能性）			タイプⅢ（不可能性）		
	ペア（完）	ペア（不完）	総数	ペア（完）	ペア（不完）	総数
уметь	18 (25.71%)	52 (74.29%)	70	12 (28.57%)	30 (71.43%)	42
способен	37 (54.41%)	31 (45.59%)	68	3 (50%)	3 (50%)	6
в состоянии	5 (55.56%)	4 (44.44%)	9	18 (90%)	2 (10%)	20
в силах	0	0	0	15 (93.75%)	1 (6.25%)	16
総数	60 (40.82%)	87 (59.18%)	147	48 (57.14%)	36 (42.86%)	84

全体的に見ると、タイプⅢになると、完了体の比率が 16 ポイントほど増加している

такой, кто-либо など）を含む文では、完了体の個別的意味のうちの「潜在的動作の意味」（cf. 第二章、第 2.5.3.2.節）が現れるとしているが（Шатуновский 2009: 319）、ここでの例（4-66’）で見たように、これらの語があっても不完了体の使用が妨げられることはない。したがって、これらの「一般性」の意味を持つ語があることそれ自体は、完了体の使用を義務付けるものとはなっていない。実際のテキストにおいて、これらの語と、動詞の体の形態がどのように共起しているのかという実態についても今後調査が求められるだろう。

ことがわかる（40.82%→57.14%）。しかしながら、その一方で、уметь と способен に関しては、タイプⅠの場合とタイプⅢの場合とでは分布に大きな変化は見られない。

уметь の場合には、タイプⅢになると 3 ポイント程度完了体が増加しているものの、どちらのタイプでも一貫して不完了体が多数を占めているのは特徴的である：

(4-13) Тане в тревожные минуты не легко дается спокойствие. Мягкий и уступчивый человек, не ***умеет*** заботиться [IPFV-INF] о себе, отстаивать личные интересы. [UC]【再掲】
ターニャは、不安な時には、なかなか気持ちが落ち着かないのだ。優しくて、人に譲る性格の人で、自分のことをかまったり、自分の利益を守ったりすることができない人なのである。

способен の場合には、タイプⅢでは、むしろ逆に完了体の比率が 4 ポイントほど下がっている：

(4-68) Признано, что воспитание имеет прямое отношение к экономике и культуре. И научно-технический прогресс не может быть выигран без школы. Доказано: эстетически развитой человек не ***способен*** производить [IPFV-INF] продукцию дурного качества. [UC]
教育というものが経済や文化というものに直接関係があるということは認められている。そして、科学技術の進歩というものは、学校が無くては成され得ない。はっきりしているのは、美的感覚が発達している人は、質のひどい製品を作ることができない、ということである。

上例の不定詞をもう一方の体に入れ替えてみると下例のようになる：

(4-68’)Признано, что воспитание имеет прямое отношение к экономике и культуре. И научно-технический прогресс не может быть выигран без школы. Доказано: эстетически развитой человек не ***способен*** произвести [PFV-INF] продукцию дурного качества.

この場合には、意味の上で変化は見られない。別の例を確認しておこう：

(4-69) Несмотря на то, что СССР обладает мощным экономическим потенциалом, мы не ***способны*** завтра же перевести [PFV-INF] все хозяйство на использование этих металлов. [UC]
ソ連邦が強力な経済的ポテンシャルを持っているにもかかわらず、我々は明日すぐさま全ての経済をこれらの金属の利用へと移すことはできない。

ここで不定詞の体を下例のように入れ替えると：

(4-69')?Несмотря на то, что СССР обладает мощным экономическим потенциалом, мы не ***способны*** завтра же переводить [IPFV-INF] все хозяйство на использование этих металлов.

この場合には、入れ替えはほとんど許容されない。「завтра же（明日すぐさま）」という、具体的な時点を示す指標と不完了体の意味が相容れないためである。それに対して、上で見た例（4-68）の場合には、そうした具体的な時点が念頭に置かれている文脈ではないため、どちらの体の形態も許容されるということになる。したがって、ここではもはや「不可能性」という意味要素は、不定詞の体の選択に影響を与えているとは考えにくい。

また、そもそもこの способен という述語は、タイプⅢで用いられる頻度が、タイプⅠに比して極めて低いということそれ自体が、この述語の特徴の一つとして指摘できるだろう。

しかしながら、同じ内的可能性でも、その他の述語の場合には事情は異なってくる。「в состоянии」は、完了体の比率がタイプⅢになると格段に高くなる（タイプⅠの場合の約 56%から、タイプⅢの場合には 90%）。また、述語「в силах」については、そもそもタイプⅢでしか用いられず、その際に結合する不定詞の体の形態も完了体が専ら（約 94%）である：

(4-14) Пальцы вцепились в землю, она судорожно вздрагивала от бомб, отталкивая, не ***в силах*** защитить [PFV-INF] меня. [UC] 【再掲】
指は地面にしっかりしがみついていたが、地面は爆撃で震えており、私を押しのけるようで、とても守ってくれるような状態ではなかった。

ここで、上例の不定詞を不完了体に入れ替えてみると、不自然に響くという：

(4-14')?Пальцы вцепились в землю, она судорожно вздрагивала от бомб, отталкивая, не ***в силах*** защитить [PFV-INF] меня.

しがみついてみて初めて分かるはずのこの地面の性質が、不完了体を用いると一般的あるいは恒常的な性質であり、万人にとって自明であるかのように響くため、そうした文脈でない限りは（そして上の例文ではそのような文脈ではない）不自然になってしまう。

また、Шатуновский（1996）によれば、述語「в состоянии」及び「в силах」は、『現時的可能性（актуальная возможность）』を表す（cf. Шатуновский 1996: 199）。「現時的可能性」とは、当該状況の起算時点での生起可能性について述べるものである。下例を参照（例文は Шатуновский 1996: 199）：

(4-70) Ты ***в состоянии*** приехать [PFV-INF] сейчас сюда?
君、今来れる状態？

この述語の意味的な特徴が、不完了体の意味と相容れないために、必然的に、述語と結合する不定詞の体の形態も、完了体が選択される割合が高くなるものと考えられる。この場合でも、完了体が選択されるのは、モダリティの意味がその要因となっているというよりもむしろ、当該可能性が現時的か否かに応じているということになる。

1.5.2.2. 外的可能性を表す述語（мочь 以外）の場合

次に、мочь 以外の述語のうち、外的可能性を表す述語と不定詞の結合の場合について確認しよう。タイプⅠ及びタイプⅢの構造における、それぞれの体の形態の分布は以下のとおりとなっている：

表 4-39：タイプⅠとタイプⅢ（外的可能性：ペアのある動詞）

述語	タイプⅠ（可能性）			タイプⅢ（不可能性）		
	ペア（完）	ペア（不完）	総数	ペア（完）	ペア（不完）	総数
можно	861 (76.06%)	271 (23.94%)	1132	4 (80%)	1 (20%)	5
возможно	12 (85.71%)	2 (14.29%)	14	2 (66.67%)	1 (33.33%)	3
нельзя	-	-	-	141 (55.29%)	114 (44.71%)	255
невозможно	-	-	-	90 (92.78%)	7 (7.22%)	97
総数	873 (76.18%)	271 (23.65%)	1146	237 (65.83%)	123 (34.17%)	360

これらの述語の場合、全体的な傾向としては、タイプⅢになると、完了体の比率はむしろ 10 ポイントほど低下している。

しかし、個々の述語を見ていくと、顕著な傾向を示しているものもある。можно 及び возможно は、タイプⅢで用いられることは極めて稀と考えてよい。

一般に、можно の否定の形式と位置付けられる述語 нельзя について言えば、データの数量的分布という観点からすると、完了体が約 55%、不完了体が 45%となっており、10 ポイント程度完了体の割合が多くなっている。しかし、можно における割合と比較すると、完了体は大幅に（約 20 ポイント）減少してしまうということになる。

外的可能性を表す述語のうち、完了体と最も結びつきやすいのは、невозможно で、完了体が九割以上を占めている：

(4-15) ***Невозможно*** <u>пройти</u> [PFV-INF] мимо и такой страшной беды — ежегодно от голода умирают 400 миллионов человек, в том числе 17 миллионов детей. [UC]【再掲】

このような恐ろしい不幸を黙って見過ごすことはできない。毎年、1700 万人の子供を含む、4 億人の人が、飢えで亡くなっているのだ。

先に見たように（cf. 本章、第 1.3.4.3.節）、ここで不定詞の体の形態は、不完了体を用いること自体は可能である。しかしながら、実際のデータの分布では、不完了体が用いられることは極めて稀であると言える。

1.5.3. 不可能性と完了体の関係について：述語 мочь の場合

ここでは、述語 мочь と結合する不定詞について、前節同様、タイプⅠとタイプⅢを比較していこう。それぞれの体の形態の分布は下表のようになる：

表 4-40：мочь と語結合をなす不定詞の分布（タイプⅠとタイプⅢの比較・その１）

タイプ	ペア（完）	ペア（不完）	総数
Ⅰ	831 (76.31%)	258 (23.69%)	1089
Ⅲ	424 (83.96%)	81 (16.04%)	505
総数	1255 (78.73%)	339 (21.27%)	1594

タイプⅠ（合計 1089 例）の場合には、完了体が 76.31%（全 1089 例中の 831 例）を占め、不完了体が 23.69%（全 1089 例中の 258 例）を占めている。タイプⅢ（合計 505 例）の場合には、完了体が 83.96%（全 505 例中の 424 例）を占め、不完了体が 16.04%（全 505 例中の 81 例）を占めており、タイプⅠと比較すると 8 ポイントほど完了体の割合が増加している。

ここで試みに単体動詞も加えて考えてみると、タイプⅠ（合計 1323 例）では、完了体が 66.06%（全 1323 例中の 874 例）を占め、不完了体が 33.94%（全 1323 例中の 449 例）を占めている。タイプⅢ（合計 608 例）では、完了体が 72.37%（全 608 例中の 440 例）を占め、不完了体が 27.63%（全 608 例中の 168 例）を占めている：

表 4-41：мочь と語結合をなす不定詞の分布（タイプⅠとタイプⅢの比較・その２）

タイプ	ペア（完）	単体（完）	ペア（不完）	単体（不完）	総数
Ⅰ	831	43	258	191	1323
	874 (66.06%)		449 (33.94%)		1323
Ⅲ	424	16	81	87	608
	440 (72.37%)		168 (27.63%)		608

総数					1931

述語 мочь の場合には、タイプⅠと比較して、タイプⅢでは、6 ポイントほど完了体が用いられる割合が高くなる。

ただ、上で見たように（cf. 本章、第 1.4.3.節）、述語 мочь の場合、タイプⅢの構造は非現実のモダリティに特化された構造であるのに対して、タイプⅠの構造は、非現実のモダリティと評定のモダリティの双方を表すことができる。そのため、タイプⅠの構造で現れてくる完了体の不定詞の総数には、評定のモダリティを表す際に現れてきているものも含まれていると考えられるため、非現実のモダリティにのみ対象を限定すれば、完了体の形態が占める割合の増加率は、上の数字よりもより高くなる可能性がある。

先に見たように（cf. 本章、第 1.4.4.節）、мочь の場合、非現実のモダリティを表す際には、二次的アスペクトの対立に基づいて不定詞の体の形態は使い分けられる。そのため、不可能性の意味による影響というよりも、アスペクトの意味の対立という要素の方が、体の形態選択に与える影響は大きい。

1.5.4. まとめ

ここまで、「可能性」と「不可能性」のそれぞれのモダリティの意味と、そこで用いられる不定詞の体の形態選択の間にあると思われる相関関係について検証するため、мочь 以外の述語との語結合の場合と、мочь との語結合の場合とのそれぞれについて、意味・統語構造のうち、タイプⅠとタイプⅢにおけるデータの数量的分布の比較を試みた。

мочь 以外の述語の場合、タイプⅠでは 74.06%、タイプⅢでは 74.71%というそれぞれの割合で、完了体の形態が選択されている。述語 мочь について言えば、このタイプⅢでは完了体の比率が、タイプⅠに比して若干高くなってはいる（83.96%が完了体で用いられている；タイプⅠでは 76.31%）。

このように、今回のデータの数量的な分布を見る限りでは、意味・統語構造のうちタイプⅢの場合に限って完了体の比率が際立って高くなるというわけでは必ずしもない。共起する確率という観点からすると、「不可能性」の意味と不定詞の体の形態の選択の間には、特に強い影響関係があるとは思われない。

タイプⅢの構造の場合に、完了体の比率が高くなる傾向が認められるのは、ある特定の述語に限ってのみである（最も顕著な傾向を示したのは、「в состоянии」及び невозможно であった）。したがって、不可能性の意味が含まれている場合に完了体が専ら選択されると言えるのは、これらの述語に限った場合ということになる。

それ以外の述語の場合、タイプⅠの場合とほぼ同様の分布の傾向を示しており、これは単に可能性の意味を含む述語と不定詞が結合する場合に観察される、全般的な傾向に沿ったものとなっている。

しかしながら、今回得たデータは、述語と不定詞の語結合というケースのみを対象として収集されたものである。ロシア語において「可能性」の意味を表しうる統語構造は、他にも存在することは既に述べた通りである（cf. 第二章、第 3.5.1.節；第七章、

第 2 節)。今回の考察に際しては、それらの統語構造における体の形態選択についての調査は及んでいないため、その点については今後の課題として引き続き取り組み、今回確認したような、データの数量的分布についても改めて調査した上で、検討を加える必要が出てくるだろう。

1.6. まとめ : ロシア語における可能性に関わるモダリティと不定詞の体のカテゴリー

1.6.1. 概要

本節では、ここまで行なってきた観察についてまとめていくことにする。

ここまで、мочь 以外の一連の述語（уметь; способен; в состоянии, в силах; можно, нельзя, возможно, невозможно）と、мочь とに大きく分類した上で考察した。

前者は「非現実のモダリティ」を表すことに特化されており、これらの述語と不定詞が語結合をなす場合に、不定詞の体の形態がどのように選択されているかについて観察を行なった（cf. 第 1.3.節)。

それに対して、後者は、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の双方を表すことができるため、まず不定詞の体の形態の使用実態と、その表しうるモダリティの種類、及びそこでの体の形態の関係について考察した（cf. 第 1.4.節)。

本節では、今回のデータの数量的分布の観察と、ここまで行なってきた考察によって得られた知見を組み合わせる形で、ロシア語における可能性のモダリティと、述語と結合する不定詞の体のカテゴリーの機能についてまとめ、相関関係の全体像を捉えることを目的とする。

以下、まず第 1.6.2.節において、可能性のモダリティの種類と意味・統語構造との関係について確認する。

そして、第 1.6.3.節では、それぞれの可能性のモダリティの種類と、その意味・統語構造、そしてそこで用いられている不定詞の体のカテゴリーが果たしている機能について確認する。

1.6.2. 可能性に関わるモダリティの種類と意味・統語構造

1.6.2.1. 意味・統語構造ごとの全体的な使用実態

ここでは、ここまで見てきたデータの数量的分布と、意味論的な考察の結果を重ね合わせ、ロシア語の文法体系において、「可能性」に関わるモダリティが、どのような述語によって、またそれぞれどのような意味・統語構造の文によって表しうるのかという点についてまとめてみる。

まず、「非現実のモダリティ」の意味表す文の意味・統語構造のうち、実際に用いられるものについて確認しよう。先に意味・統語構造の分類を行なった際、論理的に可能な意味構造を導き出したが（cf. 第二章、第 5.4.節)、今回収集したデータの分布から、これらのうち、実際にどのタイプがどの程度用いられるかの把握が可能になった。

最も頻度数の高い構造は、タイプⅠ（「可能性」）で、次いでタイプⅢ（「不可能性」）がよく用いられる構造であることが分かった。

その一方で明らかになったことは、意味・統語構造によっては、事実上ほとんど用いられないタイプもあるということである。タイプⅡ（「可能性」の変種）と、タイプ

Ⅳ（「不可避性」）は、それ自体頻度が低い。なかでも、これらのタイプで内的可能性の述語が用いられるケースは、今回の調査ではデータが極めて少ないか、全く得られなかった。また、こうした傾向は、規模の大きいコーパスを調べてみても変わらないということが分かった。

もう一方の「評定のモダリティ」の場合については、四つの意味・統語構造のうち、タイプⅢ以外の構造では、「評定のモダリティ」の意味を表すことができる。

意味・統語構造のタイプを基準にし、それぞれのタイプでどのモダリティの意味を表すことができるかをまとめると下表のようになる。下表中、「○」は、当該形式が一定の頻度で用いられることを表し、「×」は用いられないか、用いられたとしても極めて頻度数が低いことを示す：

表 4-42：モダリティの種類と意味・統語構造の使用実態

タイプ	モダリティの種類		
	評定のモダリティ（мочь のみ）	非現実のモダリティ	
		内的可能性	外的可能性
Ⅰ	○	○	○
Ⅱ	○	×	○
Ⅲ	×	○	○
Ⅳ	○	×	○

タイプⅠについては、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」の、双方のモダリティの意味を表すことができる。

タイプⅡも、「評定のモダリティ」と「非現実のモダリティ」の、双方のモダリティの意味を表すことができるが、今回得られたデータにより、「非現実のモダリティ」が表される場合には、内的可能性の述語が用いられることは極めて稀であることが明らかになっている（cf. 第 1.3.3.2.節）。したがって、多くの場合、この意味・統語構造は、「非現実のモダリティ」の場合、外的可能性についてのみ用いられるということになる。

タイプⅢは、上でも見たように（cf. 第 1.3.4.節、第 1.4.3.3.節）、この意味・統語構造では「評定のモダリティ」を表すことはできない。したがって、この構造は事実上、「非現実のモダリティ」を表すことに特化されている構造であると言ってよい。

タイプⅣも、今回得られたデータにより、内的可能性の述語が用いられることが極めて稀であることが明らかになっている。

1.6.2.2. 使用実態に応じたそれぞれの述語の特徴付け

今回の調査によって、ある特定の述語は、ある特定の意味・統語構造でしか用いられないという使用実態が明らかになった。

述語ごとに、それぞれの意味・統語構造のタイプでどの程度用いられているか、またその際結合する不定詞の体の形態選択に関するデータの数量的分布をまとめると、下表のようになる：

表 4-43：述語ごとの分布（ペアのある動詞）

内的／外的可能性	述語	不定詞の体	意味・統語構造のタイプ				合計
			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
内的可能性	уметь	完	18	0	12	0	30
		不完	52	2	30	0	84
	способен	完	37	0	3	0	40
		不完	31	0	3	0	34
	в состоянии	完	5	0	18	0	23
		不完	4	0	2	0	6
	в силах	完	0	0	15	0	15
		不完	0	0	1	0	1
合計（内的可能性）			147	2	84	0	233
мочь		完	831	16	424	22	1293
		不完	258	12	81	18	369
合計（мочь）			1089	28	505	40	1662
外的可能性	можно	完	861	2	4	1	868
		不完	271	15	1	0	287
	нельзя	完	0	0	141	19	160
		不完	0	0	114	14	128
	возможно	完	12	0	2	0	14
		不完	2	0	1	0	3
	невозможно	完	0	0	90	2	92
		不完	0	0	7	0	7
合計（外的可能性）			1146	17	360	36	1559
合計（全体）			2382	47	949	76	3454

内的可能性の述語から見ていくことにしよう。上でも見た通り、内的可能性はタイプⅡ及びタイプⅣという構造では表されない。

уметь は、どの意味・統語構造のタイプで用いられるかには関わりなく、結合する不定詞は一貫して不完了体が多数を占める。

способен は、タイプⅢの構造で用いられることは稀で、事実上タイプⅠで用いられることがほとんどである。逆に、「в силах」は、タイプⅢでしか用いられない。また、「в состоянии」及び「в силах」は、タイプⅢで用いられる場合、結合する不定詞は、完了体が選択される。

外的可能性を表す述語に関して言えば、顕著な分布の特徴を示しているのは、невозможно であり、この述語と結合する不定詞は完了体が多数を占める。

意味・統語構造のタイプと、それぞれのタイプが表しうるモダリティの種類、及びそれを実現するそれぞれの述語についてまとめると、下表のようになる。なお、下表では、今回のデータで使用頻度が低いと判断した述語（頻度数が 5 例前後のもの）は

除いてある：

表 4-44：ロシア語における可能性のモダリティの文（意味・統語構造と述語）

タイプ	モダリティの種類		
	評定のモダリティ	非現実のモダリティ	
		内的可能性	外的可能性
Ⅰ	мочь	мочь, уметь, способен, в состоянии	мочь, можно, возможно
Ⅱ	мочь	—	мочь, можно
Ⅲ	—	мочь, уметь, в состоянии, в силах	мочь, нельзя, невозможно
Ⅳ	мочь	—	мочь, нельзя

1.6.3. 可能性に関わるモダリティにおける不定詞の体の形態の果たす機能

1.6.3.1. モダリティの意味、不定詞の語彙的意味と体の機能

可能性に関わるモダリティは、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」とに大きく分けることができるが、既に上で見たように（cf. 第 1.4.4.1.節）、それぞれのモダリティが対象としている「状況」は、それぞれ「事象」と「命題」である。

「事象」は、起算時点以降に生じうる状況のみを表すのに対して、「命題」の場合には、起算時点で既に生じており、進行している状況なども表しうるため、そうした差異も考慮に入れた上で、不定詞の体の形態が果たす機能について考える必要があるだろう。以下では、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」のそれぞれについて、不定詞の体の形態が果たしている機能について考察する。

まず、「非現実のモダリティ」を表す文における不定詞の体の形態について考えてみよう。このモダリティにおける不定詞の完了体は、未来に生じうる状況について表す際に用いられる：

(4-58) Ваня ***может*** <u>посмотреть</u> [PFV-INF] телевизор сегодня вечером.【再掲】
ワーニャは今夜テレビを見るのかもしれない。

この文は、「（この時間なら家に戻っているので）ワーニャはテレビを見ることができる。」、あるいは「（医者の許可を得ているので）ワーニャはテレビを見てよい。」という、二通りの解釈が可能である。いずれも当該状況の外的可能性を示している。

それに対して、不定詞の不完了体によって表されるのは、当該状況の持続性、あるいは反復性（及びそれに基づいた習慣性、一般性など）ということになる：

(4-26) Она ***умела*** <u>рассказывать</u> [IPFV-INF] о своей поездке четыре часа подряд, и все четыре часа мы скучали.【再掲】
彼女は自分の旅行について四時間通しで話せたが、僕らはその四時間の間ずっと退屈だった。

(4-71) Ваня ***может*** <u>смотреть</u> [IPFV-INF] телевизор без очков, даже издалека.
ワーニャは遠くからでも眼鏡なしでテレビを見ることができる。

この場合、不定詞を完了体で用いることは許容されない：

(4-71')*Ваня ***может*** <u>посмотреть</u> [PFV-INF] телевизор без очков, даже издалека.

完了体が用いられると、上例（4-58）で見た、外的可能性の解釈へと切り替わることになるため、上例（4-71'）では、文脈に照らすと許容されないということになる。
また、反復相（あるいは習慣相）を意味的な基盤とした、当該状況の一般性という意味的な性質も、不完了体の形態によって表される：

(1-4) В этом кинотеатре нельзя <u>показывать</u> [IPFV-INF] широкоэкранные фильмы.【再掲】
この映画館ではワイドスクリーンの映画は上映することができません。

次に、「評定のモダリティ」を表す文における不定詞の体の形態について考えてみよう。上でも確認した通り（cf. 第 1.4.4.節）、不定詞の語彙的意味に応じてその機能は異なってくる。上では、以下の二文の比較を行なった：

(4-58) Ваня ***может*** <u>посмотреть</u> [PFV-INF] телевизор сегодня вечером.【再掲】
ワーニャは今夜テレビを見るのかもしれない。

(4-60) Ваня ***может*** <u>смотреть</u> [IPFV-INF] телевизор. 【再掲】
ワーニャはテレビを見ているのかもしれない。

完了体の形態は、（非現実のモダリティの場合と同様に）未来に生じうる状況を示すのに対して、不完了体は、動詞の語彙に応じて機能が異なる。上例（4-60）のように、当該状況が、「限界のあるプロセス」（Vendler の分類における「達成」の場合）に属する場合、不完了体は、起算時点で進行している動作を表すか、反復する動作を表すことができる。
それに対して、当該状況が「出来事」（Vendler の分類における「到達」の場合）に属する場合には、完了体が未来の状況を示し、不完了体は反復動作を原則として表すが、そうした例は実際には稀である。再度下例を確認しておこう：

(4-65) Это ***может*** <u>случиться</u> [PFV-INF] в любую минуту, если мы наконец не обратим серьезного внимания на белорусский город Солигорск. [UC]【再掲】
ソリゴルスクというベラルーシの都市に我々がいよいよ真面目に注意を払わないようになれば、このことはいつでも起きうるだろう。

(4-65') ?Это ***может*** случаться [IPFV-INF] в любую минуту, если мы наконец не обратим серьезного внимания на белорусский город Солигорск.

ここで、モダリティの種類、それぞれのモダリティの対象となる状況の区分、起算時点における状況の生起の関係、当該状況の性質、そしてそれらを表す体の形態と、その表すアスペクトなどの関係をまとめると下表のようになる：

表 4-45：モダリティの意味と様々な要素の関わり合い

モダリティ	対象となる状況	起算時点と状況生起の関係	状況の性質	完了体	不完了体
非現実	事象	起算時点以降生じうる状況	プロセス	完了相	持続相；反復相
			出来事	完了相	反復相
評定	命題	起算時点で生じている状況	プロセス	—	進行相
			出来事	—	—
		起算時点以降生じうる状況	プロセス	完了相	反復相
			出来事	完了相	反復相

1.6.3.2. 「体の競合」のケース

前節で見たように、体の形態選択によって意味の差異が明確に現れてくるケースがある一方で、どちらの体の形態を用いても文意が変わらないケースも観察される。いわゆる「体の競合」のケースである。例えば以下のような例が該当する（例文は全て再掲）：

(4-3) Она ***умела*** внести [PFV-INF] в их застолье, в неторопливый обмен мыслями притягательную, хотя и нервную ноту, будоражущую игру. [UC] 【再掲】
彼女は、彼らの祝日の食卓に、つまり気忙しいあれやこれやの思考のやり取りに、いらいらした調子ではあるけれども、魅力的な、心を揺さぶってくれる遊びを持ち込むことができる人だった。

(4-4) Так утверждается иной тип взаимовлияний характера и обстоятельств: не только обстоятельства влияют на личность, но и личность на обстоятельства, что, собственно, и составляет предмет исследования, фокусировку познавательных интересов метода: как человек ***способен*** влиять [IPFV-INF] на время, подчинять его себе, своей воле, своему сознанию. [UC] 【再掲】
このように主張されているのは、性格と環境の相互作用の別のタイプである。個性に影響を与えているのは環境の方ばかりではなく、個性の方も環境に影響を与えている。実際、このことが研究対象、方法の認識に関する興味に対する焦点となっている。どのように人は、時間に影響を与え、時間を自らに、自らの意思に、自らの意識に従属させることができるのだろうか。

(4-5) Был поставлен вопрос о том, насколько композиционно-языковая вариативность отдельных текстов ***способна*** повлиять [PFV-INF] на стабилизацию достаточно крупных и структурно четко организованных вариантов (разновидностей) литературного языка. [UC] 【再掲】
それぞれのテキストの構造上の変動性というものが、標準語の、十分に規模が大きく、構造的に明確に整えられているヴァリアント（種類）の安定化にどの程度影響を与えるかということに関する問題が提起された。

(4-13) Тане в тревожные минуты не легко дается спокойствие. Мягкий и уступчивый человек, не ***умеет*** заботиться [IPFV-INF] о себе, отстаивать личные интересы. [UC] 【再掲】
ターニャは、不安な時には、なかなか気持ちが落ち着かないのだ。優しくて、人に譲る性格の人で、自分のことをかまったり、自分の利益を守ったりすることができない人なのである。

(4-15) ***Невозможно*** пройти [PFV-INF] мимо и такой страшной беды — ежегодно от голода умирают 400 миллионов человек, в том числе 17 миллионов детей. [UC] 【再掲】
このような恐ろしい不幸を黙って見過ごすことはできない。毎年、子供 1700 万人の子供を含む、4 億人の人が、飢えで亡くなっているのだ。

(4-24) То, что сделала сборная Финляндии с допингом, конечно, мерзко. Но не ***может*** не вызывать [IPFV-INF] уважения их искреннее признание своей вины. [Ogonek, 2001 年 12 号: http://www.ogoniok.com/archive/2001/4687/12-50-51/]【再掲】
フィンランドの代表チームがドーピングでしたことは、もちろん卑劣なことだ。しかしながら、彼らが自らの罪のことを誠実に告白したことには尊敬の念を抱かざるを得ない。

それぞれの文において、下線部の不定詞の体の形態をもう一方に入れ替えても、文の意味は変わらない。

特に非現実のモダリティ（中でも内的可能性の述語との結合）の場合に、こうした例が多く確認できた（上例 4-3, 4-4, 4-5, 4-13, 4-15 など）が、上で見たように様々な述語の、様々な意味・統語構造で、この「競合」の現象は見ることができる。

こうしたケースが少なからず確認できたことで、不定詞の体の形態が、モダリティの意味（述語の意味や意味・統語構造の差異）の影響とは離れたところで選択されているということの傍証にもなりうるだろう。しかしながら、今回の調査では、この「競合」の現象の実態調査を主たる目的としていなかったため、断片的な情報しか得られていない。今後引き続きこの「体の競合」のケースについては、別途更なる検証が求められる。

1.6.4. 可能性に関わるモダリティの種類と意味・統語構造、不定詞の体の形態

ここまでで、可能性の意味を含むモダリティの種類と、意味・統語構造との関係、そしてそこで述語と結合する不定詞の体の形態との関係について見てきた。

既に、上で（cf. 第 1.6.2.1.節、表 4-42）、モダリティの種類と意味・統語構造の使用実態についてはまとめたが、そこに不定詞の体の形態についての基準を加えると、下表のようになる。下表中、「○」は、当該形式が一定以上の頻度で用いられることを示し、対して「×」は、当該形式が用いられないか、用いられたとしても極めて稀であることを示す：

表 4-46：モダリティの種類と意味・統語構造、不定詞の体の形態

タイプ	不定詞の体の別	モダリティの種類		
		評定のモダリティ（мочь のみ）	非現実のモダリティ	
			内的可能性	外的可能性
Ⅰ	完	○	○	○
	不完	○	○	○
Ⅱ	完	○	×	×
	不完	×	×	○
Ⅲ	完	×	○	○
	不完	×	○	○
Ⅳ	完	○	×	○
	不完	×	×	○

タイプⅡに関して言えば、事実上体の形態によってモダリティの種類を区別していると見ることもできる。また、タイプⅢは、非現実のモダリティを表すのに特化された構造である。

また、それぞれの体の形態の表す意味については、上で見た表 4-45（cf. 第 1.6.3.1.節）において確認した通り、動詞の語彙的意味に応じて、異なるアスペクトの意味を表しうる。特に、タイプⅠの構造によって評定のモダリティの意味を表す際には、不完了体が用いられうるのは、当該状況が「限界のあるプロセス」の場合である。

2. 語彙的意味を基準にした分析の試み

2.1. 本節の概要

前節までで、今回収集したデータに基づき、先行研究の記述の検証を行なった。

本節では、従来の研究とは異なる視点から、分析の対象を改めて見直してみることにする。

例えば、ここまで見てきた例文の中で、いくつかの動詞は、その出現する意味・統語構造に関わりなく、事実上完了体の形態でのみ現れてきているというものがある。以下の例文で確認してみよう：

(4-6) В этом смысле ***можно*** согласиться [PFV-INF] с академиком А.Д. Сахаровым, который считает, что более глубокие сокращения СНВ потребовали бы учета многих других условий, в том числе наличия систем ПРО. [UC] 【再掲】
この意味では、サハロフ博士に同意できる。彼は戦略兵器のより一層の削減には、ミサイル防衛システムの存在も含めた、他のより多くの条件を考慮する必要があるだろうと考えている。

(4-42) И Веня не ***мог*** согласиться [PFV-INF] с тем, что его нет. [UC] 【再掲】
ヴェーニャは、彼がもういないということが納得できなかった。

(4-20) ***Нельзя*** не согласиться [PFV-INF], например, с тем, что пришла пора создать координационный совет по Азовскому морю. [UC] 【再掲】
例えば、アゾフ海に関する調整のための評議会を創設する時期が来ているということには同意せざるを得ない。

この「соглашаться/согласиться（同意する）」という動詞に限って言えば、今回収集したデータでは、完了体の形態で用いられているケースが専らである。同様の傾向を見せる動詞は、ここで見た「соглашаться/согласиться」の他にもいくつか存在する。また、その一方で、ほぼ不完了体でしか用いられないという動詞も存在する。例えば、「учитывать/учесть（考慮する）」という動詞の例を見てみよう：

(4-72) ***Нельзя*** не учитывать [IPFV-INF] того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР. [UC]
トロツキーとトロツキストたちが、レーニンの死後このことが急進的な形で明らかになったように、ソ連邦における社会主義の建設というレーニンの思想の反対者だったということは、考慮しないわけにはいかない。

この例で用いられている不定詞を、完了体に入れ替えると以下のようになる：

(4-72')***Нельзя*** не учесть [PFV-INF] того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР.

このように体の形態を入れ替えても文意に違いは生じないという。それにもかかわらず、実際に得られるデータは、不完了体が専らである。

このように、意味的、統語的環境の異同に関わらず、どちらか一方の体の形態でのみ用いられる、あるいは一方の体の形態が選択される割合が高いという傾向を見せる動詞がある。

第一章でも述べた通り、従来の研究では、不定詞が結合する相手となる語の意味に

ついては注目されており、それと体の形態選択の間にある相関関係について記述されてきた。しかしながら、不定詞それ自体の語彙的意味と、体の形態選択の関係については、ほとんど注目されてこなかった。この節では、この不定詞の語彙的意味という単位に目を向け、それと体の形態選択の間に何らかの影響関係があるかどうかについて分析を試みる。

なお、以下本節では、対象とする動詞のタイプを、体のペアを持つ動詞のみに絞って論を進める。これは、形式選択の文法的必要性が生じるのは、このタイプの動詞であるため、まずこのタイプの動詞を優先的に考察対象に据えるべきであろうとの意図があるからである。

次節以降では、まずこの分析を行なうにあたり、事前に必要な作業について述べる。そこでは、「動詞（不定詞）」という単位で得られているデータを、その語彙的意味を基準とした単位でまとめあげる作業を行なう。

2.2. 体のペアを持つ動詞：語彙的意味を基準とした単位への統合

2.2.1. 語彙的意味を基準とした単位への統合

本節での分析を行なうに先立ち、体のペアを持つ動詞のデータに一定の処理を加える。

すなわち、体のペアを成していると考えられる、完了体動詞と不完了体動詞について、それぞれ別々の動詞としてここまでは扱われてきた二つの動詞を、その語彙的意味を基準とした単位でまとめ上げる。

具体例で考えてみよう。例えば、「открывать」という不完了体動詞と、「открыть」という完了体動詞は、「開ける」という語彙的意味を共有しており、体のペアを成していると見なせる（cf. 第二章、第 2.6.1.節）。この二つの動詞を、ひとつの動詞の二形態と見なして、「открывать/открыть」という単位にまとめる。この単位によって画定した後、以下の章でその振る舞いについて観察を行なう[19]。

なお、この語彙的意味を基準とした単位にまとめあげる際に、ある動詞の体の形態的対立が不明瞭な場合には、分析の対象からは原則として除外する。以下のような場合がそれに該当する：

① ある動詞が、体のペアとして複数の動詞との対応が想定されうる場合
（ア）ある不完了体動詞が、複数の完了体動詞のペアとして機能しうる場合
（イ）ある完了体動詞が、複数の不完了体動詞のペアとして機能しうる場合

② ある動詞が、いわゆる「体のトロイカ」を形成するような場合

[19] この扱いからも分かるように、ここでは、動詞の体のカテゴリーというものを、『語形変化的カテゴリー（словоизменительная категория）』として当座扱うことにする。この、体という文法的カテゴリーを、（例えば「数」のカテゴリーのような）「語形変化的カテゴリー」と見なすのか、あるいは（「性」のカテゴリーのような）『語分類的カテゴリー（словоклассифицирующая категория）』と見なすのかという点についても、これまで多くの議論が成されてきているが、これも体のカテゴリーを巡る諸問題の中で未だ最終的な結論に到達していないものの一つである。この問題の概要については、Шмелев и Зализняк（2000）などを参照。

以下の節で、上記のそれぞれについて確認する。

2.2.2. 特殊なケース

2.2.2.1. 体のペアとして複数の動詞との対応が想定されうる場合

まず、ある動詞に想定される体のペアとして、複数の動詞と対応関係が想定されるような場合（上記①）を考えてみよう。

これには二つのケースがある。

第一のケースは、不完了体動詞が、さまざまな完了体動詞の体のペアとして機能しうる場合である（例えば играть, меняться, мириться, пасть, разворачивать, резать, стирать, темнеть, учиться など）。この場合には、一対一の体の対応関係を画定することが困難なことから、これらの不完了体動詞、およびそれとペアを成しうる完了体動詞共に単体動詞として扱い、対象から除外した。同様の理由で、возвращаться（cf. вернуться, возвратиться）、ценить（cf. оценить, оценивать）も対象から除外してある。

第二のケースは、これとは逆の場合である。раскладывать / разложить, разлагать / разложить のような、同じ形態の完了体動詞が、異なる不完了体動詞と対になって用いられると想定されうる場合も、対象から除外している。

2.2.2.2. いわゆる「体のトロイカ」を形成する場合

次に、いわゆる「体のトロイカ」を形成するような場合（上記②）を確認しておこう。

『体のトロイカ（видовая тройка）』とは、以下のような特徴を持つ三つの動詞の関係を指して用いる術語である[20]：

① 接頭辞のない不完了体動詞（例：есть, пить）
② 上の①に接頭辞を付加して形成された完了体動詞（例：съесть, выпить）
③ 上の②に接辞を付加して形成された不完了体動詞（例：съедать, выпивать）

ここで、派生元となる基本的な動詞[21]（上記①）をどのように扱うかという点が問題となってくる。これらの動詞は、様々な完了体動詞の不完了体として機能する場合があるからである。例えば、上例 пить という基本的な動詞（上記①）は、それに接辞を付加して形成された、выпить といった完了体動詞のペアとしても機能しうる。一方で、完了体動詞 выпить には、この動詞から派生した不完了体動詞 выпивать がペアとして用意されている。

---

[20] このことは、ある動詞の不完了体と完了体との一対一の結びつきがさほど強くない動詞があることを示しているとも言える。また、管見によれば、派生元となっている不完了体動詞と、派生した完了体からさらに派生した不完了体動詞との間の、文法的行動の違い（すなわち発話において全く同じように用いられているのか、用いることができるのかなど）も今後の研究対象として残されている。この問題は、上で述べた、体のカテゴリーがどのような文法的カテゴリーなのかという問題にもつながりうる、ロシア語アスペクト論における理論上の大きな問題点であると思われるが、未だ解決を見ていないもののうちのひとつである。

[21] 「производный глагол」を指すが、「根源動詞」という訳語が充てられることもある。

このような事情があるため、派生元となっている不完了体動詞（上記①）が、ある完了体動詞（上記②）と、一対一の対応関係を持った動詞として画定することは困難である。こうした動詞の例として、гладить, есть, играть, ковать, крутить, мазать, менять, меняться, мыть, пить, рвать, резать, учить, ценить, шить, шутить などが、今回収集したデータからは得られ、これらは不完了体単体動詞扱いとしている。

なお、上記の②及び③については、それぞれがペアを持つ動詞であると見なし、ひとつの動詞としてまとめた。

2.3. 体の形態的対立のスケール

2.3.1. 概要：体の形態的対立のスケール

ここで、「体の形態的対立のスケール」という新たな指標を考えてみる。この「体の形態的対立のスケール」とは、ある動詞の体の形態の出現傾向が、完了体で現れる割合が多いのか、それとも不完了体で現れる割合が多いのかを数値で表示する指標である。

上で見たように、今回収集した「可能性」のモダリティと共起する不定詞は、いくつかのものについては、その体の形態の用いられ方に関して、一定の偏りがある。この偏向的特徴というものを、ある程度数値化して捉えるために、収集したデータから得られた数値に対して簡単な操作を行なう。この操作によって、当該動詞が用いられる場合の体の形態の現れ方について、どれくらいどちらか一方の体に偏って選択されているのか、あるいは偏っていないのかということを、（ある程度まで）数値化して表示することができる。もちろん、本来であればより厳密な統計的処理を行なう必要があるのだろうが、ここでは、大まかな目安としての数値を得ることが主な目的なので、ごく簡単な操作のみに留める。

「体の形態的対立のスケール[22]」は、次のような方法で算出する。

まず、当該動詞の、完了体と不完了体のそれぞれの出現数を、総出現数（当該語彙の完了体と不完了体を合わせたもの）で割り、総出現数において両者の占める比率を求める。

ここで便宜上、前者の数値（総出現数における完了体の割合）から、後者（総出現数における不完了体の割合）を引き、さらにそれに 10 を乗じる。

これらの操作をまとめると次のような数式で表わすことができる。

数式 4-1：体の形態的対立のスケールの計算式

$$\frac{\text{（完了体の出現数）} - \text{（不完了体の出現数）}}{\text{（当該動詞の合計出現数）}} \times 10$$

[22] 以下では、「体の形態的対立のスケール」という呼称の他に、単に「対立のスケール」、あるいは「スケール」と呼ぶことがある。

この計算により、10 から－10 までの数値が算出される。

完了体で現れる比率が高い（すなわち、完了体の形態が選択される、強い偏向的特徴が見られる）ものは、10 に近い数値を示す。逆に、不完了体の形態が用いられる比率が高いものは－10 に近い数値を示す。

図 4-1：体の対立のスケール

10　・・・完了体でのみ現れてくる
↑
0　・・・双方の体の形態で満遍なく現れてくる
↓
-10　・・・不完了体でのみ現れてくる

2.3.2. 体の形態的対立のスケール（今回のデータから）

上の計算式を、今回得られたデータに対して適用した結果が下表である。スケールの数値の高いものから順に提示してある。

なお、ここでは、動詞の出現総数が 10 以上のものに限ってスケールの値を算出した[23]：

表 4-47：体の対立のスケール（可能性の意味を表す述語と結合する不定詞の場合）

動詞	総数	不完了体	完了体	スケール
помогать / помочь	21	0	21	10
оказываться / оказаться	18	0	18	10
представлять себе / представить себе	17	0	17	10
случаться / случиться	16	0	16	10
позволять себе / позволить себе	14	0	14	10
заставлять / заставить	13	0	13	10
казаться / показаться	13	0	13	10
относить / отнести	13	0	13	10
покупать / купить	12	0	12	10
восстанавливать / восстановить	11	0	11	10
заменять / заменить	10	0	10	10
становиться / стать	42	1	41	9.52
объяснять / объяснить	28	1	27	9.29
соглашаться / согласиться	20	1	19	9.05
вспоминать / вспомнить	21	1	20	9

[23] このスケール内の数値について、意味・統語構造ごとの分布も示したものを、「補足資料」として末尾に添付したので参照されたい。

отвечать / ответить	16	1	15	8.75
принимать / принять	16	1	15	8.75
называть / назвать	42	3	39	8.57
определять / определить	24	2	22	8.33
изменять / изменить	12	1	11	8.33
приводить / привести	35	3	32	8.29
обеспечивать / обеспечить	19	2	17	7.89
представлять / представить	37	4	33	7.84
решать / решить	31	4	27	7.42
вызывать / вызвать	21	3	18	7.14
давать / дать	40	6	34	7
находить / найти	34	5	29	7.06
понимать / понять	64	10	54	6.88
обходиться / обойтись	18	3	15	6.67
говорить / сказать	189	35	154	6.3
возникать / возникнуть	16	3	13	6.25
замечать / заметить	16	3	13	6.25
допускать / допустить	15	3	12	6
брать / взять	14	3	11	5.71
ставить / поставить	14	3	11	5.71
делать / сделать	70	16	54	5.43
получать / получить	45	12	33	4.67
начинать / начать	15	4	11	4.67
забывать / забыть	25	8	17	3.6
предполагать / предположить	21	9	12	1.43
думать / подумать	39	20	19	－0.26
создавать / создать	25	13	12	－0.4
видеть / увидеть	35	20	15	－1.43
служить / послужить	27	24	3	－7.78
считать / счесть	31	30	1	－9.35
動詞	総数	不完了体	完了体	スケール

いくつかの動詞は、顕著な特徴を示している。次節以降で、この指標の意味することについて考えてみよう。

2.3.3. こうした傾向は何を意味するのか

では、上で提案した、体の対立のスケールという数値の示す意味について考えてみよう。

対立のスケールの両端（数値では 10、あるいは－10）に近いものほど、動詞の語彙的意味以外の要素（例えばモダリティ形式の違い、当該文の時制、主体の人称など）

とは独立して、一定の体の形態が選択される傾向にあるということになる。

この、話者の、体の選択における偏向性というのは、この動詞が示す当該状況（動作）の把握の仕方が、話者あるいはその他の文脈、文の意味・統語構造などにかかわりなく、ほぼ一定であることを示していると考えられる。

一方、対立のスケールが、0 に近い動詞ほど、様々な体の形態で用いられるということになる。これは、上で述べたような、語彙的意味以外の要素の影響などを受けやすいことを意味していると考えられる。同様に、当該文を発する話者が、この動作（状況）をどう捉えているか（あるいはどう聞き手に提示しているか）、ということが諸々の条件に応じて容易に変化しうるということでもある。

このように考えてくると、ペアを持つタイプの動詞でも、二通りのタイプを想定することができそうである。スケールの数値が 10 に近いものは、完了体が専ら用いられる動詞である。これを「第Ⅱ群」とする。一方、スケールの数値が－10 に近いものは、不完了体が専ら用いられる動詞である。こちらを「第Ⅰ群」とする。

ここで、単体動詞も考慮に入れてみよう。数値が常に 10 になるのは、完了体単体動詞の場合である。対して、不完了体単体動詞の場合には常に、－10 になる。この二つのグループは、スケールの両端に配置することになるので、必然的にペアを持つ動詞（第Ⅱ群、第Ⅰ群）は、この両者の間に配置されることになる。

これらをまとめると、下図のようになる：

図 4-2：対立のスケールと動詞のタイプの関係

スケールの数値	動詞のタイプ	用いられる体の形態	
10	単体	完了体	
↑	ペア（第Ⅱ群）	完了体	不完了体
↓	ペア（第Ⅰ群）	完了体	不完了体
-10	単体		不完了体

上の図中、右側にある「完了体」、「不完了体」の別は、それぞれの動詞のタイプが表される体の形態を示している。

以下では、ペアを持つ動詞の第Ⅰ群と第Ⅱ群について、それぞれ見ていくことにしよう。

2.4. 特徴的な振る舞いを見せる動詞

2.4.1. ペアを持つ動詞（第Ⅱ群）

2.4.1.1. 動詞群

順番が前後するが、この節ではまず、ペアを持つ動詞の第Ⅱ群から見ていくことにする。これらの動詞は、不定詞で用いられる場合に、専ら完了体の形態で現れてくる動詞である。

この動詞群には、помогать / помочь（手伝う、助ける）、оказываться / оказаться（見つかる；〜であることが分かる）、представлять себе / представить себе（想像する、思う）、случаться / случиться（起こる、生じる）、заставлять / заставить（強制する）、относить / отнести（関連づける）、позволять себе / позволить себе（あえて〜する）、показываться / показаться（〜と思われる）、покупать / купить（買う）、восстанавливать / восстановить（復興させる）、заменять / заменить（取り替える）、становиться / стать（〜になる）、объяснять / объяснить（説明する）、соглашаться / согласиться（同意する）、вспоминать / вспомнить（思い出す）、отвечать / ответить（応える）、принимать / принять（受け容れる）、называть / назвать（名付ける）、определять / определить（定める）、изменять / изменить（変える）、приводить / привести（実施する）、обеспечивать / обеспечить（保障する）、представлять / представить（提示する）などが含まれる。

具体例を確認しておこう：

(4-73) Только десять процентов больных в сильной степени наркоманов в результате лечения ***могут*** <u>стать</u> [PFV-INF] полноценными людьми. [UC]
重度の麻薬中毒患者のうち、たったの 10 パーセントだけが、治療の結果、真人間となれるのである。

(4-74) Нельзя изобрести "вечный" двигатель, ***нельзя*** <u>стать</u> [PFV-INF] физически бессмертным, нельзя сделаться "сильнее" природы. Можно лишь погибнуть вместе с нею. И таких непреодолимых ограничений десятки. [UC]
例えば、「永遠に動く」エンジンを創り出すことはできないし、不老不死の体を手に入れることもできない。自然よりも「強く」なることもできない。自然と共に死んでいくよりないのである。そうした、克服することのできない制限は何十とある。

(4-75) Это поистине удивительное явление ***можно*** <u>объяснить</u> [PFV-INF] наличием фонетического кода — объективных составляющих речи, которые легко выявляются слуховым аппаратом человека. [UC]
この、本当に驚くべき現象を説明できるのは、音声コード、すなわち人の聴覚器官によって容易に明らかになる、言葉の客観的な構成要素が存在することによってのみである。

2.4.1.2. 不完了体が用いられる場合

これらの動詞が不完了体で現れてくる場合にはどのような意味を表していると考えられるだろうか。具体例を見てみよう：

(4-76) A ***могут*** ли и дальше схемы становиться [IPFV-INF] все более компактными? [UC]
それから先もこの図式は、一層ずっとコンパクトなものになりうるのですか？

この例は、比較級の表現「все более компактными」があることから、漸次的な変化が念頭に置かれており、不完了体が選択されていると考えられる。
別の動詞が用いられている例を確認しよう：

(4-77) Искра ***умела*** объяснять [IPFV-INF], а Зиночка — слушать. [UC]
イースクラは説明をすることができて、ジーナチカの方はそれに耳を傾けることができた。

これは、後天的可能性の意味が念頭に置かれているので、反復相を示す不完了体が選択されていると考えられる。

(4-78) Именно так только и ***способна*** отвечать [IPFV-INF] машина, действующая по принципу — прошел или не прошел электрический импульс, оперирующая набором единиц и нулей, из бесчисленности которых и создаются некие сложные выражения, как из сочетаний точек и пробелов на газетном листе получаются тональные оттиски фотографий. [UC]
このようにして初めて、電気信号が通っているかいないかという原則に従って動作し、１と０の組み合わせを操作する機械が応答できるのです。この１と０の無限の組み合わせから、複雑な表現が創り出されるのです。それは、点と空白の組み合わせから、新聞紙上にトーンのある刷りが出来上がるのと同じようなものです。

(4-79) В детских играх ***можно*** смещать [IPFV-INF] значение слов, называть [IPFV-INF] песочек — пищей, серое — красным и так далее. [UC]
子供の遊びでは、語の意味を変えて、砂を食べ物と名付けたり、灰色のものを赤いもの、などと名付けたりできるのです。

これらの例はいずれも反復性を表しているものと考えられる。しかし一方で、以下のような例も見られる：

(4-80) Не знаю, до сих пор не знаю, чем так помогла жене Мария Тихоновна. Да и ***могла*** ли она вообще помочь [PFV-INF], если говорить начистоту? [UC]

知りません、今の今までマリーヤ・チーホノヴナが妻のことを手伝っていたことは知りませんでした。しかも、言ってしまえば、あの人はそもそもお手伝いなんてできたのでしょうか？

(4-81) Завод по извлечению урана из морской воды должен был бы перерабатывать за год один кубический километр воды, извлекая 3-4 тонны металла. Это значит, что за минуту установки завода должны пропускать около двух миллионов литров воды. В лаборатории ***можно*** заставить [PFV-INF] выпасть в осадок уран, содержащийся в воде в форме комплексного соединения с карбонатными ионами, добавив к воде определенные химикаты.　[UC]
海水からウランを抽出する工場では、一年で、３～４トンの金属を抽出して、１キロ立方メーターの水を精製しなければいけないでしょう。このことは、工場の設備が、１分で約２００万リットルの水を処理しなければいけないということを意味します。ラボでは、水に一定量の化学薬品を加えて、炭酸イオンとの錯体の形で水に含まれているウランを、沈殿槽に落とすことができます。

(4-82) Лучше думайте о том, скольким ***можно*** помочь [PFV-INF] через социальные медиа и какие проблемы решить [PFV-INF], а не о «промышленном шпионаже». [RNC: Андрей Семенов. 10 шагов некоммерческой организации к влиянию в Интернете (2011) // publicity.ru, 2010]
「産業スパイ」のことではなくて、ソーシャルメディアを通じてどれだけの人を助けることができるか、どんな問題を解決できるかについて考えた方がいいでしょう。

(4-83) Пеночка-весничка так мала, что ее ***можно*** иногда принять [PFV-INF] за большого жука.　[UC]
キタヤナギムシクイは非常に小さいので、時折大きな甲虫と見まごうことがある。

これらの例においても、描写されている「状況」は、反復性を持っているものと解釈することができそうである（特に上例 4-83 は反復性を示す状況語 иногда を伴っている）。しかしこのような「状況」を表す場合であっても、これらの動詞の場合には、実際のテキスト内では、（期待される不完了体ではなく）完了体を用いて表現する方がより好まれているということになる。
試みに、上例（4-80）の不定詞の体を入れ替えると以下のようになる：

(4-80')Не знаю, до сих пор не знаю, чем так помогла жене Мария Тихоновна. Да и ***могла*** ли она вообще помогать [IPFV-INF], если говорить начистоту?

この場合、妻に対してしてあげられる、全般的なことという文脈になるのに対して、

完了体の場合には、妻に対してしてあげるべき具体的で特別な何かをする能力を持っているかどうか、という文脈になるという。

あるいは同様に、上例（4-82）における不定詞の体の形態を入れ替えた下例はどのようになるだろうか：

(4-82')?Лучше думайте о том, скольким ***можно*** помогать [IPFV-INF] через социальные медиа и какие проблемы решать [IPFV-INF], а не о «промышленном шпионаже».

例（4-82）の文脈では、「助け」たり、「解決し」たりするという結果が念頭に置かれているために完了体が選択されている。不完了体を用いる場合には、「助けようとし」たり、「解決しようとし」たりという、「プロセス」を表すことになり、この文脈では不自然に響くという。

あるいは、上例（4-83）の場合には、不定詞の体の形態を入れ替えた下例は許容されない：

(4-83')*Пеночка-весничка так мала, что ее ***можно*** иногда принимать [IPFV-INF] за большого жука.

ここで見た動詞は、「当該状況（動作）が完了した後の結果」に焦点が当てられているという点で、いずれも共通した意味特徴を有しているようにも思われるが、個々の動詞により振る舞いが異なることも想定されるため、別途この観点からの検証作業が求められてくるだろう。

2.4.2. ペアを持つ動詞（第Ⅰ群）

2.4.2.1. 動詞群

次に第Ⅰ群について見ていこう。

こちらの動詞は、不定詞で用いられる場合に専ら不完了体の形態で現れてくる動詞である。この動詞群では、「служить / послужить（役に立つ）」、「считать / счесть（見なす、考える）」などが、その特徴を最も顕著に表すものである。

以下でいくつか具体例を確認しておこう：

(4-84) Примером ***может*** служить [IPFV-INF] комплекс научно-технических мероприятий по проблеме мониторинга окружающей среды. [UC]
例となりうるのは、環境モニタリングの問題に関する、いくつかの学術関連イベントである。

(4-85) Таким образом, ядерная энергетика с реакторами на тепловых нейтронах при указанных ресурсах топлива в принципе не ***может*** служить [IPFV-INF] крупномасштабным источником энергии... [UC]
このようなわけで、ここに示した燃料資源を持った、高速中性子に基づく原子

炉を備えた原子力設備でも、原則的には、大規模なエネルギー源とはなり得ない。

(4-86) На нынешнем этапе, пожалуй, одним из самых важных направлений работы по охране малых рек ***можно*** считать [IPFV-INF] создание водоохранных зон на берегах рек и водоемов. [UC]
現段階では、恐らく、小さな河川を守る作業に関する、最も重要な方向性の一つと考えることができるのは、河川や貯水池の岸壁に水質保全ゾーンを設けることである。

(4-87) Если пытаться увеличить мощность "ветряков", то возникают новые, более сложные конструктивные и экономические проблемы, и пока их ***нельзя*** считать [IPFV-INF] решенными. [UC]
「風力発電機」の出力を大きくしようとしたとしても、新たな、より複雑な構造的、且つ経済的問題が持ち上がるだろうし、差し当たりそれらの問題は解決されているものだとは考えられない。

これらはどれも、「持続相[24]」を表していると考えてよいだろう。すなわち、不完了体という形式は、ここでは一次的アスペクト（cf. 第二章、第 2.4.2.節）を表示するために用いられているということになる。

2.4.2.2. 完了体が用いられる場合

それでは、これらの動詞が、完了体で現れてくる場合には、どのような意味を表していると考えられるだろうか。具体例を見てみよう。

(4-88) Многообразие факторов, влияющих на движения речных и морских животных, сильно затрудняет создание аналогичных технических устройств, однако даже имитация колебаний ***может*** послужить [PFV-INF] основой при конструировании некоторых типов экономичных инерционных насосов. [UC]
水棲動物の動作に影響を持っている要因が多様であるため、類似の機械を創り出すことが極めて困難になっている。しかしながら、振動を模倣することだけでも、省エネルギーなタイプの慣性ポンプの設計に際しての基礎となることができる。

(4-89) Иначе этот позорный случай с Тосей Лубковой ***может*** послужить [PFV-INF] дурным примером. [UC]
そうでなければ、トーシャ・ルプコーワとのこの恥辱的な出来事は、ひどい例になりうる。

(4-90) Итак, адвокату предстоит борьба. Он анализирует добытые следствием факты,

[24] 「静態」を含む。第二章、第 2.4.2.3.節参照。

берет на заметку все просчеты обвинения, все, что только ***может*** послужить [PFV-INF] интересам подзащитного.
このように、弁護士を待ち受けているのは闘いである。弁護士は、取り調べから得られた事実を分析し、起訴状のあらゆる間違い、ただ被告人の利益になりうること全てをメモに書き留めるのである。

これらの例文で用いられている不定詞の完了体は、不完了体と置き換えることが可能であり、両者の差違は感じられない。これは、いわゆる「体の競合」であると考えてよいだろう。

もしどちらの形態も同じ意味を等しく表すのであれば、完了体が用いられている例がもっと現れてもいいはずだが、実際には、完了体が選択されるケースは、上の通り極めて稀で、不完了体の選択がより多く好まれているという傾向がデータからは明らかになっている。

もう一方の動詞（считать / счесть）についても確認しておこう：

(4-91) А молчание даже ***могут*** счесть [PFV-INF] за серьезность характера. [UC]
沈黙の方は、性格の真面目さと捉えられることさえあり得る。

この文については、不定詞を不完了体に入れ替えた場合、「反復性」の意味として解釈することも可能であるという[25]。

このⅠ群に属する動詞の場合、大部分を占める不完了体の形態は、基本的に持続相を示すものと解釈できる。したがって、体の形態が果たしている機能について言えば、一次的アスペクトの意味を表現する機能を担っていると考えられる。対応の形態とされる完了体は、実質的に用いられないか、用いられても文全体の解釈に影響を与える機能は果たしていないと考えられる。

2.5. 本節のまとめと今後の課題

本節では、従来の研究とは異なる視点から考察を行なった。従来の研究では、述語と不定詞の語結合を扱うにあたって、述語の意味の影響を中心に見てきたものが多かった。ここでは試みに、動詞の語彙的意味に着目し、それにしたがった考察を試みた。

共通の語彙的意味を持つ、ペアを持つ動詞を完了体と不完了体とでまとめあげて、それをひとつの単位とし、「体の形態的対立のスケール」という指標を導入し、それに従って不定詞の体の形態の文法的な振る舞いについての分析を試みた。

この「スケール」とは、同一の動詞の、完了体、不完了体それぞれの形態が、どの程度の割合で用いられているかを数値化するものである。数値が 10 に近付けば近付く

[25] しかし、すぐに反復の文脈で理解するということはしづらく、不完了体を用いた場合の違和感は大きいようである。同様の意味を表す「принять」が用いられている例（4-83）の場合には、不完了体が許容されなかったことから、この語彙的意味の場合は完了体の形態でのみ用いられることが予想されるが、今後一層詳しく調べる必要はあるだろう。このように、動詞という単位から更に、多義的な動詞の場合には、どの語義で用いられているのかという点まで掘り下げて分析にかけていく作業が必要となってくるが、これは今後取り組んでいくべき課題のうちの一つである。

ほど、その動詞は完了体で現れてくる割合が高くなり、逆に−10 に近付けば近付くほど、その動詞は不完了体で現れてくる割合が高くなる。

この「スケール」の示す数値に従って、ペアを持つ動詞を大きく二つのグループ（第Ⅱ群と第Ⅰ群）に分けることができる。

「可能性」の意味を持つ述語と語結合を形成する際には、専ら完了体が現れてくる動詞は、第Ⅱ群に属する動詞とした。それに対して、専ら不完了体が現れてくる動詞を、第Ⅰ群に属する動詞とした。

これらの分類に従って具体例を見ると、それぞれのグループに属する動詞の、体の形態の果たす意味的な役割も若干異なっていることが伺える。

第Ⅱ群に属する動詞の体の形態は、「状況（動作）」を、「出来事」として捉える傾向が強い。したがって、完了体の比率が高く、同時にアスペクトの形式も二次的アスペクトに変化している。そのため、不完了体が用いられると、やはり二次的なアスペクトの意味である、反復性を示す傾向が強くなる。

それに対して、第Ⅰ群に属する動詞の場合には、「状況（動作）」が、持続的な性質を保持していることを示している場合が多い。したがって、アスペクトの形式は、一次的アスペクトを表す役割を保っている。この第Ⅰ群の動詞の場合、完了体の形態は、実質的に用いられないか、あるいは用いられても体の対立は中和してしまっていることが多い。

これらをまとめると以下のような図でまとめることができる：

図 4-3：対立のスケールと二種類の対立

スケールの数値	動詞のタイプ	用いられる体の形態		アスペクトの意味的対立の種類
10	単体	完了体		
↑	ペア（第Ⅱ群）	完了体（出来事）	不完了体（反復相）	二次的
↓	ペア（第Ⅰ群）	完了体	不完了体（持続相）	一次的
-10	単体		不完了体	

もっとも、今回設定した「スケール」は、非常に限られた統語環境、すなわち「可能性」の意味を含む述語との語結合におけるデータのみを対象として設定され、算出された値である。ロシア語において「可能性」の意味を表しうる統語構造は、他にも存在することは既に述べた通りである（cf. 第二章、第 3.5.1.節）。今回の考察に際し

ては、それらの統語構造における体の形態選択についての調査は及んでいないため、全ての統語構造における共通した傾向であるかどうかも含め、最終的な結論を下すのは尚早である。しかしながら、モダリティの意味とは一切関わりなく、少なくともいくつかの動詞については、特定の体の形態がより好んで用いられるという傾向があることは明らかにできた。今後、この「スケール」の示す値を手がかりとしつつ、今回取り扱えなかった統語構造についての調査を進め、最終的な体の形態選択の実態について明らかにしたいと考えている。

3. 第四章のまとめ

本章では、第三章で得られたデータをもとに、大きく分けて次の二点に重点を置きながら考察を加えた：

① 先行研究の記述の精密化
② 従来とは異なる視点からの分析対象の見直し

まず、第 1 節において、先行研究の記述をより精密なものとする（上記①）ことを目指し、言語単位の文法的行動の実態の把握と、先行研究における記述の再検証を行なった。

第 1.2.節において、先に第三章で収集した、「可能性」のモダリティの意味を持つ述語と不定詞の語結合に関するデータの数量的分布を確認した。今回収集したデータから明らかになった傾向としては、述語と不定詞との語結合において、不定詞の体の形態選択は、全体として完了体が選択されている割合が多いということである。

また、四つの意味・統語構造のタイプ（cf. 第二章、第 5 節）に応じてデータを分類してみると、論理的には存在しうるものの、事実上用いられない（用いられたとしても極めて稀な）構造があることも確認できた。具体的には、タイプⅡ及びタイプⅣの構造は、それ自体頻度数が低いことに加え、これらの構造において内的可能性の述語が用いられることは極めて稀である。

また、述語と結合する不定詞の体の形態選択の実態は、それぞれ結合する述語や、それが用いられる意味･統語構造に応じて､異なる様相を見せていることがわかった。

内的可能性の意味を表す述語に関しては、多くの場合、その意味・統語構造に関わらず、不完了体の方が多数を占めている。そうした傾向が最も顕著だったのは уметь である。しかし、同じ内的可能性を表す述語である способен と結合する不定詞に関しては、その体の形態選択においては、完了体の割合も少なからず観察された。

次に、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」とに分類した上で、それぞれの意味を表しうる述語と、不定詞の語結合について、そのデータの数量的分布と、そこでの不定詞の体の形態が果たしている機能について、それぞれ四つの意味・統語構造に分類を行なった上で考察した。

まず､第1.3.節では､「非現実のモダリティ」を表す､мочь以外の述語（уметь, способен, в состоянии, в силах, можно, нельзя, возможно, невозможно）と不定詞の語結合の実態

を確認した。このモダリティの意味は、「内的可能性」と「外的可能性」に分類することができ、それぞれの可能性の意味に応じて、体の形態選択の傾向も異なっている。時間軸上に定点を持ち得ない、「事象」を対象とする、「非現実のモダリティ」の場合には、完了体によって起算時点以降で生じうる状況が表され、不完了体は当該状況の反復性を示すことが多い。

次に、第 1.4.節では、述語 мочь と不定詞の語結合のケースを取り上げた。この мочь は、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の双方を表すことができる述語である。この述語について、四つの意味・統語構造のそれぞれが、どのモダリティを表すことができるかについて確認した。タイプⅠは双方のモダリティの意味を表すことができるのに対して、タイプⅢは「非現実のモダリティ」しか表すことができない。また、タイプⅡの構造においては、事実上体の形態の際に応じてモダリティの意味が異なったものになることが分かった。

また、мочь と結合する不定詞の語彙的意味の差異に応じて、実現するモダリティの意味も一定の制限を受けていることが明らかになった。

また、先行研究で指摘されていたような、不可能性と完了体の形態選択との間の相関関係について、データの数量的分布の観察に基づいた再検証も試みた（cf. 第 1.5.節）。タイプⅠ（「可能性」）とタイプⅢ（「不可能性」）の意味・統語構造におけるデータの分布を比較したところ、前者における体の形態選択の実態と、後者のそれとではそれほど大きな差は見られなかった。また、同じタイプⅢでも、内的可能性か外的可能性かというモダリティの意味に応じて、不定詞の体の形態選択の実態は大きく異なっていることも、今回のデータが示す数量的分布から明らかになった。

ここまでで確認した、「非現実のモダリティ」及び「評定のモダリティ」のそれぞれにおける、意味・統語構造の使用実態、そして述語と結合する不定詞の体の形態選択についてまとめたのが第 1.6.節である。

今回得られたデータにより、それぞれの述語の使用実態が明らかになり、データの数量的分布に従って、特徴付けを行なうことが可能となった。例えば、уметь は、どの意味・統語構造のタイプで用いられるかには関わりなく、結合する不定詞は一貫して不完了体が多数を占める。また、способен は、タイプⅢの構造で用いられることは稀で、事実上タイプⅠで用いられることがほとんどである。逆に、「в силах」は、タイプⅢでしか用いられない。「в состоянии」及び「в силах」は、タイプⅢで用いられる場合、結合する不定詞は、完了体が選択される。外的可能性を表す述語に関して言えば、顕著な分布の特徴を示しているのは、невозможно であり、この述語と結合する不定詞は完了体が多数を占める。こうした特徴に従って、モダリティの種類、意味・統語構造に応じて、どの述語が用いられるかを明らかにした。

体の形態の果たす機能に関して言えば、当該状況が「限界のあるプロセス」の場合であれば、「評定のモダリティ」において、起算時点で進行している状況（及び「状態」）を不完了体によって表すことが可能である。それに対して、「出来事」の場合には、不完了体の形態は、多く当該状況の反復性を表すという機能を果たしている。対して完了体の形態は、当該状況が起算時点以降に生起するということを表す。

第二に、従来の研究とは異なる視点から分析対象を捉え分析することを試みた（本

節冒頭の②)。すなわち、動詞の語彙的意味という単位に注目し、新たな基準を設けて考察した（cf. 第 2 節)。

ここまで見てきた動詞のうち、いくつかの動詞は、どちらか一方の体の形態が選択される割合が高いという、ある種の偏向性を示すものがある。この、動詞の見せる形態選択における偏向性を数値化して示すために、「体の形態的対立のスケール」という指標を導入し、動詞ごとの選択の実態について観察を行なった。

その指標に従って、スケールの数値に応じて、ペアを持つ動詞が第Ⅱ群と第Ⅰ群とに分類が可能である。

第Ⅱ群に属する動詞（помогать / помочь, оказываться / оказаться, представлять себе / представить себе, случаться / случиться, заставлять / заставить, относить / отнести, позволять себе / позволить себе, показываться / показаться, покупать / купить, восстанавливать / восстановить, заменять / заменить, становиться / стать, объяснять / объяснить, соглашаться / согласиться, вспоминать / вспомнить, отвечать / ответить, принимать / принять, называть / назвать, определять / определить, изменять / изменить, приводить / привести, обеспечивать / обеспечить, представлять / представить）は、用いられる際に完了体で現れることが専らであり、対立する不完了体が用いられる場合には反復性の特徴を示すことが多い。

第Ⅰ群に属する動詞（служить / послужить, считать / счесть）は、用いられる際に不完了体で現れることが専らである。

第五章

補足的考察：述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケース[1]

0. 本章の概要

前章までで、「可能性」の意味を持つ述語と不定詞の語結合のケースについて、その言語使用の実態の把握と、不定詞の体の形態の文法的な振る舞いについて考察した。また、ペアを持つ動詞の中でも体の形態選択に一定の傾向を見せるものがあることについても確認した。

本章では、従来の研究では十分に注意を向けられてこなかったと思われる、「述語派生抽象名詞」（後述）と不定詞が成す語結合という問題について、新たに問題を設定した上で分析を試みる。

まず、次の第 1 節において、「述語派生抽象名詞」と不定詞の語結合という具体例を確認しつつ、新たな問題の提起と課題の設定を行なう。それを踏まえた上で、ここでの分析対象を定める。

第 2 節では、本章での調査に際してのサンプルの収集方法、及びそこから抽出したデータの性質について確認する。また、それに伴って本章で行なう分析の対象の制限についても触れる。

第 3 節で、今回収集したデータから読み取れる、言語使用の実態についてまとめる。述語と不定詞の語結合のケースと、述語派生抽象名詞と不定詞の語結合のケースについて、その体の形態選択の実態について比較を行ない、この語結合における不定詞の見せる文法的行動について、主にデータの数量的分布の比較を通じて読み取れることについて確認する。

1. 異なる視点からの分析の試み

1.1. 問題提起

従来の研究は、モダリティの意味を含む述語と不定詞との語結合について扱ったものが中心であり、前章までに行なった考察もそれに沿うものであった。したがって、「述語」と「動詞（不定詞）」の語結合という、「語」のレベルにおいては、両者の間にある相関関係について、ある程度の記述がされてきていると考えてよいだろう。では果たして、こうした相関関係、あるいは意味の上での影響関係は、ロシア語という言語体系内において、普遍的に存在していると考えられるだろうか。

もう少し具体的に考えてみよう。例えば、これまで扱ってきたモダリティの意味を持つ述語から派生した名詞（本章ではこれを便宜的に『述語派生抽象名詞』と呼ぶ）と、不定詞の語結合の場合、体の形態選択には、述語との語結合の場合と同様の相関

[1] 本章の内容は、阿出川（2009）及び阿出川（2010）の内容に、加筆及び修正を行なった上で再構成したものである。

関係が保持されているのだろうか。もし、この述語派生抽象名詞と不定詞から成る語結合の場合でも、モダリティの意味と体の形態の顕れ方の間に見られる相関関係が保持されているのであれば、「可能性」という意味カテゴリー[2]と、「アスペクト」の意味カテゴリーとの間にある相関関係について、より抽象度の高いレベルで論じることができるのではないだろうか。

例えば、述語 уметь と、それから派生した名詞 умение の例を取り上げてみよう。上でも確認したように（cf. 第四章、第 1 節など）、この述語の場合には、通常結合する不定詞は、不完了体で現れる。下の例を参照：

(5-1) Бедой исследований Соколова было отсутствие датировок отложений, свидетельствующих о наступлениях и отступлениях моря — четвертичный период велик — около 1 млн. лет, но тогда <u>определять</u> [IPFV-INF] время образования таких отложений геологи еще не ***умели***. [UC]
ソコロフの研究の災難となっていたのは、海の接近と後退を裏付ける、地層の年代決定が欠如していることであった。第四紀は非常に長く、約 100 万年である。しかし、当時そうした地層の形成に要する時間を確定することは出来なかった。

では、この述語から派生した名詞との結合の場合にはどうだろうか。下の例を見てみよう：

(5-2) Самое сложное, что есть в человеческой жизни, — ***умение*** <u>определить</u> [PFV-INF] грань между тем, что такое хорошо, что такое плохо. [UC]
人生において存在する最も複雑なことは、何が良くて何が悪いかという、その間に境界線を引く能力である。

уметь と умение は派生関係にあるため、それぞれ共通した「内的可能性」という共通の意味カテゴリーを有していると考えられる。したがって、これらの語と結合する不定詞は、述語との結合の場合と、述語派生抽象名詞との結合の場合とで、それぞれ同様の振る舞いを見せると期待される。

管見によれば、このような、述語から派生した名詞と不定詞の語結合のケースを取り上げている先行研究は極めて少なく、このケースについて言及しているのは、Рассудова（1982）と Forsyth（1970）のみである。まず、Рассудова（1982）では、完了体の「例示的意味（cf. 第二章、第 2.5.3.2.節）」が現れる例としてごく数行を費やして触れられている（Рассудова 1982: 115）。また、Forsyth（1970）でも、述語に関する記述と関連した事項として極々簡単に言及されているのみである（Forsyth 1970: 237）。ここでは Forsyth（1970）の挙げている例を確認しておこう：

[2] 「意味カテゴリー」及び「機能・意味的場」といった一連の概念については、第二章の第 3.5.1.節を参照されたい。

(5-3) Ну, а теперь мне представляется ***возможность*** самому увидеть [PFV-INF], понюхать [PFV-INF] и попробовать [PFV-INF] на вкусе.
さあ、今や実際に自分で見て、嗅いで、試してみる機会が訪れたようだ。

Forsyth（1970）は、これらの名詞と結合する不定詞は、完了体をとる傾向を示すと指摘している（Forsyth 1970: 237）。

しかしながら、どちらの研究でも、それ以上の調査、あるいは考察はされておらず、事実上ほとんど注意を払われていないと言ってもいいほどの扱いしか受けていない。

実際には上の例のように、同じ動詞でも、異なる体の形態が用いられることがあり、これは述語の場合と同様であるようにも思われる。しかし、実際にどちらの体の形態が、どの程度の割合で用いられているのかという点について、その実態は明らかになっていない。

1.2. 本章で試みる分析の目的とその対象

このような、品詞を超えた考察はこれまで試みられていないため、ロシア語の文法体系内において、モダリティの意味と体の形態選択において観察される相関関係が、普遍的に見られる傾向であるかどうかは不明瞭なままである。

つまり、こうした相関関係が、言語体系のどのレベルにまで、どの程度普遍的に保持されているのかという点について、従来の研究では事実上考慮に入れられていないのである。ある特定の意味カテゴリーが、言語形式の選択に何らかの影響を与えていると考えられるのであれば（本稿での一連の議論に当てはめてみると、「可能性」の意味が、不定詞の体の形態選択に影響を与えていると考えられるのであれば）、その意味カテゴリーを共通して持っている他の言語形式（他の品詞）の場合においても、同様の傾向が観察されるのではないかと予想される。あるいは逆に、ある特定のモダリティの意味と、話者による体の形態選択の傾向が、強い影響関係にあると主張するためには、語のレベルよりも更に抽象度を高め、意味カテゴリーのレベルからの考察が求められてくるだろう。

こうした問題意識を出発点として、ここでは、同じ「可能性」の意味カテゴリーを共有すると考えられる、возможность、умение、способность を対象として取り上げ、これらと不定詞が結合するケースについて考えてみることにする。これらの名詞は、ここまでで扱ってきた述語と形態論的に派生関係にあると考えられ、「可能性」という意味的な共通性も保持しているため、意味カテゴリーを共有している（つまり、同じ機能・意味的場に属している）と考えてよいだろう。

ここで、これらの名詞と、上述のモダリティの意味を持つ述語との形態論的な派生関係について確認しておこう。まず、способность と умение については、それぞれ、形容詞及び動詞から名詞を形成する際の一般的な語形成法に準じているので、これらがそれぞれ、способный と уметь に対して派生的関係にあることは明らかだろう（cf. способн-ость < способн-ый, умен-ие < уме-ть）。一方、возможность については、どの述語と派生関係あるいは対応関係にあるかというのは一義的には決しがたい[3]が、мочь、

[3] 直接派生関係にあるのは、возможно ということになるだろうが、上でも見た通り（cf. 第四章、第 1

можно、あるいは возможно と共通の語根を含んでいることは判断できる（cf. воз-можн-ость）[4]。また、мочь から直接派生し、且つ同様の意味を担っていると考えられる名詞では、多く用いられるものが他に存在しない[5]ことからも、возможность がこれらの述語と意味的な共通基盤を持っている名詞であると考えてよいだろう。

ここで見た、述語派生抽象名詞と派生元の述語との対応関係は下表のようにまとめられる：

表 5-1：「可能性」の意味カテゴリーを共有する述語と名詞

派生元の述語	述語派生抽象名詞
мочь, можно, возможно	возможность
уметь	умение
способен	способность

また、これらの名詞は、不定詞と語結合を形成することができるという、統語論的特徴をも共有している。

ここで派生元となっている、мочь, можно, возможно, уметь, способен といった述語は、上に見たように、それぞれ内的可能性と外的可能性の両方、あるいはどちらか一方を表す述語として機能するものである。そのため、これらの述語から派生した名詞と不定詞の結合のケースを調査、分析することにより、「可能性」のモダリティの意味を含む名詞と語結合を成す不定詞のかなりの部分をサンプルとして含めることが可能になる。これらを対象として取り上げることで、「可能性」のモダリティの意味を持つ述語と結合する、不定詞の体の選択の間に見られる相関関係が、どの程度保持されているのかということに関する調査の出発点とすることができる。

第四章までで扱ってきた述語から派生したこれらの名詞は、不定詞と語結合を形成する場合、その体のカテゴリーは、述語との結合の場合と同じような文法的行動を共通して見せるのだろうか。これらの、意味的、また統語的特性を共有している、派生関係にある語も対象に含めた上で、同様の考察を行なえば、更に抽象的なレベルにおける、意味同士の相互作用について何らかの示唆が得られるはずである。その上で改めて、モダリティの意味と体の形態選択についての何らかの定式化を試みることができるだろう。そうした議論の足がかりを作ることが、本章での試みの目的のうちの一つである。

また、これらの名詞は、「可能性」の意味を表す名詞としても頻度が高いものであり、これらと結合する不定詞がどのように体の選択が成されているかという点についての記述それ自体も過去に存在していないため、その点でも、ここでこれらの名詞と不定詞の語結合について扱うことは一定の意義を持っていると考えられる。

節）、この語は述語としては使用頻度がむしろ低い部類に入る。

[4] なお、動詞 мочь は現在時制（非過去時制）で、могу, можешь, может（それぞれ一人称、二人称、三人称単数）；можем, можете, могут（同複数）と変化する。

[5] 先に述べた通り、動詞と同一の形態が名詞となった мочь という語は存在するが、使用頻度も極端に低く、「可能性」という意味で一般的に用いられる語ではないと言える。

2. 収集したデータに関する情報

2.1. 検索にかける文字列

本研究の分析対象となるデータは、ウプサラ・コーパス（cf. 第三章、第 1.2.2.節）と、テュービンゲン大学で提供されているオンラインコーパス（cf. 第三章、第 1.2.3.節）の Огонек のコーパスから収集したサンプルから抽出したものである。

サンプルの収集と取捨選択、及びデータの採用の基準に関しては、先に述語を対象とした際の方法（cf. 第三章、第 2 節〜第 3 節）と同様であるが、以下に手順を示すことにする。

まず、述語派生抽象名詞の諸変化形の文字列を含んだサンプルを収集する。述語が含まれている文のサンプル収集における場合と同様に、まず「возможность」「невозможность」、「умение」、「неумение」、「способность」、「неспособность」の名詞を対象として文字列検索を行なった。

それぞれ、大文字で始まる場合と小文字で始まる場合との、合計 84 パターンの検索を行なうことになる（下表）：

表 5-2：検索にかける文字列（述語派生抽象名詞）

述語派生抽象名詞	検索にかける文字列
возможность	возможность, возможности, возможностью, возможностей, возможностям, возможностями, возможностях
невозможность	невозможность, невозможности, невозможностью, невозможностей, невозможностям, невозможностями, невозможностях
умение	умение, умения, умении, умением, умениям, умениями, умениях
неумение	неумение, неумения, неумении, неумением, неумениям, неумениями, неумениях
способность	способность, способности, способностью, способностей, способностям, способностями, способностях
неспособность	неспособность, неспособности, неспособностью, неспособностей, неспособностям, неспособностями, неспособностях

2.2. サンプルの分類及び制限事項

サンプルの収集、分類及び取捨選択の手順については、原則として、上で分析した述語と不定詞の語結合の場合と同様である（cf. 第三章）。大まかに手順を確認すると以下のようになる：

① 当該文字列を含む文の抽出
② 不定詞との語結合か否かに応じたフィルタリング

③　不定詞のタイプに応じたフィルタリング

まず、上述のコーパスに対して上表文字列を検索にかけ、当該文字列を含む文を抽出した上で（上記①）、その文に「述語派生抽象名詞＋不定詞」という語結合が含まれているかどうかを確認し、含まれていなければ除外する（上記②）。そして、名詞と結合している不定詞を、その動詞のタイプ（cf. 第二章、第 2.6.節；第三章、第 3.3.節）に応じて分類を行なう（上記③）。

ただ、今回のサンプルの収集に際しては、いくつかの制限事項があるため、ここで確認しておく。

ウプサラ・コーパスからは、これらの名詞の諸変化形を全て検索にかけ、サンプルを収集した。一方、Огонек のコーパスからは、時間的な制約のため、当該名詞の直格形（主格形及び同一の形態である対格形）のみを検索にかけてサンプルを収集し、その一部[6]を最終的にデータベースに加えてある。そのため、データの全体的な整合性という観点から見る場合、サンプル収集に際して、Огонек のコーパス中での当該名詞の全ての形態が対象として含められていないという難点があるものの、数量的には十分な数が得られるため、本稿ではこれらのサンプルからデータを採用し、観察を行なうこととした。この不備を補う作業については、今後の課題のひとつとしたい。

これらのデータに基づき、述語派生抽象名詞と語結合を成している不定詞の振る舞いを観察するという手順を踏むことになる。

なお、以下では、分析の対象とする動詞のタイプを、体のペアを持つ動詞に限り、論を進める。

2.3. データの総数

上で行なった文字列による検索の結果得られたサンプルから、最終的にデータとして採用されるのは全 1077 例である。それぞれの内訳は以下の通りとなっている：

表 5-3：述語派生抽象名詞（「可能性」）と不定詞の語結合

述語派生抽象名詞	合計
возможность	731
умение	181
способность	165
総数	1077

また、「不可能性」を表す名詞は、得られたデータ数は極めて少なく、実際のテキスト内での使用頻度はかなり低い（そしてこのことは直観に照らしてみても違和感が無いだろう）。そのため、ここでは参考程度の扱いに留めることとする。ここでは、数量的情報について確認しておこう。以下のような内訳になっている：

[6] невозможность, умение, неумение, способность, неспособность については、検索の結果得られたサンプルを全てデータベースに加えたが、возможность については、検索結果の先頭から順にサンプルの処理を開始し、最終的に 921 例をデータベースに加えた。

表 5-4 :「不可能性」の述語派生抽象名詞と不定詞の語結合

述語派生抽象名詞	合計
невозможность	36
неумение	28
неспособность	20
総数	84

次節で、それぞれの名詞と結合する不定詞の体の形態の数量的分布について確認する。

3. 言語使用の実態と考察

3.1. 概要

上で行なった文字列による検索で得られたサンプルから、最終的にデータとして採用されるのは、全 1077 例となる。また、不定詞の体の形態の内訳は以下のようになっている：

表 5-5：述語派生抽象名詞（「可能性」）と不定詞の語結合

述語派生抽象名詞	完了体	不完了体	合計
возможность	484 (66.21%)	247 (33.79%)	731
умение	55 (30.39%)	126 (69.61%)	181
способность	24 (14.55%)	141 (85.45%)	165
総数	563 (52.27%)	514 (47.73%)	1077

まず、возможность と不定詞の語結合について見てみよう。この語それ自体では、内的可能性とも外的可能性とも示すことはできないと考えられる[7]ので、その意味的性質から考えると、派生元の述語のうち мочь と類似していると考えられる[8]。そのため、不定詞の体の形態については、双方の形態が一定の割合で結合しうることが予想されるが、そうした傾向についても確認することができた[9]。また、上でも見たように、Forsyth（1970）では、具体的なデータの数量的分布は示されていないものの、「これらから派生した名詞もまた、完了体の不定詞を支配する傾向を示す」と指摘されており（1970: 237）、この指摘の正当性も、ある程度はこのデータによって裏付けられたと言ってよいだろう。

次に、内的可能性（後天的可能性）を示す述語 уметь から派生したと考えられる

[7] 「内的可能性」、「外的可能性」のそれぞれを表す場合には、それぞれ対応する形容詞を付して「внутренняя возможность」、「внешняя возможность」となる。

[8] ただ、上でも見た通り、мочь の場合には、非現実のモダリティと評定のモダリティの双方を表すことができるということは勘案する必要がある。名詞 возможность の場合には、非現実のモダリティのみが表され、評定のモダリティを表す場合には、вероятность が用いられると考えられる。

[9] 述語との結合の場合との比較については、下の第 3.2.節にて詳しく見るため、そちらを参照されたい。

умение について、既に先の章で見たように、後天的可能性を表す уметь と結合する不定詞は、不完了体の形態で用いられることが多いため、そこから派生した名詞である умение と不定詞の結合の場合も、不完了体の形態が多くなるものと予想される。実際のデータを見てみると、やはり不定詞の体の形態は、不完了体の使用が多数を占めている。

次に、述語 способен から派生した名詞 способность と不定詞の語結合について見てみると、こちらもまた不完了体が多数を占めるという結果になっている。

不可能性を表す名詞は、今回は対象とは含めないが、参考として体の形態の分布について確認しておこう：

表 5-6：述語派生抽象名詞（「不可能性」）と不定詞の語結合

述語派生抽象名詞	完了体	不完了体	合計
невозможность	28 (77.78%)	8 (22.22%)	36
неумение	19 (67.86%)	9 (32.14%)	28
неспособность	8 (40%)	12 (60%)	20
総数	55 (65.48%)	29 (34.52%)	84

次節では、ここで見た、述語派生抽象名詞との結合の場合と、述語との結合の場合との、不定詞の体の形態の選択の実態についての比較を試みる。

3.2. 統語環境に応じた不定詞の振る舞いの比較

ここまでで、不定詞が述語と結合している場合と、述語派生抽象名詞と結合している場合という、異なる統語環境における不定詞の体の形態選択の実態についてのデータが揃ったということになる。ここでは、それぞれのデータの比較を試みる。

述語との結合、及び名詞との結合、それぞれのケースをまとめると下表のようになる：

表 5-7：述語と結合している場合、名詞と結合している場合

述語／名詞	可能性の種類	可能性の意味を含む語	完了体	不完了体	合計
述語	–	мочь	1293 (77.80%)	369 (22.20%)	1662
	内的（後天的）	уметь	30 (26.32%)	84 (73.68%)	114
	内的（先天的）	способен	40 (54.05%)	34 (45.95%)	74
	外的	можно	868 (75.15%)	287 (24.85%)	1155
	外的	возможно	14 (82.35%)	3 (17.65%)	17
合計（述語）			2245 (74.29%)	777 (25.71%)	3022

述語派生抽象名詞	–	возможность	484 (66.21%)	247 (33.79%)	731
	内的（後天的）	умение	55 (30.39%)	126 (69.61%)	181
	内的（先天的）	способность	24 (14.55%)	141 (85.45%)	165
合計（名詞）			563 (52.27%)	514 (47.73%)	1077
合計（全体）			2808 (68.50%)	1291 (31.50%)	4099

まず、全体的な傾向について確認しておこう。述語と不定詞の語結合の場合、述語派生抽象名詞と不定詞の語結合の場合、共に不定詞が完了体の形態で用いられる割合が多いという傾向には変化はないが、それぞれの占める割合は統語環境に応じて大きく異なっていることがわかる。述語との結合の場合には、完了体が選択される割合は約 74%であるのに対して、名詞との結合との場合には約 52%というように 20 ポイントほど、その割合が下がっている。

次に、それぞれのモダリティの意味ごとに見てみよう。便宜上、まず、「内的可能性」のケースから確認する。

「内的可能性」のうち、「後天的可能性」を表す述語 уметь と、名詞 умение との結合のケースそれぞれについて見てみると、名詞と不定詞の結合の場合においても、不完了体がより多く選択されるという全体的な傾向はやはり変わっていない。しかしながら、名詞との結合の場合には、完了体の形態の占める割合が若干増えている。述語との結合に際しては、不定詞の形態は、完了体が約 26%だったのに対して、名詞との結合の場合には約 30%と、その割合が若干増えている。

また、同じ「内的可能性」であっても、「先天的可能性」の場合については、「後天的可能性」とはその傾向が大きく異なっている。述語 способен と不定詞の結合のケースでは、完了体が一定の割合（約 54%）で選択されていたのに対して、その述語から派生した名詞である способность と不定詞の結合のケースでは、完了体が選択される割合が非常に小さくなっている（約 15%）という傾向が見られた。

最後の、述語派生抽象名詞 возможность については、やはり完了体が多数を占めているというのは、全体の傾向から逸れるものではない。この名詞の表す可能性の意味は、上でも見た通り、それ単独では内的可能性とも外的可能性とも判断できず、その双方を包含しているものと考えられる。したがって、この名詞と不定詞の語結合のケースでは、そのデータの数量的分布は、мочь を除いた[10]全ての述語と不定詞の語結合のケースの分布に近いものになることが想定される。試みに、мочь を除く述語と不定詞の語結合のケースと、возможность と不定詞の語結合のケースについて、それぞれのペアを持つ動詞の数量的分布を確認してみよう：

[10] 前にも見た通り、述語 мочь は評定のモダリティと非現実のモダリティの双方を表すことができるため。

表 5-8：述語（мочь 以外）との結合と名詞との結合の場合の比較

述語／名詞	可能性の種類	可能性の意味を含む語	完了体	不完了体	合計
述語	内的（後天的）	уметь	30 (26.32%)	84 (73.68%)	114
	内的（先天的）	способен	40 (54.05%)	34 (45.95%)	74
		в состоянии	23 (79.31%)	6 (20.69%)	29
		в силах	15 (93.75%)	1 (6.25%)	16
	外的	можно	868 (75.15%)	287 (24.85%)	1155
		нельзя	160 (55.56%)	128 (44.44%)	288
		возможно	14 (82.35%)	3 (17.65%)	17
		невозможно	92 (92.93%)	7 (7.07%)	99
合計（述語）			1242 (69.31%)	550 (30.69%)	1792
合計（名詞）	–	возможность	484 (66.21%)	247 (33.79%)	731

上の想定通り、両者のデータの分布は非常に似通ったものとなっている。述語との結合の場合の方が､完了体の不定詞が使用されている割合が 3 ポイントほど高いが(述語との結合の場合の約 69%に対して、名詞との結合では 66%)、極めて類似した分布であると考えてよいだろう。

3.3. 動詞ごとの振る舞いの違い

3.3.1. 概要

前節では、述語との語結合の場合と、述語派生抽象名詞との語結合の場合という、異なる統語環境に応じた、体の形態の選択の実態について確認した。本節では、動詞ごとの振る舞いの違いに着目して考察を加えてみる。

まず、今回のデータで得られた不定詞を、第二章で行なったように、語彙的意味を基準にしてまとめ、対立のスケールを算出する（cf. 第二章、第 2 節)。

次に、スケールの変化から、統語環境に応じて振る舞いの変わる動詞と変わらない動詞とに分類を行なう。

3.3.2. 動詞ごとの振る舞い

3.3.2.1. 述語派生抽象名詞

では、述語派生抽象名詞と結合する不定詞の振る舞いについて考察しよう。ここでは、出現頻度の高かった動詞（頻度数が 5 以上）を取り上げ、先に見た対立のスケール（cf. 第四章、第 2 節）を算出した。その数値に応じて順番を並べて整理したものが、下表である：

表 5-9：体の対立のスケール（述語派生抽象名詞との結合の場合）

動詞	総数	不完了体	完了体	スケール
становиться / стать	9	0	9	10.00
начинать / начать	6	0	6	10.00
ставить / поставить	6	0	6	10.00
играть / сыграть	5	0	5	10.00
обеспечивать / обеспечить	5	0	5	10.00
получать / получить	26	4	22	6.92
показывать / показать	6	1	5	6.67
отвечать / ответить	5	1	4	6.00
узнавать / узнать	5	1	4	6.00
брать / взять	5	1	4	6.00
сравнивать / сравнить	5	1	4	6.00
находить / найти	9	2	7	5.56
решать / решить	9	2	7	5.56
сохранять / сохранить	9	2	7	5.56
создавать / создать	7	2	5	4.29
покупать / купить	10	3	7	4.00
зарабатывать / заработать	13	4	9	3.85
помогать / помочь	6	2	4	3.33
выступать / выступить	8	3	5	2.50
уходить / уйти	5	2	3	2.00
защищать / защитить	5	2	3	2.00
поступать / поступить	5	2	3	2.00
понимать / понять	17	7	10	1.76
строить / построить	17	8	9	0.59
делать / сделать	19	9	10	0.53
проводить / провести	8	4	4	0.00
думать / подумать	8	4	4	0.00
смотреть / посмотреть	15	8	7	-0.67
ценить, оценивать / оценить	9	5	4	-1.11
видеть / увидеть	25	14	11	-1.20

продолжать / продолжить	5	3	2	-2.00
снимать / снять	5	3	2	-2.00
собирать / собрать	5	3	2	-2.00
продавать / продать	5	3	2	-2.00
добиваться / добиться	8	5	3	-2.50
выбирать / выбрать	13	9	4	-3.85
говорить / сказать	17	12	5	-4.12
распоряжаться / распорядиться	7	5	2	-4.29
чувствовать / почувствовать	7	5	2	-4.29
принимать / принять	12	9	3	-5.00
считать / счесть, сосчитать, посчитать	5	4	1	-6.00
заниматься / заняться	11	9	2	-6.36
выполнять / выполнить	7	5	2	-4.29
влиять / повлиять	7	7	0	-10.00
писать / написать	7	7	0	-10.00
контролировать / проконтролировать	7	7	0	-10.00
пользоваться / воспользоваться	6	6	0	-10.00
動詞	総数	不完了体	完了体	スケール

3.3.2.2. 述語との語結合の場合との比較

一定の頻度数で、双方の統語環境において共通して現れる動詞は、今回のデータでは 18 組あった。これらを抜き出し、それぞれの数量的分布及びスケールを示したものが、下表である：

表 5-10：双方の統語環境に共通して現れる動詞

	＋述語				＋名詞			
動詞	総数	不完	完	Scale	総数	不完	完	Scale
помогать / помочь	22	0	22	10.00	6	2	4	3.33
покупать / купить	12	0	12	10.00	10	3	7	4.00
становиться / стать	42	1	41	9.52	9	0	9	10.00
отвечать / ответить	17	1	16	8.82	5	1	4	6.00
принимать / принять	16	1	15	8.75	12	9	3	-5.00
решать / решить	31	4	27	7.42	9	2	7	5.56
находить / найти	34	5	29	7.06	9	2	7	5.56
понимать / понять	64	10	54	6.86	17	7	10	1.76
говорить / сказать	185	31	154	6.65	17	12	5	-4.12
брать / взять	14	3	11	5.71	5	1	4	6.00
ставить / поставить	14	3	11	5.71	6	0	6	10.00
делать / сделать	71	17	54	5.21	19	9	10	0.53

получать / получить	45	12	33	4.67	26	4	22	6.92
начинать / начать	15	4	11	4.67	6	0	6	10.00
думать / подумать	39	20	19	－0.26	8	4	4	0.00
создавать / создать	25	13	12	－0.4	7	2	5	4.29
видеть / увидеть	35	20	15	－1.43	25	14	11	-1.20
считать / счесть	31	30	1	－9.35	5	4	1	-6.00

それぞれの動詞の統語環境ごとのスケールを比較したのが、下表である。ここでは、述語との語結合の場合のスケールを「P」、述語派生抽象名詞との語結合の場合のスケールを「N」とし、その差を求めたものを加えると下表のようになる：

表 5-11：統語環境によるスケールの変化

動詞	Scale（述語＝P）	Scale（名詞＝N）	Scale の差（P-N）
помогать / помочь	10.00	3.33	6.67
покупать / купить	10.00	4.00	6
становиться / стать	9.52	10.00	-0.48
отвечать / ответить	8.82	6.00	2.82
принимать / принять	8.75	-5.00	13.75
решать / решить	7.42	5.56	1.86
находить / найти	7.06	5.56	1.5
понимать / понять	6.86	1.76	5.1
говорить / сказать	6.65	-4.12	10.77
брать / взять	5.71	6.00	-0.29
ставить / поставить	5.71	10.00	-4.29
делать / сделать	5.21	0.53	4.68
получать / получить	4.67	6.92	-2.25
начинать / начать	4.67	10.00	-5.33
думать / подумать	－0.26	0.00	-0.26
создавать / создать	－0.4	4.29	-4.69
видеть / увидеть	－1.43	-1.20	-0.23
считать / счесть	－9.35	-6.00	-3.35

ここで算出した「スケールの差」を元に、それぞれの動詞（不定詞）が、統語環境に応じてどのような振る舞いを見せているかの把握が可能になる。

スケールの差が 0 に近ければ、不定詞が用いられる統語環境の影響を受けずに、その動詞の体の選択に際しての振る舞いが一定であるということになる。逆に、数値が大きく変化していれば、それは体の選択が統語環境に何らかの影響を受けていると考えられる。

この「スケールの差」の大小に応じて、動詞を以下のように分類することが可能で

ある：

① 統語環境に応じて振る舞いが変わらない動詞
② 統語環境に応じて振る舞いが変わる動詞
（ア）名詞との語結合でスケールの数値が増えるもの
（＝名詞との語結合の場合には完了体の使用が増える）
（イ）名詞との語結合でスケールの数値が減じるもの
（＝名詞との語結合の場合には不完了体の使用が増える）

以下で、上のそれぞれの主なものを取り上げて考察してみよう。

3.3.3. 統語環境に応じて振る舞いが変わらない動詞

述語との語結合の場合でも、述語派生抽象名詞との語結合の場合でも、体の形態選択に際して、その振る舞いが大きく変化しない動詞がある。具体的には、становиться / стать（述語との結合の場合のスケール 9.52 対 名詞との結合の場合のスケール 10.00）、видеть / увидеть（同-1.43 対 -1.20）、думать / подумать（同-0.26 対 0.00）などである。また、一方のデータ数が少ないため扱いに注意を要するものの、брать / взять（同 5.71 対 6.00）なども同様の傾向を示している。

これらの動詞については、「可能性」の意味を含む語（述語及び述語派生抽象名詞）と語結合を成す場合、結合する相手の品詞や、あるいは意味構造などに関わりなく、選択に際しての傾向が一定であると考えていいだろう。

特に顕著なのは、становиться / стать の例であろう。この動詞については、どちらの統語環境においても、完了体が圧倒的に選択されている：

(5-4) Им надо дать ***возможность*** работать, <u>стать</u> [PFV-INF] богатыми, глядишь, и остальные за ними потянутся. [Ogonek]
彼らには、働き、裕福になる可能性を与えてあげないといけない。そうすれば、他の者は彼らに続くだろう。

(5-4') Им надо дать ***возможность*** работать, <u>становиться</u> [IPFV-INF] богатыми, глядишь, и остальные за ними потянутся.

ここで、例（5-4'）のように、体の形態を入れ替えることも可能であり、その場合この文脈では、当該状況の漸次的な変化、つまり「限界のあるプロセス」が表されることになる。

このように、これらの動詞でも不完了体の形態を用いて、相応のアスペクトの意味を表示することも可能ではあるものの、実際の使用では、完了体が選択されるケースが圧倒的に多数を占めている。この、特定の動詞の見せる偏向的な選択傾向というものは、不定詞が現れる統語環境、あるいは前の章で見た、意味・統語構造とは関わりがなく、一定して観察されるものである。こうした偏向性が生じる要因としては、何

か別のものを想定しなければならず、これについては今後の課題となる。

3.3.4. 統語環境に応じて振る舞いが変わる動詞

次に、統語環境に応じて振る舞いを異にする動詞について見ていくことにしよう。この動詞の場合には、以下の二つのケースがある：

（ア） 名詞との語結合でスケールの数値が増えるもの
（＝名詞との語結合の場合には完了体の使用が増える）
（イ） 名詞との語結合でスケールの数値が減じるもの
（＝名詞との語結合の場合には不完了体の使用が増える）

上記（ア）のケースに当てはまるのは、создавать / создать（述語との結合の場合のスケール-0.4 対 名詞との結合の場合のスケール 4.29）、начинать / начать（同 4.67 対 10.00）、ставить / поставить（同 5.71 対 10.00）などである。最も顕著な例は、начинать / начать（始める）の例だろう：

(5-5) Он был одним из первых обычных людей, сделанных в СССР, который открыл эту ***способность*** преодолеть [PFV-INF] все впитанное, <u>начать</u> [PFV-INF] жить иначе и сумел сообщать эту способность окружающим. [Ogonek]
彼は、ソ連邦において作られた、最初の普通の人のうちの一人だった。彼はあらゆる学び取ったものを乗り越え、違った風に暮らし始めるというこの能力を発見し、その能力を周囲の人に触れ回ることすらできたのだ。

不定詞の体の形態を入れ替えると下例のようになる：

(5-5') Он был одним из первых обычных людей, сделанных в СССР, который открыл эту ***способность*** преодолевать [IPFV-INF] все впитанное, <u>начинать</u> [IPFV-INF] жить иначе и сумел сообщать эту способность окружающим.

不完了体が顕れている後者の例（5-5'）では、当該状況の反復性が積極的に表現される。対して完了体が用いられている例では、そうした反復性を持っている解釈も排除されないものの、そのことは積極的には示すことはない。

これに対して、上記（イ）のケースに当てはまるのは、делать / сделать（述語との結合の場合のスケール 5.21 対 名詞との結合の場合のスケール 0.53）、говорить / сказать（同 6.65 対 -4.12）、понимать / понять（同 6.86 対 1.76）、принимать / принять（同 8.75 対 -5.00）、покупать / купить（同 8.75 対 -5.00）、помогать / помочь（同 10.00 対 4.00）といった動詞である。

ここでは「помогать / помочь」の例を確認しておこう：

(5-6) Не только благодарность греет, распрямляет сама ***возможность*** <u>помочь</u> [PFV-INF] человеку. [Ogonek]

感謝の気持ちのおかげで心が温まるばかりでなく、人のことを助けるという可能性それ自体がまっすぐにしてくれるのである。

ここで不定詞の体の形態を入れ替えると下例のようになる：

(5-6') Не только благодарность греет, распрямляет сама ***возможность*** <u>помогать</u> [IPFV-INF] человеку.

この場合には､体の形態の差異によって文意に差は生じない､競合のケースである。一方で下例のようなケースもある：

(5-7) У меня появилась ***возможность*** <u>помогать</u> [IPFV-INF] им материально. [Ogonek]
私には彼らを物質的に援助する可能性が出てきた。

ここで不定詞の体の形態を入れ替えると、下例のようになる：

(5-7') У меня появилась ***возможность*** <u>помочь</u> [PFV-INF] им материально.

この場合には、不完了体が顕れている例（5-7）の場合には、継続的に援助を行なうことが表され、対して完了体が顕れている（5-7'）の方は、一度きりの援助を表すことになるという。したがって、この文脈では、二次的アスペクトの意味に応じて体の選択が成されているということになる。

4. 第五章のまとめ

本章では、モダリティの意味と体の形態選択の間にある相関関係に関する、補足的な考察を行なった。

第四章までで、可能性のモダリティの意味を含む述語と結合する不定詞の体の形態選択についての観察を行ない、一定の傾向があることが確認された。しかしながら、ここで見られた傾向が、意味カテゴリーという、品詞の枠を超えた、より抽象的なレベルにおいても、同様の傾向が観察されるかどうかについては、先行研究では何も述べられていない。

そこで、本章では試みに、умение, способность, возможность といった、述語から直接派生した抽象名詞（述語派生抽象名詞）との結合における不定詞の体の形態選択の実態を調べた。そして、述語との結合の場合と、述語派生抽象名詞との結合の場合とに見せる、不定詞の体の振る舞いの傾向の違いについて、主にデータの数量的分布の観察に重点を置き比較を行なった。

全体の傾向としては、述語との語結合の場合と同様、不定詞の体の形態選択は完了体が優勢であった。

しかしながら、モダリティの意味に応じて見ていくと、述語との語結合の場合と、

名詞との語結合の場合とで、選択傾向に変化があるものも見られた。

後天的可能性の意味を表す述語 уметь と結合する不定詞は、不完了体の形態で顕れることが大多数であった。ところが、そこから派生した、умение と不定詞が結合する場合には、完了体が選択される割合が増える。

また、先天的可能性の意味を表す述語 способен と結合する不定詞は、完了体と不完了体の形態の割合はほぼ半々であったが、そこから派生した抽象名詞である способность との結合の場合には、不完了体が多数を占めており、大きくその選択傾向が変化している。

動詞ごとに、その統語環境に応じてどのように振る舞いが変化しているかを観察するために、第四章で導入した「スケール」の概念を用いて、その変化に応じて個々の動詞の特徴付けを試みた。それによれば、述語との語結合の場合と、名詞との語結合の場合とで、その体の形態選択の傾向について変化を見せない動詞と見せる動詞とがあることが分かった。

前者に分類されるのは、становиться / стать、видеть / увидеть、думать / подумать などである。

後者は、その変化の仕方に応じて、二種類に分類される。ひとつは、名詞との語結合の場合に完了体の使用が増えるタイプの動詞（создавать / создать、начинать / начать、ставить / поставить）であり、もうひとつは、逆に、名詞との語結合の場合に不完了体の使用が増えるタイプの動詞（делать / сделать、говорить / сказать、понимать / понять、принимать / принять、покупать / купить、помогать / помочь）である。

しかしながら、ここでの調査は、規模、質ともに非常に限られたものとなっており、今後一層の調査が必要となってくる。いくつか今後の課題について指摘しておく必要があるだろう。

まず、サンプル収集に際して、サンプル収集における不均衡があるため、限られたデータにしたがったものとなっているため、より網羅的にデータを収集した上で、改めて対象にあたる必要があるだろう。

また、умение と不定詞の結合の場合に、述語との結合の場合と比べて、完了体が用いられるケースが増加したこと、あるいは逆に способность の場合には不完了体が用いられるケースが大幅に増えたことについては、ここでは十分に検討を加えられていない。このことは、今後の課題として分析を行なう予定である。

このような、述語との結合の場合と名詞との結合の場合との、選択傾向の変化という現象はどのような解釈が可能だろうか。述語が名詞化する途上で起きる最も大きな文法上の変化は、時制のカテゴリーの喪失である。このことによって、当該状況が生起する可能性というものが、具体的なものではなく、時間軸上に位置を置くことのできない、一般的・抽象的なものと変化するという可能性がある。このため、当該状況の具体的なイメージを提示する完了体の使用は、相対的に頻度が下がるという傾向につながっていると考えられる。

今回の調査の結果を踏まえ、これを出発点とした上で、上記の不備な点については補いつつ、今後も引き続き調査を行なっていこうと考えている。

第六章

本稿における結論

0. はじめに

本章では、本研究で行なってきた一連の分析、考察の結果についてまとめる形で結論に代えることにする。

本稿で試みた一連の分析、及び考察の目的は、「可能性」のモダリティの意味と、そこで用いられる不定詞の「体」の形態選択をめぐる問題を再検討することにあった。

ロシア語において、動詞の形態論的カテゴリーである「体」のカテゴリーは、「アスペクト」のカテゴリーを表す主要な手段であるが、従来からモダリティの意味と体の形態選択における一定の相関関係については指摘されてきており、本稿はそうした記述の不備な点を補い、より体系的に分析を行なうことを目的としている。

第一章において、この問題を扱っている Рассудова（1982）及び Forsyth（1970）といった先行研究を再検討した結果、その記述に共通している問題点として、１）実際のテキストにおいてどのように用いられているかに関する十分な実態の記述がされていないか、あるいは不十分である、２）「可能性」の意味についての分類が十分に成されていない、３）不定詞の語彙的意味に関する考察も十分ではなく、体系的な記述となっていない、などがあった。

上記の問題点を踏まえた上で、分析の対象としたのは、уметь, способен, в состоянии, в силах; мочь; можно, нельзя, возможно, невозможно といった、一連の「可能性」の意味を表す主要な述語と、不定詞が成す語結合である。これらの語結合が、実際のテキスト内ではどのように用いられているのかという実態の把握、そしてそこでは不定詞の体が一体どのような振る舞いを見せており、そうした振る舞いは一体どのような要因に依っているのかを明らかにすることが、本稿の主要な目的である。

上記を踏まえた上で、本稿では以下のような課題を設定した（cf. 第一章、第 5 節）：

① 言語使用の実態の記述
② 「可能性」の意味の明確化とその分類
③ モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味の考察

具体的な考察に先んじて、本稿で取り上げる対象が、ロシア語という言語体系内においてどのような位置を占めているかを捉えるために、各種の概念について概観した（cf. 第二章）。

まず最初に、Vendler（1967）の研究などに代表される、いわゆる「状況の性質」の分類について確認した（cf. 第二章、第 1 節）。我々の意識において概念化（そして言語化）される「状況」は、まずその「動態性」、「漸次的変化」、「限界点」の有無によって大きく分類され、「静態」や「プロセス」、「限界のあるプロセス」などに分けられ

る。

次に、一般言語学的な視座に立ち、「アスペクト」のカテゴリーについて確認を行なった（cf. 第二章、第 2.4.節）。Плунгян（2011, 2012）では、「アスペクト」の意味を、「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」に分類している。

「一次的アスペクト（線状的アスペクト）」は、「状況の構造モデル」（cf. 第二章、第 2.4.2.1.節）において示された、それぞれの部分（「状況の断片」）を表すものである。この「一次的アスペクト」では、「状況」をミクロな視点で捉えるものである。

それに対して「二次的アスペクト（数量的アスペクト）」は、一次的アスペクトが持つ本来の機能から変化したものであり、主に「状況」の回数性（数量性）を述べる際に用いるアスペクトである。この「二次的アスペクト」では「状況」をマクロな視点から捉えているものと考えられる。

次に、ロシア語の「体」のカテゴリーについて確認した（cf. 第二章、第 2.5.節）。「体」のカテゴリーの表す意味について、文法形式の表す「個別的意味」と「一般的意味」という両者について、その概念をまず確認した後、ロシア語の体の個別的意味について、Forsyth（1970）と Рассудова（1982）の両研究に基づいて、個別的意味のリストを確認した。そして、ロシア語のアスペクト論における独特の概念である「体のペア」という概念について確認し、動詞のタイプ（ペアを成す動詞、単体動詞、両体動詞など）について確認した（cf. 第二章、第 2.6.節）。そして、先に見た「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」が、ロシア語という言語体系内ではどのように表現されているかについて考察した。体のカテゴリーの個別的意味として挙げられている意味は、その多くが二次的アスペクトの意味であるという特殊性についても指摘した。

また、本節では、もう一方の大きな対象である「モダリティ」のカテゴリーについて、その理論的枠組みを確認した（cf. 第二章、第 3 節）。モダリティの意味には、大きく分けて、「評定のモダリティ」と、「非現実のモダリティ」とがある。前者は、命題的部分に対する話者の態度に関するモダリティで、後者は、当該状況が現実世界に対してどのように位置付けられているかを扱うモダリティである。

「可能性」の意味の分類については、Palmer（2001）における枠組みと、Плунгян（2011）における枠組みとを援用し、まず「評定のモダリティ」（Palmer の枠組みでは「命題的モダリティ」に対応する）と「非現実のモダリティ」（同「事象的モダリティ」）とに大きく分類した。更に、「非現実のモダリティ」は、ТФГ（1990）で提案されている枠組みを援用し、「内的可能性」と「外的可能性」とに大きく分類した。

「内的可能性」は、「当該状況を引き起こす要因となるものが、当該状況の主体そのもの、主体の内的特徴であるもの」であり、更に「後天的可能性」と「先天的可能性」とに下位分類が可能である。

それに対して、「外的可能性」は、当該状況の生起を決定する要因が、主体以外、例えば、恒常的あるいは一時的な外的状況、社会的法則、自然の法則などによって条件付けられているものであり、更に「非義務的可能性」と「義務的可能性」とに下位分類が可能である。

また、ロシア語の不定詞について、その形態論的特徴と統語論的な性質について確

認した（cf. 第二章、第 4 節）。不定詞の統語論的性質は、「接語的用法」と「非接語的用法」との二つに分類することが可能である。前者は、従属する語との結びつきが緊密であるのに対して、後者はそうした緊密さがなく、文脈に依存する程度も大きい。本稿の対象である、述語と語結合を成す不定詞の用法は、前者の接語的用法と位置付けることができる。

以下で、上記①～③のそれぞれの課題に対して、本稿で試みた考察から得られた結論を確認していこう。

1. 「可能性」の意味の明確化と意味・統語構造への分類

上で挙げた、三つの課題のうち、二点目の、「可能性」の意味の明確化と分類という課題を踏まえ、本稿では、モダリティの意味を含む文の、意味・統語構造の分類を行ない、それに従う形で分析を試みた（cf. 第二章、第 3.5.節；同、第 5 節）。

「内的可能性」を表す述語は、уметь, способен, в состоянии, в силах が該当する。「外的可能性」を表す述語は、можно, нельзя, возможно, невозможно が該当する。

最も使用頻度の高い述語である мочь については、その表す意味の多様性から、「評定のモダリティ」あるいは「非現実のモダリティ」（内的可能性、外的可能性）のいずれもそれ自身は積極的には表示しないという特殊な述語として位置付けた。

これらの分類を踏まえた上で、「可能性」に関わるモダリティの意味を含む文を、その意味・統語構造に応じて分類することを試みた（cf. 第二章、第 5 節）。

「可能性」に関わるモダリティの意味を含む文は、１）述語（モダリティの意味）、２）不定詞（あるいは不定詞句；「状況」の提示）、３）否定辞（否定の意味）という、その意味・統語的要素の組み合わせに応じて以下の四つのタイプ（Ⅰ～Ⅳ）に分類が可能である：

表 2-46：論理的に可能な意味・統語構造【再掲】

	タイプ	意味・統語的要素とその結合	要素の結合＋可能性の下位分類
肯定構造	Ⅰ	M – Inf	M: INT – Inf
			M: EXT – Inf
	Ⅱ	[M – (Neg – Inf)]	[M: INT – (Neg – Inf)]
			[M: EXT – (Neg – Inf)]
否定構造	Ⅲ	[(Neg – M) – Inf]	[(Neg – M: INT) – Inf]
			[(Neg – M: EXT) – Inf]
	Ⅳ	[(Neg – M) – (Neg – Inf)]	[(Neg – M: INT) – (Neg – Inf)]
			[(Neg – M: EXT) – (Neg – Inf)]

タイプⅠは、「可能性」のモダリティの意味を表す最も基本的なタイプである。

タイプⅡは、不定詞に否定辞が直接結合しているタイプで、「可能性」のモダリティの変種と位置付けることができる。

タイプⅢは、「不可能性」のモダリティの意味を表すタイプである。

タイプⅣは、いわゆる二重否定により「不可避性」の意味を表すタイプである。

2. 言語使用の実態の記述

本稿で設定した第一の課題である、言語使用の実態の記述の一環として、コーパスから収集したサンプルをデータとして利用し、実際のテキストではどのように使用されているのかを、具体的な数量データと共に示すという点がある。

具体的な分析に先立ち、第三章では、本稿で採用したデータの収集方法について確認した。

まず、ロシア語を対象とするコーパスについて概観した。本研究では、対象とするロシア語の年代的側面と、データの安定性から、ウプサラ・コーパスをその中心的なコーパスとして採用した。

述語と不定詞から成る語結合のデータを得るために、まずそれぞれの述語と同形の各種文字列によって、コーパスからサンプルを収集することから開始した。この時点で得られたサンプルには、最終的なデータとすることができないものが含まれているので、以下に述べる二つのフィルターを設定してサンプルより取捨選択を行なった。

当該文字列が述語として機能しているかどうかなどの基準により、モダリティの述語に関して最初にフィルタリングを行なった上で、次に、動詞のタイプ（ペアを成す動詞、単体動詞、両体動詞など）によりフィルタリングを行ない、最終的にデータとして採用するサンプルを絞り込んだ。これらのフィルタリング作業によって、最終的に分析の対象となるデータは、4565 例（うち中心的な対象となる「ペアを成す動詞」は 3454 例）となった。

こうして得られたデータに基づき、本稿で設定した課題の解決を試みた（cf. 第四章）。

第四章は、大きく分けて二つの内容から成っている。まずひとつは、第三章で得られたデータから、先行研究における記述の妥当性について再検証を行なうという試みである。第三章で得られたデータに基づいて、まず先行研究における記述がどの程度言語使用の実態を把握し、記述されているかについての再検証を行なった。

今回収集したデータから、全体的な傾向として、「可能性」の意味を含む述語と不定詞が結合する場合には、不完了体よりも完了体がより多く選択されていることが明らかになった。

上で、意味・統語構造を四つのタイプに分類した。その意味・統語構造と、述語の別にしたがって、今回のデータを整理すると、論理的には想定しうるものの、実際にはほとんど用いられない意味・統語構造があることが明らかになった。すなわち、タイプⅡ（「可能性」の変種）及びタイプⅣ（「不可避性」）の構造については、そもそも頻度が低いが、とりわけこれらのタイプで、「内的可能性」の述語が用いられるケースは、今回の調査ではデータが極めて少ないか、事実上観察されず、これは我々の言語的直感を裏付けるものとなった。

「非現実のモダリティ」を表す一連の述語（уметь, способен, в состоянии, в силах; можно, нельзя, возможно, невозможно）について、どの意味・統語構造において、結

合する不定詞の体の形態選択がどのように成されているかについて検証した。まず、内的可能性の意味を表す述語（уметь, способен, в состоянии, в силах）のうち、уметь との結合の場合には、意味・統語構造に関わらず、不定詞は一貫して不完了体の形態が選択されることが多い。これは先行研究での指摘をデータの面からも裏付けられたということになる。しかし、同じ内的可能性でも、способен の場合には、異なる傾向を見せる。この述語と結合する不定詞は、уметь との結合の場合と比較すると、完了体が選択される割合が増える。外的可能性の意味を表す述語（можно, нельзя, возможно, невозможно）に関して言えば、最も顕著な特徴を見せるのは невозможно である。この述語と結合する不定詞は、完了体の形態が選択されることが専らである。

上でも述べた通り、述語 мочь は、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の双方を表すことができるため、別途検証した。まず、それぞれの意味・統語構造において表されるモダリティの種類について検証した。タイプⅠは、双方のモダリティの意味を表すことができる。タイプⅡも、双方のモダリティの意味を表すことができるが、その場合、結合する不定詞の体の形態に応じて、実質的にモダリティの意味が変化する。「評定のモダリティ」が表される場合には完了体が選択され、「非現実のモダリティ」が表される場合には不完了体が選択されるという傾向を示す。タイプⅢは、「非現実のモダリティ」を表すのに特化された構造であることが明らかになった。タイプⅣは、双方のモダリティの意味を表すことができる。

また、Forsyth（1970）や Рассудова（1982）による先行研究で指摘されていた、「不可能性」の述語と完了体の結びつきについて、データの分布という観点から検証するため、мочь 以外の述語との語結合の場合と、мочь との語結合の場合とのそれぞれについて、意味・統語構造のタイプⅠとタイプⅢにおけるデータの数量的分布の比較を試みた（cf. 第四章、第 1.5.節）。

мочь 以外の述語の場合には、タイプⅠでは 74.06%、タイプⅢでは 74.71%というそれぞれの割合で、完了体の形態が選択されている。述語 мочь について言えば、このタイプⅢでは完了体の比率が、タイプⅠに比して若干高くなってはいる（83.96%が完了体で用いられている；タイプⅠでは 76.31%）。

このように、今回のデータの数量的な分布を見る限りでは、意味・統語構造のうちタイプⅢの場合に限って完了体の比率が際立って高くなるというわけでは必ずしもない。共起する確率という観点からすると、「不可能性」の意味と不定詞の体の形態の選択の間には、特に強い相関関係があるとは思われない。

タイプⅢの構造の場合に、完了体の比率が高くなる傾向が認められるのは、ある特定の述語に限ってのみである（最も顕著な傾向を示したのは、в состоянии 及び невозможно であった）。それ以外の述語の場合には、タイプⅠの場合とほぼ同様の分布の傾向を示しており、これは単に可能性のモダリティの述語と不定詞が結合する場合に観察される、全般的な傾向に沿ったものとなっている。

また、今回得たデータから、実際の使用実態に沿って、それぞれの述語の特徴付けも行なった（cf. 第四章、第 1.6.2.2.節）。уметь は、どの意味・統語構造のタイプで用いられるかには関わりなく、結合する不定詞は一貫して不完了体が多数を占める。また、способен は、タイプⅢの構造で用いられることは稀で、事実上タイプⅠで用いら

れることがほとんどである。逆に、「в силах」は、タイプⅢでしか用いられない。「в состоянии」及び「в силах」は、タイプⅢで用いられる場合、結合する不定詞は、完了体が選択される。外的可能性を表す述語に関して言えば、顕著な分布の特徴を示しているのは、невозможно であり、この述語と結合する不定詞は完了体が多数を占める。こうした特徴に従って、モダリティの種類、意味・統語構造に応じて、どの述語が用いられるかという分布を表したのが下表である：

表 4-44：ロシア語における可能性のモダリティの文（意味・統語構造と述語）【再掲】

タイプ	モダリティの種類		
	評定のモダリティ	非現実のモダリティ	
		内的可能性	外的可能性
Ⅰ	мочь	мочь, уметь, способен, в состоянии	мочь, можно, возможно
Ⅱ	мочь	—	мочь, можно
Ⅲ	—	мочь, уметь, в состоянии, в силах	мочь, нельзя, невозможно
Ⅳ	мочь	—	мочь, нельзя

ここまでの観察から、「可能性」のモダリティの述語と語結合を成す不定詞の、体のカテゴリーの形態選択に関する振る舞いについては傾向が把握できたことになる。

「可能性」のモダリティの意味を含む述語と結合する不定詞の体の形態選択には、どのような要因を想定すればよいだろうか。今回得られたデータの観察によると、多くの場合完了体の形態は、「非現実のモダリティ」と「評定のモダリティ」の別に関わらず、当該状況が起算時点以降に生起する（しうる）ことを表す。

不完了体の形態の表す内容は、「評定のモダリティ」の場合、当該状況の性質が、「限界のあるプロセス」であるか、あるいは「出来事」の場合かに応じて体の形態が表しうる意味内容も異なってくる。当該状況が「限界のあるプロセス」の場合、起算時点で進行している状況を不完了体の形態によって表すことが可能である。また、不完了体の形態は、当該状況の反復性、あるいはそれを基盤とした習慣性や一般性といった特徴をも表すことができる。それに対して、「出来事」の場合には、不完了体の形態は、進行相の意味を表せないため、多く当該状況の反復性を表すという機能を果たしている。しかし、実際の言語使用では、この「出来事」の性質を持つ動詞の不完了体の形態はほとんど現れてこず、また仮に用いたとしても不自然な文であると感じられてしまうことも多い。

3. モダリティの意味を含む語と結合する不定詞の語彙的意味の考察

前述の通り、第四章は、大きく分けて二つの内容から成っている。まずひとつは、前節で見た通り、第三章で得たデータに基づいて、先行研究における記述の妥当性について再検証を行なうという試みであった。そして二つ目の内容は、データから読み

取れる分析対象の示す傾向に基づき、新たな基準を設定した上で対象を分析するという試みである。

ここまで確認してきた通り、「可能性」の意味を含む語と結合する不定詞の見せる文法的な振る舞いについて、全体的な傾向を把握することができた。その一方で、いくつかの動詞語彙に限っては、どちらか一方の体の形態でのみ用いられるという文法的行動を見せるものもあった。

動詞語彙の見せる、このような形態選択における「偏向性」を、数値とともに把握するために、新たな基準として、本稿では「体の形態的対立のスケール」(以下単に「スケール」とする）という指標を導入した（cf. 第四章、第 2.3.節)。これは、完了体と不完了体でペアを成す動詞において、この「可能性」の述語と語結合を成す場合に、どちらの体が選択される割合が多いかを示す指標である。この数値が 10 に近ければ近いほど、完了体が選択される割合が高く、−10 に近ければ近いほど、不完了体が選択される割合が高いことを示す。

この「スケール」を利用することにより、体のペアを持つ動詞は、その選択傾向に応じて、「第Ⅱ群」及び「第Ⅰ群」の二つのグループに分類することが可能である。

「第Ⅱ群」に属する動詞は、専ら完了体のみが現れる動詞である。помогать / помочь（手伝う、助ける)、оказываться / оказаться（見つかる；〜であることが分かる)、представлять себе / представить себе（想像する、思う)、случаться / случиться（起こる、生じる)、заставлять / заставить（強制する)、относить / отнести（関連づける)、позволять себе / позволить себе（あえて〜する)、показываться / показаться（〜と思われる)、покупать / купить（買う)、восстанавливать / восстановить（復興させる)、заменять / заменить（取り替える)、становиться / стать（〜になる)、объяснять / объяснить（説明する)、соглашаться / согласиться（同意する)、вспоминать / вспомнить（思い出す)、отвечать / ответить（応える)、принимать / принять（受け容れる)、называть / назвать（名付ける)、определять / определить（定める)、изменять / изменить（変える)、приводить / привести（実施する)、обеспечивать / обеспечить（保障する)、представлять / представить（提示する）などが含まれる。

「第Ⅰ群」に属する動詞は、служить / послужить（役に立つ)、считать / счесть（見なす、考える）などが、その特徴を最も顕著に表すものである。これらは、専ら不完了体で用いられる動詞である。

また、それぞれの「群」に属する動詞は、その体の形式の表すアスペクトの意味にも違いがあることが分かった。

「第Ⅱ群」に属する動詞の場合には、体の形式は主に二次的アスペクトを表す機能を果たしていると考えられる。すなわち、完了体は「出来事」として「状況」を提示し、対応する不完了体は、当該状況の反復性を主に示す役割を果たしており、この「群」に属するペアは、主に二次的アスペクトの意味において対立していると考えられる。

それに対して、「第Ⅰ群」に属する動詞の場合には、体の形式は主に一次的アスペクトを表す機能を果たしていると考えられる。すなわち、不完了体の形態は当該状況の持続的性質を表している。対応する完了体は、事実上用いられないか、あるいは用いられても、そこでは体の対立は中和してしまっている（いわゆる「体の競合」の現象)。

4. 述語派生抽象名詞と不定詞の結合のケース

本稿では、ここまで見てきた、述語と不定詞の語結合における相関関係に関する考察に加えて、これらの述語から派生した抽象名詞（述語派生抽象名詞）と不定詞の語結合のケースについて補足的考察を行なった（cf. 第五章）。これは、ここまでで見られた両者（述語と不定詞の体の形態選択）の相関関係（あるいは影響関係）が、語のレベルよりも更に抽象的なレベルである、意味カテゴリーのレベルにおいても共通して観察されるものなのかどうかを検証するための試みである。

умение, способность, возможность といった、述語から派生した抽象名詞との結合における不定詞の体の形態選択の実態を調べた。そして、述語との結合の場合と、述語派生抽象名詞との結合の場合とに見せる、不定詞の体の振る舞いの傾向の違いについて、主にデータの数量的分布の観察に重点を置き比較を行なった。

全体の傾向としては、述語との語結合の場合と同様、不定詞の体の形態選択は完了体が優勢であった。しかし、モダリティの意味に応じて見ていくと、述語との語結合の場合と、名詞との語結合の場合とで、選択傾向に変化があるものも見られた。

後天的可能性の意味を表す述語 уметь と結合する不定詞は、不完了体の形態で顕れることが大多数であったのに対して、умение と不定詞が結合する場合には、完了体が選択される割合が増加する。

また、先天的可能性の意味を表す述語 способен と結合する不定詞は、完了体と不完了体の形態の割合はほぼ半々であったが、способность との結合の場合には、不完了体が大多数を占めており、大きくその選択傾向が変化している。

さらに、ここでデータとして得られた動詞ごとに、その統語環境に応じてどのように振る舞いが変化しているかを観察するために、第四章で導入したスケールの概念を用いて、その変化に応じて個々の動詞の特徴付けを試みた。それによれば、述語との語結合の場合と、名詞との語結合の場合とで、その体の形態選択の傾向について変化しない動詞と何らかの変化を見せる動詞とがあることが分かった。

前者に分類されるのは、становиться / стать、видеть / увидеть、думать / подумать などである。

後者は、その変化の仕方に応じて、二種類に分類される。ひとつは、名詞との語結合の場合に完了体の使用が増えるタイプの動詞（создавать / создать、начинать / начать、ставить / поставить）であり、もうひとつは、逆に、名詞との語結合の場合に不完了体の使用が増えるタイプの動詞（делать / сделать、говорить / сказать、понимать / понять、принимать / принять、покупать / купить、помогать / помочь）である。

第七章

おわりに：今後の課題

0. 本章の概要

前章までで、「可能性」の意味を持つ述語と不定詞の語結合のケースについて、その言語使用の実態の把握を行ない、ペアを持つ動詞の中でも体の形態選択に一定の傾向があることについて確認した。しかしながら、本稿で明らかにできたことは、この研究の対象の極一部に過ぎず、未だ多くの解明されていない点が残されている。

本章では、本稿において着手することができなかった、あるいは考察が不十分であった諸々の問題について確認し、また従来の研究では注意を向けられてこなかったことについても考察し、今後の課題として設定する。

問題の性質は、大きく以下の二点に分類することができるだろう：

① 動詞ごとの振る舞いに関する問題
② その他の「可能性」の意味を表す表現手段とその平行的使用に関する問題

以下では、主にこれらの点を中心に、今後の課題について探っていく。

1. 動詞ごとの振る舞いに関する問題

1.1. 「体の形態的対立のスケール」について

第四章第 2 節で提案した、「体の形態的対立のスケール」という指標そのものが問題を抱えていることは認めざるを得ない。

そもそも、「スケール」は、その不定詞が現れてくる意味・統語構造に関わりなく、どちらか一方の体の形態でのみ現れてくる動詞の文法的な振る舞いを明らかにするという視点に立っているため、意味・統語構造の要素を差し当たり考慮せずに設定された指標であるが、反面それによる弊害もある。

例えば、次節で述べるように、動詞 забывать-забыть の場合（不完了体が用いられるのは、意味・統語構造のタイプⅢの時のみ）のように、どちらか一方の体の形態が、ある特定の意味・統語構造の場合にのみ用いられるという、特徴的な振る舞いが埋もれてしまうことになる。

これらを把握するには、動詞ごとに、どの意味・統語構造で、どのように用いられているかを調査するという、「スケール」を設定した当初の目的とは、逆の視点からの分析が当然必要となってくる。

それを可能にするためには、今回収集したデータでは、その数量自体が絶対的に不足しているということは明らかである。

今回の調査で、体の形態選択に際して、一定程度の偏りを見せる動詞について、あ

る程度の見当を得ることはできたので、以後はこの数値を目安として、ある程度動詞を絞り込んだ上で、様々な視点からの更なる調査を行なうことが可能になるだろう。

1.2. その他の特徴的な動詞

ここではその他に特徴的な振る舞いを見せている動詞をいくつか取り上げてみる。

動詞 забывать-забыть を見てみよう。この動詞は、今回の対象の「可能性」の意味を持つ述語と語結合を成す場合、専ら完了体が選択される：

(7-1) Нам и в голову не приходило, что мы когда-либо ***можем*** забыть [PFV-INF] двери его квартиры. [UC]
我々は自分たちが彼のフラットのドアを忘れることがあろうなどとは思いも寄らなかった。

この動詞が不完了体の形態で用いられるのは、意味・統語構造のタイプⅢ（不可能性）の時のみ、且つ нельзя との語結合の場合が専らである：

(7-2) ***Нельзя*** забывать [IPFV-INF], что марксисты никогда не рассматривали внутрипартийную демократию как самоцель. [UC]
マルクス主義支持者たちは、党内の民主主義を自己目的と見なしたことは一度も無かったということを忘れてはならない。

今回収集したデータでは、この動詞が不完了体で用いられるのは、нельзя との語結合のみであったが、他の可能性の意味を持つ述語との結合で、不完了体が現れる場合（下例）も、ナショナル・コーパスなどでは見つけることができる：

(7-3) —Прости. — Забудем, — очень твердо сказала она. — Давай забудем. Пока еще ***можем*** забывать [IPFV-INF]. [RNC: Сергей Лукьяненко. Ночной дозор (1998)]
ごめんなさい。忘れましょう。彼女はきっぱりとこう言った。忘れましょう。今ならまだ忘れられるから。

しかし、このような例は極めて少数となっている（19 例のみ）。

次に、動詞 учитывать-учесть について見てみよう。この動詞は、「可能性」の意味を持つ述語との語結合の場合、不完了体でしか用いられず、意味・統語構造の影響は受けない（総頻度数が低いため、先のスケールには含めなかった）：

(7-4) ***Нельзя*** не учитывать [IPFV-INF] и общей сложной ситуации в энергетике. [UC]
エネルギー政策における総じて複雑な状況を考慮しないわけにはいかない。

(7-5) И депутатская подготовительная комиссия по здравоохранению, физкультуре

и социальному обеспечению, рассматривая показатели плана и бюджета на 1988 год, ход выполнения плана в этом году, не ***могла*** не учитывать [IPFV-INF] думы и настроения миллионов людей.　[UC]
1988 年度の計画と予算の指標、今年の計画実施の進捗を見て、保健体育及び社会保障に関する議会準備委員会も、議会と数百万人の人々の機運を考慮に入れないわけにはいかなかった。

(7-6) Я ***могла*** бы не учитывать [IPFV-INF] мнения Марьи Ефремовны, но мне надо исправить оценку в четверти.　[UC]
私ならマーリヤ・エフレーモヴナの意見を考慮しないこともできるだろうが、今学期の評価を修正しなければならない。

本文でも見た通り、この場合の不定詞の体の形態は、入れ替えても文意が変わることはない、いわゆる「競合」の現象が見られる：

(4-72) ***Нельзя*** не учитывать [IPFV-INF] того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР.　[UC]【再掲】
トロツキーとトロツキストたちが、レーニンの死後このことが急進的な形で明らかになったように、ソ連邦における社会主義の建設というレーニンの思想の反対者だったということは、考慮しないわけにはいかない。

(4-72')***Нельзя*** не учесть [PFV-INF] того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР.

それにも関わらず、データとして得られるのは、専ら不完了体の形態の不定詞である。
更に言えば、この動詞が不定詞で用いられる場合、完了体の形態である учесть が現れるのは、接続詞「если（もし～なら）」で導かれる条件節の中で用いられるケース（下例）が圧倒的多数を占める：

(7-7) Совсем неплохой результат, если учесть [PFV-INF], что на острове не хватает дизельного топлива.　[UC]
島にはディーゼル燃料が不足していることを考慮すれば、十分に悪くない結果である。

このように、いくつかの動詞は特徴的な振る舞いを見せる。
このような、動詞という単位から、体の形態選択における実態を観察し直すというアプローチは、動詞の振る舞いの記述を進めるという観点から有意義ではあるものの、

スケールの値なども参照しながら、更に何らかの分類の基にして、取り上げる動詞を絞り込んだ上で取り組んでいく必要があるだろう。

1.3. 「体の競合」をめぐる問題

また、いわゆる「体の競合」をめぐる問題についても、別途調査が必要となってくるだろう。

本文においても指摘したように（cf. 第四章、第 1.6.3.2.節）、今回のデータにおいても、文意が変わることなく不定詞の体の形態を入れ替えることのできる、「競合」のケースは多く見られた。とりわけ、述語 уметь や способен の場合には、この「競合」の用例が多かった。

体の個別的意味の分類（cf. 第二章、第 2.5.3.節）に従って言えば、以下の個別的意味の対立が「弱い対立」であるとされる[1]：

① 「具体的事実の意味（完了体）」と「一般的事実の意味（不完了体）」
② 「例示的意味（完了体）」と「制限のない多回性の意味（不完了体）」
③ 「潜在的動作の意味（完了体）」と「潜在的・性質的動作の意味（不完了体）」
④ 「一括化の意味（完了体）」と「制限のない多回性の意味（不完了体）」

これらの対立の場合、しばしば「体の競合」の現象が起きるという（cf. Бондарко 1971: 36-42; Рассудова 1982: 12）。今回の対象は、上の対立で言えば、②あるいは③の場合であると考えられる。今回の対象では、モダリティの意味を表す述語を伴っている場合を取り上げたが、そうでない場合（例えば非過去時制の場合など）と比較して、体の形態の入れ替えの可能性がどのように変わってくるのかなど、検討の余地は多く残されている。

今回の調査では、こうした「競合」のケースについての分析が不十分なものになってしまっている。それでも、「競合」するケースと、そうではないケースとが存在することが、断片的ではあれ、明らかになったということは、解決すべき新たな課題が見つかったということでもある。この「競合」をめぐる現象については、今後更なる調査が求められてくるだろう。

2. 「可能性」を表すその他の表現手段とその平行的使用に関する問題

2.1. 概要：可能性の意味を表すその他の表現手段

第二章でも見た通り（cf. 第二章、第 3.5.1.節）、「可能性」の意味の「場（意味カテゴリー）」を表現する手段としては、以下のものがある（ТФГ 1990: 127；提示の順番には変更を加えてある）：

[1] それに対して、「強い対立」とされるのは以下の対立である：

① 「具体的事実の意味（完了体）」と「具体的過程の意味（不完了体）」
② 「具体的事実の意味（完了体）」と「制限のない多回性の意味（不完了体）」

① 形態的手段：直説法における体・時制形態、仮定法における体の形態
② 語彙的手段：モダリティの意味を持つ動詞及び述語
③ 統語的手段：否定を伴った不定詞構造

それぞれ以下のような文が対応する（斜字体で示した語が該当する表現手段）：

(7-8) Ребенок уже *ходит*.
その子はもう歩けます。
(7-9) Он *умеет* плавать.
彼は泳げます。
(7-10) Тебе этого не *понять*!
あんたなんかにそれは理解できないわ！

今回本稿で対象として扱ったのは、上記のうち②の「語彙的手段」による表現手段の場合に用いられる述語、あるいはそこから派生した名詞と語結合を形成する不定詞の体の形式選択の問題についてみてきた。

ロシア語の文法体系内では、この「語彙的手段」による表現手段に加えて、動詞の体・時制形態による表現手段（同①）、そして不定法文による表現（同③）のそれぞれが、それぞれぶつかり合うことなく、共存しているということになる。それぞれの表現手段の、体系内での「棲み分け」がどのようになっているのかということは、今後の大きな課題となってくるだろう。

一方、上記①の体・時制形態による表現手段について、一体どのような意味上の条件が揃っていれば、「可能性」を表す意味となりうるのかという点については、分析が必要だろう。これは、伝統的なアスペクト論においては、特定の体の個別的意味、例えば、完了体の「潜在的動作の意味」（cf. 第二章、第 2.5.3.2.節）、不完了体の「潜在的・性質的動作の意味」（cf. 第二章、第 2.5.3.3.節）がどのような文脈において実現するかという問題として提起されるものである。

また、③の、いわゆる「不定法文」の場合にも、やはりこの構文で用いられる動詞の語彙的意味が問題となってくるだろう。

そしてこの問題は、次節で扱う、これらの文の「平行性」の問題へとつながってくる。

2.2. 様々な表現手段の平行的使用に関する問題

前節の問題と密接に関わってくる問題として、これらの複数の表現手段の間にある平行性（あるいは類義性）についての問題も、今後取り組むべき課題のうちの一つである。

例えば、以下の四種類の文を比較してみよう：

① 動詞の非過去時制
Ты этого не поймешь! / Ты не избежишь объяснения!

② 語彙的手段（１）
Ты этого не можешь понять! / Ты не можешь избежать объяснения!

③ 語彙的手段（２）
*Тебе этого нельзя понять! / ?Тебе нельзя избежать объяснения!

④ 不定法文
Тебе этого не понять! / Тебе не избежать объяснения!

これらは、前節で見た、可能性の意味を表す表現手段とそれぞれ対応しており、不定詞によって表される状況について、生起の「不可能性」を表している。

あるひとつの表現から、他の表現形式を派生させると、場合によっては上記③のように、非文と見なされてしまうものが出て来てしまう[2]。したがって、これらは「可能性」という共通の意味カテゴリーを持っていても、それぞれの守備範囲が異なっているということが伺える。

このような、意味の上での「平行性」を扱った例は、他にも見つけることができる。例えば、無人称文と人称文の場合を考えてみよう。Шелякин（1993）によれば、次のようなモダリティの意味を持つ述語は、人称文と無人称文が平行的に使用されるという（cf. Шелякин 1993: 252-253）：

表 7-1：平行的に使用される述語

モダリティの意味	文の種類	述語	例
可能性／不可能性（возможность／невозможность）	人称文	мочь	Я могу идти?
	無人称文	можно	Мне можно идти?
願望／非願望（желательность／нежелательность）	人称文	хотеть	Я хочу спать.
	無人称文	хотеться	Мне хочется спать.
義務（обязанность）	人称文	должен	Наша команда должна поехать на соревнования.
	無人称文	необходимо, следует, надо, нужно	Нашей команде необходимо поехать на соревнования.
禁止（запрещение）	人称文	не должен	Ты не должен рисковать своим здоровьем.
	無人称文	не следует	Тебе не следует рисковать своим здоровьем.

[2] ここで、③の述語 нельзя を用いた文が動詞 понять と相容れない理由は、нельзя という述語が、外的要因による当該状況生起の不可能性を表すものであるのに対して、понять という動詞によって表される状況は、主体の内的要因によって生起するものだからである。

結果の達成（достижение результата）	人称文	суметь	Этот спортсмен сумел добиться победы.
	無人称文	удасться	Этому спортсмену удалось добиться победы.

しかし、本節冒頭の四例の比較から、少なくとも「不可能性」の場合には、全ての場合において平行的に用いられる訳ではないということは、既に明らかである。したがって、これらは果たして平行的に用いられるか、あるいは、どの程度平行的に用いられると言ってよいのか、という点から新たに問題を設定し直した上で考察する必要があるだろう。

管見によれば、これらの文の間には以下のような差異があると考えられる：

イ） 意味論的観点からの差異
ロ） 語用論的観点からの差異

まず、イ）の意味論的観点からの差異については、上の例でも見た通りである。述語同士の間、あるいはそれぞれの表現形式の間には、意味的な差異があるので、それらをまず明らかにする必要があろう。本稿でも見た通り、述語の間においても、あるものは外的可能性を表し、別のものは内的可能性を表すという違いがある。また、それに応じて、不定詞の語彙的意味との結びつきの可能性も考慮する必要が生じてくる。

管見によれば、このような、述語を用いた語彙的手段、動詞の非過去形を用いる手段、そして不定法文との間にある意味的な差異というものについて、従来比較や検討を試みた研究というものは存在していない。

一方で、人称文と無人称文の用法の違いを、語用論的観点から特徴付けることもどうやら可能である（上記ロ）。例えば、上表冒頭の「可能性／不可能性」の場合には、人称文を用いる方が、より丁寧だという証言もある。しかし、「願望／非願望」の場合には、無人称文を用いる方が好ましいと説明がされることがある。このような、表現手段とその語用論的効果の間にある、言ってみれば「一貫性の無さ」のようなものは、どのように説明すればいいだろうか？

あるいは、例えば下のような例を見てみよう。統語論的分類としては、例（7-11）は人称文、例（7-12）は無人称文（不定法文）ということになる：

(7-11) Ствол двумя руками не охватишь.
(7-12) Ствол—двумя руками не охватить.

ある母語話者[3]によれば、この両者は類義的であるという。これらは、既に「可能性」の有無について述べているのではなく、その表現を通じて、ここで話題になっている対象の、規模や大きさなどを伝える文であるという。したがって、これらの文に対して「Почему?（なんで？）」というような問いを発するのは滑稽なことになってしまう。

[3] あるロシア語研究所研究員による証言の要約（2012 年 3 月 13 日付私信）。

これらを踏まえた上で、日本語の訳を考えてみると、「その枝は両手じゃつかめない（くらい太い）んだから！」といったところが適当な訳になるだろう。

この二文は共に、構文それ自体が「超時間性」（cf. 本稿第二章、第 3.4.2.節、注 78）を表すという特徴を有しているため、このような意味の変化が生じるということであると考えられる。

あるいは次のような文を例にとってみよう：

(7-13) До метро не дойдешь за 10 минут.
(7-14) Ты не дойдешь до метро за 10 минут.
(7-15) Ты не можешь дойти до метро за 10 минут.
(7-16) Тебе нельзя дойти до метро за 10 минут.
(7-17) До метро не дойти за 10 минут.

例（7-13）と例（7-14）は、人称代名詞の有無だけが異なっている。人称代名詞の無い例（7-13）の方は、先の例（7-11）と同様に、超時間的な状況を表すので、「10 分では着けない（くらい遠い）」ということを表す。そのため、不定法文である例（7-17）と類義的ということになる。

一方、例（7-14）の方は、人称代名詞を伴っているため、状況は具体的な状況ということになる。したがってこの例は、例（7-16）と類義的ということになる。

これらの例の場合には、それぞれの文に「長さや距離の基準点となる表現」、そこから更に転じて「時間的長さの基準点となる表現」が含まれていることも、重要な要素となるだろう。

こうした、文の意味の最終的な解釈に影響を持つ、文脈上の要因をひとつひとつ洗い出していく作業が今後求められてくるだろう。

筆者は既にこれらの問題点に関して断片的に調査を開始しており、ここで示したようないくつかの有益な情報を得ることができている。今後も引き続き、この各表現手段の平行的使用という問題には取り組んでいきたいと考えている。

補足資料：体の形態的対立のスケール（詳細）

本論第四章第 2 節で見た、体の形態的対立のスケールの、それぞれの動詞の分布をより詳細に示したものを下表の形にした。主な留意事項を下に記す。

イ）下表中①の欄は、スケールの数値（−10〜10）を示してある。
ロ）同②の欄は、意味・統語構造のタイプ（Ⅰ〜Ⅳ）を示してある。
ハ）述語内訳の欄には、それぞれの形態がどのような述語と結合しているかを示してある。括弧内に頻度数を示した。
ニ）不完了体と完了体の双方が分布している場合には、最初に不完了体と結合する述語を提示し、セミコロンの後に完了体と結合する述語を提示してある。

表：体の形態的スケール（詳細）

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
10	помогать / помочь（手伝う、助ける）	Ⅰ	0	15	15	в состоянии (1), можно (3), мочь (11)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	16	16	в состоянии (1), мочь (4), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	21	21	-
10	оказываться / оказаться（見つかる、〜であると分かる）	Ⅰ	0	17	17	мочь (17)
		Ⅱ	0	1	1	мочь (1)
		Ⅲ	0	0	0	-
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	18	18	-
10	представлять себе / представить себе（想像する）	Ⅰ	0	10	10	можно (7), мочь (2), способен (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	7	7	мочь (7)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	17	17	-
10	случаться / случиться（起こる、生じる）	Ⅰ	0	14	14	мочь (14)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	2	2	мочь (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	16	16	-
10	позволять себе / позволить себе（あえて〜する）	Ⅰ	0	8	8	мочь (8)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	6	6	мочь (5), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	14	14	-

補足資料：体の形態的スケール（詳細）

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
10	заставлять /	Ⅰ	0	9	9	можно (5), мочь (3), уметь (1)
	заставить	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	мочь (1), невозможно (1), нельзя (2)
	（強制する）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	13	13	-
10	казаться /	Ⅰ	0	13	13	мочь (13)
	показаться	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	0	0	-
	（～と思われる）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	13	13	-
10	относить /	Ⅰ	0	10	10	можно (10)
	отнести	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	3	3	нельзя (3)
	（関連づける）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	13	13	-
10	покупать /	Ⅰ	0	8	8	можно (7), мочь (1)
	купить	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	невозможно (2), нельзя (2)
	（買う）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	12	12	-
10	восстанавливать /	Ⅰ	0	5	5	возможно (1), можно (1), мочь (3)
	восстановить	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	6	6	мочь (2), невозможно (2), нельзя (1)
	（復興させる）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	11	11	-
10	заменять /	Ⅰ	0	5	5	можно (1), мочь (4)
	заменить	Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	5	5	мочь (4), нельзя (1)
	（取り替える）	Ⅳ	0	0	0	-
		総数	0	10	10	-
9.52	становиться /	Ⅰ	1	35	36	мочь (1); можно (2), мочь (33)
	стать	Ⅱ	0	0	0	-
	（～になる）	Ⅲ	0	6	6	мочь (4), невозможно (1), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	1	41	42	-

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
9.29	объяснять / объяснить （説明する）	Ⅰ	1	14	15	уметь (1); можно (12), мочь (1), уметь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	13	13	мочь (6), невозможно (2), нельзя (4), уметь (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	1	27	28	-
9.05	соглашаться / согласиться （同意する）	Ⅰ	0	5	5	можно (2), мочь (3)
		Ⅱ	1	1	2	мочь (1); можно (1)
		Ⅲ	0	7	7	можно (1), мочь (6)
		Ⅳ	0	6	6	можно (1), мочь (1), нельзя (4)
		総数	1	19	20	-
9	вспоминать / вспомнить （思い出す）	Ⅰ	1	3	4	мочь (1); можно (2), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	13	13	в состоянии (1), мочь (10), невозможно (1), нельзя (1)
		Ⅳ	0	4	4	мочь (3), нельзя (1)
		総数	1	20	21	-
8.75	отвечать / ответить （答える）	Ⅰ	1	4	5	способен (1); мочь (4)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	11	11	в состоянии (1), можно (1), мочь (9)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	1	15	16	-
8.75	принимать / принять （受け容れる）	Ⅰ	1	11	12	мочь (1); можно (8), мочь (2), способен (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	мочь (2), нельзя (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	1	15	16	-
8.57	называть / назвать （名付ける）	Ⅰ	3	34	37	можно (2), мочь (1); можно (33), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	5	5	мочь (2), нельзя (3)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	39	42	-

補足資料：体の形態的スケール（詳細）

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
8.33	определять / определить （定める）	Ⅰ	1	17	18	можно (1); можно (12), мочь (5)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	1	5	6	уметь (1), невозможно (4), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	2	22	24	-
8.33	изменять / изменить （変える）	Ⅰ	1	7	8	можно (1); можно (2), мочь (5)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	мочь (1), невозможно (1), нельзя (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	1	11	12	-
8.29	приводить / привести （実施する）	Ⅰ	3	30	33	можно (1), можно (2); можно (10), мочь (20)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	1	1	мочь (1)
		Ⅳ	0	1	2	мочь (1)
		総数	3	32	35	-
7.89	обеспечивать / обеспечить （保障する）	Ⅰ	2	13	15	можно (1), мочь (1); можно (4), мочь (9)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	в состоянии (2), мочь (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	2	17	19	-
7.84	представлять / представить （提示する）	Ⅰ	4	19	23	можно (1), мочь (2), способен (1); можно (12), мочь (6), способен (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	13	13	в силах (1), мочь (5), невозможно (4), нельзя (3)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	4	33	37	-
7.42	решать / решить （決める）	Ⅰ	1	16	17	уметь (1); в состоянии (1), можно (10), мочь (5)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	3	11	14	в состоянии (1), мочь (1), нельзя (1); в силах (1), мочь (3), невозможно (5), нельзя (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	4	27	31	-

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
7.14	вызывать / вызвать （ひきおこす）	Ⅰ	0	13	13	мочь (12), способен (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	2	2	мочь (2)
		Ⅳ	3	3	6	мочь (3); мочь (3)
		総数	3	18	21	-
7	давать / дать （与える）	Ⅰ	6	26	32	можно (3), мочь (2), уметь (1); можно (3), мочь (18), способен (5)
		Ⅱ	0	1	1	мочь (1)
		Ⅲ	0	7	7	мочь (5), нельзя (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	6	34	40	-
7.06	находить / найти （見つける）	Ⅰ	5	22	0	можно (1), уметь (4); возможно (1), можно (13), мочь (8)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	7	0	мочь (6), невозможно (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	5	29	34	-
6.88	понимать / понять （理解する）	Ⅰ	4	24	0	можно (3), мочь (1); можно (21), мочь (2), споосбен (1)
		Ⅱ	1	0	0	мочь (1)
		Ⅲ	5	30	0	мочь (4), нельзя (1); мочь (22), невозможно (8)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	10	54	64	-
6.67	обходиться / обойтись （～なしですます）	Ⅰ	3	7	10	можно (2), мочь (1); можно (4), мочь (3)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	8	8	мочь (6), нельзя (1), невозможно (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	15	18	-
6.3	говорить / сказать （言う、話す）	Ⅰ	24	126	150	можно (22), возможно (1), мочь (1); возможно (1), можно (97), мочь (28)
		Ⅱ	1	1	2	мочь (1); мочь (1)
		Ⅲ	10	18	28	в силах (1), мочь (2), уметь (4), нельзя (3); в состоянии (1), мочь (9), нельзя (8)
		Ⅳ	0	9	9	мочь (2), нельзя (7)
		総数	35	154	189	-

補足資料：体の形態的スケール（詳細）

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
6.25	возникать / возникнуть （生じる）	Ⅰ	3	11	14	мочь (2), уметь (1); мочь (11)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	2	2	мочь (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	13	16	-
6.25	замечать / заметить （見つける）	Ⅰ	1	3	4	можно (1); можно (2), мочь (1)
		Ⅱ	2	0	2	можно (1), мочь (1)
		Ⅲ	0	3	3	мочь (2), невозможно (1)
		Ⅳ	0	7	7	мочь (3), невозможно (1), нельзя (3)
		総数	3	13	16	-
6	допускать / допустить （許容する）	Ⅰ	0	3	3	можно (2), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	3	9	12	нельзя (3); мочь (5), нельзя (4)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	12	15	-
5.71	брать / взять （取る）	Ⅰ	2	8	10	можно (2); можно (3), мочь (5)
		Ⅱ	0	1	1	мочь (1)
		Ⅲ	1	2	3	нельзя (1); нельзя (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	11	14	-
5.71	ставить / поставить （置く）	Ⅰ	0	7	7	можно (6), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	3	4	7	мочь (2), нельзя (1); мочь (1), нельзя (3)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	3	11	14	-
5.43	делать / сделать （する、行なう）	Ⅰ	11	40	51	можно (4), мочь (4), способен (1), уметь (2); возможно (2), можно (26), мочь (12)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	5	14	19	мочь (2), нельзя (2), уметь (1); мочь (7), невозможно (2), нельзя (5)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	16	54	70	-

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
4.67	получать / получить （受け取る）	Ⅰ	12	27	39	можно (8), мочь (4); можно (21), мочь (5), способен (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	6	6	мочь (4), невозможно (1), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	12	33	45	-
4.67	начинать / начать （始める）	Ⅰ	4	7	11	можно (4); можно (6), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	0	4	4	мочь (2), невозможно (1), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	4	11	15	-
3.6	забывать / забыть （忘れる）	Ⅰ	0	6	6	можно (3), мочь (3)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	8	11	19	нельзя (8); мочь (10), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	8	17	25	-
1.43	предполагать / предположить （思う）	Ⅰ	6	10	16	можно (5), мочь (1); можно (8), мочь (2)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	3	2	5	мочь (3); мочь (2)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	9	12	21	-
－0.26	думать / подумать （考える、思う）	Ⅰ	7	18	25	можно (4), мочь (3); можно (14), мочь (4)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	11	1	12	мочь (8), нельзя (1), способен (1), уметь (1); невозможно (1)
		Ⅳ	2	0	2	мочь (1), нельзя (1)
		総数	20	19	39	-
－0.4	создавать / создать （創り出す）	Ⅰ	9	8	17	можно (5), мочь (3), способен (1); возможно (2), можно (5), мочь (1)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	4	4	8	мочь (1), нельзя (3); в состоянии (1), мочь (1), нельзя (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	13	12	25	-

補足資料：体の形態的スケール（詳細）

①	動詞	②	不完了体	完了体	総数	述語内訳
－1.43	видеть / увидеть （見て取る）	Ⅰ	9	14	23	в состоянии (1), можно (3), мочь (5); можно (12), мочь (2)
		Ⅱ	1	0	1	мочь (1)
		Ⅲ	5	1	6	мочь (3), невозможно (1), нельзя (1); мочь (1)
		Ⅳ	5	0	5	нельзя (5)
		総数	20	15	35	-
－7.78	служить / послужить （役に立つ）	Ⅰ	23	3	26	мочь (3); мочь (23)
		Ⅱ	0	0	0	-
		Ⅲ	1	0	1	мочь (1)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	24	3	27	-
－9.35	считать / счесть （見なす）	Ⅰ	22	1	23	можно (18), мочь (3), уметь (1); мочь (1)
		Ⅱ	1	0	1	можно (1)
		Ⅲ	7	0	7	можно (1), нельзя (6)
		Ⅳ	0	0	0	-
		総数	30	1	31	-

参考文献

0. はじめに

同一の著者による複数の著作については、出版年の古い順から挙げている。

また、同一の著者が、同一年に複数の著作を発表している場合には、出版順に応じて、年号の後に「a」、「b」、「c」といったアルファベットを付して、順番を示している。

なお、それぞれの書誌情報の末尾の隅付き括弧（【　】）内に、適宜コメントを付している場合がある。

ウェブ上のリソースについては、本稿執筆時時点（2013 年 8 月）で確認しているが、リンク先のウェブページが既に無くなっているなどの場合には、適宜コメントとしてその旨言及している。

1. 欧文文献 1（ロシア語）

Авилова 1976 ― *Авилова Н.С.* Вид глагола и семантика глагольного слова. М., 1976.

Апресян 2004 ― *Апресян Ю.Д.* Лингвистическая терминология словаря. // Новый объяснительный словарь синонимов русского языка. Изд. 2-е, испр., доп. М., 2004.

Апресян 2005 ― *Апресян Ю.Д.* О московской семантической школе. // Вопросы языкознания. 2005. № 1.

Апресян 2009 ― *Апресян Ю.Д.* Исследования по семантике и лексикографии. Т. 1. Парадигматика. М., 2009.

Апресян и др. 2006 ― *Апресян Ю.Д.* (Отв. ред.) Языковая картина мира и системная лексикография. М., 2006.

Бондарко, Буланин 1967 ― *Бондарко А.В., Буланин Л.Л.* Русский глагол. Л., 1967.

Бондарко 1971а ― *Бондарко А.В.* Вид и время русского глагола (значение и употребление). Л., 1971.

Бондарко 1971б ― *Бондарко А.В.* Грамматическая категория и контекст. Л., 1971.

Бондарко 1978 ― *Бондарко А.В.* Грамматическое значение и смысл. Л., 1978.

Бондарко 1976 ― *Бондарко А.В.* Теория морфологических категорий. М., 1976.

Бондарко 1983 ― *Бондарко А.В.* Принципы функциональной грамматики и вопросы аспектологии. Л., 1983.

Бондарко 1984 ― *Бондарко А.В.* Функциональная грамматика. Л., 1984.

Бондарко 1985 ― *Бондарко А.В.* К теории функциональной грамматики // Проблемы функциональной грамматики. М., 1985.

Бондарко 1990 ― *Бондарко А.В.* Вступительная замечания // Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. Л., 1990, 59-67.

Бондарко 1999 ― *Бондарко А.В.* Основы функциональной грамматики. Языковая интерпретация времени. СПб., 1999.

Бондарко 2002а ― *Бондарко А.В.* Глагольный вид в системе грамматических категорий (на материале русского языка) // Основные проблемы русской

аспектологии. СПб., 2002.

Бондарко 2002б — *Бондарко А.В.* Теория значения в системе фукциональной грамматики: На материале русского языка. М., 2002.

Бондарко 2004 — *Бондарко А.В.* Теоретические проблемы русской грамматики. СПб., 2004.

Бондарко 2005 — *Бондарко А.В.* Теория морфологических категорий и аспектологические исследования. М., 2005. 【内容的には Бондарко 1971a 及び Бондарко 1976 を再録したものが中心】

Брицын 1990 — *Брицын В.М.* Синтаксис и семантика инфинитива в современном русском языке. М., 1990.

Булыгина 1980 — *Булыгина Т.В.* Грамматические и семантические категории и их связи // Аспекты семантических исследований. М., 1980. 【Булыгина и Шмелев 1997 に再録】

Булыгина 1982 — *Булыгина Т.В.* К построению типологии предикатов в русском языке // Семантические типы предикатов. М., 1982. 【Булыгина и Шмелев 1997 に再録】

Булыгина и Шмелев 1997 — *Булыгина Т.В., Шмелев А.Д.* Языковая концептуализация мира (на материале русской грамматики). М., 1997.

Виноградов 1972 — *Виноградов В.В.* Русский язык. Учение о русском слове. 2-е изд. 1972.

Виноградов 1950 —*Виноградов В.В.* О категории модальности и модальных словах в русском языке // Труды Ин-та русского языка АН СССР. М.; Л., 1950.

Виноградов 1975 —*Виноградов В.В.* Избранные труды: исследования по русской грамматике. М., 1975.

Виноградов 2003 — *Виноградов В.В.* Русский язык. Учение о русском слове. 4-е изд. 2003.

Вопросы 1962 — Вопросы глагольного вида. М., 1962.

Воронцова и др. 1996 — *Воронцова В.Л.* и др. Русский язык конца XX столетия. 1985-1995. М., 1996.

Гловинская 1982 — *Гловинская М.Я.* Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. М., 1982.

Гловинская 1986 — *Гловинская М.Я.* Теоретические проблемы видо-временной семантики русского глагола. Дисс. ... докт. филол. наук. М., 1986. 【Гловинская 2001 に再録】

Гловинская 1992 — *Гловинская М.Я.* Русские речевые акты и вид глагола // Логический анализ языка. Модели действия. М., 1992. 【Гловинская 2001 に再録】

Гловинская 1998 — *Гловинская М.Я.* Инвариант совершенного вида в русском языке // Типология вида: проблемы, поиск, решение. М., 1998.

Гловинская 2001 — *Гловинская М.Я.* Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола. М., 2001.

Гловинская 2002 — *Гловинская М.Я.* Периферийные видовые пары и их отличие от способов действия // Основные проблемы русской аспектологии. СПб., 2002.

Грамматика 1960 — Грамматика русского языка. Ред. коллегия: В.В. Виноградов, Е.С. Истрина. 2-е изд. М., 1960.

Грамматика 1970 — Грамматика современного русского литературного языка. М., 1970.

Грамматика 1980 — Русская грамматика. Гл. ред. Н.Ю. Шведова. М., 1980.

Грамматика 1989 — Краткая русская грамматика. Под редакцией Н.Ю. Шведовой и В.В. Лопатина. М., 1989.

Грамматика 2001 — Краткая русская грамматика. Под редакцией Н.Ю. Шведовой и В.В. Лопатина. Изд. 2-е, стереотипное. М., 2001.【Грамматика 1989 のリプリント版】

Грамматика 2005 — Русская грамматика. Репринтное издание. М., 2005. 【Грамматика 1980 のリプリント版】

Гуревич 2008 — *Гуревич В.В.* Глагольный вид в русском языке: значение и употребление. Учебное пособие. М., 2008.

Зализняк и Шмелев 2000 — *Зализняк Анна А., Шмелев А.Д.* Введение в русскую аспектологию. М., 2000.

Золотова 1973 — *Золотова Г.А.* Очерки функционального синтаксиса русского языка. М., 1973.

Золотова 1982 — *Золотова Г.А.* Коммуникативные аспекты русского синтаксиса. М., 1982.

Золотова и др. 1997 — *Золотова Г.А., Онипенко Н.К., Сидорова М.Ю.* Коммуникативная грамматика русского языка. М., 1997.

Золотова и др. 2004 — *Золотова Г.А., Онипенко Н.К., Сидорова М.Ю.* Коммуникативная грамматика русского языка. М., 2004.

Исаченко 1960 — *Исаченко А.В.* Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. Ч. 2. Братислава, 1960.

Исаченко 1963 — *Исаченко А.В.* Бинарность, привативные оппозиции и грамматические значения // ВЯ. 1963. № 2. 39-56.

Исаченко 1965 — *Исаченко А.В.* Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. Ч. 1. Изд. 2-е. Братислава, 1965.

Исаченко 2003 — *Исаченко А.В.* Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология I-II. Изд. 2-е. М., 2003.【Исаченко 1960, 1965 の復刻版から成っている】

Караванов 2003 — *Караванов А.А.* Виды русского глагола: значение и употребление. Практическое пособие для иностранцев, изучающих русский язык. М., 2003.

Маслов 1948 — *Маслов Ю.С.* Вид и лексическое значение глагола в современном русском языке // Изв. АН СССР. Сер лит. и яз. 1948. Т. VII. 303-316. 【Маслов 1984 に再録；筆者が参照したのは再録されたもの】

Маслов 1965 — *Маслов Ю.С.* Система основных понятий и терминов славянской

аспектологии // Вопросы общего языкознания, Л., 1965. 【Маслов 2004 に再録】

Маслов 1984 — *Маслов Ю.С.* Очерки по русской аспектологии. М., 1984.【Маслов 2004 に再録】

Маслов 2004 — *Маслов Ю.С.* Избранные труды. Аспектология. Общее языкознание. М., 2004.

Мельчук 1998 — *Мельчук И.Г.* Курс общей морфологии. Т. II (Часть 2-я: Морфологические значения). М.: Языки русской культуры; Вена: Wiener Slavistischer Almanach, 1998.

Милославский 1981 — *Милославский И.Г.* Морфологические категории современного русского языка. М., 1981.

Милославский 2011 — *Милославский И.Г.* Морфологические категории современного русского языка. Изд. 2-е. М., 2011.【Милославский 1981 の第二版だが、本文を見る限り大きな変更点は見当たらない；しかし書籍本体にはステレオタイプ版との明記もされていない】

Мучник 1971 — *Мучник И.П.* Грамматические категории глагола и имени в современном русском языке. М., 1971.

ОПРА 2002 — Основные проблемы русской аспектологии. СПб., 2002.

Одинцова 2011 — *Одинцова И.В.* Звуки. Ритмика. Интонация. Учебное пособие. 4-е изд. М., 2011.

Падучева 1986 — *Падучева Е.В.* Семантика вида и точка отсчета. // Известия АН СССР. Серия лит-ры и языка, т. 45, № 5. 413-424.【Падучева 1996 に再録】

Падучева 1990 — *Падучева Е.В.* Вид и лексическое значение глагола (от лексического значения глагола к его аспектуальной характеристике). // Russian linguistics 14. 1-18.

Падучева 1996 — *Падучева Е.В.* Семантические исследования. М., 1996.

Падучева 1998 — *Падучева Е.В.* Опыт систематизации понятий и терминов русской аспектологии. // Russian linguistics 22. 35-58.

Петрухина 2000 — *Петрухина Е.В.* Аспектуальные категории глагола в русском языке в сопоставлении с чешским, словацким, польским и болгарским языками. М., 2000.

Петрухина 2009 — *Петрухина Е.В.* Русский глагол: категории вида и времени (в контексте современных лингвистических исследований): учебное пособие. М., 2009.

Пешковский 1938 — *Пешковский А.М.* Русский синтаксис в научном освещении. М., 1938.

Пешковский 2001 — *Пешковский А.М.* Русский синтаксис в научном освещении. Изд. 8-е. М., 2001.【Пешковский（1938）の再版、Клобуков による序文が付されている】

Плунгян 2010 — *Плунгян В.А.* Общая морфология: введение в проблематику. Изд. 3-е, испр. и доп. М., 2010.

Плунгян 2011 — *Плунгян В.А.* Введение в грамматическую семантику: грамматические значения и грамматические системы языков мира. Учебное пособие. М., 2011.

Плунгян 2012 — *Плунгян В.А.* Общая морфология: введение в проблематику. Изд. 4-е, М., 2012.

Рассудова 1968 — *Рассудова О.П.* Употребление видов глагола в русском языке. М., 1968.

Рассудова 1982 — *Рассудова О.П.* Употребление видов глагола в современном русском языке. Изд. 2-е, испр. и доп. М., 1982.

Результаты и перспективы 2005 — Национальный корпус русского языка: 2003-2005. Результаты и перспективы. М., 2005.

Русский язык-Теория — Современный русский язык. Теория. Анализ языковых единиц. Под редакцией Е.И. Дибровой. М., 2006.

Скворцова 2010 — *Скворцова Г.Л.* Употребление видов глагола в русском языке. Учебное пособие для иностранцев, изучающих русский язык. 3-е изд. М., 2003.

Соколовская 2003 — *Соколовская К.А.* 300 глаголов совершенного и несовершенного вида в речевых ситуациях. Пособие для начинающих. 4-е изд., стереотипное. М., 2003.

Соколовская 2008 — *Соколовская К.А.* Виды глагола в русской речи. Пособие по русскому языку. М., 2008.

СТП 1982 — Семантические типы предикатов. М., 1982.

Татевосов 2010 — *Татевосов С.Г.* Акциональность в лексике и грамматике. Автореферат Диссертации на соискание ученой степени доктора филологических наук. М., 2010. 【電子版を参照】

Тэк-Гю Хонг 2003 — *Тэк-Гю Хонг* Русский глагольный вид сквозь призму теории речевых актов. М., 2003.

Типология вида 1998 — Типология вида: проблемы, поиск, решение. М., 1998.

Труды 1997 — Труды аспектологического семинара филологического факультета МГУ им. М.В. Ломоносова. Том 1-3. М., 1997.

Труды 2004 — Труды международной конференции "Корпусная лингвистика — 2004": 11-14 октября 2004 г. СПб., 2004.

ТФГ 1987 — Теория функциональной грамматики. Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис. Л., 1987.

ТФГ 1990 — Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. Л., 1990.

ТФГ 2001 — Теория функциональной грамматики. Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис. Изд. 2-е, стереотипное. М., 2001.

Храковский 1987 — *Храковский В.С.* Кратность. // Теория функциональной грамматики. Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис. Л., 1987, 124-152.

Храковский 2002 — *Храковский В.С.* Семантика вида (опыт исчисления). // Основные проблемы русской аспектологии. СПб., 2002, 190-200.

Шатуновский 1996 — *Шатуновский И.Б.* Семантика предложения и нереферентные слова. М., 1996.

Шатуновский 2009 — *Шатуновский И.Б.* Проблемы русского вида. М., 2009.

Шведова 1984 — *Шведова Л.Н.* Трудные случаи функционирования видов русского глагола. К проблеме конкуренции видов. М., 1984.

Шелякин 1990 — *Шелякин М.А.* Модально-аспектуальные связи // Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность. Л., 1990, 110-122.

Шелякин 1993 — *Шелякин М.А.* Справочник по русской грамматике. М., 1993.

Шелякин 2000 — *Шелякин М.А.* Справочник по русской грамматике. 2-е изд., испр. М., 2000.【Шелякин 1993 の改訂新版】

Шелякин 2001 — *Шелякин М.А.* Функциональная грамматика русского языка. М., 2001.

Шелякин 2003 — *Шелякин М.А.* Справочник по русской грамматике. 3-е издание, стереотипное. М., 2003. 【Шелякин 2000 のステレオタイプ版】

Шелякин 2006 — *Шелякин М.А.* Русский инфинитив (морфология и функции). Учебное пособие. М., 2006.

Шелякин 2007 — *Шелякин М.А.* Категория аспектуальности русского глагола. М., 2007.

Штейнфельдт 1963 — *Штейнфельдт Э.А.* Частотный словарь современного литературного языка. Справочник для преподавателей русского языка. Таллин, 1963.

2. 欧文文献 2（英語、その他）

BIBER, Douglas, CONRAD, Susan, and REPPEN, Randi. 1998. Corpus Linguistics: investigating language structure and use. Cambridge: Cambridge University Press.

BYBEE, J.L. 1985. *Morphology: a study of the relation between meaning and form.* Amsterdam: Benjamins.

CHUNG, Sandra and TIMBERLAKE, Alan. 1985. *Tense, aspect, and mood* in SHOPEN, T. (ed.) *Language typology and syntactic description.* v. III: *Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press, 202-258.

COATES, Jeniffer. 1983. *The Semantics of modal auxiliaries.* London: Croom Helm.

COMRIE, Bernard. 1976. *Aspect. An introduction to the study of verbal aspect and related problems.* Cambridge: Cambridge University Press.

COMRIE, Bernard. 1986. *Tense.* Cambridge: Cambridge University Press.

DAHL, Östen. 1985. *Tense-Aspect Systems.* Oxford; New York: B. Blackwell.

DICKEY, Stephen M. 2000. *Parameters of Slavic aspect: a cognitive approach.* California, CSLI Publications.

DIK, S.C. 1989. The theory of functional grammar. Part I: The structure of the clause. Dordrecht: Foris, 1989.

FIELDER, G. 1990. Aspect and lexical semantics: Russian verbs of abitity. // Slavic and East European Journal 34. 2. 192-207.

FORSYTH, J. 1970. *A Grammar of Aspect. Usage and meaning in the Russian verb.* Cambridge: Cambridge University Press.

GOLDBERG, Adele E. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument*

structure. Chicago: University of Chicago Press.
JOSSELSON, H.H. 1953. *The Russian word count and frequancy analysis of grammatical categories of Standard Literary Russian.* Detroit: Wayne University Press.
LYONS, J. 1977. *Semantics.* Vol. 1-2. Cambridge: Cambridge University Press.
PALMER, F.R. 1986. *Mood and modality.* Cambridge: Cambridge University Press.
PALMER, F.R. 2001. *Mood and modality.* 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. 【Palmer 1986 の改訂新版】
PORTNER, Paul, 2009. *Modality.* Oxford: Oxford University Press.
RASSUDOVA, O.P. 1984. *Aspectual usage in modern Russian.* Moscow: Russky Yazyk. 【Рассудова 1982 の英訳版】
SHOPEN, T. (ed.) 2007. *Language typology and syntactic description.* 2nd edition. Vol. 3: *Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
ŠTEINFELDT, E. 1963? *Russian Word Count. 2500 words most commonly used in modern literary Russian. Guide for teachers of Russian.* Moscow: Progress Publishers. 【Штейнфельдт（1963）の英訳版；書籍本体に出版年が記載されていないため正確な出版年は不明】
TATEVOSOV, Sergej. 2002. *The parameter of actionality.* in Linguistic Typology 6 (2002), 317-401.
TIMBERLAKE, Allan. 2004. *Russian reference grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.
TIMBERLAKE, Alan. 2007. *Tense, aspect, and mood* in SHOPEN, T. (ed.) *Language typology and syntactic description.* 2nd edition. Vol. 3: *Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press, 280-333.
VAKAR, N.P. 1966. *A Word Count of Spoken Russian. The Soviet Usage.* [Columbus], Ohio State University Press.
VENDLER, Zeno. 1957. "Verbs and times". in The Philosophical review 66 (2), 143-160.
VENDLER, Zeno. 1967. "Verbs and times". *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.

3. 日本語文献

阿出川修嘉（2001a）:『「状況」の性質と叙想語のあらわす「可能性」との相関について』、東京外国語大学博士前期課程学位（修士）論文。
阿出川修嘉（2001b）:『叙想語のあらわす可能性と動詞の体の選択について』、日本ロシア文学会関東支部発行関東支部報。 【阿出川 2001a の一部分を基に行なった報告の概要】
阿出川修嘉（2002）:『A.V.ボンダルコ「文法的カテゴリーという体系における動詞の体（ロシア語に基づいて）」（「ロシア語アスペクト論の主要な問題（ナウカ社、2002 年）」所収）』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』第 15 号。【Бондарко 2002 の翻訳】
阿出川修嘉（2003）:『E.V.パードゥチェヴァ「ロシア語アスペクト論の概念及び術語

の体系化試論」（その１）』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』第 16 号、pp. 86-97。【Падучева 1998 の翻訳（その１）】
阿出川修嘉（2004）:『Основные проблемы русской аспектологии. СПб.: Наука』、『ロシア語ロシア文学研究』、第 36 号。【ОПРА 2002 に対する書評】
阿出川修嘉（2004a）:『「нельзя не＋動詞不定詞」という構文における動詞について ―― 既存コーパスからのデータに基づいた再解釈 ―― 』、COE 言語情報学報告３『コーパス言語学における構文分析』、pp. 199-217。
阿出川修嘉（2004b）:『「не мочь не＋不定形」という構文における動詞語彙及びその体の研究 ―― 既存コーパスのデータを利用した一考察 ―― 』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』、第 17 号、 pp. 35-58。
阿出川修嘉（2005a）:『E.V.パードゥチェヴァ「ロシア語アスペクト論の概念及び術語の体系化試論」（その２）』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』第 18 号、pp. 71-90。【Падучева 1998 の翻訳（その２）】
阿出川修嘉（2005b）:『「不可能性」のモダリティの意味と動詞の体の形態との相関関係に関する一考察』、COE 言語情報学報告 7『コーパス言語学における語彙と文法』、pp. 191-209。
阿出川修嘉（2007）:『Гловинская による研究の理論的成果の再検討に向けた一試論 ―― 動詞語彙の出現率という側面からの一考察 ――』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』第 20 号、pp. 57-81。
阿出川修嘉（2009）:『可能性の意味を含む名詞と語結合を成す不定詞の体のカテゴリーに関する一考察』、東京外国語大学グローバル COE 研究報告集『コーパスに基づく言語学教育研究報告１：コーパスを用いた言語研究の可能性』、pp. 1-24。
阿出川修嘉（2010）:『現代ロシア語における内的可能性を表す形式と体のカテゴリーの意味・機能に関する一考察』、東京外国語大学グローバル COE 研究報告集『コーパスに基づく言語学教育研究報告４：コーパスを用いた言語研究の可能性Ⅱ』、pp. 277-297。
阿出川修嘉（2011）:『可能性の述語を含む文の意味・統語構造と不定詞の体の対立に関する一考察 ―― 研究ノート ――』、『ロシア語学と言語教育Ⅲ』、神奈川大学ユーラシア研究センター、pp. 99-117.【研究ノート】
影山太郎（1996）:『動詞意味論―言語と認知の接点―』、くろしお出版。
金田一春彦（1950）:『国語動詞の一分類』、「言語研究」15。【金田一春彦（編）（1976）に再録されている】
金田一春彦（編）（1976）:『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房。
金田一真澄（1997）:『最近のロシア語モダリティー研究の問題点』、ロシア語研究会年報『ロシア語研究』、第 10 号、pp. 13-27。
雲越繁（2005）:『ロシア語ナショナルコーパス（Национальный корпус русского языка）について』、ロシア語研究会年報『ロシア語研究』、第 18 号、pp. 49-70。
郡司隆男、阿部泰明、白井賢一郎、坂原茂、松本裕治（2004）:『意味』 言語の科学４、東京：岩波書店。
小林潔（2003）:『ドイツ・テュービンゲン大学のロシア語コーパス』、ロシア語研究会

「木二会」年報『ロシア語研究』、第 16 号、pp. 64-85。
A．ゴールドバーグ（2001）:『構文文法論　英語構文への認知的アプローチ』、研究社出版。【Goldberg 1995 の邦訳】
齋藤俊雄、中村純作、赤野一郎（2005）:『英語コーパス言語学　基礎と実践』、研究社。
澤田治美（2006）:『モダリティ』、開拓社。
ジェニファー・コーツ著、澤田治美訳（1992）:『英語法助動詞の意味論』、研究社出版。【Coates 1983 の邦訳】
ダグラス・バイバー、スーザン・コンラッド、ランディ・レッペン（2003）:『コーパス言語学　―言語構造と用法の研究―』、南雲堂。【Biber et al.（1998）の日本語訳；齋藤俊雄、朝尾幸次郎、山崎俊次、新井洋一、梅咲敦子、塚本聡による共訳】
水野晶子（2004）:『AOT のロシア語検索システム』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』、第 17 号、pp. 71-82。
水野晶子、阿出川修嘉（2006）:『コンコーダンスソフト AntConc をロシア語研究に活かす―― ソフトの使用法の概説とロシア語研究への活用の試み ――』、ロシア語研究会「木二会」年報『ロシア語研究』、第 19 号、pp. 25-57。

4．辞書・辞典類

БТС 1998 ― Большой толковый словарь русского языка. Гл. ред. С.А. Кузнецов. СПб., 1998.【書籍版 1998 年、電子版 2009 年（下の「ウェブ上の各種リソース」の項目を参照）】
ЛЭС 1990 ― Лингвистический энциклопедический словарь. Глав. редактор В.Н. Ярцева. М., 1990.
ЛЭС 2002 ― Лингвистический энциклопедический словарь. Глав. редактор В.Н. Ярцева. 2-е изд., доп. М., 2002. 【ЛЭС 1990 の増補改訂版】
НОСС 2004 ― Новый объяснительный словарь синонимов русского языка. Изд. 2-е, испр., доп. М., 2004.
РСС ― Русский семантический словарь. Толковый словарь, систематизированный по классам слов и значений. Под общей редакцией Н.Ю. Шведова. Т. I-IV. М., 1998-2007.
ТСРГ 1999 ― Толковый словарь русских глаголов: Идеографическое описание. Английские эквиваленты. Синонимы. Антонимы. Под ред. проф. Л.Г. Бабенко. М., 1999.
СРЯЕ (Словарь Евгеньевой) ― Словарь русского языка. В 4-х томах. Изд. 2-е, испр. и доп. Под ред. А.П. Евгеньевой. М., 1981-1984.
ССРЛЯ ― АН СССР. Словарь современного русского литературного языка. М.-Л., 1950-1965.
СЕ (Словарь Ефремовой) ― *Т.Ф. Ефремова.* Современный толковый словарь русского языка. М., 2006.
СО (Словарь Ожегова) ― *С.И. Ожегов и Н.Ю. Шведова*. Толковый словарь русского языка. М., 1992.

СУ (Словарь Ушакова) — Толковый словарь русского языка. В 4-х томах. Под редакцией Д.Н. Ушакова. М., 1935-1940.

СШ (Словарь Шведовой) — Толковый словарь русского языка с включением сведений о происхождении слов. Отв. редактор, Н.Ю. Шведова. М., 2007.

Энциклопедия 1979 — Русский язык. Энциклопедия. Под общей редакцией Ф.П. Филина, М., 1979.

Энциклопедия 1996 — Русский язык. Энциклопедия. Изд. 2-е, переработанное и дополненное. Под главной редакцией Ю.Н. Караулова, М., 1996. 【Энциклопедия 1979 の改訂新版】

ЭСС 2002 — Русские глагольные предложения. Экспериментальный синтаксический словарь. Под общ. ред. Л. Г. Бабенко. М., 2002.

Зализняк 2003 — *Зализняк А.А.* Грамматический словарь русского языка: Словоизменение. Изд. 4-е, испр. и доп. М., 2003.

Шушков 2008 — *Шушков А.А.* Толково-понятийный словарь русского языка. 600 семантических групп. Около 16500 слов и устойчивых выражений. М., 2008.

ЧСЗ — Частотный словарь русского языка. Около 40000 слов. Под редакцией Л.Н. Засориной. М., 1977.

ЧССРЯ 1993 — Частотный словарь современного русского языка. Редактор, Леннарт Ленгренн. Uppsala, 1993.

ЧССРЯ 2009 — *Ляшевская О.Н., Шаров С.А.* Частотный словарь современного русского языка. На материалах национального корпуса русского языка. М., 2009.

東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三（編）（1988）:『研究社露和辞典』、研究社。

5. ウェブ上の各種リソース

http://authorities.loc.gov 【米国議会図書館典拠データベース】

http://authorities.loc.gov/help/contents.htm 【米国議会図書館典拠データベースについて】

http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page 【Wikipedia（英語版）】

http://en.wikipedia.org/wiki/Reliability_of_Wikipedia 【Wikipedia の信頼性】

http://en.wikipedia.org/wiki/Romanization_of_Russian 【ロシア語翻字法】

http://en.wikipedia.org/wiki/Zeno_Vendler 【Z. Vendler に関する項目】

http://ru.wikipedia.org/wiki/Заглавная_страница 【Wikipedia（ロシア語版）】

http://slovari.yandex.ru/~книги/Толковый словарь Ушакова/ 【СУ（オンライン版）】

http://ushdict.narod.ru/ 【СУ（オンライン版）】

http://www-senate.ucsd.edu/assembly/memorial_resolutions/vendlerzeno.pdf 【Z. Vendler の略歴など】

http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html 【コンコーダンサーAntConc の配布ページ】

http://www.aot.ru/index.html 【AOT】

http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php 【Leipzig Glossing Rules】

http://www.gramota.ru/slovari/info/bts/ 【БТС（オンライン版）】

http://www.lib.ru 【Lib.ru】
http://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/russian.pdf 【米国議会図書館方式ロシア文字翻字法（Transliteration Tables）】
http://www.loc.gov/catdir/cpso/romanization/russian.pdf 【米国議会図書館】
http://www.moderna.uu.se/slaviska/ryska/corpus/ 【ウプサラコーパス配布サイト】
http://www.ogoniok.com/ 【Огонек のウェブページ】
http://www.ogoniok.com/archive/ 【Огонек のウェブページ（記事アーカイヴ）】
http://www.ruscorpora.ru 【ロシア・ナショナル・コーパス】
http://www.ruscorpora.ru/corpora-sem.html 【ロシア・ナショナル・コーパスの意味論的情報に関する記述】
http://www.ruscorpora.ru/instruction-main.pdf 【ロシア・ナショナル・コーパスの利用法に関するドキュメント】
http://www.sfb441.uni-tuebingen.de/b1/en/korpora.html 【テュービンゲン大学のコーパス（2013 年 8 月時点ではウェブページが表示されない）】
http://www.yandex.ru 【Яндекс（検索エンジン）】